ot20120202

平成20～22年度

文部科学省「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」採択

# 学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト

## ―最終報告書―



公立大学法人
山梨県立大学
Yamanashi Prefectural University

# 「ＧＰの三年間をふり返って」



学長・山梨県立大学教育GP推進本部長
伊藤　洋

アルビン・トフラーは、名著『第三の波』（徳山次郎他訳・日本放送出版会、1980）の中で、「第二の波」で総称する産業社会を律していた基本的特徴として、標準化、中央集権化、同期化、規格化、集中化、資格化の六つを上げていました。たしかに、産業社会の特徴は大量生産・大量流通・大量消費であり、それを実現するためにはすべての部面で標準化がなされて、それを中央集権の下で規格化し、様々な部面で資格化された人々によって同期化された環境の中で集中して生産することが必須の要件でした。第二の波はこれらの原則を忠実に実行することで人類史上空前絶後の成功をおさめました。しかし、この波を永久に維持するためには、無尽蔵の資源と廃棄される塵芥のすべてを許容する広大無辺の地球環境が必要でした。この条件を欠くためにやがて第二の波は衰退して第三の波が来るであろうというのが、この書の主張でした。彼の予言は見事に当たって、いま私たちは第三の波の中に「あえいでいる」と言ったらよいしょう。

Ａ・トフラーは同書の中で「年配者を世話する人々が必要で、彼らはどのように同情し、どのように正直であるべきかを知っていなければならない。社会には、病院で作業する人々が必要である。社会には、単なる認識だけではないすべての種類のスキルが必要である。それらは感情的であり、それらは愛情である。データとコンピュータだけでは社会は実現しない」とも付言しています。

文部科学省所管事業「質の高い大学教育推進プログラム（教育 G P)」からの資金を受けて、2008年から始まった「学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト」は、今年2010年度をもって一段落いたしました。この事業のタイミングの良さは、上述のＡ・トフラーが言う「第二の波」を生きた人々を対象とした最前線の保健と福祉の現場で「第三の波」の時代を生きる学生たちが、それぞれに「専門化」された専門職の人々の下で、規格化されえない仕事を体験するという幸運に恵まれたことに集約されます。ここでは、単にプラグマティズムの現場を学んだというにとどまらず、学生たちにとって歴史的な大波の中をかいくぐっての体験だったのではないでしょうか。かつてベビーブームがあったことによって、これからしばらくの間我が国は必然的に「大量死」の時代を迎えます。三年間のプロジェクトの中で育った若者たちは、その時の有力な社会的担い手になることでしょう。本学は、このプロジェクトの神髄を「第二の波」の余波が消えるまで今後も継続してまいります。

この間ご指導いただいた甲府市役所福祉保健担当部局および三つの甲府市地域包括支援センター「おおくに」・「きょうりつ」・「甲府西」の専門職スタッフのみなさんに厚くお礼申し上げると共に引き続きご指導賜りますようお願い申し上げます。

最後に、ご支援を賜った文部科学省はじめ県内関係組織のみなさんに謝意を表します。

## 「３年間の取り組みそのものが連携でした」



看護学部長・教育 GP 推進本部担当主査
佐藤　悦子

本大学の取り組みである「学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト」が文部科学省から「質の高い大学教育推進プログラム（教育 GP)」として採択を受け、あっという間に３年が経ちました。その間、これに関わる大学教職員は、形のないものを創り出す難しさに悩みながら、一方でその成果を実感しながら懸命に取り組んで参りました。

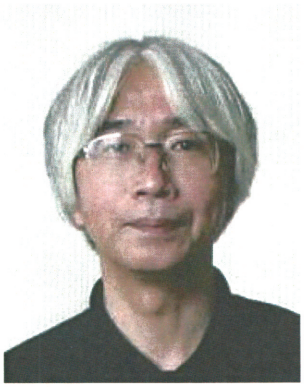
地域で暮らす人々がその人らしく生活できることを支援するためには、そこに関わるチームメンバーの「連携」が必須です。互いの専門性をつなぐ連携の技術を学生の段階から学ばせたい、この思いが本プロジェクトを推進させていくエネルギーとなりました。看護学部・人間福祉学部の学部を超えた教育の展開は、想像以上に様々な課題がありました。その課題をひとつずつ解決していくプロセスそのものが、まさに「連携」であるということに途中から気づきました。

この教育プログラムの特徴は、地域住民の中に学生が直接飛び込み、フィールドワークをしながら「専門職間の連携」を学んでいくところにあります。つまり、実際に生活している人々に触れ合いながら、そこでの生活や健康ニーズを体感し、ニーズに対応するための専門職の連携について学んでいくのです。この教育方法を重要視するのは、ニーズを中心において支援者としての互いを見つめ合うことで、何を大切にしなければならないかを考えさせることができると考えているからです。

３年間の成果を積み上げ「専門職連携教育プログラム」の試案を、やっと創ることができました。学生たちが、「専門職が連携することで、大きな力が発揮できる」と実感し、将来チームの中で機能を発揮できる専門職として成長できる力を育てたいと思います。今後もこのプログラムの検討を重ね、さらに効果的な教育プログラムとして展開できるよう努力していくつもりです。

最後になりましたが、この取り組みは、甲府市をはじめ地域包括支援センターの皆様や甲府市民の皆様の大きなご理解とご協力がなければ実施することはできませんでした。心から深く御礼申し上げます。また、いつも暖かな励ましとご助言をくださり、様々な点から支えてくださいました伊藤洋学長をはじめ大学の教職員の皆様、ここまで悩み励まし合いながら精一杯の情熱を持ちともに取り組んで参りました教育 GP ワーキングの皆様、GP 事務室の皆様、本当にありがとうございました。心から深く感謝申し上げます。

## 「現場での連携による学びから得られるもの」



人間福祉学部長
藤谷　秀

３年間にわたって実施されてきた、人間福祉学部と看護学部の協働による「学際統合型専門職連携教育プログラム」が、節目の年を迎えました。この報告書に記されているように、両学部学生のチームによる現場実習を中心とした様々な取り組みは、多くの成果をもたらしました。学生をはじめとして、この取り組みに関わった全ての方々に、敬意を表するとともに、心から感謝申し上げます。そしてこの成果を、今後の学生教育や大学の地域活動に、ぜひ生かしていきたいと思います。

この取り組みの主役である学生たちは、多くのことを学んだことと思います。前回の報告書で私は、専門職連携授業を通して学んでほしいこととして、とくに二つのことを強調しました。一つは、ソーシャルワーカーや看護師という専門職が関わる相手は、「利用者」や「患者」である前に一人の人であり、そういう意味で、人と向き合うことを学んでほしいということです。専門性の異なる者が連携しながら人に関わるという経験は、この「人と向き合う」ということを思い出させてくれたはずです。二つ目は、人間らしい健康で文化的な生活は、一人だけの力で獲得されるものではなく、様々な人々のつながりの中ではじめて実現されることを学んでほしいということです。行政や地域包括支援センターの協力を得ながら、その地域で生活している高齢者の方々を訪問してお話をうかがい、それを福祉と看護という異なった視点からふりかえり、その結果を地域の方々に還元していく。この実地の取り組みによって、専門職どうしのつながり、さらには人と人のつながりの意味を学べたのではないかと思います。

そして、こうした学びは、教室での講義だけでなく、実習を通して得られたものです。実習で何よりも大事なことは、あるいは勇気のいることと言った方がよいかも知れませんが、自ら事に当るということ、つまり「当事者」になることではないでしょうか。「当事者」という言葉はたいてい、何らかの生活上の困難に巻き込まれている当人という意味で使われます。しかし、その状況に巻き込まれていて、逃げ出すわけにはいかないという意味でなら、チームを組んで実地に活動した学生もまた「当事者」なのです。そして、その場にいて何かを行わざるを得ない立場に置かれることは、たとえ時には苦しみを伴うものであったとしても、他の方法では得られない知をもたらしてくれます。そのような知を、ぜひ大切にしてほしいと思います。

ここでは学生の学びを中心に述べましたが、この取り組みは、大学にとっても、また地域社会にとっても実り多いものです。そこから得られたものを、様々な形で次の実りへとつなげていきたいと思います。

最後に、地域包括支援センターの方々、甲府市の担当職員の方々、そして何よりもあたたかく学生を迎えてくださった住民の方々に、心から感謝いたします。ありがとうございました。

## 「チームを組んで活動することの意義」



国際政策学部長
小沢　典夫

看護学部と人間福祉学部が中心となり取り組んできた「専門職連携教育開発プロジェクト」を間近で見させていただき、専門職が互いの専門性を尊重し合いながらチームを組んで活動することの重要性を痛感しております。学部という枠を越えた教育プログラムの実施は、新たな取り組みであると同時に、難しい面も多々あったのではないでしょうか。さらに、文部科学省の教育GPの採択を受けての実施には、成果を出していかなければならないという重圧感が絶えずあったことと推察いたします。担当なさった先生方のご努力に改めて敬意を表します。そして、3年間というひとつの区切りを迎え、報告書という形で成果をまとめられることに、大変大きな意義があると考えます。

今回はこのプロジェクトに国際政策学部は参画しておりませんが、本学部の教育理念と目標は、グローバルな視点に立って地域社会の問題を考えることのできる人材、地域の自然・文化・産業を豊かにして地域の活力をつくる人材、平和で豊かな国際社会の形成に貢献できる人材の育成です。そういった観点からも、いずれは本学部学生も何らかの形で参画できれば、互いの専門性の枠も広がっていくのではないかと考えております。教員も地域づくりの専門家が集まっており、将来的に地域づくりという取り組みに連携・協働が図れたら、楽しい活動になるのではないかと思います。

山梨県立大学の三学部の特性を大いに生かすことで、活動の広がりと深さを増していくと考えます。様々な観点から人の生活を見つめ地域を捉え、そのアプローチの方法を多角的に捉えることができる学生の育成を、ともに目指せたらすばらしいことだと考えます。今後、この取り組みがますます充実したものとなることをご期待申し上げます。

－ 目　　次 －

Ⅰ　「学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト」の内容 …… 1
1. 事業概要 …… 1
2. 採択までの経緯と採択理由 …… 1
(1) 取り組みの契機 …… 1
(2) 平成 19 年度の取り組み …… 2
(3) 平成 20 年度の取り組み …… 2
3. 組織体制 …… 2
(1) 教育ＧＰ推進本部 …… 2
(2) 教育ＧＰ執行部 …… 3
(3) 教育開発プロジェクト実行委員会 …… 3
(4) 健康長寿プロジェクト実行委員会 …… 3
(5) 専門職連携ワーキングチーム …… 3
(6) その他（地域との調整） …… 3
4. 会議開催状況 …… 4
(1) 執行部会議（平成 21 年度・22 年度） …… 4
(2) 専門職連携ワーキングチーム会議（平成 21 年度・22 年度） …… 5
(3) 健康長寿プロジェクト実行委員会 …… 6
(4) 教育開発プロジェクト実行委員会 …… 7
Ⅱ　平成 20 年度の取り組み概要 …… 8
1. 平成 20 年度のプログラム実施－専門職連携演習－ …… 8
(1) 演 習 要 項 …… 8
(2) 甲府市地域包括支援センター別演習内容 …… 10
2. 甲府市地域包括支援センター研修会 …… 13
(1) 甲府市と大学との連携による地域包括支援センター職員等研修会実施要項 …… 13
(2) 研修講師の紹介 …… 14
(3) 研修実施状況 …… 14
3. 英国調査研修 …… 14
4. 広報活動及び他大学との交流 …… 15
(1) 学内・外への周知と協力体制への呼びかけ …… 15
(2) 国内・外大学関係者への周知と交流 …… 15
5. 成果と課題 …… 16
(1) 専門職連携に関する教育の充実 …… 16
(2) 教育プログラムの開発 …… 16
(3) フィールドとなる地域包括支援センターの活性化 …… 17
(4) 教育プログラム開発に関する体制づくり …… 17
Ⅲ　平成 21 年度・22 年度のプロジェクトの実施（専門職連携演習） …… 18
1. 演習概要 …… 18
(1) 演習目的・目標 …… 18
(2) 演習日程と内容（平成 21 年 12 月～平成 23 年 3 月） …… 18
(3) 演習記録と評価表 …… 19
(4) 各演習施設の担当教員・学生数 …… 19
(5) その他の事項 …… 20

2. 甲府市南西地域包括支援センター ..... 21
(1) 平成 21 年度 ..... 21
(2) 平成 22 年度 ..... 32
3. 甲府市中央地域包括支援センター ..... 41
(1) 平成 21 年度 ..... 41
(2) 平成 22 年度 ..... 50
4. 甲府市西地域包括支援センター ..... 57
(1) 平成 21 年度 ..... 57
(2) 平成 22 年度 ..... 65
5. 合同発表会 ..... 72
(1) 合同発表会概要 ..... 72
(2) 地域包括支援センター地区別発表内容 ..... 73
(3) リフレクション ..... 89
6. 演習評価 ..... 104
(1) 学生評価表 ..... 104
(2) プロジェクト実施の成果と課題 ..... 111
Ⅳ 専門職連携演習教材開発 ..... 116
1. 教材開発プロジェクトの位置づけ ..... 116
2. メンバー表・会議開催状況 ..... 116
3. 平成 23 年度「専門職連携演習」の第 1～4 回の授業案及び使用する教材 ..... 116
Ⅴ 甲府市地域包括支援センター職員等研修会 ..... 120
1. 実施要項 ..... 120
(1) 研修目的 ..... 120
(2) 目　　標 ..... 120
(3) 研修方法及び講師 ..... 120
(4) 対象者 ..... 121
2. 実施状況 ..... 121
(1) KJ 法による地域課題の把握と対策 ..... 121
(2) その他の研修 ..... 131
3. アンケート結果 ..... 131
(1) アンケート内容 ..... 131
(2) アンケート結果 ..... 132
4. 成果と課題 ..... 140
(1) 目標達成状況 ..... 140
(2) 今後の課題 ..... 141
(3) 大学の地域貢献における本研修会の意義 ..... 141
Ⅵ 合同フォーラム・講座・成果報告会・シンポジウム ..... 142
1. 合同フォーラム ..... 142
(1) 概　　要 ..... 142
(2) 結　　果 ..... 142
2. 話し相手ボランティア養成講座 ..... 142
3. 認知症に関するミニ講演会 ..... 143
4. 成果報告会・シンポジウム ..... 143

(1) 成果報告会 ..... 143
(2) シンポジウム ..... 144
(3) アンケート結果(抜粋) ..... 145
5. 講演会 ..... 145
Ⅶ 情報発信及び他大学との交流 ..... 146
1. 平成 21 年度 ..... 146
(1) 「教育ＧＰ」としての情報発信・周知 ..... 146
(2) 教育活動の状況及びその成果に関する情報発信 ..... 147
2. 平成 22 年度 ..... 148
(1) 「教育ＧＰ」としての情報発信・周知 ..... 148
(2) 教育活動の状況及びその成果に関する情報発信 ..... 149
Ⅷ 米国調査・研修(2010 年 3 月 18 日～22 日) ..... 150
1. 調査・研修の概要及びスケジュール ..... 150
2. ミシガン大学研修報告～チャレンジプログラムについて～ ..... 151
(1) チャレンジプログラムの受講目的 ..... 151
(2) ファシリテーター ..... 151
(3) チャレンジプログラムの特徴 ..... 151
(4) 参加した「チャレンジプログラム」(主な Active Practice) ..... 152
(5) まとめ ..... 153
(6) 今後に向けて ..... 153
3. Services for Students with Disabilities ..... 154
(1) はじめに ..... 154
(2) 障がいのある大学生の背景と現状 ..... 154
(3) テクノロジーの進歩について ..... 155
(4) 専門職による業務・役割 ..... 155
(5) まとめ ..... 156
4. Turner Geriatric Clinic, East Ann Arbor Heath and Geriatric Center ..... 156
(1) ターナークリニックの概要 ..... 156
(2) ターナークリニックの施設見学 ..... 157
(3) ターナークリニックの職員と多職種連携の実際及び連携教育に関するディスカッション . 157
5. シルバークラブとメモリーサポートセンター ..... 159
(1) シルバークラブ ..... 159
(2) メモリーサポートセンター ..... 160
6. Arbor Hospice Residence ..... 161
(1) 施設の紹介 ..... 161
(2) ホスピスの基本理念と専門職の役割 ..... 162
(3) 多職種連携：IDT (InterdisplinaryTeam) Meeting　多職種チーム会議 ..... 163
(4) 学際的チームとの意見交換の主な内容 ..... 163
(5) 研修での学びと今後の課題 ..... 164
Ⅸ 総　　括 ..... 165
1. 専門職連携教育プログラムの開発 ..... 165
2. フィールドとなる地域包括支援センターの活性化 ..... 166
3. 今後の課題 ..... 166

－ 資　料　編 － ..... 168
1. 演習に使用した資料 ..... 168
(1) 評価表 ..... 168
(2) リフレクションペーパー ..... 169
(3) 地域の皆様への協力依頼文 ..... 170
(4) 訪問調査案内＜はがき＞ ..... 171
(5) 訪問調査の同意書 ..... 172
(6) 調査用紙 ..... 173
2. 情報発信の関係資料 ..... 186
(1) 新聞掲載 ..... 186
(2) パンフレット、ポスターなど ..... 188
3. メンバー表 ..... 197

# Ⅰ　「学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト」の内容　（編集：神山　裕美）

## 1. 事業概要

住民のより豊かな生活への支援を実践できる優れた専門職業人を育成するためには、専門性への探求と、チームアプローチができる能力の開発が必須である。しかし、現実的には、それぞれの教育機関においてその専門性の教育は行われるものの、他職種の専門性を理解しながら互いの力をダイナミックに出し合い、組織的にアプローチをしていく能力の開発までには至っていないといった課題を抱えている。本大学は、看護学部・人間福祉学部・国際政策学部の3学部から成り、教育理念は「確かな知識技術を持ち、豊かな人間性とマネジメント能力の高い社会に貢献できる専門職を育成すること」にある。各学部ともそれぞれの特徴を生かし、社会のニーズに対応した教育方法を模索している。

そこで本取り組みは、看護学部と人間福祉学部の学生が、協働してフィールドに入り、住民の生活を体感しながら、住民と共に、地域包括支援センターの活動を核とした住民参加型ケアシステムをつくるプロセスに関わることで、専門性を高め他職種との協働の在り方を学ぶことを目的とした、学際統合型の専門職連携教育開発プロジェクトである。

本取り組みは、質の高い専門職育成のための教育プログラムを「協働」という観点から地域包括支援センターの活動に入り込み、住民の生活の場において展開させることで、2つの教育効果をねらっている。第一は、学生が住民とともに、このプロセスに参画することによる教育効果であり、学生が住民の生活を体感しつつ住民のニーズを把握し、利用者本位の専門職としての関わり方の習得・住民主体の健康づくり活動の展開技法の修得・住民参加型のコミュニティづくりの手法の修得がはかれる。第二は、看護・福祉の学生が協働で取り組みむことによる教育効果である。協働で関わることで、互いの専門性の理解を深め、協働することの利点の明確化・チームアプローチ手法の修得ができることである。

一方、フィールドとなる地域包括支援センターは、平成18年に高齢社会を迎える国の最重要施策の一つとして立ち上がったものの、その活動の方向は、取り組み方法の未熟さやシステム化の遅れで混沌としており、今回この取り組みが実現したのは、本取り組みの趣旨と地域包括支援センターのニーズとが明確に一致したことによる。本取り組みにより地域包括支援センターは、行政を巻き込んだ住民参加型のケアシステム化が図れることを期待している。

この教育開発プロジェクトは、絶えず社会の動きに学生を触れさせることで地域に貢献できる優れた人材育成が図れ、さらに、国が期待する「地域ケアの拠点」としてのモデルを戦略的に創りあげることに連動する。このような、地域包括支援センターと大学・行政が協働で取り組みむこの取り組みは、全国に類をみない。またこれは高齢化が進む地域を、健康長寿コミュニティとして活性化させることを可能にする。（H20 年度「質の高い大学教育推進プログラム」山梨県立大学取り組み概要より抜粋）

## 2. 採択までの経緯と採択理由

### (1) 取り組みの契機

平成18年10月に地域研究交流センターのＧＰ開発部門において、平成19年度のＧＰ申請にあたり本学が統合した利点を生かしたプログラムを創れないかといった提案を頂いた。検討する教員が集まり「看護学部」「人間福祉学部」との統合の実を挙げるカリキュラム展開として、それぞれの学部が育成する専門職が機能する地域包括支援センターに着目し、そこをフィールドに何かできないだろうかと意見交換を重ねた。

現場で抱えている現状を整理していきながら、実践の場で課題となっている「チーム連携のあり

方」を、①互いの専門性を理解し合えること　②チームアプローチに関する基本的な考え方やそのスキルを学ばせることで可能となり、それにより、より質の高い専門職の育成に貢献できるのではないかと考えた。申請にあたり、フィールドとなる地域包括支援センターの候補を挙げ、そこに出向いてその趣旨と必要性について説明し、ＧＰ採択の有無に関わらず実行していくことで了解が得られた。

**(2) 平成 19 年度の取り組み**

本取り組みは(1)を契機として始まり、平成 19 年 4 月申請書を作成し提出を行った。しかし、今年度は採択に至らず、その理由は、「実施に関する具体性」であった。採択には至らなかったが、平成 19 年度は、地域研究交流センターの予算を頂き、その一部を実施した。カリキュラム上の調整ができないため、専門職連携教育演習は 12 月と 1 月の土曜日 2 日間に分けて、両学部の教員の協力のもと実施した。

また、フィールドには「甲府市地域包括支援センターおおくに」の協力と理解が得られ、約 50 例の高齢者への訪問インタビューを行った。その協働のプロセスを通して学生の振り返りを分析し、この方法で本取り組みの教育効果を得られることを確信できた。

**(3) 平成 20 年度の取り組み**

**1) 採択までの経過**

**① 申　請**

平成 20 年度申請にあたり、平成 19 年度の実施経過からその教育成果や実施する上での課題を明確にし、それを申請書のなかに明記していった。教育ＧＰの意図するところから、A．本プログラムの特色　B．PDCA のサイクルの明確化　C．評価指標の明確化　D．実施体制　といった視点を中心に作成した。

**② 審　査 －ヒアリング－**

8 月 25 日、書類による一次審査が通り文部科学省のヒアリングがあった。ヒアリングでは、20 分間のプレゼンテーションを行い、その後審査員 6 名・事務担当者 4 名による質疑があった。

**③ 結　果 －選定理由－**

平成 20 年度教育ＧＰには、全国 488 大学等から 939 件の申請があり、「質の高い大学教育推進プログラム」分野で 148 件の取り組みが選定された。本学のその一校として選ばれ 9 月下旬に採択の内定を頂いた。以下に、文部科学省からの選定理由を挙げる。「学生参画、協働という視点から学際統合型の専門職連携教育の開発に取り組んだプログラムとして高く評価できる。特に、学生が地域住民の生活の場に入り、住民とともにケアシステムをつくる地域支援体制を整備・構築することについては、座学ではできない学生の新たな学びを促し、社会貢献という観点からみて、この取り組みの目的を達成することについて大きな意義を有するものである。また、大学がこの取り組みの意義を高く位置づけ、学長のリーダーシップの下で教育の質向上に向けた実施体制を積極的に整備しており、今後の展開について行政との連携や教育効果の測定方法を含めて具体的な計画を立てていることなど、意欲的な取り組みとして高く評価できる。」

（文部科学省選定理由一部抜粋）

## 3. 組織体制

次ページの「実施体制図」のような組織により実施した。各部門の内容は以下のとおりである。

**(1) 教育ＧＰ推進本部**

教育ＧＰの推進にあたっての総括を行い、学長を推進本部長に据え、３学部長・地域研究交流センター長・事務局がメンバーとなった。

**(2) 教育ＧＰ執行部**

教育ＧＰ推進にあたっての全体的な企画・調整を行い、実施プロセスにおける情報収集・課題の明確化にあたるとともに、教育ＧＰ全体を評価し成果物を報告書としてまとめていく。平成 20 年度教育ＧＰ申請にあたったメンバーを、本プログラムを推進していく執行部として位置づけた。

**(3) 教育開発プロジェクト実行委員会**

「専門職連携教育プログラム」に関する教育方法・評価方法を審議し、「専門職連携教育プログラム」の開発を行う。検討メンバーには、看護学部・人間福祉学部・国際政策学部の教員を構成メンバーとした。

**(4) 健康長寿プロジェクト実行委員会**

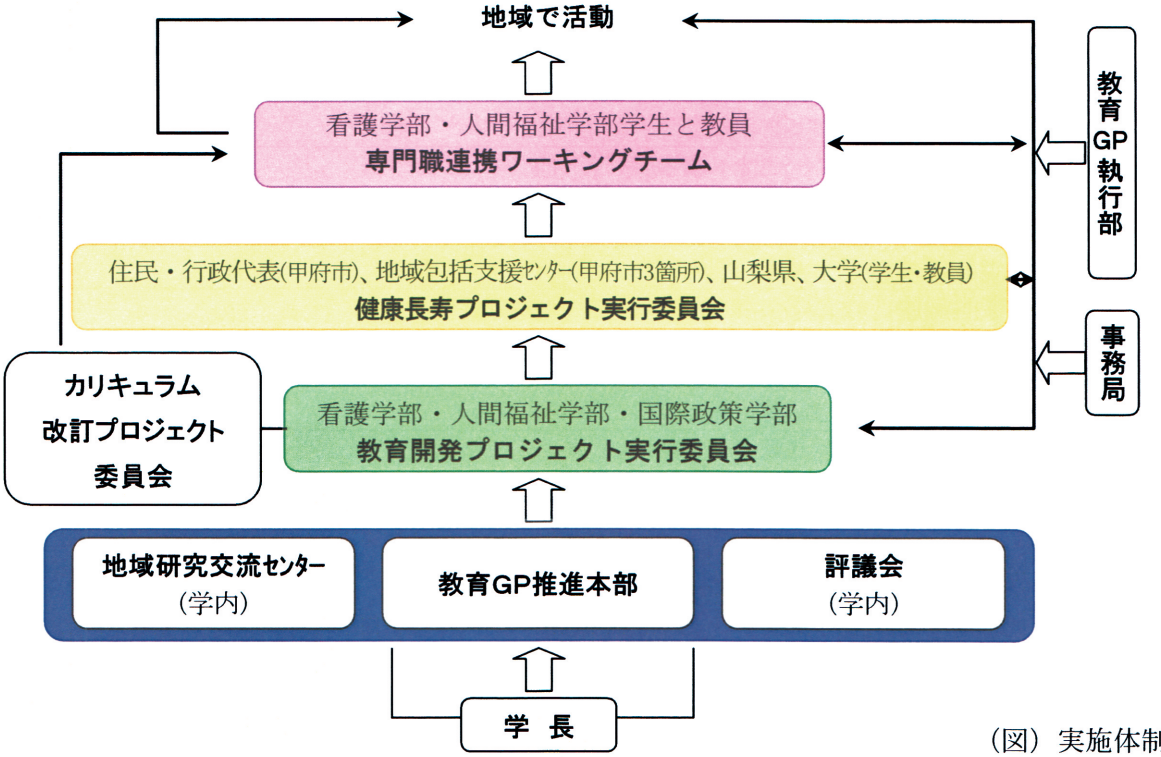
活動目的・目標を設定し、活動計画の立案・評価・成果・課題を明確にしつつ、住民参加型ケアシステムに繋がるネットワークの拡大に向けて検討を行う。メンバー構成は甲府市地域包括支援センター・甲府市の関連部署の担当課、山梨県福祉保健部（医務課・長寿社会課）である。

**(5) 専門職連携ワーキングチーム**

地域包括支援センターをフィールドにした学生の専門職連携演習の実施に関する調整・実施に向けて演習が効果的に行えるよう実行する。また、「健康長寿プロジェクト実行委員会」や「教育開発プロジェクト実行委員会」で検討された内容を、実践するための取り組みを行う。メンバーは、本プログラムの実践を担当するメンバーを両学部の教員で、本プログラムは 3 カ所のフィールドに分かれて実施するため、ワーキングメンバーも 3 つに分かれフィールドを担当し、フィールドとの綿密な調整を行いながら進めた。

**(6) その他（地域との調整など）**

甲府市やフィールドとなる地域包括支援センターとは、専門職連携教育のための演習実施にあたり綿密な打ち合わせを繰り返し実施した。学生の効果的演習を行うためにはフィールドづくりが必要であり、それを組織的に行っていくために、甲府市と連携を図り、地域包括支援センター職員対象の KJ 法による合同研修を企画した。




（図）実施体制図

「学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト　中間報告書」より抜粋

## 4. 会議開催状況　　（編集：GP 事務室 三井 平形 松橋）

### (1) 執行部会議（平成 21 年度・22 年度）

| 月　日 | 内　　容 | 出席者（名） |
|---|---|---|
| 21. 4. 20 | 報告：学生による合同発表会の参加状況について　他<br>審議：平成 21 年度事業計画について　他 | 9 |
| 5. 11 | 報告：地域包括支援センター合同研修会について　他<br>審議：合同フォーラムについて　他 | 9 |
| 6. 15 | 報告：市との打ち合わせについて　他<br>審議：平成 21 年度専門職連携演習実施計画について　他 | 9 |
| 8. 3 | 報告：地域包括支援センター研修会実施状況　他<br>審議：平成 21 年度専門職連携演習実施計画について　他 | 8 |
| 9. 3 | 報告：地域包括支援センター研修会実施状況　他<br>審議：平成 21 年度専門職連携演習実施計画について　他 | 9 |
| 10. 13 | 報告：ミニ研修会実施報告　他<br>審議：中間報告会について　他 | 7 |
| 10. 27 | 報告：甲府市との協議書について　他<br>審議：平成 21 年度演習計画について　他 | 9 |
| 12. 7 | 報告：専門職連携演習の準備状況　他<br>審議：教育ＧＰ今後の取り組みについて　他 | 8 |
| 12. 24 | 報告：専門職連携演習の準備状況　他<br>審議：専門職連携演習の実施要項について　他 | 9 |
| 22. 1. 18 | 報告：専門職連携演習の準備状況　他<br>審議：専門職連携演習合同オリエンテーションの評価と課題 | 9 |
| 2. 16 | 報告：専門職連携演習の実施状況　他<br>審議：専門職連携の評価と今後の進め方　他 | 9 |
| 3. 8 | 報告：地域包括支援センター職員研修会の実施状況　他<br>審議：平成 22 年度教育ＧＰ実施計画　他 | 9 |
| 3. 30 | 報告：甲府市とのモデル事業に関する進捗状況　他<br>審議：平成 22 年度教育ＧＰ実施計画　他 | 8 |
| 4. 12 | 報告：平成 22 年度の体制について　他<br>審議：合同報告会について　他 | 8 |
| 5. 10 | 報告：地域報告会について　他<br>審議：平成 22 年度専門職連携演習実施計画について　他 | 9 |
| 6. 21 | 報告：包括支援センターごとの活動報告　他<br>審議：地域包括支援センター研修会について　他 | １０ |
| 7. 21 | 報告：平成 22 年度専門職連携演習実施計画について　他<br>審議：成果報告会について　他 | 8 |
| 9. 1 | 報告：専門職連携教育学会報告について　他<br>審議：成果報告会について　他 | 8 |
| 9. 24 | 報告：なし<br>審議：成果報告会について　他 | 8 |
| 10. 25 | 報告：成果報告会の振り返り　他<br>審議：平成 22 年度演習計画　他 | 9 |
| 11. 29 | 報告：なし<br>審議：平成 22 年度演習計画　他 | 9 |
| 23. 1. 5 | 報告：平成 22 年度連携演習準備の進捗状況　他<br>審議：地域包括支援センターとの合同研修について　他 | 9 |
| 2. 22 | 報告：地域報告会準備状況　他<br>審議：平成 22 年度地域包括支援センターとの合同研修　他 | 9 |

※会議場所は池田キャンパス教育ＧＰ室

### (2) 専門職連携ワーキングチーム会議（平成21年度・22年度）

| 月　日 | 場　　所 | 内　　容 | 出席者（名） |
|---|---|---|---|
| 21.4.13 | 池田キャンパス<br>共同研究室1 | 報告：イギリス調査研修　他 | １４ |
| 4.27 | 飯田キャンパス<br>福祉実習室 | 報告：平成20年度事業の総括　他<br>審議：平成21年度事業計画　他 | １７ |
| 5.25 | 池田キャンパス<br>共同研究室1 | 報告：5月22日甲府市地域包括支援センター職員等研修 他<br>審議：6月20日合同フォーラム　他 | １８ |
| 6.29 | 飯田キャンパス<br>福祉実習室 | 報告：6月20日合同フォーラム　他<br>審議：平成21年度専門職連携演習の進め方 | １７ |
| 8. 3 | 飯田キャンパス<br>福祉実習室 | 報告：7月18日甲府市地域包括支援センター職員等研修会　他<br>審議：平成21年度専門職連携演習計画　他 | １８ |
| 10.20 | 飯田キャンパス<br>福祉実習室 | 報告：第2回保健医療福祉専門職連携教育学会　他<br>審議：平成21年度専門職連携演習計画、ミシガン大学調査研修 | １８ |
| 11.17 | 飯田キャンパス<br>福祉実習室 | 報告：甲府市との調査検討部会進捗状況　他<br>審議：平成21年度専門職連携演習ビジョンとゴールの検討と共有 | １８ |
| 12.15 | 飯田キャンパス<br>福祉実習室 | 報告:平成21年度専門職連携演習各包括との打ち合わせ状況　他<br>審議：調査項目　他 | １６ |
| 22.1.19 | 池田キャンパス<br>共同研究室1 | 報告:平成21年度専門職連携演習各包括との打ち合わせ状況　他<br>審議：1月5日合同オリエンテーションの評価と課題　他 | １６ |
| 2.23 | 池田キャンパス<br>大学院棟会議室 | 報告：平成21年度専門職連携演習実施状況　他<br>審議：平成21年度専門職連携演習の評価と今後の進め方 | １６ |
| 3.30 | 飯田キャンパス<br>福祉実習室 | 報告：甲府市地域包括支援センター職員等研修会実施状況　他<br>審議：平成22年度教育ＧＰ実施計画 | １７ |
| 4.27 | 池田キャンパス<br>共同研究室1 | 報告：4月17日合同発表会、地域報告会　他<br>審議：第3回保健医療福祉専門職連携教育学会への報告　他 | １７ |
| 6. 1 | 飯田キャンパス<br>福祉実習室 | 報告：ミシガン大学調査研修　他<br>審議：平成22年度甲府市地域包括支援センター職員等研修会、10月2日成果報告 | １８ |
| 6.24 | 池田キャンパス<br>大学院棟会議室 | 報告：各包括の活動状況　他<br>審議：7月1日甲府市地域包括支援センター職員等研修会、10月2日成果報告　他 | １４ |
| 7.26 | 飯田キャンパス<br>福祉実習室 | 報告：甲府市との教育ＧＰ関連事業話し合い　他<br>審議:平成22年度教育ＧＰパンフレット､10月2日成果報告　他 | １６ |
| 9. 6 | 池田キャンパス<br>共同研究室1 | 報告：第3回保健医療福祉専門職連携教育学会<br>審議：10月2日成果報告　他 | １５ |
| 9.28 | 飯田キャンパス<br>福祉実習室 | 報告：論文投稿進捗状況　他<br>審議：10月2日成果報告　他 | １９ |
| 11.22 | 池田キャンパス<br>共同研究室1 | 報告：10月2日成果報告、甲府市モデル地区調査　他<br>審議：12月9日甲府市地域包括支援センター職員等研修会、平成23年度カリキュラム　他 | １９ |
| 12.21 | 飯田キャンパス<br>福祉実習室 | 報告：12月9日甲府市地域包括支援センター職員等研修会、論文投稿進捗状況　他<br>審議：平成22年度専門職連携演習、3月4日甲府市地域包括支援センター職員等研修会 | １６ |
| 23. 2. 1 | 池田キャンパス<br>共同研究室1 | 報告：1月25日教育ＧＰ合同フォーラム、報告書作成　他<br>審議：3月4日甲府市地域包括支援センター職員等研修会　他 | １８ |
| 3. 3 | 池田キャンパス<br>共同研究室1 | 報告：地域報告会準備状況　他<br>審議：平成22年度地域包括支援センターとの合同研修　他 | １４ |

### (3) 健康長寿プロジェクト実行委員会　（編集 ： 吉澤 千登勢）

#### 1) 位置づけ

学生が実施したフィールド(地域包括支援センター)演習を、地域の視点から評価し、住民参加型ケアシステムに繋がるネットワークの拡大に向けて検討する組織であり、演習にご協力・ご指導を頂いた学外者からも組織した。

#### 2) 開催状況

| 年 月 日(時間) / 次 第 | 出席者 |
|---|---|
| 平成 22 年 1 月 26 日 10:30～12:00<br>1. あいさつ(学長)<br>2. 自己紹介<br><br>〈本会の目的〉<br>大学が甲府市との連携の中で地域に対してどのような活動ができるのか、将来的な住民参加型ケアシステム形成に向けて、これまでの取り組みを踏まえ意見交換を行なう。<br><br>3. 現在までの取り組み状況<br>4. 今年度の取り組み<br>5. 甲府市モデル事業の取り組み<br>6. 地域ケアシステム形成に向けた意見交換<br>7. その他<br>8. おわりのことば | ○甲府市<br>・福祉部福祉総室長 乙黒 功<br>・福祉計画課長 相良治彦<br>・健康衛生課長 早川 守<br>・高齢者支援室長 二宮康樹<br>・介護保険課長 池谷充男<br>○甲府市地域包括支援センター<br>・おおくに 所長 横内理乃<br>・西 所長 滝花昌子<br>・きょうりつ 所長 高山理恵 保健師 楠 史子<br>○山梨県<br>・福祉保健部医務課 看護指導監 佐野博美<br>・福祉保健部長寿社会課 介護保険指導監<br>都築和子<br>○山梨県立大学<br>・教育GP推進本部長 学長 伊藤 洋<br>・教育GP担当主査 看護学部長 佐藤悦子<br>・人間福祉学部長 藤谷 秀<br>・地域研究交流センター長 波木井 昇<br>・教育GP執行部及び専門職ワーキングチーム<br>神山裕美 柳田正明 河野由乃<br>吉澤千登勢 小野興子<br>・事務担当職員 関谷秀昭 相川喜代弘<br>・GP 事務室 三井知波留 堀内理恵 松橋昌代 |



地域包括支援センター



山梨県立大学



山梨県福祉部医務課・長寿社会課



甲府市福祉部

### (4) 教育開発プロジェクト実行委員会

1) 位置づけ

「専門職連携教育プログラム」に関する教育方法・評価方法を審議する学内組織である。

2) 開催状況

| 年 月 日(時間) / 次 第 | 出席者 |
|---|---|
| 平成 20 年 10 月 23 日 18:30～20:00<br>1. 取組みの概要説明<br>2. 教育開発プロジェクト実行委員会の役割について<br>3. 今後の運営について<br>・委員会の役割(委員長など)<br>・具体的な運用<br>4. その他 | ○看護学部<br>佐藤悦子 河野由乃 吉澤千登勢<br>清水惠子 望月宗一郎 須田由紀<br>○人間福祉学部<br>神山裕美 小野興子 大澤準一<br>横山貴美子 伊藤健次<br>○国際政策学部<br>波木井 昇 熊谷隆一 |

今後、3 年間の教育 GP のまとめとして、「健康長寿プロジェクト実行委員会」及び「教育開発プロジェクト実行委員会」を開催し、成果と課題を検討し、次年度以降の「専門職連携演習」に活用していく予定である。

## Ⅱ　平成 20 年度の取り組み概要　　（編集：須田　由紀）

平成 20～22 年度文部科学省「質の高い大学教育推進プログラム（教育ＧＰ）」採択
学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト －中間報告書－ より抜粋
詳細は、そちらを参照

### 1. 平成 20 年度のプログラム実施－専門職連携演習－

#### (1) 演 習 要 項

1) 演 習 目 的

① 看護学部と人間福祉学部の学生が、協働して「地域包括支援センター」を核としたフィールドに入り、住民の生活を体感する中で、生活及び健康ニーズを考えることができる。

② 看護・福祉の学生が協働で取り組むことによって、互いの専門性を知り、他職種と協働することの利点を明確にできる。

2) 演 習 目 標

① 看護学部及び人間福祉学部の学生の相互理解ができる。

② 地域アセスメント(地域特性と社会資源)が行なえる。

③ 実態調査や数的データ分析、個別面接などを通して、生活及び健康ニーズの把握ができる。

④ 地域住民への報告会に参加することができる。

3) タイムスケジュール（ 平成 21 年 1 月～4 月 ）

| | 日　時　・　場　所 | 内　　容 |
|---|---|---|
| オリエンテーション | 平成 21 年 1 月 6 日(火)<br>Ⅰ・Ⅱ限<br>(池田キャンパス<br>第 7 講義室) | 9:00～9:30　全体オリエンテーション<br>① 教育ＧＰの概要<br>② 演習目的・目標・方法<br>③ 4 月までのタイムスケジュール<br>①～③の担当 ： 佐藤先生(20 分)<br>④ 演習を担当する教員及びセンターの職員紹介<br>⑤ 本日の演習の進め方、学生名簿の配布、演習日に使用するブルゾンや名札について<br>④・⑤の担当 ： 神山先生(10 分)<br>9:30～12:10　各センターに分かれ、演習内容について話し合う。 |
| 演習実施日 | 2 月の上旬までに実施<br>(各地域包括支援センター) | ※ 演習日及び報告会は、センターによって異なる。 |
| 地域住民への報告会 | 4 月の上旬までに終了 | |
| 合同発表会<br>(新 4 年生・新 3 年生) | 4 月 18 日(土)午後<br>(池田キャンパス 講堂) | ・ 新 4 年生が本年度の演習内容や成果を発表する。新 3 年生は、地域特性を知るとともに、互いに知り合う場とする。 |
| ワークショップ | 6 月の予定<br>(飯田キャンパス 講堂) | ・ 講師は、本取り組みに関して先駆的な活動を実施している機関から招聘する。<br>・ 住民、甲府市及び各センターの職員にも参加を呼びかける。<br>・ 県立大学は、全学部の学生が参加する。 |

4) **各演習施設の担当教員**

| 地域包括支援センター名 | 担当教員 | |
|---|---|---|
| | 看護学部 | 人間福祉学部 |
| おおくに | 佐藤・須田 | 横山・鷹野（非常勤講師） |
| きょうりつ | 吉澤・望月(宗) | 神山・大澤 |
| 甲府西 | 河野・清水 | 小野・伊藤 |

教育ＧＰ室：三井・堀内

5) **演習記録**

① リフレクションペーパー

**【記載項目】**

- 他学部の学生との協働の取組を通して、互いの特徴に関して気づいたこと、考えたこと
- 今後、協働で取り組む上で大切にしたいと思うこと
- 今後、今回の体験をどのように活かしていきたいか
- その他、考えたこと、疑問に感じたこと　など

**【提出方法】**

・e-mailにて提出

② 演習の成果をまとめたもの：各地域包括支援センターごとの記録物

・合同発表会、地域住民への報告会に使用する資料など

③ 演習評価表

6) **その他の事項**

① この演習は、看護学部は「看護学原理Ⅱ」、「地域保健活動論Ⅱ」、「在宅看護活動論」、人間福祉学部は「ソーシャルワーク技術演習Ⅲ・Ⅳ」の時間の一部に充当する。

② 演習場所のセンターや訪問先、地域活動においては、礼節を保ち、相手の反応を見ながら臨機応変に対応すること。

③ 演習を通して知り得たセンター及び個人に関する情報で、口外してはならないもの、個人のプライバシーに関する情報の取り扱いには十分に配慮すること(情報の保護)。

④ 服装はスーツとし、靴は履きやすいもの、ピアスなどのアクセサリーは身に付けないこと。

⑤ 演習中は、ネームプレートを付けること。

⑥ 演習における地域活動では、教育ＧＰから貸し出しされるブルゾンを必ず着用すること。

⑦ 緊急連絡網は各センターごとに作成し、それぞれのセンターごとにリーダー2名(看護学部1名・人間福祉学部1名)、サブリーダー2名(看護学部1名・人間福祉学部1名)を選出し、連絡網に記載し、担当教員に提出する。

7) **戸別訪問調査訪問を実施するにあたっての共通文書について**

- 地域の皆様への協力依頼文書
- 同意書
- 戸別訪問調査のご案内



### (2) 甲府市地域包括支援センター別演習内容

#### ◆ 甲府市地域包括支援センター：おおくに

| | |
|---|---|
| 学　　生 | 看護学部 34 名 / 人間福祉学部 20 名　計 54 名 |
| 担当教員 | 看護学部 2 名 / 人間福祉学部 2 名　計 4 名 |
| センター職員 | 4～5 名 |

1) **専門職連携演習に向けてのオリエンテーション：平成 21 年 1 月 6 日(火)9:00～12:10**

| 時　　間 | 内　　容 | 備　　考 |
|---|---|---|
| 9:30～ 9:45 | メンバー紹介　担当教員の紹介 | 担当：須田 |
| 9:45～10:30 | 演習内容のオリエンテーション | 担当：佐藤 |
| 10:30～10:40 | 休　憩 | |
| 10:40～11:00 | おおくに職員紹介<br>横内所長　社会福祉士：渡邊さん　保健師：伊藤さん | |
| 11:00～11:30 | おおくに地域の概況 | おおくに所長：横内 |
| 11:30～12:10 | 調査方法について<br>チームごとの話し合い（役割分担・連絡網）<br>リフレクションペーパー記入 | 担当：横山 |

2) **フィールド演習：平成 21 年 1 月 31 日(土)** 9:00～17:00

**【演習の流れと内容】**

9:00　池田キャンパス 101 講義室に集合、出欠確認
(チームメンバーが揃ったところでリーダーが報告)

9:00- 9:25　オリエンテーション　①演習全体の留意点、依頼文、同意書
②調査票、地区踏査記録用紙
③バス巡回経路

9:30　バス出発（１号車：堀内・２号車：須田）

10:00-11:20　訪問調査・地区踏査

11:30　決められたバス停車場所に集合（乗り遅れた場合は教員携帯に連絡）

12:00　センターにて昼食

12:50　バス２号車：出発

13:00　バス１号車：出発

13:30-14:50　訪問調査・地区踏査

15:00　決められたバス停車場所に集合（乗り遅れた場合は教員携帯に連絡）

15:30　池田キャンパス到着、101 講義室に集合

15:30-16:00　チーム毎に訪問調査のまとめ、調査用紙の整理

16:00-16:30　「協働の取り組みを通して気づいたこと」についての話し合い
２～３チーム合同で以下のグループに分かれてグループワークを行い、国母・大国・大里各地区の代表１グループが、発表する。

16:30-17:00　各地区代表のグループの発表
その他、連絡事項

◆ **甲府市地域包括支援センター：きょうりつ**

| | |
|---|---|
| 学　　生 | 看護学部 33 名 / 人間福祉学部 21 名　計 54 名 |
| 担当教員 | 看護学部 2 名 / 人間福祉学部 2 名　　計　4 名 |
| センター職員 | 1～2 名 |

1) **専門職連携演習に向けてのオリエンテーション：平成 21 年 1 月 6 日（火）** 9:00～12:10

| 時　　間 | 内　　容 | 担 当 |
|---|---|---|
| 9:00- 9:30 | 全体オリエンテーション<br>配布したグループ表よりグループごとに座る | <br>神 山 |
| 9:40-10:30 | きょうりつ地区演習の目的・内容・日程<br>きょうりつ地区の高齢者と地域特性紹介 | 神 山<br>高 山 |
| 10:30-10:40 | 休憩 | |
| 10:40-10:55 | 地域マップ作成の概要と手順　/　調査用紙の説明 | 神 山 |
| 10:55-11:20 | グループ毎に自己紹介と調査日の役割分担・連絡網の記入 | 望 月<br>吉 澤 |
| 11:20-12:00 | 訪問時の接遇　/　面接の留意点とロールプレイ | 大 澤 |
| 12:00-12:10 | 次回調査の連絡事項 / リフレクション用紙の記入 | 吉 澤 |

【小グループによる調査日の決定事項について】
演習当日の集合場所と時間
役割分担
＊面接グループメンバー（3 名×2）　＊地域マップ作成（5 名）
＊調査集計（1 名）　＊地域住民への報告者（きょうりつ地区で 4 名程度）
＊グループ発表者（1 名）　＊感想共有記録者（1 名）
調査日の持ち物確認と分担

2) **フィールド演習**：1 月 31 日(土) 9:00～17:00

| 時　間 | 内　　容 | 担　　当 |
|---|---|---|
| 9:00- 9:20 | 集合・説明（訪問調査者名と地図を渡す） | 2～3 グループ毎に担当教員 1 名が調査地域を巡回し、学生指導や助言を行う |
| 9:20-10:50 | 小グループ毎に担当地区を歩き、指定された項目について調査を行う。 | |
| 11:00-12:00 | 各グループ代表者　（2 名程度）は、予約をとった高齢者宅で聞き取り調査を行う。 | |
| 12:00-13:00 | 昼食休憩 | |
| 13:00-13:30 | 聞き取り調査の結果を面接グループで共有し、記録するお礼状の記入 | マップ作成担当<br>大澤・吉澤・望月 |
| 13:30-14:50 | 午前中の現地調査をもとに、小グループごとに地域マップの作成と聞き取り調査の集計を行う | 調査集計担当<br>神山・三井 |
| 14:50-15:00 | 休憩 | |
| 15:00-15:50 | 調査結果について、グループで話し合い、協働の感想などを共有する | 1～5 グループ担当<br>大澤・吉澤<br>6～9 グループ担当 |
| 15:50-16:50 | 9 グループ合同報告会（発表時間は 1 グループ 5 分）<br>センター職員・教員のコメント 15 分 | 望月・神山 |
| 16:50-17:00 | 総括・連絡・リフレクションペーパー配布（後日提出） | |

◆ **甲府市地域包括支援センター：甲府西**

| | |
|---|---|
| 学　　生 | 看護学部 33 名 / 人間福祉学部 20 名　計 53 名 |
| 担当教員 | 看護学部 2 名 / 人間福祉学部 2 名　　計 4 名 |
| センター職員 | 3 名 |

1）**専門職連携演習に向けてのオリエンテーション：平成 21 年 1 月 6 日（火）** 9:00～12:10

| 時　間 | 内　　容 | 備　考 |
|---|---|---|
| 9:00～ 9:30 | 全体オリエンテーション | |
| 9:30～ | 教室の移動、チームごとの着席 | 資料配布 |
| 9:40～10:00 | 担当者紹介 | |
| | 担当教員の紹介 | |
| | センター職員の紹介 | |
| | センターの紹介 | |
| 10:00～10:40 | オリエンテーション | |
| | 演習の重点目標、内容、スケジュールなどの説明 | |
| | 対象者への聞き取り調査内容の説明 | |
| 10:40～10:50 | （休　憩） | |
| 10:50～11:40 | グループワーク | |
| | チームごとの自己紹介→2 チームの自己紹介（グループ） | |
| | ①聞き取り調査内容の学習（30 分程度） | |
| | 質問内容の理解、質問の仕方、聞きやすい順番、 | 学生は適 |
| | オリジナル質問の検討など | 宜担当教 |
| | ②家庭へ伺う時の態度や面接する時の配慮（15 分程度） | 員に相談 |
| | 電話での留意事項など | する |
| | ③調査に備え①②で主体的に学習することを各自確認 | |
| | ＊本日の記録用紙は事前学習用でありメモしてよい | 担当教員 |
| 11:40～12:00 | グループごとに担当教員へ報告と確認 | の確認 |
| | リフレクションペーパーの記入 | |
| | 連絡網の確認 | |
| | リーダー、サブリーダーの選出（各学部 1 名づつ） | 連絡網の |
| 12:00～12:10 | 今後の予定など連絡事項 | 確認と配 |
| 配布資料 | 実施計画、調査記録用紙（No. 1・2・3）、 | 布 |
| | 甲府西の資料（簡易的な地図、地域配布のお便り）、 | |
| | 学生名簿、連絡網、リフレクションペーパー、他 | |

2）**フィールド演習**：2 月 7 日（土）9:00～17:00

| 時　間 | 内　　容 | 備　考 |
|---|---|---|
| 9:00 | 集　合（飯田キャンパス） | |
| 9:00～ 9:10 | オリエンテーション | |
| 9:10～ 9:30 | チームごとに聞き取り調査内容の再確認 | 物品確認 |
| | （調査内容、対象者宅、電話での最終確認他） | |
| 9:30～12:00 | 調査出発～帰校　チームごとに調査内容をまとめる | |
| 12:00～13:00 | （昼食）（お礼状の記入） | |
| 13:00～14:30 | チームごとに記録用紙を整理し仕上げる | 学生は適 |
| | No. 1：地域で生活する高齢者への聞き取り調査 | 宜担当教 |
| | No. 2：○○さんの人とのつながりＭＡＰ | 員に相談 |
| | No. 3：○○さんの住まいの周辺地域ＭＩＮＩＭＡＰ | する |
| | パソコン入力 | |
| 14:30～14:40 | （休　憩） | |
| 14:40～15:40 | グループワーク：演習目標に沿っての気付きや学びなど | |
| 15:40～16:40 | グループの発表、報告会 | ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾀｰの確認 |
| | センター職員のコメント | |
| 16:40～17:00 | リフレクションペーパーの配布（後日回収） | |
| | 連絡事項 | |
| 記録用紙 | チームごと　調査記録用紙（NO１・２・３） | |
| | お礼状（ハガキ） | |
| | グループワーク記録用紙、リフレクションペーパー、他 | |

## 2. 甲府市地域包括支援センター研修会

### (1) 甲府市と大学との連携による地域包括支援センター職員等研修会実施要項

#### 1) 開 催 目 的

平成 20 年 8 月、甲府市主催の甲府市地域包括支援センター職員研修会が、「日常活動の中から把握した地域の課題を明確にし、地域へのかかわりを深め地域包括ケア体制の整備を学ぶ機会とする」ことを目的とし、山梨県立大学との連携により実施された。今回その継続の研修として、地域の課題をより具体的に明らかにすることによって、地域包括ケア体制の整備に向けて、取り組む課題や方策について検討し、今後、高齢者が生き生きと暮らせる地域づくりの実践に繋げることができることを目的に、山梨県立大学との共催で継続的に研修を開催していく。

#### 2) 目　　標

① 地域の課題を分析し明らかにする。
② 課題解決に向けての方向性が明確になる。
③ 具体的な方策を検討し業務に繋げることができる。
④ 共同作業を進めるプロセスにより参加者の共通理解を深めることができる。

#### 3) 研修方法及び講師

① 研修方法：ＫＪ法を用いてのグループワーク演習を基本とする。
② 講師：情報工房代表　山浦晴男先生（千葉大学大学院非常勤講師等歴任）
講師は、KJ 法の開発者である川喜田二郎氏の門下である。地域のまちづくりや訪問看護事業及び大学院教育などに関わるなど、多くの実績を持つ。

#### 4) 参 加 者

甲府市地域包括支援センター職員
甲府市役所職員
山梨県立大学教員

#### 5) 開催時期及び場所

① 時　期：平成 21 年 2 月～平成 21 年 7 月（時間：平日昼間・夜、土曜日などを候補）
② 回　数：5 回程度とする。ただし、研修内容や到達ステップの進捗状況により調整する。
③ 場　所：山梨県立大学とする。

#### 6) 具体的展開

| 年　度 | 開催月日 | | 時　間 | 場　所 |
|---|---|---|---|---|
| 平成 20 年度 | 第 1 回 | 2 月 27 日（金） | 18:30～21:00 | 山梨県立大学<br>池田ｷｬﾝﾊﾟｽ<br>101 講義室 |
| | 第 2 回 | 3 月 13 日(金) | 18:30～21:00 | |
| 平成 21 年度 | 第 3 回<br>中間報告 | 5 月 1 日（金） | 18:30～21:00 | |
| | 第 4 回 | 5 月 22 日（金） | 18:30～21:00 | |
| | 第 5 回 | 6 月 22 日（金） | 18:30～21:00 | |
| | 発表会及び<br>交流会の予定 | 7 月 18 日（土） | 13:00～17:30 | |

### (2) 研修講師の紹介

情報工房代表　　山浦　晴男先生

### (3) 研修実施状況

＜各グループの研修テーマと参加者数＞

| グループ別研修テーマ | 参加人数（人） | | |
|---|---|---|---|
| | 第1回（2月27日） | 第2回（3月13日） | 第3回（5月1日） |
| 甲府市地域包括支援センター（6グループ）<br>地域包括支援センターの業務で抱えている問題は何か | 30 | 28 | 29 |
| 甲府市役所（1グループ）<br>介護支援情報センターの業務で抱えている問題は何か | 4 | 4 | 4 |
| 大学（1グループ）<br>専門職連携演習を終えての悩みと課題 | 10 | 7 | 12 |
| 合　　計 | 44 | 39 | 45 |

## 3. 英国調査研修

### ＜ 調査研修の概要＞

今回の調査テーマと目的、及び調査項目は以下の通りである。

1) **テーマ**：

「英国の専門職連携教育と専門職連携の実際」

2) **目的**：

「英国の専門職連携教育のカリキュラム、教育方法、評価、及び課題と、専門職連携現場での現状と課題などについて調査し、本学の専門職連携教育プログラムの開発資料とする」

3) **調査項目**：

① 専門職連携教育の内容　（概要・教材・設備・指導資料・教育の実際・評価）

② 専門職連携の実際　　（連携先の機関や施設を視察）

調査先は、英国CAIPEのヘレナ・ロウ氏の調整により、以下の3ヶ所に決定し、山梨県立大学の看護学部教員4名と福祉コミュニティ学科教員4名、及びＧＰ事務局2名により実施した。

4) **調 査 先**

**① 英国専門職連携教育推進センター**

CAIPE: The UK Centre for the Advancement of Interprofessional Education

本調査全体調整：Helene Low （CAIPE 開発部長）

**② キングスカレッジ（ロンドン大学）**

King's College London, Strand, London WC2R 2LS, England, United Kingdom

セント・トーマス病院

（担当：Jayne Slonina, MA, RN, HV cert. Lecturer in Interprofessional Education ）

Division of Medical Education, Kings College London

**③ ブルックス大学**

Oxford Brookes University, Headington Campus, Gipsy Lane, Oxford OX3 0BP, UK

ジョン・ラドクリフ病院・ナッフィールド整形外科センター

（担当：Elizabeth Westcott, Pre Qualifying Director and IPL lead）

Oxford Brookes University

5）**調査日程**





**平成 21 年 3 月 26 日（木）**

CAIPE 事務局へのインタビュー

**平成 21 年 3 月 27 日（金）**

**① キングスカレッジグループ**

キングスカレッジの IPE（多職種連携教育）学習と演習の説明と質疑応答、IPE　1 年目履修中の学生と教員とともに昼食、患者教育への授業の視察（医学部と看護学部学生）等

**② ブルックス大学グループ**

歓迎昼食会、学部内の実習・演習施設の案内、学部と英国の IPL（多職種連学習）概要、ジョン・ラドクリフ病院見学等

**平成 21 年 3 月 28 日（月）**

**① キングスカレッジグループ**

キングスカレッジの IPE（多職種連携教育）学習と演習の説明と質疑応答、小児科集中ケアユニット視察、Florence Nightingale Museum 視察等

**②ブルックス大学グループ**

ナッフィールド整形外科センター、CAIPE の役割、昼食会、IPL の実際、学生指導への戦略と学習プロジェクト、IPL バーチャル学習について等

## 4. 広報活動及び他大学との交流

### (1) 学内・外への周知と協力体制への呼びかけ

1）プログラムの立ち上げと組織化は、本学「地域研究交流センター」に位置づけられている「教育開発」担当として企画されたものであり、採択結果もセンター長から全学情報ネットワークを通じて伝達され、実施における全学協力体制の呼びかけがセンター長からなされた。(2008/9/26)

2）教育ＧＰに選定されたことについて、本学ホームページのトップにトピックスとして掲載し、学内外へ広く周知を図った。

3）新聞への報道：本プログラムについて山梨日日新聞に掲載された。(2008/10/1)

4）学内教員フォーラム「水曜フォーラム」の開催：参加者は学内教員 39 名、甲府市職員及びセンター職員など学外からの参加者 16 名、計 55 名であった。発表者は佐藤、神山(2008/10/29)

5）学内にポスターを掲示(2009/1/12)

6）「学生による専門職連携演習合同発表会」開催ポスターの作成(2009/4)

7）パンフレット・ボールペンの作成

8）調査時に学生のブルゾン着用と調査対象者への本プログラム紹介の文書の配布

9）本学ホームページに「教育ＧＰ」ページを開設(2009/1/30 開設)

10）本学地域研究交流センター発行のニューズレターへの掲載（山梨県立大学地域研究交流センターニューズレターVol.6、2008/2/4 発行、佐藤が掲載）（山梨県立大学地域研究交流センターニューズレターVol.8、2009/2/19 発行、佐藤が掲載）

11）ラジオ放送を通してのプログラム紹介（FM 甲府「生涯学習の時間」2009/2/10 放送、佐藤、神山が担当）

### (2) 国内・外大学関係者への周知と交流

1）平成 20 年度「大学教育改革プログラム合同フォーラム」ポスターセッションへの参加出席者は教育ＧＰ担当教職員 8 名。（2009/1/12、パシフィコ横浜）

2）教育ＧＰパンフレット英訳版の作成

## 5. 成果と課題

平成 20 年度 文部科学省の教育ＧＰの選定を受けた教育プログラムへの取り組みの成果と課題を、以下の 4 つの視点から述べる。

### (1) 専門職連携に関する教育の充実

本取り組みのねらいは、大きく 2 点ある。1 点目は、学生が住民の生活する環境の中で演習を展開することで、より具体的な生活・健康のニーズを体感し、そこから住民を巻き込んだ生活の質を高める活動への展開方法を学ぶことである。

平成 20 年度の活動は、初年度ということもあり住民の生活・健康ニーズがどこにあるかについて、まず学生たちが体感することに焦点を当てた演習の展開だった。学生は、グループで住民の生活の場に入り、インタビューや地区踏査を行い、「住みやすさ」といった視点から情報収集を行った。今回の演習は、インタビューを行った対象者数に限界があったものの、収集した情報からの分析を行うことができた。学生の学びをみると、地域で生活する高齢者はそれぞれ固有のニーズはあるものの、その多くが「住み慣れた地域で生活し続けたい」と思い、「その人なりに生活を工夫している」ことを体感することができた。さらに、「人との交流を持ちたい」と思っている人が必ずしも交流があるとは言い難く、「何らかの心配事や不安」を持っている人もいることが明らかになった。

しかし、初年度は、それを地域のニーズというところまで掘り下げていくまでには至らなかった。今後、これらのデータを積み上げて地域のニーズとして捉え、そのニーズに対し看護・福祉の専門職として、住民主体の動きを創る援助のあり方を検討し実践できる力をどのようにつけていくかが、課題である。

2 点目のねらいは、看護と福祉の学生が協働で取り組むことによって、互いの専門性を知り、他職種と協働することの利点を明確にできることである。目的を持ってひとつのものに取り組んだことで、互いの共通点と相違点に気づき、広い視野から人や地域を観ることの必要性を学んだ。それは学生たちにとって新鮮な発見であり、「他学部の学生と交流できて良かった」という言葉も多く聞かれた。また、協働で行うことの困難さも一部体験し、「時間を合わせるのが大変だった」、「コミュニケーションをうまく取るのが大変だった」と言った言葉も聞かれ、異なる専門職が協働することの利点と困難さを体験できたことは成果であった。

しかし、多くの学生から「もっとじっくり意見交換をしたかった」、「情報交換する時間が十分なかった」という意見があったことから、意見交換をする時間の確保が今後の課題である。

### (2) 教育プログラムの開発

本プログラムは、平成 23 年度からは「専門職連携演習」として必須科目となるが、それまでは移行措置として、いくつかの科目から時間を頂いて実践しているといった状況である。したがって、両学部の時間調整に大変な困難があり、土曜日をその時間に当てているという無理も生じている。学生の出席状況は非常によいものの、「十分な時間がとれない」、「どの科目の時間に入るのか」などの指摘を受けている。新カリキュラムの実施までは、学生への説明と理解を十分に得ることで動機づけをしっかり行うことが、大きな課題である。

教育プログラムとしては、方法論としてある程度の成果を得たことから、今後はさらに学生の学びが深まるような導入・展開方法を検討していく必要がある。また、評価指標がまだ十分とは言えないので、平成 20 年度の実績を分析し、より確かな評価指標を作成していきたい。

### (3) フィールドとなる地域包括支援センターの活性化

地域包括支援センターの研修会を継続的に実施している。その中で、各センターが抱えている課題がある程度明確になりつつあり、それを異なった専門職同士が、その課題を共有できたことは大きな成果だと考える。また、研修会への出席状況も良く、これからのセンターの活動が活性化することにも貢献できたと評価する。

今後は、センターの課題に対する活動方法を明確にでき、そしてそれらを実践するまで、どのように支援するかが課題である。

また、フィールドとなった3ヶ所の地域包括支援センターについては、実習するための準備や学びをまとめる段階において、意見や助言をいただいているものの、本演習そのものが直接センターの活性化には結びついている状況にあるとは言えない。今後、学生や教員のパワーを活用し活性化につなげてもらえるような取り組みが必須である。

### (4) 教育プログラム開発に関する体制づくり

学長を中心とした学内体制を構築することはできた。教育ＧＰ執行部会・ワーキングチームは会議を頻回に持ち、教育プログラムを作るための検討は活発にされている。特に、ワーキングチームは、フィールドとなる3ヶ所の地域包括支援センターに分かれ、そこの職員との話し合いも適宜行っている。その成果が、平成20年度の演習を円滑に実施することにつながった。また、代表者が、英国への先進地調査にも行き、そこで学んだことを今回の活動に取り入れることができている。

しかし、健康長寿プロジェクト実行委員会や教育開発プロジェクト委員会は、メンバーが確定したにとどまり、まだ十分に機能していない状況にある。今後は、各組織を円滑に運営し、さらに充実した教育プログラムの検討をかさねていきたい。





## Ⅲ　平成21年度・22年度のプロジェクトの実施（専門職連携演習）

### 1. 演習概要　　（編集：GP事務室　三井　平形　松橋）

#### (1) 演習目的・目標

1) 演習目的

看護学部及び人間福祉学部の学生が、協働して「地域包括支援センター」を核としたフィールドに入り、地域住民の生活及び健康ニーズを考えることができる。併せて、両学部の学生が協働して取り組みむことによって、互いの専門性を知り、他職種と連携することの意義を学ぶ。

2) 演習目標

1. 看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互理解することができる。
2. 個別に関わった高齢者の暮らしと、それを支える社会資源について検討できる。
3. 実態調査を通して、高齢者の生活及び健康ニーズを検討し、フィードバックすることができる。
4. 専門職が連携して地域住民に関わるための基本的態度を学ぶことができる。
5. 1～4を通して、連携の意義を考えることができる。

#### (2) 演習日程と内容（平成21年12月～平成23年3月）

| | 日　時　・　場　所 | 内　　容 |
|---|---|---|
| オリエンテーション | 平成22年1月5日(火)<br>Ⅰ・Ⅱ限<br>池田キャンパス<br>第6・7・8講義室 | 全体オリエンテーション<br>・教育ＧＰの概要<br>・演習の目的・目標・スケジュール<br>・演習担当教員及び地域包括支援センター職員の紹介<br>地域包括支援センター別オリエンテーション<br>・演習地域の特性<br>・訪問調査における留意点 |
| フィールド演習 | 平成22年2月6日(土)<br>9：00－17：00<br>各地域包括支援センター | ・高齢者への聞き取り調査<br>・調査結果の分析と生活及び健康ニーズの検討<br>・一連の過程を通して専門職連携の意義を考える |
| 地域住民への報告会 | 平成22年3月－5月<br>日時と場所は地域包括支援センターにより異なる | 演習にご協力頂いた地域の皆様へ、訪問調査結果及び学生が学んだことを報告した。 |
| 合同発表会 | 平成22年4月17日(土)<br>9：00－16：30<br>池田キャンパス講堂 | ・新4年生による、実施した演習内容や成果の発表<br>・新3年生は、演習先の地域特性を知るとともに、互いに知り合う場とする。 |
| オリエンテーション | 平成23年1月11日(火)<br>Ⅰ・Ⅱ限<br>池田キャンパス<br>第6・7・8講義室 | 全体オリエンテーション<br>・教育ＧＰの概要<br>・演習の目的・目標・スケジュール<br>・演習担当教員及び地域包括支援センター職員の紹介<br>地域包括支援センター別オリエンテーション<br>・演習地域の特性<br>・訪問調査における留意点 |

| | 日　時　・　場　所 | 内　　容 |
|---|---|---|
| フィールド演習 | 平成 23 年 2 月 5 日(土)<br>9：00－17：00<br>各地域包括支援センター | ・高齢者への聞き取り調査<br>・調査結果の分析と生活及び健康ニーズの検討<br>・一連の過程を通して専門職連携の意義を考える |
| 地域報告会 | 平成 23 年 3 月（予定）<br>日時と場所は地域包括支援センターにより異なる | |

**(3) 演習記録と評価表**

1) **リフレクションペーパー**

【記載項目】

- 他学部の学生との協働の取り組みを通して、互いの特徴に関して気づいたこと、考えたこと
- 今後、協働で取り組む上で大切にしたいと思うこと
- 今後、今回の体験をどのように活かしていきたいか
- その他、考えたこと、疑問に感じたこと　など

【提出方法】

・e-mail にて提出

2) **演習の成果をまとめたもの ：各地域包括支援センターごとの記録物**

・合同発表会、地域住民への報告会に使用する資料など

3) **演習評価表**

**(4) 各演習施設の担当教員・学生数**

平成 21 年度

| 地域包括支援センター名 | 担　当　教　員 | | 学生数 |
|---|---|---|---|
| | 看護学部 | 人間福祉学部 | |
| おおくに | 泉宗・須田・佐藤 | ○ 横山・山田 | 看護：36 名<br>福祉：24 名 |
| きょうりつ | ○ 望月・中橋・吉澤 | 伊藤・大澤・神山 | 看護：36 名<br>福祉：24 名 |
| 甲府西 | 清水・河野・山本 | ○ 柳田・小野 | 看護：31 名<br>福祉：19 名 |

教育ＧＰ室 ： 三井 ・ 堀内 ・ 松橋

平成 22 年度

| 地域包括支援センター名 | 担　当　教　員 | | 学生数 |
|---|---|---|---|
| | 看護学部 | 人間福祉学部 | |
| 南西ほうかつ（おおくに） | ○ 泉宗・田中・森田・佐藤 | 下村・山田<br>山中（演習時のみ） | 看護：34 名<br>福祉：23 名 |
| 中央ほうかつ（きょうりつ） | 望月・中橋・吉澤 | ○ 神山・伊藤・大澤 | 看護：34 名<br>福祉：24 名 |
| 西ほうかつ（甲府西） | ○ 清水・井出・須田<br>山本・河野 | 柳田・小野 | 看護：34 名<br>福祉：22 名 |

教育ＧＰ室 ： 三井 ・ 平形 ・ 松橋　　※ 包括名の改称（平成 22 年 4 月）

**(5) その他の事項**

1) この演習は、看護学部は「看護学原理Ⅱ」、「地域保健活動論Ⅱ」、「在宅看護活動論」、人間福祉学部は「ソーシャルワーク技術演習Ⅲ・Ⅳ」の時間の一部に充当する。
2) 演習場所のセンターや訪問先、地域活動においては、礼節を保ち、相手の反応を見ながら臨機応変に対応すること。
3) 演習を通して知り得たセンター及び個人に関する情報で、口外してはならないもの、個人のプライバシーに関する情報の取り扱いには十分に配慮すること(情報の保護)。
4) 服装はスーツとし、靴は履きやすいもの、ピアスなどのアクセサリーは身に付けないこと。
5) 演習中は、ネームプレートを付けること。
6) 演習における地域活動では、教育ＧＰから貸し出しされるブルゾンを必ず着用すること。
7) 緊急連絡網は各センターごとに作成する。
8) 戸別訪問調査訪問を実施するにあたっての共通文書
   - 地域の皆様への協力依頼文書
   - 同意書
   - 戸別訪問調査のご案内（はがき）　　(巻末資料参照)

## 2. 甲府市南西地域包括支援センター

### (1) 平成 21 年度　　(文責:泉宗　美恵)

| | |
|---|---|
| 学　　生 | 看護学部 36 名 / 人間福祉学部 22 名　計 58 名 |
| 担当教員 | 看護学部 3 名 / 人間福祉学部 2 名　　計　5 名 |
| 包括職員 | 1～2 名 |

#### 1) 演習実施計画

**① 演習目的と内容は、全体の共通事項による**

**② 実施概要**

大国地区老人クラブの協力を得て、高齢者の生活や健康状況と課題、地域活動等について調査し、高齢者の生活実態やニーズを把握しまとめる。

1) オリエンテーションや訪問時の地区踏査を通して、大国地区の概況や老人クラブの活動状況を把握する。
2) 大国地区老人クラブに所属している高齢者に訪問面接を行い、「老人クラブへの参加状況」「自治会活動への参加状況」「日常生活の様子」等について聞き取り調査をする。
3) 健康や生活ニーズ把握し、数的・質的データ集計を行う。
4) 上記は看護・福祉の学生の協働により行い、大国地区の地域特性をふまえて高齢者の生活実態やニーズについてまとめる。
5) 学生による地域住民への報告会を行う。

**③ グループ編成**

・訪問面接時は、看護学部と福祉学部の学生 2～3 名を 1 チーム（訪問チーム）として 23 チーム編成する。
・グループワークは、訪問チームをコア単位として、演習内容により学生 4～5 名のグループと学生 10～11 名のグループを編成する。

**④ 調査地域・調査対象・調査数**

・甲府市大国地区の老人クラブに参加されている高齢者のうち、本調査協力に同意の得られた 23 名。
・調査の依頼は、大国地区老人クラブの会合に出向き、調査の主旨等を口頭および文書にて説明し、大国地区老人クラブの承諾を得る。その後包括職員、老人クラブ会長の協力のもと、口頭で了解が得られた方を対象とし、大学・包括・甲府市の連名で訪問依頼書を葉書にて郵送する。

**⑤ 訪問調査用紙の内容**

・質問Ⅰ:「老人クラブ活動への参加について」
　所属しているグループ名、活動頻度、活動内容、活動人数、活動場所、老人クラブへの要望
・質問Ⅱ:「自治会活動への参加について」
　所属する自治会の活動内容と参加の有無、自治会活動への要望
・質問Ⅲ:「老人クラブ活動以外への参加について」
　老人クラブ活動以外で参加している活動の内容とその活動頻度、要望
・質問Ⅳ:「その他」
　隣近所の人からの困りごとの相談の有無とその内容、相談に対する支援の有無とその内容、隣近所や地域に対してできること
・質問Ⅴ:「学生へのメッセージ」

・質問Ⅵ：「その他（オリジナル質問など）」
・質問Ⅶ：「老研式活動能力指標」（20 項目からなる設問に「はい」「いいえ」で回答）

**⑥ 戸別訪問調査の実施**

学生 2～3 名で編成した訪問チームで事前に口頭で同意を得た高齢者宅に訪問し、聞き取り調査用紙の質問項目についてインタビューを行う。

調査にあたっては、学生同士で役割を決め、学内で打合せ・予行練習を行い演習に臨む。

**⑦ 調査結果のまとめ方**

・訪問チームごとにインタビュー内容を確認し、互いが聞き取った内容を共有しながら「調査結果まとめ用紙」にまとめる。
・訪問した 23 事例の調査結果を、分析項目別に数的・質的な集計を行い、高齢者の生活実態やニーズをまとめる。
・分析グループごとにまとめた調査結果を全体で共有し、「老人クラブへの参加状況」「自治会活動への参加状況」「日常生活の様子」等をふまえて、分析結果を地域に報告できるように検討する。

**⑧ 看護と福祉の協働へのフィードバック**

・調査結果のまとめ終了後に、学生 4～5 名のグループで「専門職の連携」についてグループワークを行う。
　ア）演習での連携を通して感じたことや考えたこと、専門職の連携の在り方や課題について話し合い、グループごとにまとめる。
　イ）グループでまとめた内容を発表し、全体での共有を図る。
・演習後には、各人で専門職連携演習の振り返りを行い、リフレクションペーパーを記入して指定日までに指定場所へ提出する。

**2）演習実施内容**

**①オリエンテーション：平成 22 年 1 月 5 日（火）9:00～12:10**

| 時　間 | 内　　容 | 担　当 |
|---|---|---|
| 9:00-9:30 | 全体オリエンテーション | |
| 9:45-10:05 | 「おおくに」グループオリエンテーション<br>【演習内容】：目的・方法、チーム構成、演習当日の服装・持ち物 | 佐藤 |
| 10:05-10:25 | 【甲府市地域包括支援センターおおくにからの説明】<br>職員紹介、おおくに地区の概況、老人クラブの概要<br>老人クラブと地域包括支援センター | 包括職員 |
| 10:25-11:15 | 【グループワーク】：自己紹介、相互の専門性理解、役割分担・連絡網作成、リーダー選出 | 横山 |
| （10 分） | 【休憩】 | |
| 11:25-12:05 | 【訪問面接の留意点とロールプレイ】 | 横山 |
| 12:05-12:10 | 連絡事項・リフレクションペーパーの配布 | |

**② フィールド演習までの準備**

・調査対象者については、包括職員を通して内諾を得た後、学生とのマッチングを行い、約 2 週間前に調査依頼葉書を郵送した。葉書は訪問チームリーダーが両学部窓口教員の指示に従い作成し、チームごとに学生が投函した。
・学生は葉書投函から 1 週間以内に、葉書到着と訪問日時を電話にて確認し、訪問調査 3 日前に再度電話で最終確認を行った。
・学生は、オリエンテーションで配布した調査用紙を基に訪問面接調査のリハーサルを行い、

当日の役割分担を決め演習の事前準備をした。

・訪問先を地図上にプロットし、訪問チームごとのバス乗降車場所を確定し、バスの運行表を作成する。

**③ フィールド演習当日の日程 ： 平成 22 年 2 月 6 日(土)9：00〜17：00**

| 時　間 | 内　　容 | 担　当 |
|---|---|---|
| 9:00-9:20 | 【オリエンテーション】<br>演習の流れ、健康チェック、諸注意、バス移動について | 横山・泉宗 |
| 9:30-10:00 | 【演習地区への移動】<br>バス 2 台に分乗、最寄り場所で降車し地図で確認しながら移動 | |
| 10:00-11:00 | 【訪問調査】<br>チーム毎に訪問し調査用紙に沿ってインタビュー実施 | |
| 11:00-12:30 | 【大学へ移動】<br>最寄り場所でバス 2 台に分乗し大学へ移動。バスの中で午後からの予定を説明する。 | |
| 12:30-13:30 | 【昼食・休憩】 | |
| 13:30-13:45 | 【調査結果のまとめ】：訪問チーム毎に 1 枚の用紙にまとめる | 全教員 |
| 13:45-15:05 | 【調査結果の入力】：分析グループに分かれて担当調査項目のデータ入力をする。(情報処理室)<br>【調査結果の分析】：分析グループ毎に入力担当項目の分析結果をまとめ、提出する。 | |
| 15:05-15:15 | 【休憩】 | |
| 15:15-15:45 | 【専門職の連携についてグループ討議】<br>学生 4〜5 名でグループワーク<br>①演習の連携を通して感じたこと ②専門職連携の在り方・課題<br>③まとめ | 佐藤 |
| 15:45-16:25 | 【発表・意見交換】<br>①分析グループごとの調査分析結果<br>②専門職連携についてのグループ討議内容 | 包括職員<br>教員 |
| 16:25-16:50 | 【講評】：①包括職員　②大学担当教員 | |
| 16:50-17:00 | 【連絡事項】：リフレクションペーパーの提出、ブルゾン返却、今後の予定<br>【調査対象者への「お礼のはがき」記入】 | |

**④ 指導体制**

〔学部・教員の連携〕

・訪問前のはがきの作成および電話確認などは、チームリーダーが相談・確認ができるよう両学部 1 名ずつ窓口教員を選定し、学生・教員間で連携が図れるよう調整を行った。

〔訪問調査〕

・戸別訪問が円滑にできるよう、事前に地域の地図を掲示し、訪問宅を把握できるように支援した。

・演習当日は、訪問宅周辺地図をそれぞれの訪問チームに配布し、バス降車後のルートを確認できるようした。

・訪問地区エリア別でバス 2 台に分乗し、教員がサポートできるように各 1 名添乗し、訪問宅の最寄り場所で安全に降車・乗車できるように支援した。

・訪問調査中の緊急連絡先を学生に提示し、教員は甲府市包括支援センターおおくに内で待機した。

〔調査結果の集計・分析〕

・分析グループごとに教員1名が担当し、入力方法および結果の分析に指導・助言を行った。

〔演習後の講評〕

・両学部の教員から専門職連携演習の一連のプロセスを通してのコメントをし、演習のまとめへの助言を行った。

**⑤ 地域住民への報告**

専門職連携演習に協力いただいた地域住民（大国地区老人クラブに所属している高齢者）や地域包括支援センターの職員等に調査結果をふまえた高齢者の生活実態と課題、専門職にできることを報告し、意見交換をした。

日時：2010年4月16日（金）13:30～14:30

場所：大国遊悠館

参加者：大国地区老人クラブメンバー、社会福祉協議会職員、地域包括支援センター職員
山梨県立大学看護学部、人間福祉学部　学生代表者、教員　　計　44名

報告内容：報告用の資料を作成し、資料を提示しながら以下の内容について報告した。

ア）インタビュー調査の結果

イ）調査結果からみえてきた生活の様子

ウ）私たち専門職にできること

エ）専門職の連携について学んだこと

**⑥ 合同発表会への事前準備演習：平成22年4月5日（月）13:00～16:30**

〔目　的〕演習のまとめと成果発表(4/17)のための準備

※ 前回の演習では分析グループごとに調査結果をまとめたが、それぞれのグループの分析結果を併せ、「大国地区」全体の調査結果及び協働の成果をまとめる。

〔目　標〕

・調査結果から、大国地区の高齢者の生活及び健康ニーズについて考えることができる。

・調査で明らかになった高齢者の生活実態をふまえて、専門職として何ができるか考えることができる。

・専門職が協働することの意義について考えることができる。

〔おおくにグループリーダー会の実施〕

合同発表会に向けての事前準備演習に向け、訪問チームのリーダー23名で今後の取り組みについて打ち合わせを実施し、事前準備演習はリーダーを中心にすすめていくこととした。

日時：2010年4月5日（金）10:40～12:10

場所：共同研究室

内容：ア）専門職連携演習報告会に向けての報告内容の検討

・地域住民報告会　・合同発表会

イ）発表に向けての準備作業と役割分担

〔タイムスケジュール〕

| 時 間 | 内　　容 | 備　考 |
|---|---|---|
| Ⅲ限 | **オリエンテーション**<br>・演習の振り返り<br>・本日のタイムスケジュールについて<br>・専門職連携演習報告会について<br><br>**各グループでまとめた調査結果の報告**<br>2/6 の専門職連携演習後、各グループでまとめた調査結果を資料として、グループごとに発表し全体で調査結果を共有した。<br><br>**報告会に発表する内容の骨子を検討**<br>報告内容の骨子（案）をリーダーから提示し、全体で共有し検討する。<br><br>**報告会準備のための役割分担の決定**<br>報告会に向けてどのような準備が必要なのかを全体で確認し、分析グループ単位で役割分担を決める。 | オリエンテーション：<br>教　員<br><br>進行：リーダー代表者<br>看護学部 2 名<br>人間福祉学部 2 名 |
| Ⅳ限 | **グループに分かれて発表に向けての準備作業**<br>1）各グループがまとめた原稿を基礎資料に調査結果をパワーポイントに編集する。(分析グループごと)<br>2）調査結果をふまえて私たち専門職に何ができるのかについてグループごとに話し合い、出された意見を集約して整理する。<br>3）演習を通して専門職の連携について学んだことについてグループワークで出された意見をポストイットに記入し、ＫＪ法で整理する。<br><br>**作業の進捗状況と今後の予定を全体で確認**<br>各グループでまとめた発表準備資料を併せて、地域報告会用と合同発表会用に作成することを全体で確認し、リーダーが代表として報告会に向け発表用資料（パワーポイント原稿と発表原稿）を作成することを確認する。 | 各グループのリーダーを中心に作業をすすめる。<br><br>※ 4/17 の全体発表会の演者を 4 人(看護学部 2 人、人間福祉学部 2 人)選出。<br><br>※ 4/16 の地域報告会の演者を 4 人(看護学部 2 人、人間福祉学部 2 人)選出。 |
| 4/17<br>予定 | 9:00 ～ 集合<br>9:10 ～ 模擬発表会(質疑応答)<br>10:00 ～ 修正・発表の準備<br>11:30 ～ 最終模擬発表会<br>12:00 ～ 昼　食<br>13:00 ～ 発表準備<br>14:15 ～ 発表会 | |

### 3) リフレクションと評価　（文責:田中　彰子）

南西ほうかつグループの56名（看護学部35名、人間福祉学部21名）のリフレクションペーパーについて考察した。１回目オリエンテーション終了後、２回目演習実施後、３回目合同発表会後に実施した。いずれも、「感じたこと、考えたこと、学んだこと」を問うものであり、字数制限なしの自由記載とした。大多数の学生は記述量が多く、300字～700字でまとめており、具体的な学び、感想、意見が述べられていた。

#### ①　1月5日　オリエンテーション終了後

オリエンテーションプログラムにおけるグループワークでは、専門性と個別性に関する学生相互の質疑応答と、調査対象者についてのイメージづくりを行った。看護学部35名、人間福祉学部21名、計56名からリフレクションペーパーが提出された。未提出は２名（看護学部１名、人間福祉学部１名）であった。気づきや発見が多い記述の中でも、代表的な例を両学部それぞれ１例ずつ原文のまま紹介する。（以下、NN：看護学部、HS：人間福祉学部とする。）

・「昨年の４月に４年生の発表を聞いた時は、プロジェクトの大きさにあまり気がつかなかった。しかし今日、その概要を聞いて驚いた。それは、この大人数で一つのものを仕上げるということが可能なのか。また、地域というフィールドに飛び出して、なおかつ、家でお話を伺うということが可能なのか。インタビュー結果をどのようにまとめ、インタビュアーに返していけるのか、などであった。さまざまな不安を感じつつも、今日のオリエンテーションを通して小グループの中で、グループワークをしているうちに、いつの間にか打ち解けている自分に気がついた。今はまだ、メンバーの顔と名前を一致させることに手一杯ではあるが、自分とは異なる視点で高齢者やその家族、生活面や社会性を捉えている他学部のメンバーと活動をしていけることに期待を持てた。今までに体験したことのない未知なる領域に未だ不安を感じながらも、それに増して２月の演習が楽しみになった。高齢者とのふれあいを大切にしながら、今現在、高齢者の周りに起きている問題や悩みを身近なこととして考えていきたいと思った。」（NN）

・「他職種との協働の意義を見つめるという目的をもって挑んだこのオリエンテーションでしたが、とても楽しい時間を過ごすことができました。そのなかでも、対象者のイメージを挙げていくという場面では、学部特有の視点の違いがはっきりと見られ、とても面白く感じました。先輩方の発表やプログラムの概要説明で、他学部との視点の違いについては触れられており想像はしていましたが、ここまではっきりと分かれることを目の当たりにして、自分にきちんと福祉的視点が身についてきたのだと実感したとともに、見方が偏らないよう気をつけなければと改めて気を引き締めた瞬間でもありました。２月の実践を通じて、さらに協働することへの意義・面白さを追求していきたいです。本番が楽しみになるオリエンテーションでした。」（HS）

リフレクションペーパーの自由記述から、対象者についてのイメージづくりとしてインパクトがあったことがわかった。短時間で専門性を語ることは難しかったようだが、グループ形成が早く、この日の演習は、学生が打ち解ける方法として効果的であった。今後の予定に対する不安もあげられていたが、住民が相手であるため、今後も学生の不安を抱くことは避けられないのではないかと考える。住民の反応を受け取り、自分達の学びとするPDCAサイクルであることを踏まえ、相手の日程にあわせることや流動的なことがあることの意識化を導入部分で加えておくべきであった。その後、２月６日までのプロセスの中で行動に困った学生もいなかったため、当日に向けての動機付けが出来たと考える。したがって、オリエンテーションの２つのねらい「①2月6日の本演習に向けての準備ができる」「②仲間づくりができる」は、達成できたと考える。

#### ②　2月6日　演習実施後

演習への参加者は、58名であった。リフレクションペーパーの提出は54名（看護学部34名、人間福祉学部20名）であり、未提出は４名（看護学部２名、人間福祉学部２名）であった。類似する記述がみられた中から代表的な記述と特記すべき記述を抜粋した。

・私たちの意見を福祉の人に分かってもらえるように説明し、理解を促したり、逆に福祉の学生の意見をわかろうとし、とてもいい関係が築けたと思う。先入観だけで判断せずに、納得するまで話し合うことが大切だと感じた。(NN)
・異なった専門性をそれぞれで考えるのではなく、専門性を統合させることで対象者をあらゆる角度から捉えることができるのだと分かった。(NN)
・対象者へのアプローチの幅を広げるためにも互いが持っている知識や技術を活用し、互いの考えを尊重しあうことが重要であるが、そのためには根拠を持って相手に伝えることが必要であるとわかった。(NN)
・自分の意見を相手に理解してもらえるようにしっかり伝えたうえで、相手の意見も理解し尊重することが多面的に対象者を考える上で大切だと学ぶことができました。(NN)
・同じ話を聞いたにも関わらず、見てきた印象や気がついた点が違うことを実感できた。また、高齢者に対しての見方も違い、他職種で意見を共有することで対象について多面的に考えていくことができると感じた。(NN)
・訪問後のグループワークや発表を通して、それらを押し付けあうのではなく、尊重しあって同じ目標に向かって協力し合うことでよりよい支援体制が築けるのだということを学んだ。(HS)
・議論を行うと、やはり、お互いが注目している所が違い、視点が異なることを改めて実感した。今回の合同演習を通して考えたことが、福祉と看護との連携に限らず、他職種との連携においても時間をかけて議論を繰り返し行い、お互いの専門性を理解することが、私たち専門職が目指す連携ではないかと考えた。(HS)
・互いの専門性の違いばかりに目を向けるのではなく共通する部位も勿論あり、それを認め合いながら援助過程においてどの専門職にウェイトを置くのか考えながらのアセスメントが専門職連携では非常に重要だと考えさせられた。(HS)

オリエンテーションから1ヶ月後、老人クラブに参加している高齢者の自宅への訪問演習とデータ分析、ディスカッションをする過程で、学生の意識は高まり、視野が広がり、自らが目指す専門職としての自覚、多職種が連携する意義について表現していた。その中から、「根拠」「共有」「尊重」のキーワードが見えてきた。

**③ 4月17日　合同発表会後**

合同発表会への参加者は、58名であった。リフレクションペーパーの提出は54名（看護学部34名、人間福祉学部20名）であり、未提出は（看護学部2名、人間福祉学部2名）であった。以下に類似する記述の中から代表的な記述と特記すべき記述を抜粋した。

【訪問演習からの学び】
・地域の人も快く迎え入れてくれて、この演習を続けて欲しいと思っていることを知り、私たちにとっても、地域の人にとっても意味のあるものになっていることを実感した。(NN)
・高齢者がより暮らしやすい街のためにできることを考えるには、その土地、人のことを理解していく必要があると感じた。(NN)
【専門性と連携】
・自分自身の専門性を磨くことによって、他職種と連携した時により専門性を発揮できると感じた。(NN)
・看護の専門性を伝えることや相手の専門性を理解することは非常に難しいことではあるが、それぞれの専門的な知識があるからこそ対象を多面的に捉え、またアプローチの幅も広がるため、連携は必要不可欠であると感じた。(NN)
【連携の難しさ】
・カリキュラムやキャンパスの違う2つの学部が同じ目標に向かうことは難しく、これは2つの職種において連携することは難しいとも言えます。それぞれの考えをまとめ、それを合わせながら1つにまとめてい

く作業をもっとスムーズにこなせるようになりたいと思いました。(NN)
・互いの専門性を尊重することが大事と主張していても、その専門性を尊重するあまり意見がまとまらず集約できないという弊害も生じることがあると、この演習で学ぶことができた。(HS)
【視点、意識の拡がり】
・連携を学ぶことを通して、地域の実情や当事者の方々の的確なニーズ把握など、近い将来専門職として社会に出て行く中で、意識しなければならない点を数多く感じ取ることができた。(HS)
・今回の連携で福祉の学生はどのような視点で捉えているのかなど自分とは違う面、共通点も明らかにすることができ、連携の大切さを学ぶことができた。(NN)
・この演習では「私たちは専門職になる」という意識の向上にもつながっているのではないかと思った。(NN)
【プログラム改善の必要性】
・発表のまとめについて、明確な手順等が決められていなかったので、どうするべきか困る場面がありました。しっかりとしたプログラムが組まれていったほうがいいと思いました。(HS)

これらのリフレクションの内容は、【訪問演習からの学び】【専門性と連携】【連携の難しさ】【視点、意識の拡がり】【プログラム改善の必要性】であった。合同発表会までのプロセスと発表の場が、専門職連携についてのそれぞれの体験を言語化し学習として意味づけを行う機会となったと考える。以上より、演習の目的とした「１．学生が協働して地域住民の生活及び健康ニーズを考えることができる。」「２．互いの専門性を知り、他職種と連携することの意義を学ぶ。」は、達成されたのではないかと考える。

**④自己評価より**

オリエンテーション終了後、演習実施後、及び合同発表会後の３回自己評価の提出を求めた。評価基準は、A：目標を達成できた、B:目標をある程度達成できた、C:目標を達成するにはやや努力を要する、D：目標をほとんど達成できなかった、それぞれ看護学部と人間福祉学部に分類した。３回とも同一評価内容の９項目をA評価（%）で比較し、特記すべき点について述べる。1 回目に、看護学部のほうが非常に高かった（71.4、28.6）項目は、「自分が学んでいる専門性について説明することができる」であったが、２回目、３回目と人間福祉学部の評価が向上し、３回目は、両学部とも７割以上（88.2、71.4）となった。「相手が学んでいる専門性について表現することができる」は、両学部とも最も低い（ 25.7、4.8）項目だったが、看護学部のほうが高かった。しかし、２回目では両学部ともさらに低くなり（9.1、10.0）、３回目にてやっと 3 割以上が達成できた（32.4、33.3）。「互いの専門性をふまえた連携の必要性について多面的に考えることができる」は、１回目両学部とも低い評価（34.3、47.6）ながら、人間福祉学部のほうが高かったが、２回目、３回目と進むにつれて両学部とも向上し、最終的に（88.2、90.5）に到達した。「今後の自己の課題を明確にできる」は、１回目看護学部のほうが高かった(60.0、38.1)が、２回目で人間福祉学部が高くなり（60.6、70.0）、３回目で両学部ともに高くなったが、人間福祉学部の向上率が目覚ましかった（73.5、85.7）。

2009年度 教育ＧＰ「学際統合型専門職連携演習」オリエンテーション終了後自己評価

| 自己評価項目 | おおくに (%) | | | | n=56 | 看　護 (%) | | | | n=35 | 福　祉 (%) | | | | n=21 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | A | B | C | D | | A | B | C | D | | A | B | C | D | |
| 看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互に理解することができる | 57.1 | 35.7 | 7.1 | 0.0 | | 57.1 | 34.3 | 8.6 | 0.0 | | 57.1 | 38.1 | 4.8 | 0.0 | |
| 自分が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について説明することができる | 55.4 | 37.5 | 7.1 | 0.0 | | 71.4 | 25.7 | 2.9 | 0.0 | | 28.6 | 57.1 | 14.3 | 0.0 | |
| 相手が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について自分の言葉で表現できる | 17.9 | 69.6 | 12.5 | 0.0 | | 25.7 | 62.9 | 11.4 | 0.0 | | 4.8 | 81.0 | 14.3 | 0.0 | |
| 互いの専門性について尊重することができる | 89.3 | 10.7 | 0.0 | 0.0 | | 88.6 | 11.4 | 0.0 | 0.0 | | 90.5 | 9.5 | 0.0 | 0.0 | |
| 互いの専門性を踏まえた連携の必要性について多面的に考えることができる | 39.3 | 55.4 | 5.4 | 0.0 | | 34.3 | 60.0 | 5.7 | 0.0 | | 47.6 | 47.6 | 4.8 | 0.0 | |
| 他職種と連携する意義を考えることができる | 82.1 | 17.9 | 0.0 | 0.0 | | 85.7 | 14.3 | 0.0 | 0.0 | | 76.2 | 23.8 | 0.0 | 0.0 | |
| グループワークに積極的に参加し、チームの一員としての役割を担うことができる | 71.4 | 26.8 | 1.8 | 0.0 | | 77.1 | 22.9 | 0.0 | 0.0 | | 61.9 | 33.3 | 4.8 | 0.0 | |
| グループメンバーの意見を傾聴し、受け止めたうえで自分の意見を述べることができる | 78.6 | 19.6 | 1.8 | 0.0 | | 77.1 | 22.9 | 0.0 | 0.0 | | 81.0 | 14.3 | 4.8 | 0.0 | |
| 本日の一連のプロセスを振り返り、評価し、今後の自己の課題を明確にできる | 51.8 | 42.9 | 5.4 | 0.0 | | 60.0 | 40.0 | 0.0 | 0.0 | | 38.1 | 47.6 | 14.3 | 0.0 | |
| 評価基準　A：目標を達成できた<br>B：目標をある程度達成できた<br>C：目標を達成するにはやや努力を要する<br>D：目標をほとんど達成できなかった | | | | | | | | | | | | | | | |

2009年度 教育ＧＰ「学際統合型専門職連携演習」演習実施後自己評価

| | 自己評価項目 | おおくに(%) | | | | | 看　護(%) | | | | | 福　祉(%) | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | A | B | C | D | | A | B | C | D | | A | B | C | D | |
| **1** | **看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互に理解することができる** | 66.0 | 34.0 | 0.0 | 0.0 | n=53 | 66.7 | 33.3 | 0.0 | 0.0 | n=33 | 65.0 | 35.0 | 0.0 | 0.0 | n=20 |
| 1) | 自分が学んでいる専門職の専門性(知識・技術など)について説明することができる | 67.9 | 32.1 | 0.0 | 0.0 | n=53 | 78.8 | 21.2 | 0.0 | 0.0 | n=33 | 50.0 | 50.0 | 0.0 | 0.0 | n=20 |
| 2) | 相手が学んでいる専門職の専門性(知識・技術など)について自分の言葉で表現できる | 9.4 | 79.2 | 11.3 | 0.0 | n=53 | 9.1 | 84.8 | 6.1 | 0.0 | n=33 | 10.0 | 70.0 | 20.0 | 0.0 | n=20 |
| 3) | 互いの専門性について尊重することができる | 90.6 | 9.4 | 0.0 | 0.0 | n=53 | 90.9 | 9.1 | 0.0 | 0.0 | n=33 | 90.0 | 10.0 | 0.0 | 0.0 | n=20 |
| 4) | 互いの専門性を踏まえた連携の必要性について多面的に考えることができる | 75.5 | 20.8 | 3.8 | 0.0 | n=53 | 72.7 | 24.2 | 3.0 | 0.0 | n=33 | 80.0 | 15.0 | 5.0 | 0.0 | n=20 |
| **2** | **実態調査で関わった高齢者の暮らしと、それを支える社会資源について検討できる** | 45.3 | 52.8 | 0.0 | 1.9 | n=53 | 36.4 | 60.6 | 0.0 | 3.0 | n=33 | 60.0 | 40.0 | 0.0 | 0.0 | n=20 |
| 1) | 関わった高齢者個々の暮らしについて考えることができる | 75.5 | 20.8 | 1.9 | 1.9 | n=53 | 84.8 | 9.1 | 3.0 | 3.0 | n=33 | 60.0 | 40.0 | 0.0 | 0.0 | n=20 |
| 2) | 関わった高齢者個々の暮らしを支える社会資源について説明することができる | 17.0 | 66.0 | 15.1 | 1.9 | n=53 | 9.1 | 63.6 | 24.2 | 3.0 | n=33 | 30.0 | 70.0 | 0.0 | 0.0 | n=20 |
| 3) | 関わった高齢者が暮らす地域について考えることができる | 71.7 | 26.4 | 0.0 | 1.9 | n=53 | 75.8 | 21.2 | 0.0 | 3.0 | n=33 | 65.0 | 35.0 | 0.0 | 0.0 | n=20 |
| 4) | 関わった地域で調査した高齢者全体の生活及び健康ニーズを考えることができる | 52.8 | 39.6 | 5.7 | 1.9 | n=53 | 57.6 | 39.4 | 0.0 | 3.0 | n=33 | 45.0 | 40.0 | 15.0 | 0.0 | n=20 |
| **3** | **実態調査をとおして、高齢者の生活及び健康ニーズについて検討できる** | 50.9 | 49.1 | 0.0 | 0.0 | n=53 | 45.5 | 54.5 | 0.0 | 0.0 | n=33 | 60.0 | 40.0 | 0.0 | 0.0 | n=20 |
| 1) | 互いの専門的な視点を踏まえ、得られた情報を共有するとともに、多角的に議論することができる | 69.8 | 22.6 | 7.5 | 0.0 | n=53 | 69.7 | 24.2 | 6.1 | 0.0 | n=33 | 70.0 | 20.0 | 10.0 | 0.0 | n=20 |
| 2) | 議論の結果をもとに、客観的に分析し、課題を明らかにできる | 45.3 | 54.7 | 0.0 | 0.0 | n=53 | 48.5 | 51.5 | 0.0 | 0.0 | n=33 | 40.0 | 60.0 | 0.0 | 0.0 | n=20 |
| 3) | 課題に対する解決方策を専門的な視点から考えることができる | 34.0 | 60.4 | 5.7 | 0.0 | n=53 | 36.4 | 60.6 | 3.0 | 0.0 | n=33 | 30.0 | 60.0 | 10.0 | 0.0 | n=20 |
| **4** | **専門職が連携して地域住民に関わるための基本的態度を学ぶことができる** | 84.9 | 15.1 | 0.0 | 0.0 | n=53 | 90.9 | 9.1 | 0.0 | 0.0 | n=33 | 75.0 | 25.0 | 0.0 | 0.0 | n=20 |
| 1) | 訪問前後の手続き(電話・礼状など)が的確に実施できる | 79.2 | 20.8 | 0.0 | 0.0 | n=53 | 84.8 | 15.2 | 0.0 | 0.0 | n=33 | 70.0 | 30.0 | 0.0 | 0.0 | n=20 |
| 2) | 身だしなみや言葉遣いが適切であり、相手に不快を与えないよう接することができるとともに、相手の反応を的確に捉えることができる | 84.9 | 13.2 | 0.0 | 1.9 | n=53 | 90.9 | 6.1 | 0.0 | 3.0 | n=33 | 75.0 | 25.0 | 0.0 | 0.0 | n=20 |
| 3) | 地域住民・専門機関従事者に感謝の意を伝えることができる | 88.7 | 11.3 | 0.0 | 0.0 | n=53 | 93.9 | 6.1 | 0.0 | 0.0 | n=33 | 80.0 | 20.0 | 0.0 | 0.0 | n=20 |
| 4) | 個人情報を的確に扱い、確実に保護することができる | 96.2 | 3.8 | 0.0 | 0.0 | n=53 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | n=33 | 90.0 | 10.0 | 0.0 | 0.0 | n=20 |
| **5** | **他職種と連携する意義を考えることができる** | 75.5 | 24.5 | 0.0 | 0.0 | n=53 | 81.8 | 18.2 | 0.0 | 0.0 | n=33 | 65.0 | 35.0 | 0.0 | 0.0 | n=20 |
| 1) | グループワークに積極的に参加し、チームの一員としての役割を担うことができる | 73.6 | 24.5 | 1.9 | 0.0 | n=53 | 84.8 | 12.1 | 3.0 | 0.0 | n=33 | 55.0 | 45.0 | 0.0 | 0.0 | n=20 |
| 2) | グループメンバーの意見を傾聴し、受け止めたうえで自分の意見を述べることができる | 81.1 | 18.9 | 0.0 | 0.0 | n=53 | 87.9 | 12.1 | 0.0 | 0.0 | n=33 | 70.0 | 30.0 | 0.0 | 0.0 | n=20 |
| 3) | 協働する体験から得られた学びをグループ活動を通してまとめ、分かり易く発表することができる | 34.0 | 60.4 | 5.7 | 0.0 | n=53 | 42.4 | 51.5 | 6.1 | 0.0 | n=33 | 20.0 | 75.0 | 5.0 | 0.0 | n=20 |
| 4) | 連携して関わった一連のプロセスを振り返り評価し、今後の自己の課題を明確にできる | 64.2 | 35.8 | 0.0 | 0.0 | n=53 | 60.6 | 39.4 | 0.0 | 0.0 | n=33 | 70.0 | 30.0 | 0.0 | 0.0 | n=20 |

2009年度 教育ＧＰ「学際統合型専門職連携演習」合同発表会後自己評価

| | 自己評価項目 | おおくに（%） | | | | n=55 | 看　護（%） | | | | n=34 | 福　祉（%） | | | | n=21 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | A | B | C | D | | A | B | C | D | | A | B | C | D | |
| 1 | **看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互に理解することができる** | 80.0 | 20.0 | 0.0 | 0.0 | | 85.3 | 14.7 | 0.0 | 0.0 | | 71.4 | 28.6 | 0.0 | 0.0 | |
| 1) | 自分が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について説明することができる | 81.8 | 18.2 | 0.0 | 0.0 | | 88.2 | 11.8 | 0.0 | 0.0 | | 71.4 | 28.6 | 0.0 | 0.0 | |
| 2) | 相手が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について自分の言葉で表現できる | 32.7 | 63.6 | 3.6 | 0.0 | | 32.4 | 64.7 | 2.9 | 0.0 | | 33.3 | 61.9 | 4.8 | 0.0 | |
| 3) | 互いの専門性について尊重することができる | 98.2 | 1.8 | 0.0 | 0.0 | | 97.1 | 2.9 | 0.0 | 0.0 | | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | |
| 4) | 互いの専門性を踏まえた連携の必要性について多面的に考えることができる | 89.1 | 10.9 | 0.0 | 0.0 | | 88.2 | 11.8 | 0.0 | 0.0 | | 90.5 | 9.5 | 0.0 | 0.0 | |
| 2 | **実態調査で関わった高齢者の暮らしと、それを支える社会資源について検討できる** | 56.4 | 43.6 | 0.0 | 0.0 | | 47.1 | 52.9 | 0.0 | 0.0 | | 71.4 | 28.6 | 0.0 | 0.0 | |
| 1) | 関わった高齢者個々の暮らしについて考えることができる | 85.5 | 12.7 | 1.8 | 0.0 | | 88.2 | 8.8 | 2.9 | 0.0 | | 81.0 | 19.0 | 0.0 | 0.0 | |
| 2) | 関わった高齢者個々の暮らしを支える社会資源について説明することができる | 23.6 | 69.1 | 7.3 | 0.0 | | 11.8 | 76.5 | 11.8 | 0.0 | | 42.9 | 57.1 | 0.0 | 0.0 | |
| 3) | 関わった高齢者が暮らす地域について考えることができる | 80.0 | 16.4 | 3.6 | 0.0 | | 79.4 | 17.6 | 2.9 | 0.0 | | 81.0 | 14.3 | 4.8 | 0.0 | |
| 4) | 関わった地域で調査した高齢者全体の生活及び健康ニーズを考えることができる | 76.4 | 23.6 | 0.0 | 0.0 | | 76.5 | 23.5 | 0.0 | 0.0 | | 76.2 | 23.8 | 0.0 | 0.0 | |
| 3 | **実態調査をとおして、高齢者の生活及び健康ニーズについて検討し、地域にフィードバックできる** | 49.1 | 49.1 | 1.8 | 0.0 | | 50.0 | 50.0 | 0.0 | 0.0 | | 47.6 | 47.6 | 4.8 | 0.0 | |
| 1) | 互いの専門的な視点を踏まえ、得られた情報を共有するとともに、多角的に議論することができる | 78.2 | 21.8 | 0.0 | 0.0 | | 76.5 | 23.5 | 0.0 | 0.0 | | 81.0 | 19.0 | 0.0 | 0.0 | |
| 2) | 議論の結果をもとに、客観的に分析し、課題を明らかにできる | 61.8 | 34.5 | 3.6 | 0.0 | | 67.6 | 32.4 | 0.0 | 0.0 | | 52.4 | 38.1 | 9.5 | 0.0 | |
| 3) | 課題に対する解決方策を専門的な視点から考えることができる | 58.2 | 40.0 | 1.8 | 0.0 | | 58.8 | 41.2 | 0.0 | 0.0 | | 57.1 | 38.1 | 4.8 | 0.0 | |
| 4) | 得られた結果をまとめて、関係者にわかりやすく報告することができる | 40.0 | 58.2 | 1.8 | 0.0 | | 47.1 | 52.9 | 0.0 | 0.0 | | 28.6 | 66.7 | 4.8 | 0.0 | |
| 4 | **専門職が連携して地域住民に関わるための基本的態度を学ぶことができる** | 90.9 | 9.1 | 0.0 | 0.0 | | 94.1 | 5.9 | 0.0 | 0.0 | | 85.7 | 14.3 | 0.0 | 0.0 | |
| 1) | 訪問前後の手続き（電話・礼状など）が的確に実施できる | 80.0 | 18.2 | 1.8 | 0.0 | | 79.4 | 20.6 | 0.0 | 0.0 | | 81.0 | 14.3 | 4.8 | 0.0 | |
| 2) | 身だしなみや言葉遣いが適切であり、相手に不快を与えないよう接することができるとともに、相手の反応を的確に捉えることができる | 87.3 | 12.7 | 0.0 | 0.0 | | 94.1 | 5.9 | 0.0 | 0.0 | | 76.2 | 23.8 | 0.0 | 0.0 | |
| 3) | 地域住民・専門機関従事者に感謝の意を伝えることができる | 96.4 | 3.6 | 0.0 | 0.0 | | 94.1 | 5.9 | 0.0 | 0.0 | | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | |
| 4) | 個人情報を的確に扱い、確実に保護することができる | 98.2 | 1.8 | 0.0 | 0.0 | | 97.1 | 2.9 | 0.0 | 0.0 | | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | |
| 5 | **1～4をとおして、他職種と連携する意義を考えることができる** | 85.5 | 14.5 | 0.0 | 0.0 | | 88.2 | 11.8 | 0.0 | 0.0 | | 81.0 | 19.0 | 0.0 | 0.0 | |
| 1) | グループワークに積極的に参加し、チームの一員としての役割を担うことができる | 74.5 | 25.5 | 0.0 | 0.0 | | 85.3 | 14.7 | 0.0 | 0.0 | | 57.1 | 42.9 | 0.0 | 0.0 | |
| 2) | グループメンバーの意見を傾聴し、受け止めたうえで自分の意見を述べることができる | 80.0 | 18.2 | 1.8 | 0.0 | | 85.3 | 14.7 | 0.0 | 0.0 | | 71.4 | 23.8 | 4.8 | 0.0 | |
| 3) | 協働する体験から得られた学びをグループ活動を通してまとめ、分かり易く発表することができる | 54.5 | 43.6 | 1.8 | 0.0 | | 58.8 | 38.2 | 2.9 | 0.0 | | 47.6 | 52.4 | 0.0 | 0.0 | |
| 4) | 連携して関わった一連のプロセスを振り返り評価し、今後の自己の課題を明確にできる | 78.2 | 21.8 | 0.0 | 0.0 | | 73.5 | 26.5 | 0.0 | 0.0 | | 85.7 | 14.3 | 0.0 | 0.0 | |

4) **担当者会議**

| 月　日 | 場　所 | 内　　容 | 出席者（名） | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | | 大学 | 包括 | その他 |
| 21.11.10 | 包括 | 平成21年度演習の方向性について | 2 | 2 | |
| 11.17 | 大学 | 11月10日包括との会議議事報告、<br>11月20日老人クラブ会長会での説明について | 6 | | |
| 11.20 | 大国<br>悠遊館 | 大国老人クラブ会長会にて演習の概要説明及び協力依頼 | 5 | 2 | 甲府市1<br>住民　10 |
| 12. 4 | 包括 | 1月5日オリエンテーションと2月6日訪問調査のながれ、調査用紙・項目と今後の準備作業について | 4 | 2 | |
| 12.15 | 大学 | 今後の準備作業について | 5 | | |
| 12.22 | 包括 | 訪問調査の留意点、調査対象者と調査依頼文について | 4 | 2 | |
| 22. 1. 4 | 大学 | 1月5日オリエンテーションのながれと配布物の最終確認 | 5 | | |
| 1.19 | 大学 | 2月6日訪問調査までの予定 | 5 | | |
| 1.22 | 包括 | 2月6日訪問調査のながれと配布物の確認、<br>地域への報告会について | 4 | 2 | |
| 1.26 | 大学 | 2月6日訪問調査のながれ最終確認 | 5 | | |
| 2. 8 | 大学 | オリエンテーションと訪問調査、演習準備作業の振り返り及び今後の予定について | 6 | | |
| 3. 9 | 大学 | 合同発表会準備作業のすすめ方、地域報告会及び合同発表会について | 5 | | |

**(2) 平成22年度**　（文責:森田　祐代）

| | |
|---|---|
| 学　　生 | 看護学部33名／人間福祉学部23名　計56名 |
| 担当教員 | 看護学部4名／人間福祉学部1名　　計5名 |
| 包括職員 | 2～3名 |

1) **演習実施計画**

**① 演習目的・目標は、全体の共通事項による**

**② 実施概要**

甲府市南西地域包括支援センターの国母地区、大国地区、大里地区に生活する「自主的な活動」グループに参加している高齢者の生活の様子について調査すると共に、生活環境や近所付き合いなどの地域交流について把握する。調査結果から高齢者の生活実態や健康ニーズについて分析し、その結果を地域へ報告できるようにまとめる。

**③ グループ編成**

・訪問チーム（1～23）は看護学部と福祉学部の学生2～3名を1チームとして構成する。

・グループワークは話し合いの効果を考慮し、2つの訪問チームを合わせた学生4～5名のグループ（a～k）で構成する。

・分析グループは結果の入力・分析における分担や効率性を考慮し、学生10～11名のグループ（A～E）で構成する。

**④ 調査対象者**

・甲府市国母地区・大国地区・大里地区に在住する「自主的な活動に参加されている高齢者」

のうち、本調査協力に同意の得られた23名。

・対象者は、包括職員・地区自治会長の協力のもと、口頭で内諾を得た後、訪問依頼書をはがきにて郵送し、その後、電話で確認し承諾を得る。

**⑤ 訪問調査用紙の内容**

・質問Ⅰ：「あなた自身のことについて」

性別、年齢、同居人数、住居形態（一戸建て・アパート・マンション・公営住宅）、居住階（エレベータ有無）、現地区居住年数

・質問Ⅱ：「自主活動への参加について」

所属しているグループ名、活動のきっかけ、活動頻度、活動内容、活動人数、活動場所、活動場所への移動手段、活動の意味（①生活の充実感がもてる ②生きがいになる ③健康や体力が保てる ④人と話す機会が増える ⑤新しい友達ができる ⑥情報交換ができる ⑦地域のほかの活動にも参加するようになる ⑧地域に貢献できる ⑨話題が豊富になる ⑩社会への見方が広がる ⑪その他〈複数回答〉）、他に参加している活動

・質問Ⅲ：「近所の人とのお付き合いについて」

隣近所の付き合い軒数、近所とのあいさつ頻度、近所に相談できる人の存在、近所の人の相談にのれるか、相談を受けて困ったときに誰に相談するか（①市役所 ②地域包括支援センター ③民生員 ④同居の家族 ⑤隣近所の人 ⑥誰にも相談しない ⑦分からない ⑧その他〈複数回答〉）、見守り活動でできること、見守り訪問の希望とその理由

・質問Ⅳ：「地域包括支援センターについて」（認識の有無・期待することなど）

・質問Ⅴ：「学生へのメッセージ」

・質問Ⅵ：「その他（オリジナル質問など）」

・質問Ⅶ：「老研式活動能力指標」（20項目からなる設問に「はい」「いいえ」で回答）

**⑥ 戸別訪問調査**

・訪問チーム（学生2～3名）で事前に口頭で同意を得た対象者宅に訪問し、聞き取り調査用紙の質問項目についてインタビューを行う。

・調査に先駆け、学生同士で役割を決め、学内で打合せ・予行練習を行い演習に臨む。

**⑦ 調査結果のまとめ方**

・訪問チームで調査結果を確認し、「調査結果まとめ用紙」1枚にまとめる。

・訪問チームごとにまとめた調査用紙を回収し、入力・分析項目別に用紙を分ける。

・分析グループごとに、「入力マニュアル」を参照しながら、パソコンのフォーマットに入力する。

・入力終了後、グラフなどを基に、調査結果の分析を行う。分析結果を地域に報告できるように検討し、リーフレットにまとめる。

**⑧ 看護と福祉の専門職連携についての討議**

・調査結果の分析終了後に、4～5名のグループ（a～k）で「専門職の連携」についてグループ討議を行う。

・演習の連携を通して感じたことや考えたこと、専門職の連携の在り方や課題について話し合い、グループごとにまとめる。

・グループでまとめた内容を発表し、全体での共有を図る。

**⑨ 調査結果の報告**

・分析グループの調査結果内容をリーフレットまとめ、作成したリーフレットを介して地域への報告を行う（時期は未定）。

2) **演習実施内容**

**① オリエンテーション：平成 23 年 1 月 11 日(月)** 9:00〜12:10

| 時　間 | 内　　容 | 担　当 |
|---|---|---|
| 9:00-9:30 | 全体オリエンテーション | |
| 9:45-10:05 | 「南西ほうかつ」グループオリエンテーション<br>【演習内容】：目的・方法、チーム構成、演習当日の服装・持ち物 | 佐藤 |
| 10:05-10:25 | 【甲府市南西地域包括支援センターからの説明】<br>職員紹介、地区概況、調査対象者について、<br>地域包括支援センターの活動 | 包括職員 |
| 10:25-11:15 | 【グループワーク】：自己紹介、相互の専門性理解、役割分担・連絡網作成、リーダー選出 | 泉宗 |
| (10 分) | 【休憩】 | |
| 11:25-12:05 | 【訪問面接の留意点とロールプレイ】 | 下村 |
| 12:05-12:10 | 連絡事項・リフレクションペーパーの配布 | 田中 |

**② フィールド演習までの準備**

- 調査対象者については、センター職員から地区の自治会長を通して内諾を得た後、学生とのマッチングを行い、約 2 週間前に調査依頼葉書を郵送した。
- 葉書は訪問チームリーダーが両学部窓口教員の指示に従い作成し教員が一括して投函した。
- 葉書投函から 1 週間以内に葉書到着と訪問日時を電話確認し、訪問調査 3 日前に再度電話での確認を行った。
- 包括職員と相談し、当日写真撮影可能な対象者を選定し、事前に依頼、承諾を得た。
- 学生は、オリエンテーションで配布した調査用紙を基に訪問調査のリハーサルを行い、役割分担を決め演習準備を進めた。
- 演習当日のバス 2 台を予約し、ドライバーの協力のもとに到着時刻とバス乗降場所について事前に何度も打合せを行った。

**③ 演習当日の日程：平成 23 年 2 月 5 日(土)** 9：00〜17：00

| 時　間 | 内　　容 | 担　当 |
|---|---|---|
| 9:00-9:20 | 【オリエンテーション】<br>演習の流れ、健康チェック、諸注意、バス移動について | 下村<br>森田・平形 |
| 9:30-10:00 | 【演習地区への移動】<br>バス 2 台に分乗、最寄り場所で降車し地図で確認しながら移動 | (バス添乗) |
| 10:00-11:00 | 【訪問調査】<br>チーム毎に訪問し調査用紙に沿ってインタビュー実施 | 田中・平形 |
| 11:00-12:30 | 【大学へ移動】<br>最寄り場所でバス 2 台に分乗し大学へ移動。バスの中で午後からの予定をアナウンスする。 | (バス添乗)<br>田中・平形 |
| 12:30-13:30 | 昼食・休憩 | |
| 13:30-13:45 | 【調査結果のまとめ】：訪問チーム毎に 1 枚の用紙にまとめる | 全教員 |
| 13:45-15:05 | 【調査結果の入力】：分析グループ(A〜E)に分かれて担当項目の入力をする。<br>【調査結果の分析】：分析グループ毎に入力担当項目の分析結果をまとめる。 | |

| | | |
|---|---|---|
| 15:05-15:15 | 【休憩】 | |
| 15:15-15:45 | 【専門職の連携についてグループ討議】：グループ a～k で討議　①演習の連携を通して感じたこと ②専門職連携の在り方と課題 ③まとめ | 佐藤 |
| 15:45-16:25 | 【発表・意見交換】：①調査分析結果 ②専門職連携についてのグループ討議内容 | 泉宗 |
| 16:25-16:50 | 【講評】：①包括職員 ②大学担当教員 | 包括職員<br>田中・山中 |
| | 【連絡事項】：リフレクションペーパーの提出、ブルゾン返却、今後の予定 | 森田 |
| 16:50-17:00 | 【調査対象者への「お礼のはがき」記入】 | 森田 |

**④ 指導体制**

〔学部・教員の連携〕

・訪問前のはがきの作成および電話確認などは、チームリーダーが相談・確認ができるよう両学部 1 名ずつ窓口教員を選定し、学生・教員間で連携が図れるよう調整を行った。

〔訪問調査〕

・戸別訪問が円滑にできるよう、事前に地域の地図を掲示し、訪問宅を把握できるように支援した。

・演習当日は、訪問宅周辺地図をそれぞれの訪問チームに配布し、バス降車後のルートを確認できるようした。

・訪問地区エリア別でバス 2 台に分乗し、教員がサポートできるように各 1 名添乗し、訪問宅の最寄り場所で安全に降車・乗車できるように支援した。

・訪問調査中の緊急連絡先を学生に提示し、教員は南西包括支援センター内で待機した。

〔調査結果の集計・分析〕

・分析グループごとに教員 1 名が担当し入力方法および結果の分析に指導・助言を行った。

〔演習後の講評〕

・両学部の教員から「専門性」についてコメントをし、演習のまとめへの助言を行った。

**⑤ 地域への報告**

〔調査に協力いただいた高齢者への報告〕

地域における高齢者の自主活動に関する調査結果と演習を通しての学びをリーフレットにまとめ、調査に協力いただいた高齢者へ個別に郵送した。リーフレットの作成は、分析グループ単位で選出したリーダーを中心に、演習で分析したデータをもとに編集作業を行った。

〔地域包括支援センターへの報告〕

地域包括支援センター職員、甲府市地区担当保健師を対象にインタビュー調査の結果と連携演習を通しての学びを学生代表者が報告し、意見交換をした。

日時：平成 23 年 3 月 11 日（金）10:00～11:00

場所：南西包括地域包括支援センター

報告内容：報告用の資料を作成し、資料を提示しながら以下の内容について報告した。

・インタビュー調査の結果

・調査結果からみえてきた生活の様子

・専門職の連携について学んだこと

### 3) リフレクションと評価　　（文責：下村　幸仁）

南西ほうかつグループでは、看護学部（以下、「NN」という）33名、人間福祉学部（以下、「HS」という）22名の合計55名の学生による専門職連携演習に関するリフレクションを基に考察を行った。リフレクションペーパーは、「感じたこと、考えたこと、学んだこと」について自由記述とし、1回目を4月17日の「4年生の合同発表会後」、2回目を1月11日の「オリエンテーション終了後」、そして3回目を2月5日の「フィールド演習後」に提出させた。以下に専門職連携に係る学生の意識の変化をみてみる。

#### ① 4年生の発表を聞いて

リフレクションペーパーからは、4年生の合同発表会から専門職連携演習のイメージができたことと看護と福祉の連携の必要性を再確認することができたという意見が多かった。代表的なものとして、次の二つを紹介したい。

・「発表を聞いて、人間福祉学部の学生と共に地域に出向くことで、普段見ない角度から対象を捉える力を身に付けられるのではないかと思った。発表者の中には、それぞれの専門性の違いから、意見が対立することもあったと話している学生もいたが、両者がお互いの専門性を理解し合えたとき、それぞれの視野はさらに広がっていくのではないかと思う。それぞれの専門性によって、視点や方法は違っても、地域の人々の生活を支えるという点は同じであると思うので、互いの専門性を理解し合い、生かしながら地域を支えていけたらと思う。」（NN）

・「看護を専門に学ぶ学生と、福祉を専門に学ぶ学生が同じ目標をもって活動していく中で、異なる視点や考え方、意見などをお互いに伝えあい尊重し合いながら、まとめあげていくことの難しさを感じた。しかし、お互いの不足を補いあったり、偏った考えに陥ることを防ぐことができたりといった利点もあることがわかった。看護や福祉の現場ではとくに、対象者にとっても援助者にとっても他職種との連携が大切であるということを今までの講義の中で学んできた。連携の困難さを実感することで、連携するうえで大切なことや、連携の必要性を考え感じられる有意義な演習にしたい。」（HS）

このように4年生の報告時において、専門職連携演習の必要性を感じているが、本年度自分たちが実際に演習を行うことへの不安も伺えた。

#### ② オリエンテーション終了後

オリエンテーションプログラムにおけるグループワークでは、専門職連携に不可欠な専門性と個別性に関する理解を深め、また調査対象者についてのイメージづくりを行った。 具体的には、学生相互による自己紹介から個別性の重要性を学び、各学部生による履修科目や演習、実習内容に関する説明と質疑応答から互いの専門性について理解を深めた。調査対象者のイメージづくりに関しては、年齢層や行っているサークル活動などの説明からイメージを膨らませ、調査時に配慮すべき事項をグループで協議した。こうしたグループワークを終えて提出されたリフレクションペーパーから特徴的なものをまとめて紹介する。

・「人間福祉学部の学生とコミュニケーションをとることができたが、お互いに人を対象とする学びをしているためお互いにコミュニケーションを積極的に取ろうとしていた。そのため短時間であつたが、グループメンバーがどのような人なのか捉えやすかった。」専門性について話すなかで、「自分自身の看護学部としての専門性として私が感じることは、生命の誕生から終末期と言う人生の最後まで幅広く関わることのできる職業であり、医学的な知識・技術が必要とされる仕事であるということ。さらに、医学的な身体変化・異常を見極めるというだけでなく、心理社会的な側面からも多面的に対象をとらえていかなければならない職業であるということである。次に他学部の人間福祉学部の専門性は、精神保健福祉士や介護福祉士・社会保健福祉士というような立場から、私たち看護学部も関わっていく分野をさらに深く関わっていく専門性の高い職場であり、対象に対しても専門の分野に関してはより身近な存在になることのできる立場であるのではないかと感じた。」（NN）

・「オリエンテーションとグループワークを通して、看護学部の学生から新たな知識を得ることが多く、看護学

部の学生が目指す専門職と専門性への理解が不十分であることを実感した。また、私が所属している福祉学部の学生が目指す専門職の専門性を看護学部の学生に伝えることが難しく、専門性を語る上では自分自身が目指す専門性を熟知し、互いの専門性を尊重し合える関係を構築することが必要であると感じた。」「看護というのは患者に医療行為を行うだけではなく、患者の精神的サポートや患者の思いが伝わるよう医師との調整役を行うなど患者との信頼関係づくりを大切にしていることが学ぶことが出来ました。また、看護は病院だけでなく、幼稚園や老人施設、訪問看護等幅広い分野で活躍出来ることを知りました。これは、福祉分野にも共通する部分だと思いました。

さらに、訪問調査の際に調査対象者への必要な配慮について話し合っているときには、私たち福祉学部は話を聞く際の態度や雰囲気づくりなどに注目しているのに対し、看護学部の人は食生活や服薬についてなど対象者への健康面について注目していることに気が付きました。両学部の専門性を見ることが出来ました。

このように、看護・福祉お互いの専門性や着目点が違うことを理解したうえで連携を行うことが出来れば、クライエントに対してより良い支援を行っていけると思いました。」（HS）

リフレクションペーパー全体を通して、いずれの学部生も自分の専門性について再考する機会になったと感じている。しかし、他学部の専門性については、NN 生からは「福祉＝介護」との先入観が強く、HS 生からは医療機関の看護であり、地域看護や地域保健というイメージは薄いようである。またHS生は、「福祉には正解はないが看護には確実なものがある」と思っているが、NN 生自身も「援助や患者さんとの関わりのなかで正解であり確実なものが必ずあるわけではない」と同様な思いがあり、ここに連携演習による互いの専門性を学ぶ必要性を見いだすことができる。そして「多くの様々な人と接し関わっていく点では、看護と福祉は共通であり、どちらもその人のよりよい生活のために援助を行っていくものであると思った。関わりを通して、お互いの専門性をより深く知ることで連携する重要性をさらに知っていきたいと思った。福祉を学ぶ人がどのように人と接しているのかとても興味があるので演習では福祉の人の言動から学びを得たい」（NN）という思いは、両学部生にとって聞き取り調査当日に向けての共通の動機づけとなったと評価できる。しかし、リフレクションペーパーからは、対象者のイメージに関する記述は皆無に等しかった。これは時間的制約のなかで調査対象者の説明が十分にできなかったことと、学生たちが他者理解や互いの専門性の理解に時間を割いたことによるものである。これについては、全体の進行管理上の教員の責任によるところが大きく、今後の反省点としたい。

**③ フィールド演習後**

高齢者世帯への実地調査を終えての、本年度の専門職連携演習における最終リフレクションである。

NN 生に共通の感想は、「看護学生は社会資源や社会システムについて弱いが、福祉の学生は強い部分」であり、「お互いにの強みを生かしながら弱い部分を補うことができ、職種が異なることで対象者を多面的に捉えることができることが実感でき、他職種と連携することの重要さ」を理解できたということである。その強さや弱さは、具体的には、前者は「疾病」や「環境」であり、後者は「社会資源」や「環境」「生活ニーズ」である。このことは、看護における新カリキュラムの視点からも重視されている課題であり、医学モデルから生活モデルへの更なる転換が必要であることの理解を促進したものと評価できる。

一方HS生の感想もNN生のものと共通であり、強さや弱さが逆となる。しかし、「演習の目的と必要性は理解できるが、全体を通して数回だけではあまり意味がないように思う。連携を目的としているが、福祉、看護の双方のことを知る時間があまりにも少ないと思う。･･･事前準備の段階にもう少し時間をかけなければいけないと思う。」であるとか、「グループ内で、専門職間でどこまで役割分担するのがいいのか、分担していいのかという疑問も出てきた」という専門職連携演習に係る今後の課題についても意見があった。また、「グループワークしていくなかで無

意識に感じる専門性･･･無意識に発揮していた専門性」の表現に代表されるように、今回の演習を通じて少なからず春を感じるかのように「専門職連携」の必要性を経験する機会となったものと評価できるであろう。

**④ 学生自己評価**

演習に関する学生による自己評価は、「オリエンテーション終了後」（NN33 名、 HS22 名）と「フィールド演習後」（NN32 名、HS21 名）の２回実施した。

オリエンテーション終了後の自己評価は、７つの評価項目すべての「A：目標を達成できた」において、NN 生が HS 生を上回り、その差は平均で 28.5 ポイント、最大で 42.4 ポイントであった。しかし、NN 生は「互いの専門性を踏まえた連携の必要性について多面的に考えることができる」と「グループメンバーの意見を傾聴し、受け止めたうえで自分の意見を述べることができる」において「D：目標をほとんど達成できなった」がみられた。

演習後の自己評価では、「A：目標を達成できた」について NN 生が 19 項目中 17 項目において HS 生を上回った。「関わった地域で調査した高齢者全体の生活及び健康ニーズを考えることができる」では 54.3 ポイント、「協働する体験から得られた学びをグループ活動を通してまとめ、分かり易く発表することができる」45.1 ポイント、「グループワークに積極的に参加し、チームの一員としての役割を担うことができる」44.6 ポイントなど著しい格差が生じた。HS 生が NN 生を上回ったの、「関わった高齢者個々の暮らしを支える社会資源について説明することができる」と「互いの専門的な視点を踏まえ、得られた情報を共有するとともに、多角的に議論することができる」の２項目にとどまり、しかも各々5.0 ポイント、0.8 ポイントの僅差であった。一方、「C：目標を達成するにはやや努力を要する」については、HS 生は 19 項目中 14 項目において上回っている。

全体的に NN 生自己評価が高い傾向にあるのに対して、HS 生は「D：目標をほとんど達成できなった」が「訪問前後の手続き（電話・礼状など）が的確に実施できる」と「協働する体験から得られた学びをグループ活動を通してまとめ、分かり易く発表することができる」の２項目あるなど自己評価が比較的低い傾向にあった。

この２回の自己評価を比較すると、両学部生ともすべての項目に関して「オリエンテーション終了後」よりも「フィールド演習後」で高い自己評価を示すとともに、「A：目標を達成できた」の伸びについては NN：21.9 ポイント、HS：22.7 ポイントでありほぼ同様であった。

**⑤ まとめ**

本演習の目標は、①両学部生が目指す専門職について相互理解することができる、②個別に関わった高齢者の暮らしと、それを支える社会資源について検討できる、③実態調査を通して、高齢者の生活及び健康ニーズを検討し、フィードバックすることができる、④専門職が連携して地域住民に関わるための基本的態度を学ぶことができる、⑤①～④を通して、連携の意義を考えることができる、の５点であった。

両学部生の A と B 評価の合計から、今回の演習全体を評価すると、①については、96.2%であり、互いの専門性について理解するように努めていた。②については 94.3%と高いが、B 評価が A を約 10 ポイント上回った。これは NN 生の HS 生に対する評価に反して HS 生の自己評価が低くなったことによるものである。HS 生は自己に厳しいというよりも自信のなさからくるものと思慮される。③については、88.7%と他よりも若干低くなったが、実態調査を通して、高齢者の生活及び健康ニーズを検討し、フィードバックができたものと思われる。④については 100.0%であり、地域住民と関わるための基本的態度が学べた。最後に⑤であるが、97.3%と演習全体を通して他職種との連携の意義を考えることができていた。

しかし、個別には「関わった高齢者個々の暮らしを支える社会資源について説明することがで

きる」や「議論の結果をもとに、客観的に分析し、課題を明からにできる」「課題に対する解決方法を専門的な視点から考えることができる」については比較的評価が低く、社会保障論など関係科目の更なる学修を深める、また分析力や問題解決力を身につけさせていくことが求められる。そして、各学部による専門職と連携に関するこれまで以上の継続的教育が必要という課題が浮かび上がった。

2010年度 教育ＧＰ「学際統合型専門職連携演習」合同オリエンテーション終了後 自己評価

| 自己評価項目 | | 南　西（%） | | | | n=55 | 看　護（%） | | | | n=33 | 福　祉（%） | | | | n=22 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | A | B | C | D | | A | B | C | D | | A | B | C | D | |
| 1 | 看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互に理解することができる | 29.1 | 61.8 | 9.1 | 0.0 | | 36.4 | 54.5 | 9.1 | 0.0 | | 18.2 | 72.7 | 9.1 | 0.0 | |
| 1) | 自分が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について説明することができる | 41.8 | 40.0 | 18.2 | 0.0 | | 57.6 | 36.4 | 6.1 | 0.0 | | 18.2 | 45.5 | 36.4 | 0.0 | |
| 2) | 相手が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について自分の言葉で表現できる | 18.2 | 61.8 | 20.0 | 0.0 | | 24.2 | 63.6 | 12.1 | 0.0 | | 9.1 | 59.1 | 31.8 | 0.0 | |
| 3) | 互いの専門性について尊重することができる | 69.1 | 30.9 | 0.0 | 0.0 | | 75.8 | 24.2 | 0.0 | 0.0 | | 59.1 | 40.9 | 0.0 | 0.0 | |
| 4) | 互いの専門性を踏まえた連携の必要性について多面的に考えることができる | 29.1 | 61.8 | 7.3 | 1.8 | | 33.3 | 57.6 | 6.1 | 3.0 | | 22.7 | 68.2 | 9.1 | 0.0 | |
| 5 | 1～4をとおして、他職種と連携する意義を考えることができる | 56.4 | 40.0 | 3.6 | 0.0 | | 69.7 | 30.3 | 0.0 | 0.0 | | 36.4 | 54.5 | 9.1 | 0.0 | |
| 1) | グループワークに積極的に参加し、チームの一員としての役割を担うことができる | 61.8 | 27.3 | 10.9 | 0.0 | | 78.8 | 18.2 | 3.0 | 0.0 | | 36.4 | 40.9 | 22.7 | 0.0 | |
| 2) | グループメンバーの意見を傾聴し、受け止めたうえで自分の意見を述べることができる | 67.3 | 23.6 | 7.3 | 1.8 | | 81.8 | 12.1 | 3.0 | 3.0 | | 45.5 | 40.9 | 13.6 | 0.0 | |
| 4) | 連携して関わった一連のプロセスを振り返り評価し、今後の自己の課題を明確にできる | 41.8 | 52.7 | 5.5 | 0.0 | | 57.6 | 39.4 | 3.0 | 0.0 | | 18.2 | 72.7 | 9.1 | 0.0 | |

2010年度 教育ＧＰ「学際統合型専門職連携演習」演習実施後 自己評価

| 自己評価項目 | | 南　西（%） | | | | n=53 | 看　護（%） | | | | n=32 | 福　祉（%） | | | | n=21 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | A | B | C | D | | A | B | C | D | | A | B | C | D | |
| 1 | 看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互に理解することができる | 67.9 | 28.3 | 3.8 | 0.0 | | 71.9 | 25.0 | 3.1 | 0.0 | | 61.9 | 33.3 | 4.8 | 0.0 | |
| 1) | 自分が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について説明することができる | 58.5 | 35.8 | 5.7 | 0.0 | | 68.8 | 28.1 | 3.1 | 0.0 | | 42.9 | 47.6 | 9.5 | 0.0 | |
| 2) | 相手が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について自分の言葉で表現できる | 39.6 | 49.1 | 11.3 | 0.0 | | 43.8 | 50.0 | 6.3 | 0.0 | | 33.3 | 47.6 | 19.0 | 0.0 | |
| 3) | 互いの専門性について尊重することができる | 84.9 | 15.1 | 0.0 | 0.0 | | 93.8 | 6.3 | 0.0 | 0.0 | | 71.4 | 28.6 | 0.0 | 0.0 | |
| 4) | 互いの専門性を踏まえた連携の必要性について多面的に考えることができる | 77.4 | 20.8 | 1.9 | 0.0 | | 87.5 | 9.4 | 3.1 | 0.0 | | 61.9 | 38.1 | 0.0 | 0.0 | |
| 2 | 実態調査で関わった高齢者の暮らしと、それを支える社会資源について検討できる | 39.6 | 54.7 | 5.7 | 0.0 | | 40.6 | 59.4 | 0.0 | 0.0 | | 38.1 | 47.6 | 14.3 | 0.0 | |
| 1) | 関わった高齢者個々の暮らしについて考えることができる | 79.2 | 20.8 | 0.0 | 0.0 | | 90.6 | 9.4 | 0.0 | 0.0 | | 61.9 | 38.1 | 0.0 | 0.0 | |
| 2) | 関わった高齢者個々の暮らしを支える社会資源について説明することができる | 20.8 | 56.6 | 22.6 | 0.0 | | 18.8 | 62.5 | 18.8 | 0.0 | | 23.8 | 47.6 | 28.6 | 0.0 | |
| 3) | 関わった高齢者が暮らす地域について考えることができる | 56.6 | 39.6 | 3.8 | 0.0 | | 65.6 | 34.4 | 0.0 | 0.0 | | 42.9 | 47.6 | 9.5 | 0.0 | |
| 4) | 関わった地域で調査した高齢者全体の生活及び健康ニーズを考えることができる | 56.6 | 35.8 | 7.5 | 0.0 | | 78.1 | 18.8 | 3.1 | 0.0 | | 23.8 | 61.9 | 14.3 | 0.0 | |
| 3 | 実態調査をとおして、高齢者の生活及び健康ニーズについて検討し、地域にフィードバックできる | 41.5 | 47.2 | 11.3 | 0.0 | | 46.9 | 50.0 | 3.1 | 0.0 | | 33.3 | 42.9 | 23.8 | 0.0 | |
| 1) | 互いの専門的な視点を踏まえ、得られた情報を共有するとともに、多角的に議論することができる | 56.6 | 32.1 | 11.3 | 0.0 | | 56.3 | 37.5 | 6.3 | 0.0 | | 57.1 | 23.8 | 19.0 | 0.0 | |
| 2) | 議論の結果をもとに、客観的に分析し、課題を明らかにできる | 35.8 | 58.5 | 5.7 | 0.0 | | 43.8 | 53.1 | 3.1 | 0.0 | | 23.8 | 66.7 | 9.5 | 0.0 | |
| 3) | 課題に対する解決方策を専門的な視点から考えることができる | 35.8 | 54.7 | 9.4 | 0.0 | | 43.8 | 53.1 | 3.1 | 0.0 | | 23.8 | 57.1 | 19.0 | 0.0 | |
| 4 | 専門職が連携して地域住民に関わるための基本的態度を学ぶことができる | 86.8 | 13.2 | 0.0 | 0.0 | | 96.9 | 3.1 | 0.0 | 0.0 | | 71.4 | 28.6 | 0.0 | 0.0 | |
| 1) | 訪問前後の手続き（電話・礼状など）が的確に実施できる | 81.1 | 15.1 | 1.9 | 1.9 | | 84.4 | 15.6 | 0.0 | 0.0 | | 76.2 | 14.3 | 4.8 | 4.8 | |
| 2) | 身だしなみや言葉遣いが適切であり、相手に不快を与えないよう接することができるとともに、相手の反応を的確に捉えることができる | 84.9 | 13.2 | 1.9 | 0.0 | | 96.9 | 3.1 | 0.0 | 0.0 | | 66.7 | 28.6 | 4.8 | 0.0 | |

### 4）担当者会議

| 月　日 | 場　所 | 内　　容 | 出席者（名） | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | | 大学 | 包括 | その他 |
| 5. 27 | 大学 | 平成22年度演習の方向性について | 5 | | |
| 6. 30 | 包括 | 平成21年度演習総括、平成22年度演習日程と導入方法の確認 | 4 | 2 | |
| 11. 22 | 包括 | 演習対象学生、演習内容、調査対象者について | 2 | 3 | |
| 12. 13 | 大学 | 調査対象者選定の進捗状況、準備資料の確認 | 6 | | |
| 12. 14 | 大学 | 1月11日オリエンテーションと2月5日訪問調査のながれ、訪問調査お願い葉書と調査項目について | 3 | | |
| 12. 16 | 包括 | 調査対象者選定の進捗状況、調査用紙・項目、1月11日オリエンテーションと2月5日訪問調査のながれ、調査結果の報告について | 6 | 3 | |
| 23. 1. 6 | 大学 | 1月11日オリエンテーションのながれと配布物の最終確認 | 6 | | |
| 2. 3 | 大学 | 2月5日訪問調査のながれと配布物の最終確認 | 4 | | |
| 2. 5 | 包括 | 地域への報告会日程と方法について | 4 | 1 | |

## 3. 甲府市中央地域包括支援センター

### (1) 平成21年度　　（文責：望月　宗一郎）

| | |
|---|---|
| 学　　生 | 看護学部36名 / 人間福祉学部22名　計 58名 |
| 担当教員 | 看護学部3名 / 人間福祉学部 3名　　計　6名 |
| センター職員 | 1〜2名 |

1）**専門職連携演習に向けてのオリエンテーション：平成22年1月5日（火）9:00〜12:10**

オリエンテーションは、下記タイムスケジュール及び内容に沿って実施した。看護学部と人間福祉学部の顔合わせの場でもあり、演習内容の伝達や自己紹介、お互いの専門性の理解、オリジナル質問項目の検討などを行った。

| 時　間 | 内　　容 | 担 当 |
|---|---|---|
| 9:00- 9:30 | 全体オリエンテーション（池田キャンパス 第7講義室） | |
| 「中央ほうかつ」グループオリエンテーション（第7講義室） | | |
| 9:45-10:05 | **❶導入1　演習目標と到達度を理解できる**<br>①教職員紹介　②演習目標と到達度について(評価表を用いて)<br>③今後のタイムスケジュール　④演習当日の服装・持ち物などの説明 | 望 月 |
| 10:05-10:20 | **❷導入 2：講義　地域の特性と実践現場で行われている協働について考えることができる**<br>テーマ：相生地区の地域特性と多職種連携について | 中央ほうかつ<br>高山所長 |
| 10:20-11:25 | **❸グループワーク 互いの専門性を意識しながら、積極的に話し合う事ができる**<br>①自己紹介（グループリーダー・サブリーダーの決定）②互いの専門性の理解(互いの学部で履修している科目や演習、実習内容について)　③地域とのつながりを意識した質問項目の検討 | 望月　大澤<br>吉澤　神山<br>中橋 |
| 【10分間の休憩】 | | |
| 11:35-12:00 | **❹演習時の留意点について**<br>①訪問先までの観察の視点（社会資源 等）<br>②電話応対時・訪問時のマナー | 神 山 |
| 12:00-12:05 | **❺連絡事項**<br>①リフレクション用紙の記入・連絡先記入・回収など<br>②全体リーダー及びサブリーダーの決定など | 大 澤 |
| 12:05-12:10 | **❺全体のまとめ** | 望 月 |

2）**フィールド演習：平成22年2月6日(土) 9:00〜17:00**

演習は下記の演習実施計画にそって進行した。

**【演習実施計画】**

① 演習目的と内容は、全体の共通事項による

② 実施概要

甲府市中央地域包括支援センターの相生地区で、「訪問した高齢者の生活の実態」「暮らしを支える社会資源」「相生地区に暮らす高齢者全体の生活・健康ニーズ」などの視点から、生活状況

や地域特性について地域住民の方から聞き取り調査を行い、高齢者の生活実態やニーズを把握しまとめる。

1）相生地区の老人会から紹介いただいた高齢者に訪問面接を行い、高齢者の生活や健康に対する現状と課題、地域とのつながり等について聞き取り調査をする
2）相生地区を歩き、高齢者の日常生活をイメージしながら地域の状況を記録し、そのデータや実態把握に基づき地域特性や社会資源を把握する
3）健康や生活ニーズ把握し、量的・質的データの集計を行う
4）上記は看護・福祉の学生の協働により行い、相生地区の地域特性、及び相生地区高齢者の生活実態やニーズについてまとめる
5）学生による地域住民への報告会を行う

③ グループ編成

学生は5～6名1グループとして10グループに編成する。戸別訪問面接時は、上記小グループを半分に分け、2～3名1グループとする。

④ 調査地域・調査対象・調査数

・ 相生地区老人会から紹介のあった高齢者のうち、本調査協力に同意した23名。
・センター職員の協力のもと、口頭で了解を得た方を対象とし、大学・センター・甲府市の連名で訪問依頼書を葉書にて郵送する。

⑤ 訪問調査用紙の内容

別紙参照

⑥ 戸別訪問調査の進め方

聞き取り調査用紙の質問項目により、2～3名1組で予め連絡し同意を得た高齢者宅へ訪問調査を行う。訪問時の礼儀や挨拶、及び聴き方やメモなどについては、他の授業などで学んだことだけでなく、オリエンテーションの中でロールプレイを行う。

⑦ 調査結果のまとめ方

・訪問した事例の調査結果より、数的・質的な集計を行い、高齢者の生活実態やニーズをまとめる。
・小グループごとにまとめた上記の結果を全体で統合し、**「訪問した高齢者の生活の実態」「暮らしを支える社会資源」「相生地区に暮らす高齢者全体の生活・健康ニーズ」の4点について、**報告できるように検討する。

⑧ 看護と福祉の協働へのフィードバック

⑦ 調査結果のまとめと同時に、看護学生と福祉学生が協働で演習したことを、「他学部の学生と協働して取り組んだ中で感じた、お互いの特徴（共通点・相違点）」「今後、他職種と協働で取り組む上で大切にしたいと思うこと」「互いの専門性を踏まえた連携の必要性について」をまとめて感想を話し合う。また演習後には、各人でリフレクションペーパーを記入し、指定日までに指定場所へ提出する。

⑨ 地域住民への報告

学生の代表者を選定し、老人会の代表が集まる場に出向き、演習の成果を発表する。

⑩ 演習当日のタイムスケジュール

| 時　間 | 内　　容 | 担　　当 |
|---|---|---|
| | 出席者の確認 | 伊藤(司会) |
| 9:00- 9:20 | 全体説明・注意事項<br>本日の演習目標・評価項目（リフレクション含）・同意書の説明 | 望月 |
| | 地域や社会資源の注意事項 | 大澤 |
| 9:25-<br>10:00-11:00<br>11:00- | グループごとに準備して出発<br>訪問面接調査（含同意書の記載）<br>訪問した家庭の周辺環境の観察と把握<br>グループごとに大学に戻り、面接結果を各グループで共有し記録後、データ入力、礼状の記入 | |
| 12:00-13:00 | 昼食・休憩 | |
| 13:00-13:30 | グループワークの注意点・到達点 | 神山 |
| 13:30-15:00 | (1)現地調査をもとに1～10グループ毎に訪問事例情報の共有（高齢者と地域について）<br>(2)ワークシートの検討事項による話し合い<br>（司会・記録・発表係を決める）<br>（適宜10分程度の休憩をとる） | |
| 15:00-16:00 | 10グループ合同の報告(1グループ5分程度) | 伊藤（司会） |
| 16:00-16:30 | 教員コメント | |
| 16:30-16:50 | 今後の日程と課題 | 神山 |
| | グループ決め | 望月 |

⑪ 指導体制

- **現地調査**：調査開始時には、集合場所で説明し訪問用資料を渡す。調査開始後は、4～5グループ毎に2名の教員で調査地域を巡回し学生指導や助言を行う
- **小グループ検討**：教員は演習目的や目標をふまえ、専門職連携演習として学生の気づきや学びが深まるように、ファシリテーターとして関わる。
- **その他**：写真記録・資料や書類準備・物品管理担当の分担

⑫ 調査日までの準備

調査対象者については、センターを通して2週間前までに内諾を頂き、学生とのマッチングを行い、1週間前に甲府市・大学・センターの連名で依頼葉書を送る。調査日前日にも、センターから電話確認をして頂くほか、取材可能な家(教員が同行訪問し、訪問時の写真撮影をさせて頂く)を選定してもらう。

3) **合同発表会に向けての事前準備演習 ： 平成 22 年 4 月 5 日（月）** 13:00～16:20

**① 目　的**

各グループの発表を通じて、高齢者の生活および健康ニーズから考えられる支援課題と専門職協働連携の意義について、自分の考えを深めることができる。

**② 目　標**

- 各グループの発表を聞き、自分の考えをワークシートにまとめることができる。
- 発表内容に対する各自の意見をグループごとに集約しその後のグループワークに活用できる。
- 合同発表会に向けて何をすべきかが理解でき、今後の計画を立てられる。

**③ タイムスケジュール**

| 時 間 | 内　　容 | 物　　品 |
|---|---|---|
| | | 担当 |
| 13:05 | **オリエンテーション**<br>本日のタイムスケジュール<br>IPE の意義<br>リフレクションペーパーの振り返り | 神　山<br><br><br>大　澤 |
| 13:25 | **グループ発表**　　進行：全体リーダー・サブリーダー<br>1 Gあたり 20 分<br>準備・入れ替え 2 分<br>発表 10 分<br>質疑応答 5 分<br>ワークシートへの記入 3 分 | 中　橋<br>（タイムキーパー含む） |
| 15:00 | **休憩** | |
| 15:10 | **グループワーク**<br>合同報告会に向けての方向性を話し合う。<br><br>**発表会当日の役割決め**<br>各グループで発表者 1 人・パワーポイント係 1 人<br>（発表者は本日と別の人）<br>※全体リーダーは当日タイムキーパーを行う | 伊　藤 |
| 16：00 | **グループ別中間報告（1 グループ 2 分）** | 望　月 |
| 16：10 | **合同報告会に向けての連絡事項** | 吉　澤 |

5) **演習に関する打ち合わせ**

演習前後には、以下のようなスケジュールで打ち合わせを行った。

| 日　時 | 場　所 | 内　容 | 出席者（大学） |
|---|---|---|---|
| 21. 11. 18 | センター | 演習打ち合わせ | 5 人 |
| 12.　1 | 外　部 | 老人クラブへ報告・あいさつ | 1 人 |
| 12.　7 | 大　学 | 演習打ち合わせ | 7 人 |
| 12. 15 | 大　学 | 演習打ち合わせ | 7 人 |
| 22.　1.　4 | 大　学 | 演習打ち合わせ | 4 人 |
| 1.　5 | 大　学 | 演習の反省、演習打ち合わせ | 7 人 |
| 1. 19 | 大　学 | 演習打ち合わせ | 5 人 |
| 2.　6 | 大　学 | 演習の反省、演習打ち合わせ | 7 人 |
| 3.　4 | 大　学 | 演習打ち合わせ | 5 人 |
| 4.　5 | 大　学 | 演習打ち合わせ | 6 人 |
| 4. 27 | 大　学 | 今年度の反省・次年度の課題 | 7 人 |

### 6）リフレクションと評価

本演習によって学生たちは何を学んだのか、そしてその達成度・満足度について成果を測定するため、参加した全学生に対しリフレクションペーパーへの記載による振り返りと、演習全体を通しての授業評価をしてもらった。以下、それぞれのリフレクションの主な回答内容を記載した。

#### ① 1月5日のオリエンテーション終了後のリフレクション

提出者は看護学生が32人、福祉学生が18人の合計50人であり、8名の者が未提出、若しくは未記入であった。以下に主な記述をみていく。

「今日のオリエンテーションでは人間福祉学部の人と混ざってグループになり、お互いの学部でどのようなことを学んでいるのかなどを話し合って、専門性や連携について考えることができた。」という回答が全体的に見られ、初めて「協働」について学ぶ場面としては、前向きの回答が多かったように思われる。これは、「それぞれの専門性について説明する機会を持ち、自分の専門性を考えるよいきっかけになった」という意見からもわかる。一方、「最後まで緊張していて自分の専門性を相手に伝えられるまではできなかった」や「まずはお互いを知ることがら始める事が必要ではないかと感じた」といった意見は、両学部の意見として見られた。お互いの専門性を学ぶ機会を増やして欲しいという意見は、初年度の演習においても出されており、計画的に演習内に盛り込んでいかなければならないと思われた。「何度も看護と福祉について理解し合えるような交流が必要だと思った」「最終的にはお互いの専門性についてまで学べなかった」という回答より、両学部の専門性を理解するためには演習前から意識的に事前学習を盛りこむ必要性が示唆された。そのような意見の中でも「対象の方を多面的に捉えることの重要性が学べ、互いに連携して業務を行う機会のために、今回の演習の重要性がわかった」などの積極的な意見が寄せられた。

以上、オリエンテーション時のリフレクションペーパーの記述を紹介したが、全体的に見て、二つの学部で学んでいることを共有し、それぞれの専門職が連携し、協働することの意義自体はほぼ理解できていることがわかった。しかし、それぞれの専門性や、具体的な協働のイメージについては、オリエンテーション時には不明瞭であることが明らかとなった。

#### ② 2月6日のフィールド演習終了後のリフレクション

提出者は看護学生が32人、福祉学生が20人の合計52人であった。以下に主な記述をみていく。

最初に気になる回答として挙げられるのは「連携の必要性、重要性は理解できるけれども、プログラムのやり方に疑問を感じる。」という内容であった。言葉としてはこれだけだったため、後日面接をし、具体的に話を聞くことができた。この言葉の裏に隠されている学生の思いは、やはり正規の科目ではないことから土曜日に演習の日程を当てた全体のプログラムに対する不満であった。このことについては、23年度以降必修科目になることで解決できると考えられる。一方、「高齢者のお宅へ訪問した後の話し合いでは、お互いの視点の違いを実感でき、専門職同士の連携の必要性が改めて理解できた」「看護の学生と関わる機会があって、今後の仕事に生かせそう」「演習を通じて、他職種連携の重要性を実感することができた」等、様々な視点からの記述があり、今回の演習が学生にとって大きな学びになったことがわかった。

全体に関わることではあるが「包括グループごとのプログラムや課題が違うことが多かった」「準備までの時間の短さや、議論の際の時間や内容量の多さに戸惑ってしまった」「訪問後の話し合いの時間がもっとあればいいと感じた。時間が足りずに話が途中になってしまった。」など、演習の課題点を指摘する具体的な記述もあり、次年度に向けた改善点がリフレクションペーパーから明確となってきた。特に演習時間について「話し合いの時間が短い」「それぞれの考えが深まる前に終わってしまった」などの記述からも、演習にかけられる総時間の短さや時間的余裕の

なさに対し、学生の満足感は一概に高いとは言えない結果であった。もっと学びたいという学生の声が聞けたように思われる。

全体を通じ、演習自体や合同演習、その後の地域へのフィードバックが時間外であることなどが学生に負の要素を与えている可能性が示唆され、今後の課題として捉えることができそうである。就職活動の時期にもあたるため、欠席の取り扱いについては学生の不利益とならないよう配慮していく必要があると思われる。

**③ 4月27日の合同報告会終了後のリフレクション**

「私たちが学んだことを、相手にわかりやすくまとめて発表することがとても難しかった。」「他学部との共同ということで、準備を行っていくのになかなかお互いの予定を合わせることができず、一部への負担が大きかったという印象があるのと、連絡が全く取れないメンバーもいたため、グループメンバーとしてグループに何か働きかけることができたのではないかと思い、少し心残りである。」という、合同報告会で発表するまでの不安や両学部の学生間での時間調整に対する難しさを感じている学生もいたが、全体的には「今回は今までの活動の成果発表で、他の地域のグループの発表も聞くことができたので連携の意義や地域に暮らす高齢者の方々の実態やニーズ・それに対する対策など多くのことについて学ぶことができた。」「今回の合同発表に向けて何度もグループワークを重ねた甲斐があったと思う。私のグループは初対面のときから比較的社交的なメンバーが揃っていたのもあって、今回の合同演習では毎回積極的な意見交換ができていたし、それにより互いのことを知ることができよいチームワークを形成することができた。」「チームワークがよりよいグループワークへの手助けとなっている気がする。また、自分とは違う立場、視点を持っている人との連携を行ってみて、単純に楽しいと感じたし、連携の重要性についてもこの身を持って感じることができた。」といった、積極的かつ前向きな意見が非常に多かった。

また、「他のフィールドの学生の発表も聞き，学生ができることの提案内容が異なるものも幾つかあり，深い学びになりました。」という回答からわかるように、他のグループの発表を聞くことの重要性が示唆された。

**④ 演習評価表から**

評価表の項目ごとに、「A：目標が達成できた」、「B：目標がある程度達成できた」「C：目標を達成するためにはやや努力が必要とする」、「D：目標をほとんど達成できなかった」の4区分により自己評価をしてもらった。このうち、連携教育の部分を中心に、学生の自己評価を考察する。

オリエンテーション後の評価では「看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互に理解することができる」の項目では、「自分が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について説明することができる」は、「A」が53.8%、「B」が36.5%、「C」が9.6%、「D」が0%であった。「相手が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について自分の言葉で表現できる」は、「A」が28.8%、「B」が55.8%、「C」が15.4%、「D」が0%であった。これらの学生自己評価から、自分が学んでいる専門職の専門性についてはある程度説明できた、と考えているが、相手の専門性の理解については不十分である、という認識の学生も少なくないことがわかる。学部間の比較では、「相手が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について自分の言葉で表現できる」について福祉学生のほうが「C：目標を達成するためにはやや努力が必要とする」を選択している学生の割合が高かった。

フィールド演習後の評価では「看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互に理解することができる」の下位項目について、「自分が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について説明することができる」は、「A」が59.6%、「B」が36.5%、「C」が3.8%、「D」が0%であり、オリエンテーション時とは大きな差は見られなかったものの、「相手が学んでい

る専門職の専門性（知識・技術など）について自分の言葉で表現できる」は、「A」が 11.5%、「B」が 76.9%、「C」が 11.5%、「D」が 0%と、オリエンテーション時の回答より「A」の割合が小さくなり「B」の割合が著しく増えた。これは、演習を通じて初めて、相手の専門性の深さを実感したことで、軽はずみに相手の専門性について説明する危険性を学べたのではないかと解釈できる。このことは、逆に連携の意義が理解できたと捉えられる。この項目は、合同報告会の結果とほぼ一緒であった。

評価表からは、ほぼ全員の学生が、一定の達成感を持っていることがわかり、両学部の学生が協働して取り組むことによってお互いの専門性を知り、他職種と連携することの意義を学ぶ、という演習目的はある程度達成できたと解釈できる。

専門職連携演習は正規科目ではなく、現存する科目と連動させたり課外学習として時間を確保したりしながら講義時間外に展開していくため、リーダーやサブリーダーといった限られた学生の負担が大きくならぬよう、学生全員が平等に演習に参加し学びを共有することを前提に、演習目標を達成するための演習内容を企画した。演習形態は、主にロールプレイやフィールドワーク、グループワークなどを用い、両学部（看護学部・人間福祉学部）の学生が互いに情報及び意見交換を行う中で、互いの専門性を学ぶ機会を多く提供した。演習の中でも特に重点を置いたのは、グループワークの展開方法であった。中央ほうかつグループの演習の組み立ては、常に「学生の全員参加」を目標にしたため、作業グループを数回に渡って再編成し、ステップ方式によりグループワークを展開してきた、このことは、より多くの「他者と話し合う場」を提供することとなり、様々な視点と向き合う中で、自己の専門性や協働の意義を問うきっかけとなったであろう。またグループの再編成は、学部を越えた学生間交流を促すためにも大きな効果があったと考えられる。

今回の演習は、初年度の反省点を課題とし、試行錯誤を繰り返しながらの演習であったが、全体を通して、学生全員が最終発表会に向けて懸命に取り組めたことには違いない。

オリエンテーションおよびフィールド演習後、合同報告会後の学生評価結果一覧は、以下に掲載する。

2009 年度 教育ＧＰ「学際統合型専門職連携演習」合同オリエンテーション終了後 自己評価

| 自己評価項目 | きょうりつ（%） | | | | n=52 | 看　護（%） | | | n=33 | 福　祉（%） | | | n=19 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | A | B | C | D | A | B | C | D | A | B | C | D |
| 看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互に理解することができる | 57.7 | 40.4 | 1.9 | 0.0 | 63.6 | 33.3 | 3.0 | 0.0 | 47.4 | 52.6 | 0.0 | 0.0 |
| 自分が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について説明することができる | 53.8 | 36.5 | 9.6 | 0.0 | 66.7 | 30.3 | 3.0 | 0.0 | 31.6 | 47.4 | 21.1 | 0.0 |
| 相手が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について自分の言葉で表現できる | 28.8 | 55.8 | 15.4 | 0.0 | 33.3 | 51.5 | 15.2 | 0.0 | 21.1 | 63.2 | 15.8 | 0.0 |
| 互いの専門性について尊重することができる | 82.7 | 15.4 | 1.9 | 0.0 | 81.8 | 15.2 | 3.0 | 0.0 | 84.2 | 15.8 | 0.0 | 0.0 |
| 互いの専門性を踏まえた連携の必要性について多面的に考えることができる | 38.5 | 53.8 | 7.7 | 0.0 | 30.3 | 63.6 | 6.1 | 0.0 | 52.6 | 36.8 | 10.5 | 0.0 |
| 他職種と連携する意義を考えることができる | 80.8 | 17.3 | 1.9 | 0.0 | 78.8 | 18.2 | 3.0 | 0.0 | 84.2 | 15.8 | 0.0 | 0.0 |
| グループワークに積極的に参加し、チームの一員としての役割を担うことができる | 63.5 | 28.8 | 5.8 | 1.9 | 66.7 | 30.3 | 3.0 | 0.0 | 57.9 | 26.3 | 10.5 | 5.3 |
| グループメンバーの意見を傾聴し、受け止めたうえで自分の意見を述べることができる | 75.0 | 19.2 | 3.8 | 1.9 | 75.8 | 24.2 | 0.0 | 0.0 | 73.7 | 10.5 | 10.5 | 5.3 |
| 本日の一連のプロセスを振り返り、評価し、今後の自己の課題を明確にできる | 53.8 | 40.4 | 5.8 | 0.0 | 60.6 | 39.4 | 0.0 | 0.0 | 42.1 | 42.1 | 15.8 | 0.0 |

# 2009年度 教育ＧＰ「学際統合型専門職連携演習」演習実施後 自己評価

| | 自己評価項目 | きょうりつ (%) | | | | | 看　護 (%) | | | | | 福　祉 (%) | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | A | B | C | D | | A | B | C | D | | A | B | C | D | |
| 1 | **看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互に理解することができる** | 51.9 | 48.1 | 0.0 | 0.0 | n=52 | 51.6 | 48.4 | 0.0 | 0.0 | n=31 | 52.4 | 47.6 | 0.0 | 0.0 | n=21 |
| 1) | 自分が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について説明することができる | 59.6 | 36.5 | 3.8 | 0.0 | n=52 | 71.0 | 29.0 | 0.0 | 0.0 | n=31 | 42.9 | 47.6 | 9.5 | 0.0 | n=21 |
| 2) | 相手が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について自分の言葉で表現できる | 11.5 | 76.9 | 11.5 | 0.0 | n=52 | 9.7 | 77.4 | 12.9 | 0.0 | n=31 | 14.3 | 76.2 | 9.5 | 0.0 | n=21 |
| 3) | 互いの専門性について尊重することができる | 82.7 | 15.4 | 1.9 | 0.0 | n=52 | 74.2 | 22.6 | 3.2 | 0.0 | n=31 | 95.2 | 4.8 | 0.0 | 0.0 | n=21 |
| 4) | 互いの専門性を踏まえた連携の必要性について多面的に考えることができる | 67.3 | 30.8 | 1.9 | 0.0 | n=52 | 64.5 | 32.3 | 3.2 | 0.0 | n=31 | 71.4 | 28.6 | 0.0 | 0.0 | n=21 |
| 2 | **実態調査で関わった高齢者の暮らしと、それを支える社会資源について検討できる** | 55.8 | 38.5 | 3.8 | 1.9 | n=52 | 54.8 | 41.9 | 3.2 | 0.0 | n=31 | 57.1 | 33.3 | 4.8 | 4.8 | n=21 |
| 1) | 関わった高齢者個々の暮らしについて考えることができる | 82.7 | 9.6 | 3.8 | 3.8 | n=52 | 83.9 | 9.7 | 6.5 | 0.0 | n=31 | 81.0 | 9.5 | 0.0 | 9.5 | n=21 |
| 2) | 関わった高齢者個々の暮らしを支える社会資源について説明することができる | 26.9 | 63.5 | 5.8 | 3.8 | n=52 | 25.8 | 71.0 | 3.2 | 0.0 | n=31 | 28.6 | 52.4 | 9.5 | 9.5 | n=21 |
| 3) | 関わった高齢者が暮らす地域について考えることができる | 69.2 | 25.0 | 5.8 | 0.0 | n=52 | 71.0 | 25.8 | 3.2 | 0.0 | n=31 | 66.7 | 23.8 | 9.5 | 0.0 | n=21 |
| 4) | 関わった地域で調査した高齢者全体の生活及び健康ニーズを考えることができる | 59.6 | 30.8 | 7.7 | 1.9 | n=52 | 61.3 | 35.5 | 3.2 | 0.0 | n=31 | 57.1 | 23.8 | 14.3 | 4.8 | n=21 |
| 3 | **実態調査をとおして、高齢者の生活及び健康ニーズについて検討できる** | 46.2 | 48.1 | 5.8 | 0.0 | n=52 | 51.6 | 45.2 | 3.2 | 0.0 | n=31 | 38.1 | 52.4 | 9.5 | 0.0 | n=21 |
| 1) | 互いの専門的な視点を踏まえ、得られた情報を共有するとともに、多角的に議論することができる | 75.0 | 21.2 | 3.8 | 0.0 | n=52 | 74.2 | 22.6 | 3.2 | 0.0 | n=31 | 76.2 | 19.0 | 4.8 | 0.0 | n=21 |
| 2) | 議論の結果をもとに、客観的に分析し、課題を明らかにできる | 32.7 | 59.6 | 7.7 | 0.0 | n=52 | 32.3 | 61.3 | 6.5 | 0.0 | n=31 | 33.3 | 57.1 | 9.5 | 0.0 | n=21 |
| 3) | 課題に対する解決方策を専門的な視点から考えることができる | 32.7 | 53.8 | 13.5 | 0.0 | n=52 | 41.9 | 48.4 | 9.7 | 0.0 | n=31 | 19.0 | 61.9 | 19.0 | 0.0 | n=21 |
| 4 | **専門職が連携して地域住民に関わるための基本的態度を学ぶことができる** | 76.9 | 21.2 | 1.9 | 0.0 | n=52 | 80.6 | 19.4 | 0.0 | 0.0 | n=31 | 71.4 | 23.8 | 4.8 | 0.0 | n=21 |
| 1) | 訪問前後の手続き（電話・礼状など）が的確に実施できる | 75.0 | 23.1 | 1.9 | 0.0 | n=52 | 77.4 | 19.4 | 3.2 | 0.0 | n=31 | 71.4 | 28.6 | 0.0 | 0.0 | n=21 |
| 2) | 身だしなみや言葉遣いが適切であり、相手に不快を与えないよう接することができるとともに、相手の反応を的確に捉えることができる | 73.1 | 25.0 | 0.0 | 1.9 | n=52 | 80.6 | 19.4 | 0.0 | 0.0 | n=31 | 61.9 | 33.3 | 0.0 | 4.8 | n=21 |
| 3) | 地域住民・専門機関従事者に感謝の意を伝えることができる | 92.3 | 7.7 | 0.0 | 0.0 | n=52 | 90.3 | 9.7 | 0.0 | 0.0 | n=31 | 95.2 | 4.8 | 0.0 | 0.0 | n=21 |
| 4) | 個人情報を的確に扱い、確実に保護することができる | 94.2 | 5.8 | 0.0 | 0.0 | n=52 | 96.8 | 3.2 | 0.0 | 0.0 | n=31 | 90.5 | 9.5 | 0.0 | 0.0 | n=21 |
| 5 | **他職種と連携する意義を考えることができる** | 65.4 | 34.6 | 0.0 | 0.0 | n=52 | 71.0 | 29.0 | 0.0 | 0.0 | n=31 | 57.1 | 42.9 | 0.0 | 0.0 | n=21 |
| 1) | グループワークに積極的に参加し、チームの一員としての役割を担うことができる | 82.7 | 17.3 | 0.0 | 0.0 | n=52 | 87.1 | 12.9 | 0.0 | 0.0 | n=31 | 76.2 | 23.8 | 0.0 | 0.0 | n=21 |
| 2) | グループメンバーの意見を傾聴し、受け止めたうえで自分の意見を述べることができる | 73.1 | 25.0 | 1.9 | 0.0 | n=52 | 67.7 | 29.0 | 3.2 | 0.0 | n=31 | 81.0 | 19.0 | 0.0 | 0.0 | n=21 |
| 3) | 協働する体験から得られた学びをグループ活動を通してまとめ、分かり易く発表することができる | 36.5 | 53.8 | 9.6 | 0.0 | n=52 | 41.9 | 48.4 | 9.7 | 0.0 | n=31 | 28.6 | 61.9 | 9.5 | 0.0 | n=21 |
| 4) | 連携して関わった一連のプロセスを振り返り評価し、今後の自己の課題を明確にできる | 50.0 | 40.4 | 9.6 | 0.0 | n=52 | 48.4 | 41.9 | 9.7 | 0.0 | n=31 | 52.4 | 38.1 | 9.5 | 0.0 | n=21 |

# 2009年度 教育ＧＰ「学際統合型専門職連携演習」合同発表後 自己評価

| | 自己評価項目 | 中央ほうかつ (%) | | | | n=51 | 看　護 (%) | | | | n=34 | 福　祉 (%) | | | | n=21 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | A | B | C | D | | A | B | C | D | | A | B | C | D | |
| 1 | **看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互に理解することができる** | 60.8 | 39.2 | 0.0 | 0.0 | | 64.7 | 35.3 | 0.0 | 0.0 | | 71.4 | 28.6 | 0.0 | 0.0 | |
| 1) | 自分が学んでいる専門職の専門性(知識・技術など)について説明することができる | 58.8 | 37.3 | 2.0 | 0.0 | | 67.6 | 29.4 | 0.0 | 0.0 | | 71.4 | 28.6 | 0.0 | 0.0 | |
| 2) | 相手が学んでいる専門職の専門性(知識・技術など)について自分の言葉で表現できる | 21.6 | 70.6 | 7.8 | 0.0 | | 20.6 | 76.5 | 2.9 | 0.0 | | 33.3 | 61.9 | 4.8 | 0.0 | |
| 3) | 互いの専門性について尊重することができる | 92.2 | 7.8 | 0.0 | 0.0 | | 88.2 | 11.8 | 0.0 | 0.0 | | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | |
| 4) | 互いの専門性を踏まえた連携の必要性について多面的に考えることができる | 80.4 | 19.6 | 0.0 | 0.0 | | 76.5 | 23.5 | 0.0 | 0.0 | | 90.5 | 9.5 | 0.0 | 0.0 | |
| 2 | **実態調査で関わった高齢者の暮らしと、それを支える社会資源について検討できる** | 58.8 | 41.2 | 0.0 | 0.0 | | 58.8 | 41.2 | 0.0 | 0.0 | | 71.4 | 28.6 | 0.0 | 0.0 | |
| 1) | 関わった高齢者個々の暮らしについて考えることができる | 88.2 | 11.8 | 0.0 | 0.0 | | 88.2 | 11.8 | 0.0 | 0.0 | | 81.0 | 19.0 | 0.0 | 0.0 | |
| 2) | 関わった高齢者個々の暮らしを支える社会資源について説明することができる | 31.4 | 66.7 | 2.0 | 0.0 | | 23.5 | 73.5 | 2.9 | 0.0 | | 42.9 | 57.1 | 0.0 | 0.0 | |
| 3) | 関わった高齢者が暮らす地域について考えることができる | 80.4 | 19.6 | 0.0 | 0.0 | | 82.4 | 17.6 | 0.0 | 0.0 | | 81.0 | 14.3 | 4.8 | 0.0 | |
| 4) | 関わった地域で調査した高齢者全体の生活及び健康ニーズを考えることができる | 68.6 | 31.4 | 0.0 | 0.0 | | 73.5 | 26.5 | 0.0 | 0.0 | | 76.2 | 23.8 | 0.0 | 0.0 | |
| 3 | **実態調査をとおして、高齢者の生活及び健康ニーズについて検討し、地域にフィードバックできる** | 56.9 | 39.2 | 3.9 | 0.0 | | 58.8 | 38.2 | 2.9 | 0.0 | | 47.6 | 47.6 | 4.8 | 0.0 | |
| 1) | 互いの専門的な視点を踏まえ、得られた情報を共有するとともに、多角的に議論することができる | 78.4 | 21.6 | 0.0 | 0.0 | | 82.4 | 17.6 | 0.0 | 0.0 | | 81.0 | 19.0 | 0.0 | 0.0 | |
| 2) | 議論の結果をもとに、客観的に分析し、課題を明らかにできる | 51.0 | 49.0 | 0.0 | 0.0 | | 50.0 | 50.0 | 0.0 | 0.0 | | 52.4 | 38.1 | 9.5 | 0.0 | |
| 3) | 課題に対する解決方策を専門的な視点から考えることができる | 51.0 | 45.1 | 3.9 | 0.0 | | 55.9 | 38.2 | 5.9 | 0.0 | | 57.1 | 38.1 | 4.8 | 0.0 | |
| 4) | 得られた結果をまとめて、関係者にわかりやすく報告することができる | 43.1 | 52.9 | 3.9 | 0.0 | | 41.2 | 58.8 | 0.0 | 0.0 | | 28.6 | 66.7 | 4.8 | 0.0 | |
| 4 | **専門職が連携して地域住民に関わるための基本的態度を学ぶことができる** | 82.4 | 15.7 | 2.0 | 0.0 | | 82.4 | 14.7 | 2.9 | 0.0 | | 85.7 | 14.3 | 0.0 | 0.0 | |
| 1) | 訪問前後の手続き(電話・礼状など)が的確に実施できる | 80.4 | 17.6 | 0.0 | 2.0 | | 73.5 | 23.5 | 0.0 | 2.9 | | 81.0 | 14.3 | 4.8 | 0.0 | |
| 2) | 身だしなみや言葉遣いが適切であり、相手に不快を与えないよう接することができるとともに、相手の反応を的確に捉えることができる | 84.3 | 13.7 | 2.0 | 0.0 | | 85.3 | 11.8 | 2.9 | 0.0 | | 76.2 | 23.8 | 0.0 | 0.0 | |
| 3) | 地域住民・専門機関従事者に感謝の意を伝えることができる | 88.2 | 11.8 | 0.0 | 0.0 | | 85.3 | 14.7 | 0.0 | 0.0 | | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | |
| 4) | 個人情報を的確に扱い、確実に保護することができる | 94.1 | 5.9 | 0.0 | 0.0 | | 91.2 | 8.8 | 0.0 | 0.0 | | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | |
| 5 | **1～4をとおして、他職種と連携する意義を考えることができる** | 74.5 | 25.5 | 0.0 | 0.0 | | 67.6 | 32.4 | 0.0 | 0.0 | | 81.0 | 19.0 | 0.0 | 0.0 | |
| 1) | グループワークに積極的に参加し、チームの一員としての役割を担うことができる | 66.7 | 33.3 | 0.0 | 0.0 | | 70.6 | 29.4 | 0.0 | 0.0 | | 57.1 | 42.9 | 0.0 | 0.0 | |
| 2) | グループメンバーの意見を傾聴し、受け止めたうえで自分の意見を述べることができる | 72.5 | 25.5 | 2.0 | 0.0 | | 73.5 | 23.5 | 2.9 | 0.0 | | 71.4 | 23.8 | 4.8 | 0.0 | |
| 3) | 協働する体験から得られた学びをグループ活動を通してまとめ、分かり易く発表することができる | 56.9 | 37.3 | 5.9 | 0.0 | | 52.9 | 38.2 | 8.8 | 0.0 | | 47.6 | 52.4 | 0.0 | 0.0 | |
| 4) | 連携して関わった一連のプロセスを振り返り評価し、今後の自己の課題を明確にできる | 66.7 | 33.3 | 0.0 | 0.0 | | 64.7 | 35.3 | 0.0 | 0.0 | | 85.7 | 14.3 | 0.0 | 0.0 | |

**(2) 平成 22 年度**　（文責：伊藤　健次）

| | |
|---|---|
| 学　　生 | 看護学部 34 名 / 人間福祉学部 24 名　計 58 名 |
| 担当教員 | 看護学部 3 名 / 人間福祉学部 3 名　　計　6 名 |
| センター職員 | 1～2 名 |

1)　**専門職連携演習に向けてのオリエンテーション：平成 23 年 1 月 11 日（火）** 9:00～12:10

オリエンテーションは下記タイムスケジュール及び内容に沿って実施した。看護学部、人間福祉学部学生の顔合わせの場でもあり、演習内容の伝達、自己紹介、お互いの専門性の理解、オリジナル質問の検討など、タイトなスケジュールの中での実施となった。

| 時　間 | 内　　容 | 担　当 |
|---|---|---|
| 9：00～ 9：30 | 全体オリエンテーション(池田キャンパス 第 7 講義室) | |
| 「中央ほうかつ」グループオリエンテーション(第 7 講義室) | | 司会：吉澤 |
| 9：45～10：05<br>【20 分】 | **❶導入 1　演習目標と到達度を理解できる**<br>①教職員紹介　②演習目標と到達度について(評価表を用いて)　③今後のタイムスケジュール　④演習当日の服装・持ち物などの説明 | 神山 |
| 10：05～10：20<br>【15 分】 | **❷導入 2：講義　地域の特性と実践現場で行われている協働について考えることができる**<br>テーマ：穴切地区の地域特性と多職種連携について | 中央ほうかつ<br>高山所長 |
| 10：20～11：10<br>【50 分】 | **❸グループワーク 互いの専門性を意識しながら、積極的に話し合う事ができる**<br>①自己紹介（グループリーダー・サブリーダーの決定）②互いの専門性の理解(互いの学部で履修している科目や演習、実習内容について)　③地域とのつながりを意識した質問項目の検討 | 望月<br>(各教員巡回) |
| 【10 分間の休憩】 | | |
| 11：20～12 ： 00<br>【40 分】 | **❹演習時の留意点について**<br>①訪問先までの観察の視点（社会資源 等）<br>②電話応対時・訪問時のマナー | 大澤 |
| 12：00～12：10<br>【10 分】 | **❺まとめと連絡事項**<br>①リフレクション用紙の記入・連絡先記入・回収など<br>②全体リーダー及びサブリーダーの決定など | 中橋 |

2)　**フィールド演習：平成 23 年 2 月 5 日（土）** 9:00～17:00

演習は下記の演習実施計画にそって進行した。

【演習実施計画】

① 演習目的と内容は、全体の共通事項による

② 実施概要

甲府市中央地域包括支援センターの穴切地区で、「訪問した高齢者の生活の実態」「暮らしを支

える社会資源」「穴切地区に暮らす高齢者全体の生活・健康ニーズ」などの視点から、生活状況や地域特性について地域住民の方から聞き取り調査を行い、高齢者の生活実態やニーズを把握しまとめる。

1）老人クラブ、愛育会が選定してくださった穴切地区の高齢者宅に訪問面接を行い、高齢者の生活や健康現状と課題、地域とのつながり等について聞き取り調査をする
2）健康や生活ニーズ把握し、数的・質的データ集計を行う
3）上記は看護・福祉の学生の協働により行い、穴切地区の地域特性、及び穴切地区高齢者の生活実態やニーズについてまとめる
4）学生による地域住民への報告会を行う

③ グループ編成

学生は5〜6名1グループとして10グループ編成する。戸別訪問調査時は、上記小グループを半分に分け、2〜3名1グループとする。

④ 調査地域・調査対象・調査数

・ 穴切地区で、本調査協力に同意した27名。
・ 対象者は老人クラブ、愛育会、地域福祉推進委員の協力のもと選定し、訪問調査の了解を得た方を対象とし、訪問時に大学・甲府市中央地域包括支援センター・甲府市の連名による協力依頼書を提示し、同意書への署名をうけることとする。

⑤ 訪問調査用紙の内容

別紙参照

⑥ 戸別訪問調査の進め方

聞き取り調査用紙の質問項目により、同意を得た高齢者宅へ訪問調査を行う。訪問時の礼儀や挨拶、及び聴き方やメモなどについては、他の授業などで学んだことも参考に活用する。

⑦ 調査結果のまとめ方

・最初に個人作業として演習を通じての学びを記録シートへ記入し、次に小グループごとに各自の気づきを話し合い、グループとしてのまとめを実施する。
・ 訪問した27事例の訪問調査結果より、数的・質的な集計を行い、高齢者の生活実態やニーズをまとめる。
・ 小グループごとにまとめた上記の結果から、担当地域の「訪問した高齢者の生活の実態」「暮らしを支える社会資源」「高齢者が暮らす地域の特性」「穴切地区に暮らす高齢者全体の生活・健康ニーズ」の4点について、報告できるように検討する。

⑧ 看護と福祉の協働へのフィードバック

⑦ の調査結果のまとめと同時に、看護と福祉学生が協働で演習を行ったことを、「他学部の学生と協働して取り組んだ中で感じた、お互いの特徴（共通点・相違点）」「今後、他職種と協働で取り組む上で大切にしたいと思うこと」「互いの専門性を踏まえた連携の必要性について」をまとめて感想を話し合う。グループごとのまとめの結果は、全体での発表で共有し、地域報告会での発表の土台となるように整理する。また演習後には、各人でリフレクションペーパーを記入し、指定日までに指定場所へ提出する。

⑨ 地域住民への報告

学生の代表者を選定し、2月22日に老人クラブ会長会で、3月27日には愛育会の地域健康祭において報告を行う。

⑩ 演習当日のタイムスケジュール

| 時　間 | 内　容 | 担当教員 |
|---|---|---|
| | 電話確認 | 伊藤（司会） |
| 9:00-9:30 | 全体説明・注意事項 | 神山 |
| | 本日の演習目標・評価項目・同意書・投票の説明 | |
| 9:30- | グループごとに準備して出発 | |
| 10:00-11:00 | 訪問面接調査（含同意書の記載） | |
| 11:00- | 訪問した家庭の周辺環境の観察と把握 | |
| | グループごとに大学に戻り、面接結果を各グループで共有し記録後、データ入力・礼状の記入 | グループ担当教員 |
| | 学生総合リーダー・サブリーダー：司会についての打ち合わせ | 神山 |
| 12:00-13:00 | 昼食・休憩 | |
| 13:00-14:30 | グループワークの進め方・発表・投票について<br>(1)個人ワークシートにまとめ<br>(2)現地調査をもとに1～10グループ毎に訪問事例情報の共有（高齢者と地域について）<br>(3)ワークシートの検討事項による話し合い（司会・記録・発表係を決める）（適宜10分程度の休憩をとる） | 伊藤 |
| 14:30-15:30 | 10グループ合同の報告（1グループ発表5分・質疑応答1分） | 学生総合リーダー（司会） |
| 15:30-16:00 | 投票説明・投票 | 望月 |
| 16:00-16:30 | 包括職員・社協職員・教員コメント | |
| 16:30-16:50 | 課題の提出・ブルゾンの返却について<br>地域報告会の日程調整・準備について<br>**3月27日（日）10：00～12：00　愛育会の地域健康まつり** | 吉澤 |
| | 投票結果発表・表彰式 | 大澤 |

3) **リフレクションと評価**

本演習によって、学生たちは何を学んだのか、そしてその達成度・満足度などの成果を測定するため、参加した全学生に対しリフレクションペーパーへの記載による振り返りと、演習全体を通しての授業評価をしてもらった。以下それぞれのリフレクションの主な回答内容を記載した。

**① 1月11日のオリエンテーション終了後のリフレクション**

提出者は看護学部学生（以下、看護学生）が33人、人間福祉学部学生（以下、福祉学生）が23人の合計56人であった。以下に主な記述をみていく。

「自分たちの専門性について言葉にして説明する機会を持てたため自分の専門性について改めて考えるきっかけになった」という意見に代表されるように、学習のきっかけとしては有効であったことがうかがえる。その一方で「緊張がとれないままでお互いの専門性というところまで話をすることができなかったため、まずはお互いを知ることから始める事が必要であると感じた」

といった意見が、看護学生、福祉学生の双方からあった。お互いを知る時間を増やして欲しいという意見は、過去の演習においても提起されており、お互いを知るための教育的な仕掛けを演習内に盛り込んでいく必要があるだろう。そういった、相互理解の時間の少なさの影響は「福祉の専門性について具体的に分からないことが多く、今回話した中ではまだ理解ができない」「1 度のみではなく、何度も福祉と看護について、理解し合えるような交流、対話が必要なのではと感じた」「今回は、具体的な専門性についての言及には至らなかった」という形で表出されている。これらより、より意図的なお互いの専門性理解のための内容や、顔合わせ前に相互の教育内容を把握しておくなどの事前学習を盛りこんでいくことが必要であると考えられる。

その他としては、「多くの視点から対象者を捉えていくことは重要となってくるので、しっかり演習を行っていきたい」「将来それぞれ福祉と看護の現場に出たときに、お互いが連携して業務を行う機会も多いと思うので、今回の演習でお互いの専門性を理解することが大切だと考えた」などの積極的な意見が寄せられた。

以上、オリエンテーション時のリフレクションペーパーの記述を紹介したが、全体的に見て、二つの学部で学んでいることを共有し、それぞれの専門職が連携し、協働することの意義自体は理解できていることがわかった。しかし、それぞれの専門性や、具体的な協働イメージについては、オリエンテーションのみでは明確になっていないことがうかびあがっている。

**② 2 月 5 日のフィールド演習終了後のリフレクション**

提出者は看護学生が 33 人、福祉学生が 24 人の合計 57 人であった。以下に主な記述をみていく。

「訪問後の話し合いでは、お互いの視点から見た対象者や地域の状態を把握することができ、専門職同士の連携の必要性を改めて実感しました」「様々なことを感じ、学べたので、福祉の学生と関わる機会があって良かった」「今回の演習を通じて、実際に他職種との連携の必要性や重要性を考え、実感することができ、すごく良い機会となった。同じ学部内のグループワークよりもさらにたくさんの意見交換ができたと思う」等々、様々な視点からの記述があり、今回の演習が学生にとって大きな学びになったことがわかった。

一方で、「包括ごとに発表方法が違っていたり課題が無かったりなどの差が多く、学んだことはどの包括も同じなのにそれに対するフィードバックが違いすぎる」「訪問後の話し合いの時間がもっとあればいいと感じた。時間が足りずに話が途中になることで、溝が深まったままに終わることもある」などの演習の課題点を指摘する具体的な記述もあり、より良い演習のためには改善が必要な点も多いと考えられる。特に演習時間に関しては、「もう少し話し合いの時間が取れれば、もっとそれぞれの考えが深まったかなと思う」「グループでの話し合いなどの時間があまり取れず、せっかくの機会であるのにとても勿体ないと感じた」「もう少し、事前に互いの専門性について学べる機会をもってから今回の演習が行えたらより良いものになったと思う。演習へ実際に行くのが急すぎて戸惑った」などの記述に代表される、演習のあわただしさ、時間的余裕のなさに関する意見が数多くあった。訪問調査とまとめを 1 日で行うことは確かにかなりタイトなスケジュールであり、時間に追われて両学部学生の議論を深めることが出来なかった点は事実であろう。双方の学生がお互いの専門性を理解し合うためには、フィールド演習だけでなく、その前後でも十分に交流し、意見を交わすことが必要となると考えられる。「せっかくの看護学部との演習はもっと充実した時間が欲しかったと感じた」「時間、時間と追い立てられて、深めることも深めずに終わった部分もあるのではないかと考える」という記述は、もっと学びたいという学生の声を象徴しているようにも感じる。

その他として、「テスト期間・就職活動時にやらないでほしかった。丁度会社説明会と重なっていたが、やむなく説明会を断念したのでその辺をもっと考慮してほしかった」「演習を終えて

から課題提出や地域への発表までの予定が事前に知らされていなかったのでグループの人と予定が合わず、全員で話し合ったり打ち合わせをすることが難しく、役割が偏ってしまい個人ワークのようなものになっていて、発表はグループでするが内容は限られた人で作ってあるためグループで括った意味がないしせめて予定を早く教えてほしい」という記述もあった。二学部の日程調整が必要なためイレギュラーな実施日程になってしまうことや、演習後の地域へのフィードバックが時間外であることなど、教育効果を上げるためにはやむを得ない部分もあるが、演習運営については学生目線での検証が必要であると言える。特に欠席の場合の取り扱いは学生教育上の大きな課題点である。就職活動を行う学生にとっては、土曜日の演習実施ということは大きな影響を及ぼす可能性があり、不利益とならないよう配慮が必要であったと考えられる。

**③ 演習評価表から**

評価表の項目ごとに、「A：目標が達成できた」、「B：目標がある程度達成できた」「C：目標を達成するためにはやや努力が必要とする」、「D：目標をほとんど達成できなかった」の4区分により自己評価をしてもらった。これらの結果について連携教育の部分を中心に、学生の自己評価を考察する。オリエンテーションおよびフィールド演習後の学生評価結果一覧は、以下に掲載する。

2010年度 教育ＧＰ「学際統合型専門職連携演習」合同オリエンテーション終了後 自己評価

| 自己評価項目 | | 中央 (%) | | | | n=54 | 看護 (%) | | | n=31 | 福祉 (%) | | | n=23 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | A | B | C | D | A | B | C | D | A | B | C | D | |
| 1 | 看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互に理解することができる | 14.8 | 61.1 | 22.2 | 1.9 | 16.1 | 67.7 | 12.9 | 3.2 | 13.0 | 52.2 | 34.8 | 0.0 | |
| 1) | 自分が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について説明することができる | 29.6 | 57.4 | 11.1 | 1.9 | 38.7 | 58.1 | 0.0 | 3.2 | 17.4 | 56.5 | 26.1 | 0.0 | |
| 2) | 相手が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について自分の言葉で表現できる | 3.7 | 55.6 | 37.0 | 3.7 | 6.5 | 64.5 | 25.8 | 3.2 | 0.0 | 43.5 | 52.2 | 4.3 | |
| 3) | 互いの専門性について尊重することができる | 64.8 | 31.5 | 3.7 | 0.0 | 67.7 | 25.8 | 6.5 | 0.0 | 60.9 | 39.1 | 0.0 | 0.0 | |
| 4) | 互いの専門性を踏まえた連携の必要性について多面的に考えることができる | 29.6 | 51.9 | 16.7 | 1.9 | 19.4 | 71.0 | 6.5 | 3.2 | 43.5 | 26.1 | 30.4 | 0.0 | |
| 5 | 1～4をとおして、他職種と連携する意義を考えることができる | 53.7 | 42.6 | 3.7 | 0.0 | 54.8 | 38.7 | 6.5 | 0.0 | 52.2 | 47.8 | 0.0 | 0.0 | |
| 1) | グループワークに積極的に参加し、チームの一員としての役割を担うことができる | 55.6 | 38.9 | 5.6 | 0.0 | 67.7 | 29.0 | 3.2 | 0.0 | 39.1 | 52.2 | 8.7 | 0.0 | |
| 2) | グループメンバーの意見を傾聴し、受け止めたうえで自分の意見を述べることができる | 55.6 | 33.3 | 9.3 | 1.9 | 74.2 | 19.4 | 3.2 | 3.2 | 30.4 | 52.2 | 17.4 | 0.0 | |
| 3) | 協働する体験から得られた学びをグループ活動を通してまとめ、分かり易く発表することができる | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | |
| 4) | 連携して関わった一連のプロセスを振り返り評価し、今後の自己の課題を明確にできる | 35.2 | 53.7 | 11.1 | 0.0 | 38.7 | 54.8 | 6.5 | 0.0 | 30.4 | 52.2 | 17.4 | 0.0 | |

2009年度 教育ＧＰ「学際統合型専門職連携演習」演習実施後 自己評価

| 自己評価項目 | | 中央 (%) | | | | n=57 | 看護 (%) | | | n=33 | 福祉 (%) | | | n=24 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | A | B | C | D | | A | B | C | D | A | B | C | D |
| 1 | 看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互に理解することができる | 40.4 | 59.6 | 0.0 | 0.0 | | 45.5 | 54.5 | 0.0 | 0.0 | 33.3 | 66.7 | 0.0 | 0.0 |
| 1) | 自分が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について説明することができる | 50.9 | 49.1 | 0.0 | 0.0 | | 51.5 | 48.5 | 0.0 | 0.0 | 50.0 | 50.0 | 0.0 | 0.0 |
| 2) | 相手が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について自分の言葉で表現できる | 12.3 | 80.7 | 7.0 | 0.0 | | 12.1 | 81.8 | 6.1 | 0.0 | 12.5 | 79.2 | 8.3 | 0.0 |
| 3) | 互いの専門性について尊重することができる | 89.5 | 8.8 | 1.8 | 0.0 | | 90.9 | 9.1 | 0.0 | 0.0 | 87.5 | 8.3 | 4.2 | 0.0 |
| 4) | 互いの専門性を踏まえた連携の必要性について多面的に考えることができる | 66.7 | 31.6 | 1.8 | 0.0 | | 72.7 | 27.3 | 0.0 | 0.0 | 58.3 | 37.5 | 4.2 | 0.0 |
| 2 | 実態調査で関わった高齢者の暮らしと、それを支える社会資源について検討できる | 66.7 | 33.3 | 0.0 | 0.0 | | 72.7 | 27.3 | 0.0 | 0.0 | 58.3 | 41.7 | 0.0 | 0.0 |
| 1) | 関わった高齢者個々の暮らしについて考えることができる | 78.9 | 21.1 | 0.0 | 0.0 | | 78.8 | 21.2 | 0.0 | 0.0 | 79.2 | 20.8 | 0.0 | 0.0 |
| 2) | 関わった高齢者個々の暮らしを支える社会資源について説明することができる | 54.4 | 42.1 | 3.5 | 0.0 | | 48.5 | 48.5 | 3.0 | 0.0 | 62.5 | 33.3 | 4.2 | 0.0 |
| 3) | 関わった高齢者が暮らす地域について考えることができる | 64.9 | 35.1 | 0.0 | 0.0 | | 72.7 | 27.3 | 0.0 | 0.0 | 54.2 | 45.8 | 0.0 | 0.0 |
| 4) | 関わった地域で調査した高齢者全体の生活及び健康ニーズを考えることができる | 64.9 | 29.8 | 5.3 | 0.0 | | 72.7 | 27.3 | 0.0 | 0.0 | 54.2 | 33.3 | 12.5 | 0.0 |
| 3 | 実態調査をとおして、高齢者の生活及び健康ニーズについて検討し、地域にフィードバックできる | 35.1 | 61.4 | 3.5 | 0.0 | | 36.4 | 63.6 | 0.0 | 0.0 | 33.3 | 58.3 | 8.3 | 0.0 |
| 1) | 互いの専門的な視点を踏まえ、得られた情報を共有するとともに、多角的に議論することができる | 52.6 | 47.4 | 0.0 | 0.0 | | 60.6 | 39.4 | 0.0 | 0.0 | 41.7 | 58.3 | 0.0 | 0.0 |
| 2) | 議論の結果をもとに、客観的に分析し、課題を明らかにできる | 35.1 | 57.9 | 5.3 | 1.8 | | 42.4 | 57.6 | 0.0 | 0.0 | 25.0 | 58.3 | 12.5 | 4.2 |
| 3) | 課題に対する解決方策を専門的な視点から考えることができる | 31.6 | 61.4 | 7.0 | 0.0 | | 30.3 | 66.7 | 3.0 | 0.0 | 33.3 | 54.2 | 12.5 | 0.0 |
| 4) | 得られた結果をまとめて、関係者にわかりやすく報告することができる | | | | | | | | | | | | | |
| 4 | 専門職が連携して地域住民に関わるための基本的態度を学ぶことができる | 86.0 | 14.0 | 0.0 | 0.0 | | 93.9 | 6.1 | 0.0 | 0.0 | 75.0 | 25.0 | 0.0 | 0.0 |
| 1) | 訪問前後の手続き（電話・礼状など）が的確に実施できる | 89.5 | 10.5 | 0.0 | 0.0 | | 87.9 | 12.1 | 0.0 | 0.0 | 91.7 | 8.3 | 0.0 | 0.0 |
| 2) | 身だしなみや言葉遣いが適切であり、相手に不快を与えないよう接することができるとともに、相手の反応を的確に捉えることができる | 84.2 | 14.0 | 1.8 | 0.0 | | 90.9 | 9.1 | 0.0 | 0.0 | 75.0 | 20.8 | 4.2 | 0.0 |
| 3) | 地域住民・専門機関従事者に感謝の意を伝えることができる | 91.2 | 8.8 | 0.0 | 0.0 | | 93.9 | 6.1 | 0.0 | 0.0 | 87.5 | 12.5 | 0.0 | 0.0 |

オリエンテーション後の評価では「看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互に理解することができる」の項目では、「自分が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について説明することができる」は、「A」が29.6%、「B」が57.4%、「C」が11.1%、「D」が1.9%であった。次いで「相手が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について自分の言葉で表現できる」は、「A」が3.7%、「B」が55.6%、「C」が37.0%、「D」が3.7%となっている。これらの学生自己評価から、自分が学んでいる専門職の専門性についてはある程度説明できた、と考えているが、相手の専門性の理解については不十分である、という認識の学生も少なくないことがわかる。学部間の比較では、福祉学生のほうが、より多く「C：目標を達成するた

フィールド演習後の評価では「看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互に理解することができる」の項目では、「自分が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について説明することができる」は、「A」が 50.9%で残り全員が「B」であった。次いで「相手が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について自分の言葉で表現できる」は、「A」が 12.3%、「B」が 80.7%、「C」が 7.0%、となっており、オリエンテーション時の回答と比較しても「A」および「B」評価の割合が著しく増えており、それぞれに専門性の理解とともに連携の意義が理解できたことが伺える。全体の演習の前後においても、目標が達成できた、目標がある程度達成できたと実感している学生が大多数をしめており、演習効果があったことを裏付けている。しかし、自由記述の内容では、時間数の不足を指摘する声や、十分な討議が出来ず理解が深められなかったことを指摘する記述が少なからず存在し、ギャップが感じられる。演習時の討議時間が少なかったことが影響し、連携の必要性は理解できても、具体的な方法については踏み込んでいけなかったためではないかと考えられる。

以上、2回のリフレクションペーパーと評価表によって学生自身が感じた成果などを振り返ってきた。全体的にみれば、評価表における学生評価からは、ほぼ全員の学生が、一定の達成感を持っていることがわかり、様々な限られた制約から課題は依然として多いものの、両学部の学生が協働して取り組むことによってお互いの専門性を知り、他職種と連携することの意義を学ぶ、という演習目的は達成できたといえる。

## 4. 甲府市西地域包括支援センター　　（文責：清水　惠子）

### (1) 平成 21 年度

| | |
|---|---|
| 学　　生 | 看護学部 31 名 / 人間福祉学部 19 名　計 50 名 |
| 担当教員 | 看護学部 3 名 / 人間福祉学部 2 名　　計　5 名 |
| センター職員 | 2 名 |

#### 1) オリエンテーション

オリエンテーションでは、各学生に「甲府市西地域包括支援センターをフィールドとした演習計画書」をはじめ、「専門職連携演習グループ表」、「地域で生活する高齢者への聞き取り調査票(調査項目 1 ～22、オリジナル項目 23～25)」、「○○さんの人とのつながりMap」、これらの資料ならびにファイル、名札、ブルゾンを配布した。この他、各グループには訪問調査にご協力くださった高畑北部自治会老人クラブの皆様のお住まいである「甲府市高畑 1 丁目の地図」を配布した。

以下に、オリエンテーションで説明した「甲府市甲府西地域包括支援センターをフィールドとした演習計画書」の演習概要、1 月 5 日(火)当日のスケジュールならびにフィールド演習までに準備したことを示した。

**＜演習概要＞**

**① 実施内容**

地域包括支援センター甲府西のフィールド内にある高畑北部老人クラブに属する高齢者から生活や健康などについて聞き取り調査を行いまとめる。

- 看護と福祉の学生が 2～3 人のチームになり高齢者から聞き取り調査を行う。
- 看護と福祉の学生は、事前学習や準備、実施、集計・分析報告などのプロセスを合同で実施する。
- 地域住民への報告会などに参加し結果報告をする。
  また、全体での合同発表会にて報告する。

**② 対象学生**

看護学部 3 年生：31 名、人間福祉学部 3 年生：19 名とする
学生の編成については、1 チーム 2～3 名、グループは２つまたは３つのチームで構成する

**③ 調査地域・調査対象者**

対象者：高畑北部老人クラブ在籍者のうち本演習に協力でき同意された高齢者約 20 名
対象者の選択は、事前に甲府西職員及び高畑北部老人クラブの方々の協力にて、口頭で了解を得た上で、聞き取り調査を行う時には大学からの依頼文を渡し同意書をいただく。

**④ 記録用紙について**

聞き取り調査用紙：チームごとに作成する
調査後作成用紙：○○さんの人とのつながりＭａｐ：チームごとに作成する
　　高畑北部地域ＭＡＰ：全体で確認し作成する
その他、グループワークの記録など

＜スケジュール＞

| 時　間 | 内　容 | 備　考 |
|---|---|---|
| 9:30～ | 教室の移動、チームごとの着席、資料の確認 | （別紙） |
| 9:45～10:00 | 担当者紹介 | 小野 |
| | 学生互いの紹介（チームごと） | 山本 |
| | 担当教員の紹介 | 柳田（進行） |
| | 地域包括支援センター甲府西職員の紹介 | |
| 10:10～10:30 | オリエンテーション | |
| | 演習の目的・目標、演習内容、スケジュールなどについて | |
| | 聞き取り調査、記録用紙について | 柳田 |
| 10:30～10:40 | 高畑北部地域の紹介 | 清水 |
| （10 分） | （休憩） | 河野 |
| 10:50～11:40 | グループワーク | 深沢様 |
| | ① グループごとの自己紹介（2～3 チーム） | |
| | 看護および福祉学生の授業や学習について情報交換 | |
| | ②聞き取り調査内容の確認とロールプレイなど | |
| | 質問内容の理解、質問の仕方、聞きやすい順番、 | 学生は適宜担当教員 |
| | オリジナル質問の検討など | に相談する |
| | ③家庭へ伺う時の態度や面接する時の配慮 | |
| | 電話での留意事項など | |
| 11:40～12:00 | グループごとに担当教員へ報告と確認 | |
| | リフレクションペーパーの記入について | 担当教員の確認 |
| | 連絡方法の確認 | |
| | グループリーダー、チームリーダーの選出 | |
| 12:00～12:10 | 今後の予定など連絡事項 | 山本 |

＜フィールド演習までに準備したこと＞（1 月 6 日～2 月 5 日）

① 1 月 5 日に教員の確認が得られなかったグループは、担当教員の確認を得るようにする。
② 調査対象者については、教員が甲府西から対象者名簿をいただき次第、学生へ連絡するため、学生は担当教員の所に行って、対象者の確認を行い、連絡用ハガキや地図などの必要物品を受け取る。
③ 事前に、調査対象者の住まいや、往復の交通手段などの確認をしておく。
④ 調査実施日の 1 週間前に調査対象者に電話を入れて、訪問日時の確認を行い、事前連絡用ハガキを書いて郵送する。
⑤ その他、チームで緊密に連絡を取り必要な準備を進める。

2) **フィールド演習**

以下に、2月6日(土)当日のスケジュールを示した。

**<スケジュール>**

| 時　間 | 内　容 | 備　考 |
|---|---|---|
| 9:00 | 集合 | |
| 9:00～9:10 | オリエンテーション | |
| 9:10～9:30 | チームごとに聞き取り調査内容の再確認<br>（調査内容、対象者宅または自治会館、最終確認他） | 物品確認 |
| 9:30～ | 出発<br>聞き取り調査の実施 | |
| ～12:00 | 帰校　順次、チームごとに調査内容をまとめる<br>お礼のはがきの作成 | |
| 12:00～13:00 | （昼食） | 学生は適宜担当教員 |
| 13:00～14:00 | チームワーク：チームごとに記録用紙を整理し仕上げる<br>地域で生活する高齢者への聞き取り調査用紙への記入<br>○○さんの人とのつながりＭＡＰの作成<br>高畑北部地区の地図の確認や記入 | に相談する |
| | パソコン入力 | 三井 |
| 14:00～14:30 | チームの発表<br>甲府市地域包括支援センター甲府西職員様のコメント | ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾀｰ |
| （10分） | （休憩） | |
| 14:40～15:20 | グループワーク<br>演習目標に沿って気付きや学びなどの意見交換 | |
| 15:20～15:50 | グループの発表<br>担当教員のコメント | |
| （10分） | （休憩） | |
| 16:00～ | 連絡事項<br>報告会に向けての準備について<br>リフレクションペーパーについて | |
| ～17:00 | 片付け | |

3) **合同発表会への事前準備**

2月6日(土)フィールド演習のグループの発表後に、各々のグループリーダーを集め、4月17日(土)合同発表会ならびに4月24日(土)地域報告会に向けて、どのような準備を進めるか話し合った。合同発表会までの間に、グループリーダーらは授業時間外に2コマずつ計3回集合し、パワーポイントを用いて発表用のスライド原稿を作成した。

4月17日( 土)合同発表会当日の1時限目、301講義室においてリーダーらはメンバーに合同発表会のリハーサルを行ない、発表会に向けて意見交換を実施した。メンバーよりリーダーらへ発表会の準備をしたことへの感謝の言葉が贈られ、いくつか意見や要望が出された。リーダーは修正を加え、午後からの発表会に備えた。

4) **地域報告会**

4月24日（土）10時～11時半高畑家北部自治会館にて、新たに選出された代表により報告会

を開催した。以下は、報告会で使用したスライドの一部で、学生は 24 人、地域住民約 20 人が参加した。

## 学生による聞き取り調査結果報告会

西ほうかつグループ（50名）
看護学部31名、人間福祉学部19名
2010年1月5日～4月24日

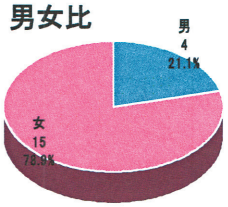
## 目　的

- 看護と福祉が連携することの大切さを学ぶ
- 地域の方と一緒に生活や健康について考えていく

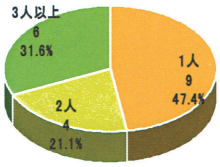
## 調査協力者の背景

・高畑北部老人クラブ在籍者のうち本演習に協力でき同意された高齢者19名

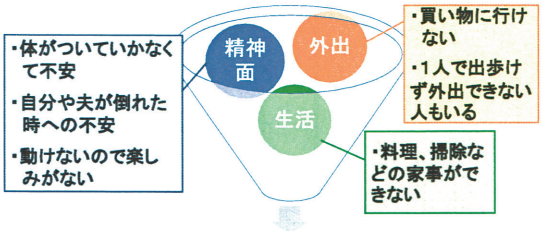
男女比




家族構成




## 生活や健康に対する高齢者の思い




・調査から主に精神面、外出、生活面で支障をきたしていることが分かった
・高齢者の思いに応えるために地域で必要なことは何か

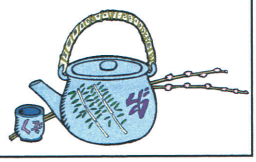
## 地域特性から見えたこと

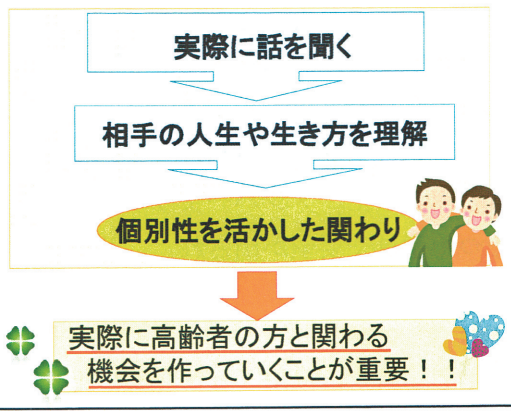
・移動手段の限られている高齢者にとって、店が遠いことや道が狭いことが暮らしにくさにつながっていることがわかった。

・自治会や地域活動への参加率が高く、活動に満足している人が多い。一方で地域の活動に参加していない人がいるのも事実である。そのような人には、自治会以外に頼れる人がいることが大切なのではないか。

## 人とのつながりから見えたこと

・地域の人や近所の人を頼っている人が多かったことや、近所の友人宅を訪問している人が多かったことから、家族だけでなく、近所の人とのつながりが密であると分かった。






## 聞き取り調査から考えたこと

・座右の銘はその人の人生や生き方と大きな関係があるのではないか。

・多くの高齢者の方が趣味をもって暮らしていることがこの地域の特徴ではないか。



5) リフレクションと評価

① オリエンテーション後

リフレクションペーパーについては、看護学部の学生は「グループメンバーと会話をする中で、同じ大学で学んではいるけれど、何を勉強しているのか、どこでどのような実習をしているか、そして看護学生である自分達がどのように思われていたのかを知ることができた。また、自分自身も他学部(他の専門職)についてあまり関心がなかったと気がつくことができた。だからグループメンバーが実習で対象とどのような関わりをしたのか、どのような視点で関わっていたのかを知ることができ、看護との違いやその専門性という点で学ぶことができたと思う。」、「2月6日実際に地域にいる高齢者の生活状況を福祉の学生と一緒にインタビューを行うために、まずは福祉学科の学生が今までにどのようなことを勉強しているかを知る必要があると思った。福祉学科では、私たち看護と同様今までに実習があり、実際に施設や在宅に行き高齢者と関わっていることを知った。これから連携をとるためにも、お互いに自分たちの役割を再度確認し、相手のことを知ることが最初にするべきことだと感じた。」、「看護と福祉の違いについて、また、福祉の学生の進路について知ることができた。福祉の学生も実習があることを知った。実習先は自分が行きたいところを選ぶことができるらしい。看護も助産師や養護教諭の専攻があるが、福祉にもそのようなコース(?)みたいなのがあって、クラスが分かれているらしい。福祉の学生と一緒に、訪問をするのがすごく楽しみになった。」など、人間福祉学部の学生が何を学びどのような進路を目指しているのかについて強い関心と、相手を知ろうとまなざしが向いたことが伺えた。

一方で、人間福祉学部の学生は、「今までは同じ学部の中で福祉を学んでいる学生としか勉強してこなかったのが、この教育GPの授業で違う分野の勉強をしている看護学部の学生さんとともに行動し学んでいくということで、自分の福祉に対する考えについてとても大きく影響するのではないかと思った。同じ高齢者の方と接するにしても、質問内容や視点が違っていると思うのでそういったことにも注目しながら、職種の連携の大切さについて学んでいきたいと思う。」、「インタビュー内容について検討のなかで看護学部の学生が『食習慣について聞くと、ついでに血圧とか薬の管理についても聞いてみたくなる』と発言していたことが、私にとって非常に印象的でした。この考え方は看護を専門に学んでいる学生だからこそ出てくるのではないかと思ったからです。また、私たちにとって馴染みのあるライフヒストリーやエコマップは看護学部の学生にとって新鮮だったようで、面白いなと感じました。」、「人間福祉学部はどういったことを学んでいるのか、と質問された。だが、学んでいる内容が幅広く、ソーシャルワークの役割や必要性、そして面白さを相手に十分伝えられなかったように思う。それは同時に、自分自身もソーシャルワークの役割や必要性、面白さへの理解が不十分であるからなのではないかと感じた。」など、看護学部の学生と学ことの意義を感じたり学生の発言に新鮮さを感じたり、質問を受けて自己の学びを振り返るなど刺激の大きさが伺えた。

自己評価については、両学部とも5項目全てにおいて、肯定的回答であり差異は見られなかった。

② フィールド演習後

リフレクションペーパーについては、対象者と生活の場で出会うことで「今回関わった高齢者は疾病もなく加齢に伴う身体的な変化とうまく付き合いながら生活していることが分かった。これらのことから、高齢者の健康ニーズを考えるときに、ただ単に身体症状やそこから考えられる生活への影響など、身体面からみてその人の全体像を捉えるだけでなく、家族の中での役割、地域との関わりなど社会面などからも捉えていく必要があると感じた。その人の健康支えている様々な面に目を向けられるいい経験になったと思う。」、「高齢者は仕事もしておらず、寂しい生活が多いのではないだろうかと感じていたのだが、そんなことはなく、無尽や中高時代のみんな

との再会、兄弟での集まりなど楽しみを自ら探し、今まで一生懸命働いた分、自分の時間を大切にし、いろいろな人と時間を共有しているということがわかった。」、「高齢者と話をする中で、住み慣れた環境で、顔見知りの仲間と一緒に地域で暮らすのは、高齢者にとって生きる力になるとわかった。お互いに助け合いながら暮らしている甲府西という地域はすばらしいと感じた。このような地域をつくるためには、地域住民だけでなく、看護職と福祉職の連携も必要だと思った。」、「単に会話の内容のみからアセスメントするのではなく、家の様子や身だしなみなどを観察して得られる情報がかなりたくさんあった。例えば、今日私たちが訪問することがカレンダーに記入されてあること、孫の写真が飾られてあること、整髪剤を使って髪をきちんと整えてある様子などがあった（独居男性）。五感をふるに活用して、様々な視点を持つことが重要だと感じた。」「北高畑の自治会の方のお話を聞かせていただき、またグループメンバーの発言や他グループの発表を聞き、『自治会や地域の活動へ楽しんで参加できる性格か』と『自力でどこまで外出できるか』という2つのポイントによって、人とのつながりに大きな違いが出てくるのではないかと私は考えました。」など、さまざまな発見をしていた。

両学部の専門性に関連したことついて、例えば看護学部の学生からは「高齢者の将来的や環境面から見て看護学部の学生は身体的、精神的、疾患に目を向け、人間福祉学部の学生は福祉サービスに目が向いていると感じられた。看護の視点では、その人の状態をまず把握して問題点をあげてその人にあった方法で解決していく。福祉の視点は、病気であって生活に支障があるならその生活の不便さへ目を向けて、そこへのアプローチをしていく。看護と福祉の視点はその人を見る、知るまでの考えやその人を良くしようという考えは一緒だけど、その人へのアプローチ方法の仕方が違うと分かった。」、「看護の学生と福祉の学生で話し合ってみて、“社会資源”というと私たちは、“制度”や“施設”を思い浮かべていたが、福祉の学生は“何でも社会資源になる”と言っていた。連携することで、自分たちの考えになかったことに気付くことができ、視点が広がるなと思った。」などが聞かれた。

一方、人間福祉学部の学生からは、「自分のチームやグループの様子から看護学部の学生と福祉学部の学生の違いを感じる場面もあった。たとえば高齢者と直接話す時には福祉学部の学生の方が積極的だが、学校に戻ってきてからの情報交換や発表の場面では看護学部の学生の方が積極的だと思った。これは福祉学部の学生が日ごろから高齢者や被支援者となる人と接し慣れているのに対して、看護学部の学生は職員間での連絡や話し合いになれているからではないかと考えた。」、「話を進めてゆくうちに、看護は視点を絞り、本人をよく見て個人に働きかけるのが得意であり、逆に私たち福祉は視野を広げて見渡し、環境に働きかけるのが得意なのではないかと考えるようになりました。どちらも対象者を援助するには必要なことであり、ここにチームアプローチの意義があるのかもしれないと私は思いました。」など、様々なとらえ方が見られた。

自己評価については、大項目の得点分布においては両学部に差異はなかったが、4つの細項目において、両学部の差異が注目された。「相手が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について自分の言葉で表現できる」、「関わった地域で調査した高齢者全体の生活及び健康ニーズを考えることができる」、「課題に対する解決方策を専門的な視点から考えることができる」、「協働する体験から得られた学びをグループ活動を通してまとめ、分かり易く発表することができる」において、肯定的に回答をしなかった学生の割合は人間福祉学部の方が看護学部より約15ポイント～25ポイントと高かった。

2009年度 教育ＧＰ「学際統合型専門職連携演習」合同発表会後 自己評価

| | 自己評価項目 | 甲府西 (%) | | | | | 看　護 (%) | | | | | 福　祉 (%) | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | A | B | C | D | | A | B | C | D | | A | B | C | D | |
| 1 | **看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互に理解することができる** | 32.7 | 63.3 | 4.1 | 0.0 | n=49 | 46.7 | 50.0 | 3.3 | 0.0 | n=30 | 10.5 | 84.2 | 5.3 | 0.0 | n=19 |
| 1) | 自分が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について説明することができる | 51.0 | 42.9 | 6.1 | 0.0 | n=49 | 66.7 | 26.7 | 6.7 | 0.0 | n=30 | 26.3 | 68.4 | 5.3 | 0.0 | n=19 |
| 2) | 相手が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について自分の言葉で表現できる | 16.3 | 61.2 | 22.4 | 0.0 | n=49 | 16.7 | 66.7 | 16.7 | 0.0 | n=30 | 15.8 | 52.6 | 31.6 | 0.0 | n=19 |
| 3) | 互いの専門性について尊重することができる | 91.8 | 8.2 | 0.0 | 0.0 | n=49 | 93.3 | 6.7 | 0.0 | 0.0 | n=30 | 89.5 | 10.5 | 0.0 | 0.0 | n=19 |
| 4) | 互いの専門性を踏まえた連携の必要性について多面的に考えることができる | 46.9 | 46.9 | 6.1 | 0.0 | n=49 | 63.3 | 30.0 | 6.7 | 0.0 | n=30 | 21.1 | 73.7 | 5.3 | 0.0 | n=19 |
| 2 | **実態調査で関わった高齢者の暮らしと、それを支える社会資源について検討できる** | 46.9 | 53.1 | 0.0 | 0.0 | n=49 | 43.3 | 56.7 | 0.0 | 0.0 | n=30 | 52.6 | 47.4 | 0.0 | 0.0 | n=19 |
| 1) | 関わった高齢者個々の暮らしについて考えることができる | 87.8 | 12.2 | 0.0 | 0.0 | n=49 | 90.0 | 10.0 | 0.0 | 0.0 | n=30 | 84.2 | 15.8 | 0.0 | 0.0 | n=19 |
| 2) | 関わった高齢者個々の暮らしを支える社会資源について説明することができる | 30.6 | 63.3 | 6.1 | 0.0 | n=49 | 26.7 | 66.7 | 6.7 | 0.0 | n=30 | 36.8 | 57.9 | 5.3 | 0.0 | n=19 |
| 3) | 関わった高齢者が暮らす地域について考えることができる | 69.4 | 28.6 | 2.0 | 0.0 | n=49 | 76.7 | 23.3 | 0.0 | 0.0 | n=30 | 57.9 | 36.8 | 5.3 | 0.0 | n=19 |
| 4) | 関わった地域で調査した高齢者全体の生活及び健康ニーズを考えることができる | 46.9 | 44.9 | 8.2 | 0.0 | n=49 | 56.7 | 43.3 | 0.0 | 0.0 | n=30 | 31.6 | 47.4 | 21.1 | 0.0 | n=19 |
| 3 | **実態調査をとおして、高齢者の生活及び健康ニーズについて検討できる** | 36.7 | 55.1 | 8.2 | 0.0 | n=49 | 46.7 | 50.0 | 3.3 | 0.0 | n=30 | 21.1 | 63.2 | 15.8 | 0.0 | n=19 |
| 1) | 互いの専門的な視点を踏まえ、得られた情報を共有するとともに、多角的に議論することができる | 42.9 | 49.0 | 8.2 | 0.0 | n=49 | 50.0 | 43.3 | 6.7 | 0.0 | n=30 | 31.6 | 57.9 | 10.5 | 0.0 | n=19 |
| 2) | 議論の結果をもとに、客観的に分析し、課題を明らかにできる | 36.7 | 57.1 | 6.1 | 0.0 | n=49 | 43.3 | 56.7 | 0.0 | 0.0 | n=30 | 26.3 | 57.9 | 15.8 | 0.0 | n=19 |
| 3) | 課題に対する解決方策を専門的な視点から考えることができる | 26.5 | 57.1 | 14.3 | 2.0 | n=49 | 33.3 | 63.3 | 3.3 | 0.0 | n=30 | 15.8 | 47.4 | 31.6 | 5.3 | n=19 |
| 4 | **専門職が連携して地域住民に関わるための基本的態度を学ぶことができる** | 93.9 | 6.1 | 0.0 | 0.0 | n=49 | 93.3 | 6.7 | 0.0 | 0.0 | n=30 | 94.7 | 5.3 | 0.0 | 0.0 | n=19 |
| 1) | 訪問前後の手続き（電話・礼状など）が的確に実施できる | 87.8 | 12.2 | 0.0 | 0.0 | n=49 | 86.7 | 13.3 | 0.0 | 0.0 | n=30 | 89.5 | 10.5 | 0.0 | 0.0 | n=19 |
| 2) | 身だしなみや言葉遣いが適切であり、相手に不快を与えないよう接することができるとともに、相手の反応を的確に捉えることができる | 91.8 | 8.2 | 0.0 | 0.0 | n=49 | 96.7 | 3.3 | 0.0 | 0.0 | n=30 | 84.2 | 15.8 | 0.0 | 0.0 | n=19 |
| 3) | 地域住民・専門機関従事者に感謝の意を伝えることができる | 98.0 | 2.0 | 0.0 | 0.0 | n=49 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | n=30 | 94.7 | 5.3 | 0.0 | 0.0 | n=19 |
| 4) | 個人情報を的確に扱い、確実に保護することができる | 98.0 | 2.0 | 0.0 | 0.0 | n=49 | 96.7 | 3.3 | 0.0 | 0.0 | n=30 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | n=19 |
| 5 | **他職種と連携する意義を考えることができる** | 59.2 | 40.8 | 0.0 | 0.0 | n=49 | 70.0 | 30.0 | 0.0 | 0.0 | n=30 | 42.1 | 57.9 | 0.0 | 0.0 | n=19 |
| 1) | グループワークに積極的に参加し、チームの一員としての役割を担うことができる | 75.5 | 24.5 | 0.0 | 0.0 | n=49 | 86.7 | 13.3 | 0.0 | 0.0 | n=30 | 57.9 | 42.1 | 0.0 | 0.0 | n=19 |
| 2) | グループメンバーの意見を傾聴し、受け止めたうえで自分の意見を述べることができる | 79.6 | 20.4 | 0.0 | 0.0 | n=49 | 86.7 | 13.3 | 0.0 | 0.0 | n=30 | 68.4 | 31.6 | 0.0 | 0.0 | n=19 |
| 3) | 協働する体験から得られた学びをグループ活動を通してまとめ、分かり易く発表することができる | 24.5 | 59.2 | 16.3 | 0.0 | n=49 | 30.0 | 63.3 | 6.7 | 0.0 | n=30 | 15.8 | 52.6 | 31.6 | 0.0 | n=19 |
| 4) | 連携して関わった一連のプロセスを振り返り評価し、今後の自己の課題を明確にできる | 46.9 | 53.1 | 0.0 | 0.0 | n=49 | 50.0 | 50.0 | 0.0 | 0.0 | n=30 | 42.1 | 57.9 | 0.0 | 0.0 | n=19 |

### ③ 合同発表会後

リフレクションについては、当日の発表やこれまでの演習の振り返り述べられていた。例えば、「他の地域の発表をみて、同じ目的をもって関わりをもっていても、地域や関わる人などが異なると、視点や着目点なども異なってきていて、とてもおもしろいと感じた。自分のできることを行い、地域に貢献できるようになれたらいいと考えた。福祉の学生さんとの関わりを持てたことで、今までは知らなかった福祉の学習内容、福祉の視点から見た地域や高齢者などの捉え方を感じることができた。」、「各グループ様々な視点で調査の考察を行っていてとても興味深かった。私たち甲府西とはまた違う調査方法や、考察、まとめ方がされており、パワーポイントもわかりやすいようにそれぞれ工夫がされていて素晴らしかった。今日は他グループの発表を聞くことを通して今までのまとめを行うことができ、あらためて『看護』と『福祉』の２つの専門職の特徴を考えることができた。対象を全人的にとらえるためにも専門性を活かした連携は大切であると実感することもできた。」、「看護学部の学生とまとまった時間を共にすごしたことは貴重な経験となりました。これまでは看護学部の学生とかかわったことがなく、『なんか強そう』など勝手なイメージが先行していました。顔合わせの時期はグループの雰囲気も重苦しかったのですが、一緒に作業したり、雑談したり、昼食を一緒にとったりするうちに、互いの学校生活やプライベート、将来のことなど深い話もできるようになり、互いの専門性を理解する基本的な部分が築けたと感じています。」などであった。

また、「各グループの報告を聞いて、同じ甲府市内でも高齢者の抱えるニーズや地域の特性が変わってくることが分かった。また、福祉・看護のそれぞれの課題についても詳しく挙げられていたグループもあって驚いた。しかし、実際に専門職として仕事をする際にこの連携がどうやって生かされるのか、という具体的な部分までは踏み込めなかったように思う。実際の現場で専門職同士がどのように連携しているか、という点についての理解が不十分であった為、推論になってしまっていた部分もあったのではないかと思う。もっとそういった部分の情報提供や、学生たちで調べられる機会を与えてくれていたらもっと具体的に仕事へと繋げられる演習になったのではないかと感じた。」と、物足りなさを感じている学生もいた。この他、発表に向けての打ち合わせやスライド原稿作りにリーダー学生の負担が大きく申し訳なかったという感想が数名から聞かれた。

自己評価については、両学部とも５項目全てにおいて、肯定的回答が多くを占め差異は見られなかった。

### 5) 演習に関する打合せ

| 月　日 | 場　所 | 内　容 | 出席者（名） | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | | 大学 | 包括 | その他 |
| 21.11.10 | | 21年度演習について | 5 | 2 | |
| 12. 7 | 自治会館 | 演習打合せ | 1 | 2 | 老人会役員他：10<br>甲府市:1 |
| 12.14 | 大学 | 演習打合せ | 5 | | |
| 12.28 | 大学 | 演習打合せ | 4 | | |
| 22. 1. 4 | 大学 | オリエンテーション前日打合せ | 3 | | |
| 1.12 | 大学 | 演習打合せ、名簿確認 | 2 | | |
| 1.19 | 大学 | 演習打合せ、名簿確認 | 4 | | |
| 2. 3 | 大学 | 演習最終確認 | 6 | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 3. 4 | 大学 | 合同発表会・発表会事前演習打合せ | 5 | | |
| 3.29 | mail 会議 | 合同発表会事前演習打合せ | | | |
| 3.30 | 大学 | 合同発表会事前演習打合せ | 5 | | |
| 3.31 | mail 会議 | 合同発表会事前演習打合せ | | | |
| 5.11 | 大学 | 21 年度反省会 | 5 | | |
| 6. 3 | 包括 | 包括職員との反省会 | 4 | 3 | |

**(2) 平成 22 年度**

| | |
|---|---|
| 学　　生 | 看護学部 34 名 / 人間福祉学部 22 名　計 56 名 |
| 担当教員 | 看護学部 5 名 / 人間福祉学部 2 名　　計 7 名 |
| センター職員 | 2 名 |

1) オリエンテーション

オリエンテーションでは、各学生に「甲府市西地域包括支援センターをフィールドとした演習計画書」をはじめ、「専門職連携演習グループ表」、「石田地区高齢者の見守り体制構築に向けたアンケート結果(高畑南西自治会)」、「住み慣れた地域で心豊かに暮らしていける福祉の町づくり・高畑南西自治会福祉部だより・高畑南西自治会年代別高齢者数ならびに高齢者世帯の内訳」(甲府市高畑南西自治会副会長佐藤千恵子氏提供)、「地域で生活する高齢者への聞き取り調査票」(調査項目 1 ～22:平成 21 年度同様)、「○○さんの人とのつながりMap」(平成 21 年度同様)、これらの資料ならびにファイル、名札、ブルゾンを配布した。この他、各グループには訪問調査にご協力くださった高畑南西自治会長寿の皆様のお住まいである「甲府市高畑 2 丁目の地図」を配布した。

以下に、オリエンテーションで説明した「甲府市甲府西地域包括支援センターをフィールドとした演習計画書」の演習概要、1 月 11 日(火)当日のスケジュールならびにフィールド演習までに準備したことを示した。

**＜演習概要＞**

**① 実施内容**

甲府市西地域包括支援センター(以下、西ほうかつ)のフィールド内にある高畑南西自治会長寿の皆様のうち本演習への協力者に対し、生活や健康などの聞き取り調査を行いまとめる。

- 看護と福祉の学生が 2～3 人のチームになり協力者から聞き取り調査を行う。
- 看護と福祉の学生は、事前学習や準備、実施、集計・分析報告などのプロセスを合同で実施する。
- 地域住民への報告会を開催し、演習の成果を報告する。

**② 対象学生**

看護学部 3 年生 33 名、人間福祉学部 3 年生 20 名、同じく 4 年生 2 名で合計 55 名である。
学生の編成については、1 チーム 2～3 名、グループは 2 つチームで構成する。

**③ 調査地域・調査対象者**

フィールド選定:11 月に西ほうかつ職員や 21 年度報告会にて地域住民代表者として報告された方に相談しながら石田地区高畑南西自治会を選定し、12/10 同自治会長寿の会　定例会で本演習の趣旨・方法を説明し、訪問調査協力を依頼した

対象者：高畑南西自治会長寿の皆様のうち本演習への協力者　22 名

4）**記録用紙**

聞き取り調査用紙：チームごとに作成する

調査後作成用紙：○○さんの人とのつながりＭａｐ：チームごとに作成する

高畑南西地域Ｍａｐ：全体で確認し作成する

その他、グループワークの記録など

**＜スケジュール＞**

| 時　　間 | 内　　容 | 備　考 |
|---|---|---|
| 9:30～ | 第８講義室に移動し、チームごと着席、資料の確認 | 全体の進行 |
| 9:45～10:00 | **担当者紹介**<br>学生互いの紹介（チームごと）<br>担当教員の紹介<br>西ほうかつ職員の紹介<br>高畑南西自治会副会長の紹介 | （　清水　） |
| 10:10～10:40 | **オリエンテーション**<br>・演習の目的・目標、演習内容、スケジュールなどについて<br>聞き取り調査、記録用紙について<br>・西ほうかつの機能<br>・石田地区高齢者の見守り体制構築に向けたアンケート結果 | オリ説明<br>（　柳田　）<br><br>（ 滝花所長 ）<br>（　井出　） |
| 10:40～11:00<br>（10 分） | **高畑南西自治会ならびに長寿の会について紹介**<br>（休憩） | （ 佐藤 様 ） |
| 11:10～11:55 | **グループワーク**<br>② グループごとの自己紹介（2 チーム）<br>・看護および福祉の学生の授業や学習について情報交換<br>・グループリーダー、チームリーダーの選出<br>③ 聞き取り調査内容の確認・検討とロールプレイなど<br>・対象者の名簿、連絡用ハガキ、地図などの受領<br>・基本の調査内容、オリジナル質問、聞く順番など<br>④ 自治会館や自宅へ伺う時の態度や面接する時の配慮<br>電話での留意事項など | 学生は適宜担当教員に相談する |
| 11:55～12:10 | **連絡事項など**<br>・リフレクションペーパーの記入について<br>・今後の予定など | （　須田　） |

**＜フィールド演習までに準備したこと＞（1 月 11 日～2 月 4 日）**

① チームごと連絡を取り合い、事前に対象者の住まいや、往復の交通手段などを確認した。

② 訪問調査日の 1 週間前(1 月 29 日前後)に対象者に電話を入れ、訪問日時の確認を行い、事前の連絡用ハガキを書いて郵送した。

2) **フィールド演習**

まず、2 月 5 日(土)当日のスケジュールを示し、訪問調査や演習中の発表の様子を一部掲載した。

| 時　間 | 内　容 | 備　考 |
|---|---|---|
| 9:00 | 集合（飯田キャンパス B120 教室） | 全体の進行 |
| 9:00～9:20 | **オリエンテーション** | （　清水　） |
| | ・健康チェック | |
| | ・学長からの演習協力者に対する依頼書・同意書の取り扱い | |
| | ・訪問時の留意点(対象者への感謝の伝え方、訪問時間等の負担への配慮、メモを取る際の了解のとり方) | |
| 9:20～12:00 | **聞き取り調査に出発** | |
| | ・高畑南西自治会館に集合(9:45)し、協力者に挨拶する | 自治会館代表挨拶 |
| | ・聞き取り調査を実施（自治会館ならびにご自宅)する | （　清水　） |
| | ・帰校後は順次、チームごとに調査内容をまとめる | |
| | お礼のハガキを作成する | |
| 12:00～13:00 | （昼食） | |
| | | 学生は適宜担当教 |
| 13:00～14:05 | **チームワーク　(65 分)** | 員に相談する |
| | ・聞き取り調査用紙にチェックや内容を記入する | |
| | ・○○さんの人とのつながりＭａｐを作成する | |
| | ・高畑南西地区の地図に地域の特性を記入する | |
| | ・パソコン入力を依頼する | （　三井　） |
| 14:05～14:40 | **チームの発表 (35 分)** | 発表の進行 |
| | ・代表チームが発表する | （柳田・河野） |
| | ・西ほうかつ職員よりコメントを受ける | |
| （10 分） | （休憩） | |
| 14:50～15:35 | **グループワーク(45 分)** | |
| | ・演習目標に沿って気づきや学びなどの意見交換 | |
| 15:35～16:10 | **グループの発表(35 分)** | 発表の進行 |
| | ・代表グループが発表する | （柳田・河野） |
| | ・担当教員よりコメントを受ける | |
| 16:10～16:30 | **連絡事項など** | （　須田　） |
| | ・リフレクションペーパーについて | |
| | ・調査記録用紙、お礼状、グループワーク記録用紙　他 | |
| 16:00～17:00 | **地域報告会の準備について** | （　井出　） |
| | ・報告者の募集ならびに選出、役割や日程調整 | |

高畑南西自治会館では、民生委員でもある自治会副会長の佐藤様をはじめ調査に協力してくださる 7 名の対象者の皆様に迎えられた。西ほうかつ滝花所長にも自治会館に来ていただきフィールド演習を支援していただいた。自治会館での挨拶後、7 チーム 17 名の学生は自治会館に残って

対面調査を実施し、15 チーム 38 名の学生は対象者のご自宅に訪問し対面調査を実施した。どのチームも時間の経過と共に笑顔が多くなり、相手に気遣いながらも会話はスムーズに弾んでいる様子であった。担当教員も自治会館や訪問先に出向き、見守り・指導した。訪問時間は 60 分～100 分で、全員 12:10 頃までには帰校できた。

チームワーク後の発表については、限られた時間の中で作成した対象者の人とのつながりMapを用いて、その人らしさやその人の強み、また近くにスーパーがなく買い物が不便なことや膝が痛むので買い物に出かけられず困っていることなど、生活や健康上のニーズや課題を対象者自身のことだけでなく対象者を取り巻く環境の変化にも着目して発表することができていた。

グループワーク後の発表では、対象者をとらえる視点の違いや対象者の課題の優先順位の違いを両学部の専門性の相違点と説明したり、対象者の課題を解決し生活の質を向上させたいという目指すゴールは共通しているなど、気づいたことを中心に発表することができていた。しかし、どのグループも同じ傾向の気づきであり、意見が対立することはなく、質問や疑問が上がらなかった。

### 3) リフレクションと評価

#### ① オリエンテーション後

リフレクションペーパーについては、限られた時間の中では、看護学部の学生も人間福祉学部の学生も共に、お互いの専門性を端的に分かりやすく説明することは十分とは言えなかった様子も、学生の多くはオリジナル質問を検討する段階で専門性の違いを意識したようであった。ある学生は「看護学部の学生からは『病院への通院があるかないか』『体調管理について』などが挙がったが、人間福祉学部の学生からは『地域の社会資源の活用について』が挙がるなど、それぞれのアプローチの違いを感じ、お互いの職種を理解して連携することで対象者に幅広いサービスを提供が可能であることを今回の演習で感じた。」と述べている。

また、ある学生はこの演習での取り組みについて、「地域で生活されている方の話を聞くだけにとどまらず、日頃地域で感じている声を行政(甲府市)へとつなげるお手伝いができるのだと考えた。…(中略)…地域に住む方の声を行政へとつなげる必要があるかないかを判断する能力を求められるようになり、地域に住む方の声を多方面から見るために看護と福祉の学生が連携する意義があるのだと感じた。」と述べていた。本演習が大学と地域と行政が一体となって取り組んでいる意義について言語化できていた。また、ある学生は「看護職は福祉職が行うことができない医療行為も行うので、看護と福祉では、何となく看護の方が上というイメージがあったので、看護学部の学生と対等に話ができるか不安だった。しかし、話をしてみるとどの学生もとても話し易く、最初の不安は全く感じなかった。」と先入観があったことについて理由を含めて説明しながら、演習を通してそれが払拭されたことまで述べることができていた。

自己評価については今回実施した項目は、1 項「看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互に理解することができる」とその細目 4 項、5 項「他職種との連携の意義を考えることができる」とその細目 4 項についてであった。両学部の得点分布の差異で注目されたことは、5 項には差がなかったにもかかわらず、1 項とその細目 1 項、2 項、4 項において、人間福祉学部の学生の方が肯定的回答が 15 ポイント～25 ポイント低かったことであった。

#### ② フィールド演習後

リフレクションペーパーについては、対象者と生活の場で出会って対面調査し、体感したことを言語化することができていた。例えば、「聞き取り調査させてもらって日常生活の状態や、現在とこれからの人生をどう生きていきたいかについてはっきりとした考えを持っていて人生の先輩として勉強させてもらうことがたくさんありました。」、「息子家族と一緒に生活したいという気持ちがありながらも迷惑をかけたくないという思いから一人の生活をしているのではない

かと感じた。…(中略)…そういった方が、折り合いをつけることで孤独を感じながら生活していかないように、地域で関わりが持てるような活動を考えていくことが大切だと思った。」、「100歳であるにもかかわらず、とても元気で話好きな方だった。…(中略)…この方の生活課題を見つけようとしてもなかなかできなかった。生き生きと毎日を楽しく健康に暮らしていらっしゃる高齢者に出会えて、近所同士の仲のよさや、地域の行き届いた見守りのすばらしさを実感することができた。本当に貴重な体験であった。」などであった。

両学部の専門性に関連したことついて、例えば看護学部の学生からは「看護の学生はこちらが聞きたいことを質問攻めにしているようで、福祉の学生は話の流れに沿って質問している様子が伺えた。…(後略)…」、「予想していた通り人間福祉学部と看護学部では対象を見る視点が違うことに気付いた。それはどちらが正しいかというのではなく、それぞれの違う視点からの観察によって対象者を様々な視点からとらえられるということを学んだ。」、「…(前略)…私は睡眠はどうかなど健康面を重視していたが、福祉の学生は買い物に行くのに交通手段はどうかなど生活ニーズを重点的に見ていた。しかし、今回の演習を通して学んだことは、看護も福祉も健康面かつ生活面どちらも見ており、それを基盤として各々の専門の視点から見ているのではないかということである。…(中略)…これからは、お互いの専門性とは何かと問い続けながら看護に携わりたい。」などが聞かれた。

一方、人間福祉学部の学生からは、「…(前略)…今回のように対象者が高齢者の場合は、身体的疾患を抱えている方が多くなる。また、独居や高齢者夫婦の二人暮らしなど、生活に対して何らかの不安を抱えている人も多くなる。看護的ニーズだけでなく福祉的ニーズを捉えることで、初めて対象者の生活ニーズは満たされる。今後福祉職として働く上で、看護との連携は必要不可欠になるだろうと思い…(後ろ略)…」、「実態調査の際に、看護の学生が『睡眠はとれていますか?』と聞いたことに対して、福祉の学生にはあまりない視点であると実感しました。しかし、その後の話し合いで看護の学生は看護の専門性として『対象者の全体を見て支援していくこと』ということを挙げていたことなどから、視点の違い以上に、対象者の生活を支援してよりよいものにしていくという目標や考え方など同じ部分を多く感じることができました。」「…(前略)…実際に看護学部の学生と接してみて、一人の対象者や地域について話し合うと、専門性が重なり合う部分が大半であるということを感じた。むしろ基本的な考え方というのはまったく同じで、違いというのはその業務内容や活動の場だけなのかもしれないとも思った。」など、これらから両学部生とも、相違点と共通点を認め合い尊重している様子が伺えた。

自己評価については、今回は5項目全てについて評価した。得点分布の違いから注目されたことは、大項目の全てにおいて、看護学部の学生は「A」ならびに「B」と肯定的に回答していることであった。一方、人間福祉学部の学生は、大項目の1項、5項において、「A」ならびに「B」と肯定的に回答した学生の割合は90%で、大項目の2項、3項、4項において「A」ならびに「B」と肯定的に回答した学生は85%であった。

また、細目において、両学部の得点分布に開きがあった項目は、大項目2項の細目4項「関わった地域で調査した高齢者の全体の生活及び健康ニーズについて検討し地域にフィードバックできる」で、フィードバックについてはこれから地域報告会で実施することであり、未実施を見込んでの評価だったかどうか不明であるが、肯定的に回答をしなかった学生の割合は人間福祉学部の方が30%で、看護学部より26.9ポイントも高かった。

# 2010年度 教育ＧＰ「学際統合型専門職連携演習」演習実施後 自己評価

| 自己評価項目 | | 西 (%) n=53 | | | | 看 護(%) n=32 | | | | 福 祉(%) n=21 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | A | B | C | D | A | B | C | D | A | B | C | D |
| 1 | 看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互に理解することができる | 54.7 | 41.5 | 3.8 | 0.0 | 68.8 | 31.3 | 0.0 | 0.0 | 33.3 | 57.1 | 9.5 | 0.0 |
| 1) | 自分が学んでいる専門職の専門性(知識・技術など)について説明することができる | 64.2 | 28.3 | 7.5 | 0.0 | 78.1 | 18.8 | 3.1 | 0.0 | 42.9 | 42.9 | 14.3 | 0.0 |
| 2) | 相手が学んでいる専門職の専門性(知識・技術など)について自分の言葉で表現できる | 32.1 | 58.5 | 9.4 | 0.0 | 43.8 | 53.1 | 3.1 | 0.0 | 14.3 | 66.7 | 19.0 | 0.0 |
| 3) | 互いの専門性について尊重することができる | 81.1 | 15.1 | 3.8 | 0.0 | 90.6 | 9.4 | 0.0 | 0.0 | 66.7 | 23.8 | 9.5 | 0.0 |
| 4) | 互いの専門性を踏まえた連携の必要性について多面的に考えることができる | 58.5 | 32.1 | 9.4 | 0.0 | 68.8 | 28.1 | 3.1 | 0.0 | 42.9 | 38.1 | 19.0 | 0.0 |
| 2 | 実態調査で関わった高齢者の暮らしと、それを支える社会資源について検討できる | 43.4 | 50.9 | 5.7 | 0.0 | 43.8 | 56.3 | 0.0 | 0.0 | 42.9 | 42.9 | 14.3 | 0.0 |
| 1) | 関わった高齢者個々の暮らしについて考えることができる | 79.2 | 17.0 | 3.8 | 0.0 | 84.4 | 15.6 | 0.0 | 0.0 | 71.4 | 19.0 | 9.5 | 0.0 |
| 2) | 関わった高齢者個々の暮らしを支える社会資源について説明することができる | 30.2 | 58.5 | 11.3 | 0.0 | 28.1 | 62.5 | 9.4 | 0.0 | 33.3 | 52.4 | 14.3 | 0.0 |
| 3) | 関わった高齢者が暮らす地域について考えることができる | 56.6 | 35.8 | 7.5 | 0.0 | 62.5 | 37.5 | 0.0 | 0.0 | 47.6 | 33.3 | 19.0 | 0.0 |
| 4) | 関わった地域で調査した高齢者全体の生活及び健康ニーズを考えることができる | 35.8 | 50.9 | 13.2 | 0.0 | 50.0 | 46.9 | 3.1 | 0.0 | 14.3 | 57.1 | 28.6 | 0.0 |
| 3 | 実態調査をとおして、高齢者の生活及び健康ニーズについて検討し、地域にフィードバックできる | 39.6 | 54.7 | 5.7 | 0.0 | 43.8 | 56.3 | 0.0 | 0.0 | 33.3 | 52.4 | 14.3 | 0.0 |
| 1) | 互いの専門的な視点を踏まえ、得られた情報を共有するとともに、多角的に議論することができる | 52.8 | 43.4 | 3.8 | 0.0 | 50.0 | 46.9 | 3.1 | 0.0 | 57.1 | 38.1 | 4.8 | 0.0 |
| 2) | 議論の結果をもとに、客観的に分析し、課題を明らかにできる | 28.3 | 66.0 | 5.7 | 0.0 | 34.4 | 65.6 | 0.0 | 0.0 | 19.0 | 66.7 | 14.3 | 0.0 |
| 3) | 課題に対する解決方策を専門的な視点から考えることができる | 24.5 | 67.9 | 7.5 | 0.0 | 28.1 | 68.8 | 3.1 | 0.0 | 19.0 | 66.7 | 14.3 | 0.0 |
| 4) | 得られた結果をまとめて、関係者にわかりやすく報告することができる | | | | | | | | | | | | |
| 4 | 専門職が連携して地域住民に関わるための基本的態度を学ぶことができる | 81.1 | 13.2 | 5.7 | 0.0 | 93.8 | 6.3 | 0.0 | 0.0 | 61.9 | 23.8 | 14.3 | 0.0 |
| 1) | 訪問前後の手続き(電話・礼状など)が的確に実施できる | 79.2 | 15.1 | 5.7 | 0.0 | 87.5 | 12.5 | 0.0 | 0.0 | 66.7 | 19.0 | 14.3 | 0.0 |
| 2) | 身だしなみや言葉遣いが適切であり、相手に不快を与えないよう接することができるとともに、相手の反応を的確に捉えることができる | 81.1 | 13.2 | 5.7 | 0.0 | 93.8 | 6.3 | 0.0 | 0.0 | 61.9 | 23.8 | 14.3 | 0.0 |
| 3) | 地域住民・専門機関従事者に感謝の意を伝えることができる | 84.9 | 11.3 | 3.8 | 0.0 | 93.8 | 6.3 | 0.0 | 0.0 | 71.4 | 19.0 | 9.5 | 0.0 |
| 4) | 個人情報を的確に扱い、確実に保護することができる | 90.6 | 9.4 | 0.0 | 0.0 | 96.9 | 3.1 | 0.0 | 0.0 | 81.0 | 19.0 | 0.0 | 0.0 |
| 5 | 1～4をとおして、他職種と連携する意義を考えることができる | 62.3 | 34.0 | 3.8 | 0.0 | 68.8 | 31.3 | 0.0 | 0.0 | 52.4 | 38.1 | 9.5 | 0.0 |
| 1) | グループワークに積極的に参加し、チームの一員としての役割を担うことができる | 71.7 | 22.6 | 5.7 | 0.0 | 81.3 | 18.8 | 0.0 | 0.0 | 57.1 | 28.6 | 14.3 | 0.0 |
| 2) | グループメンバーの意見を傾聴し、受け止めたうえで自分の意見を述べることができる | 60.4 | 32.1 | 7.5 | 0.0 | 71.9 | 25.0 | 3.1 | 0.0 | 42.9 | 42.9 | 14.3 | 0.0 |
| 3) | 協働する体験から得られた学びをグループ活動を通してまとめ、分かり易く発表することができる | 37.7 | 47.2 | 13.2 | 1.9 | 43.8 | 46.9 | 9.4 | 0.0 | 28.6 | 47.6 | 19.0 | 4.8 |
| 4) | 連携して関わった一連のプロセスを振り返り評価し、今後の自己の課題を明確にできる | 50.9 | 41.5 | 7.5 | 0.0 | 62.5 | 37.5 | 0.0 | 0.0 | 33.3 | 47.6 | 19.0 | 0.0 |

4) **地域報告会の準備と地域報告会**

地域報告会の代表者として、看護学部生3名、人間福祉学部生3名の計6名が選出されることとなった。代表者らは、2月17日(木)1時限、3月3日(木)3時限、3月8日(火)3時限にミーティングをもち、発表内容を検討した。

検討の中で代表者らは、長年にわたり福祉の町づくりを推進してきた高畑南西自治会の皆様の取り組みに敬意を払いながら、訪問調査から見えた対象者の生活や健康上のニーズや課題を中心にまとめている。

3月10日(木)14時～14時30分、甲府市高畑南西自治会館において、パワーポイントを用いて地域報告会を開催する予定で、準備を進めている。

5) **演習に関する打合せ**

| 月　日 | 場　所 | 内　容 | 出席者（名） | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | | 大学 | 包括 | その他 |
| 22.11. 1 | 大学 | 22年度演習フィールド選定について | 7 | | |
| 11. 5 | 包括 | 包括職員との打合せ | 3 | 3 | |
| 11.12 | 児童民生委員事務室 | 演習フィールドについて相談 | 3 | | 児童民生委員：1 |
| 11.19 | 自治会館 | 演習フィールド協力依頼 | 3 | | 地域代表：2 |
| 12.10 | 自治会館 | 老人会への説明と協力依頼 | 3 | 1 | 老人会メンバー |
| 12.14 | 大学 | 演習打合せ | 7 | | |
| 12.22 | 自治会館 | オリエンテーション打合せ<br>対象者について | 2 | | 地域代表：1 |
| 23. 1. 7 | mail会議 | 学生グループ、マッチングについて | | | |
| 1.26 | mail会議 | 演習打合せ | | | |
| 2. 4 | mail会議 | 演習打合せ | | | |
| 2. 6 | mail会議 | 反省会について | | | |
| 2.18 | 大学 | 22年度フィールド演習反省会 | | | |

## 5. 合同発表会　　（文責・編集：柳田 正明）

### (1) 合同発表会概要

平成21年度の合同発表会は、大学内のみならず、専門職連携の場であり演習に協力いただいた機関、施設、地域から総勢385名の参加をいただき、平成20年度と同様に、各演習グループ別の学習成果を報告する形式で開催した。本節では平成21年度の合同発表会の内容を紹介する。なお、平成20年度の合同発表会については、中間報告書（P14～）に、その詳細を示している。

平成20年度の成果を十分に踏まえ、更に格段の進歩を果たしたとの評価を得ることができた。

日時：平成22年4月17日（土）

場所：池田キャンパス講堂

発表時間：各20分（内容報告13分、質疑応答7分程度）

発表形式：パワーポイントを用いての発表

発表内容：各担当地域包括支援センターにより、内容は異なるが、共通した点としては次の1)、2）がある。

1）調査データから高齢者の生活実態（健康・生活ニーズ）を読み取り、そこから見出された課題から、どのようなことが必要であるか発表する

2）実際に自分達が協働して得られたことを整理する中で、「専門職の連携はどうあるべきか」ということについて発表する

参加者：その内訳は次の通りである。

| | |
|---|---|
| ・甲府市地域包括支援センター職員 | 10名 |
| ・甲府市職員 | 2名 |
| ・保健福祉事務所職員 | 1名 |
| ・石田地区民生児童委員協議会 | 2名 |
| ・学内教職員 | 45名 |
| ・学生（４年生） | 160名 |
| ・学生（３年生） | 165名 |
| 合計 | 385名 |

プログラム：プログラムを含めた当日の動きは次の通りである。

| 時　間 | 内　容 |
|---|---|
| 9:00　～ | ４年生　発表準備 |
| 9:00　～　9:45 | きょうりつリハーサル |
| 10:30　～　11:15 | おおくにリハーサル |
| 11:30　～ | 学生司会者打合せ |
| 11:15　～　12:00 | 甲府西リハーサル |
| 　～　13:30 | ４年生　発表準備 |
| 13:00　～　14:00 | ３年生オリエンテーション |
| 13:30　～ | ４年生講堂に集合 |
| 13:30　～ | 受付開始 |
| 14:15　～ | はじめのあいさつ |
| 14:15　～　14:20 | あいさつ |
| 14:20　～　14:30 | これまでの取り組み |
| 14:30　～　15:00 | おおくに発表 |
| 15:00　～　15:10 | 休憩 |
| 15:10　～　15:40 | きょうりつ発表 |
| 15:40　～　16:10 | 甲府西発表 |
| 16:10　～　16:25 | 総評 |
| 16:25　～　16:30 | おわりのあいさつ |

## (2) 地域包括支援センター地区別発表内容　　（編集：河野 由乃）

地域包括ごとの発表内容について、プレゼンテーションに使用したパワーポイント資料を以下に掲載する。

### 1) 甲府市南西地域包括支援センター

甲府市南西地域包括支援センター
（旧地域包括支援センターおおくに）

山梨県立大学　人間福祉学部・看護学部４年

---

## 調査の目的と方法




---

## おおくに地区

・**地区概要**
人口：9742人（H21年）
老年人口：1365人（H21年）
老年人口割合：14.0%（H21年）

・**老人クラブ**
自治会単位で１０箇所（会員数343名）

・**今回の調査対象**
円満寺福寿会、豊栄会、古上条桜クラブ、後屋本町老人クラブ、上小河原長寿会、親友寿会、二日市場東・西老人クラブ、後屋年輪会
→**２３名の高齢者に調査を実施**

---

### 調査目的

看護と福祉の学生が協働しておおくに地区の高齢者の生活および健康の実態を把握する。

### 調査方法

高齢者の自宅に個別に訪問し、インタビュー調査を実施。

---

## Ⅰ．老人クラブへの参加について



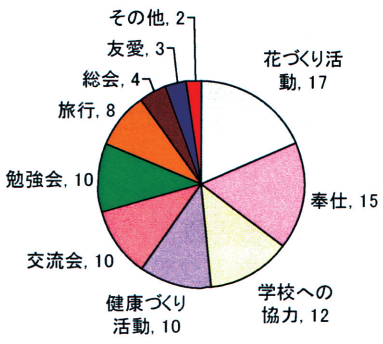

---

### １．老人クラブ活動の参加状況

平均　１．８回/月
（最高３回/週、最低３回/年）

---

## 2. 老人クラブの主な活動




---

## 3．活動場所と移動手段

活動場所･･･公共の施設（自治会館）
交通手段･･･徒歩が圧倒的に多い。

## 4．老人クラブへの要望

・人や地域との関わりを増やしたい
・６０歳代の人に参加してほしい
・全体的に会員を増やしたい
・活動内容の充実

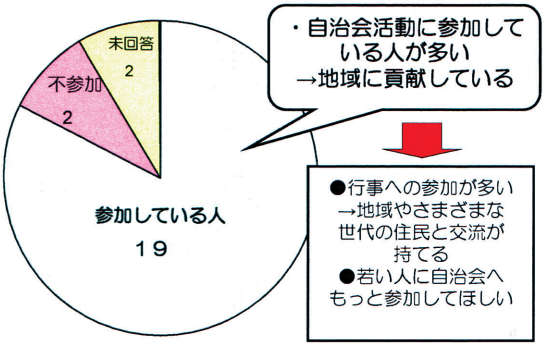
## 考察と課題

・名称を工夫するなどして、若い人への参加を促すことが必要
・他クラブとの交流により、意見交換をし、活動内容を充実させていく
・健康高齢者増加のため専門職介入の活動の充実

## Ⅱ．自治会活動への参加について



## 自治会活動への参加状況




・自治会活動に参加している人が多い
→地域に貢献している

●行事への参加が多い
→地域やさまざまな世代の住民と交流が持てる
●若い人に自治会へもっと参加してほしい

## Ⅲ．老人クラブ活動以外への参加について



## 老人クラブ以外の活動

・運動
（ｹﾞｰﾄﾎﾞｰﾙ・ﾊﾞﾚｰﾎﾞｰﾙ・ｸﾞﾗﾝﾄﾞｺﾞﾙﾌ）
→参加人数の確保が問題
・文化活動
（旅行・映画・囲碁・小学生への指導など）
→活動場所や移動手段がない
・地域貢献
（小学生の下校時のﾊﾟﾄﾛｰﾙ）
→地域との関りを深めたい

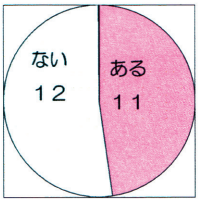


## Ⅳ．その他

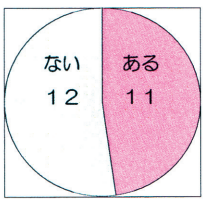


## 地域の困りごとについて

**困りごとの相談**




**相談についての手助け**

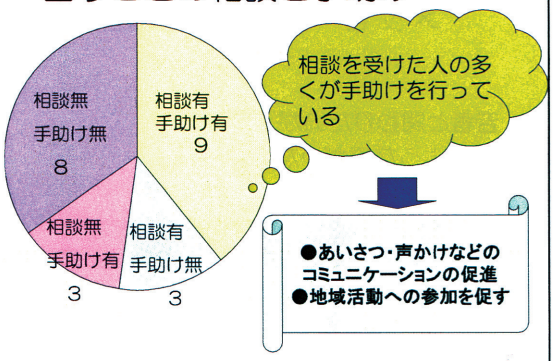



## 隣近所や地域でできること

・地域交流・コミュニケーション
挨拶・声かけ
「会って話をするだけでも違う」
etc.

・公の団体による活動
民生委員や老人クラブなどによる地域への働きかけ

## 困りごとの相談と手助け

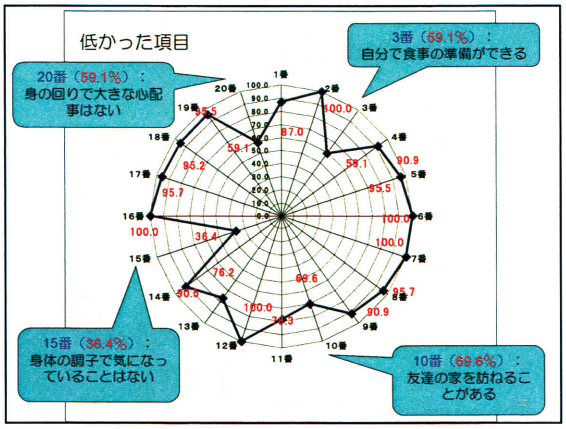


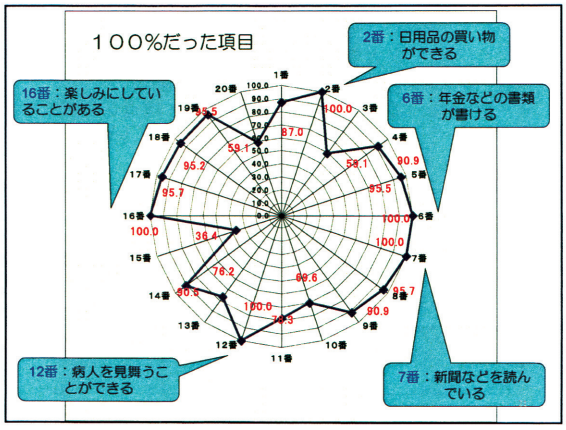

## Ⅴ.老研式活動能力指標など



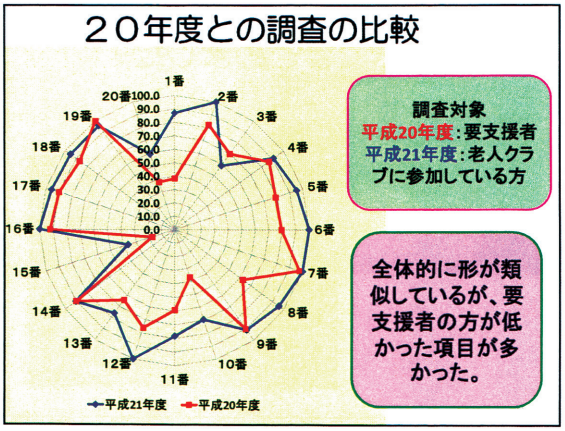
## 老研式活動能力指標などの項目

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1番 | バスや電車を使って一人で買い物ができる | 11番 | 家族や友達の相談にのることがある |
| 2番 | 日用品の買い物ができる | 12番 | 病人を見舞うことができる |
| 3番 | 自分で食事の準備ができる | 13番 | 若い人に自分から話しかけることがある |
| 4番 | 請求書の支払いができる | 14番 | 身体にいいと思うことを日々実行している |
| 5番 | 銀行預金、郵便貯金の出し入れができる | 15番 | 身体の調子で気になっていることはない |
| 6番 | 年金などの書類が書ける | 16番 | 楽しみにしていることがある |
| 7番 | 新聞などを読んでいる | 17番 | 人との交流をしている |
| 8番 | 本や雑誌を読んでいる | 18番 | 暮らしやすい環境である |
| 9番 | 健康についての記事や番組に関心がある | 19番 | 困ったときに頼りになる人がいる |
| 10番 | 友達の家を訪ねることがある | 20番 | 身の回りで大きな心配事はない |



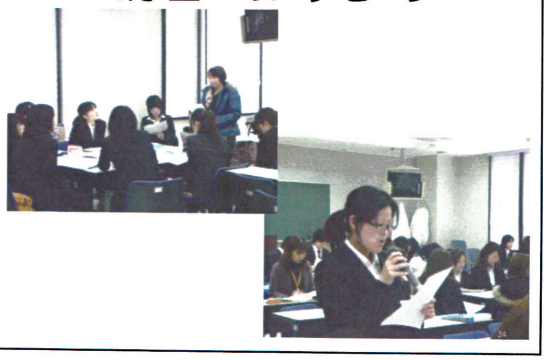

## ２０年度との調査の比較




## <まとめ>

**小さな心配事がありながらも、**
**老人クラブに参加するなど**
**人との交流を持ちながら、**
**充実した日常生活を**
**送っている！！！**

## Ⅵ.学生へのメッセージ



## 多かったメッセージ

- 期待（学生の今後に対して）
  →技術だけでなくｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝを大切にするなど
- 要望（自分がしてもらいたいこと・交流の継続）
  →本当に必要なｻｰﾋﾞｽを受けられるような社会に変えてほしいなど
- 経験の伝承
  →勉強できるありがたみをいつか分かる日が来るのでがんばってほしいなど
- 学生の態度への評価
  →積極的に話を聞き態度もよいなど

## メッセージからの課題

- 若者と関わりたいが
  そのような場が少ない
- 高齢者側から働きかけないと自分たちの要望に気づいてもらえない、という不満がある

## メッセージからの課題

- 制度の説明を受ける際に難しい言葉や抽象的な表現が多く、理解しにくいため、自分にあった説明がほしい



## 私たち専門職に何ができるのか ～私たちの課題～



## ＫＪ法でまとめました！



- 自治会活動・老人クラブなどの地域活動への高齢者の参加をサポートすること
- 高齢者の健康維持・増進のための支援を行っていくこと
- 対象者のニーズに応じて的確かつ十分な情報提供ができること
- 新たなサービスの開発 社会資源の開拓を通してよりよいサービスの提供を図ってゆくこと

- 対象者の気持ちや意思を尊重しその人にあった支援をしてゆくこと
- 対象者が気軽に困りごとや健康について相談できる場を設けること
- さまざまな実態把握や問題把握を通して対象者のニーズを的確に捉え、支援につなげていくこと
- 多職種間で知識や情報の共有を行いよりよい支援へとつなげていくこと

## 演習を通して 専門職の連携について 学んだこと



率直な感想として・・・

自分たちに専門性が身に付いていることを知った

「暮らしを支える」という目標は同じ

しかし！！

各々の専門性により視点や方法は違う

対象者によりよい支援をするために・・・

- 対象者に専門性を理解してもらう
- 専門職同士で弱い部分をカバーする
- 互いの専門性・自己の専門性を理解し、尊重し合う
- 専門職間の情報共有
- 情報の見きわめ、取り扱い

実際に対象者の援助を考える際は・・・

- 対象者の情報を共有し意見交換する
- 専門職が連携する事で視野が広がり多面的に幅広い支援ができるようにする

## 多職種が連携するときは

→視点が違うため、意見が対立することもある

→多職種で連携することは難しい



## 〈専門職連携のために〉 ～私たちの課題～

- 人と人との関わりを深めること
- コミュニケーション能力の向上
- 個性を大切にして人を理解する姿勢
- 考えの根拠を具体的に示しあうこと

## 地域への報告会（4/16）の様子





貴重なお話を聞かせてくださった高齢者の皆様、このような学習の機会を与えてくださいました皆様、本当にありがとうございました。
さらに学習を積み、期待に応えられる専門職を目指します！！

ご清聴ありがとうございました。



2）甲府市中央地域包括支援センター

## 甲府市中央地域包括支援センター(きょうりつ)グループ

山梨県立大学
- 看護学部学生：36名
- 人間福祉学部学生：22名

## 活動の目的

・看護と福祉の学生が協働して地域住民の生活と健康ニーズを考える。
・互いの専門性を知り、他職種と連携する意義を知る。

## 調査内容

- 看護と福祉の学生が相生地区に暮らす高齢者の方の自宅に訪問。
- ・・・インタビュー時間：1時間程度
  ・・・質問項目：19項目とオリジナル質問1項目
  ・・・訪問した件数：19件
- 相生地区の社会資源の調査




## 発表の流れ

1. 地域の特性について
2. 社会資源について
3. 生活の実態について
4. 私たちが考える相生地区の課題と対策
5. 協働していく上で学生が感じたこと
6. 連携の必要性について
7. 連携していく上で大切にしたいと思うこと

## 1. 地域の特性について

## 中央地域相生地区の概要




・甲府駅から歩いて30分程度
・世帯数：1591世帯
・人口：3,288人
・65歳以上総数：1,155人
・高齢化率(65歳以上)：35.1%(甲府市は24.3%)

## 相生地区の特性について（聞き取り調査からわかったこと）

住民について

・子供が少ない。
・昔から住んでいる人が多いため、近所付き合いは良い。
・老人会や婦人会などの地域住民の自治会は多い。しかし所属しているほとんどが高齢者で、若い人がおらず、高齢者だけでは運営が難しい。

## 2. 社会資源について

## 高齢者の暮らしを支える社会資源



(1)医療機関
- ・総合病院
- ・診療所
- ・かかりつけ医 (94.4%)

(2)相談機関・施設
- ・地域包括支援センター
- ・市役所
- ・社会福祉協議会
- ・デイサービスセンター



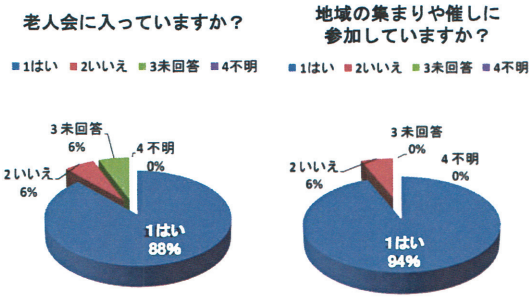
(3)組織・団体
- ・無尽
- ・老人会
- ・自治会

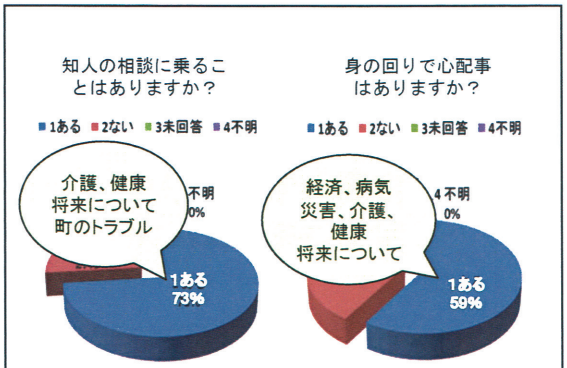
(4)商店
- ・商店街 (シャッター街化が目立つ)
- ・コンビニエンスストア
- ・点在する小売店
- ・スーパーマーケット

＊無尽
親戚・知己が寄り集まり、物やお金を出し合う相互扶助のシステム。(三省堂「大辞林 第二版」)
現在では、特定の人が定期的に集まり飲み会や旅行などをする会となっている。

## 3. 生活の実態について

## 訪問した高齢者の生活の実態



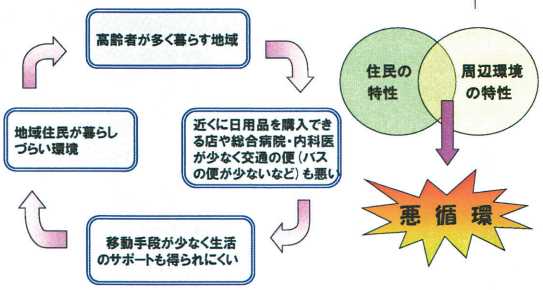




## 4. 私たちが考える相生地区の課題と対策

## 調査結果から

- **住民同士の交流の場が減少しているうえ、そのような場に参加していない人もいる**
  - ⇨外出の機会が減る。外出に消極的になる
  - ⇨交流の場の存在を知らない、参加したくてもできない人がいるのではないか
- **相談を受けたことがある人、心配事がある人がともに多い**
  - ⇨社会資源の相談機関や医療機関のみではすべてを認識するのは困難ではないか

## 私たちが考える相生地区の課題




## 提案①買い物

・近くにスーパーがない、交通手段が少ない

⇒ **巡回販売**
コンビニエンスストアに野菜や肉などの小分けした食品や身近な生活用品を置く

## 提案②健康と暮らし

**・身近に、健康や暮らしを気にかけてくれる人が欲しい。**

⇒ 地域の人と保健センター・福祉事務所・地域包括支援センター・社会福祉協議会の職員、学生ボランティアが協力。

## 提案③コミュニケーション

・若い人との交流が少ない
・活動状況に関する情報が行き渡っていない

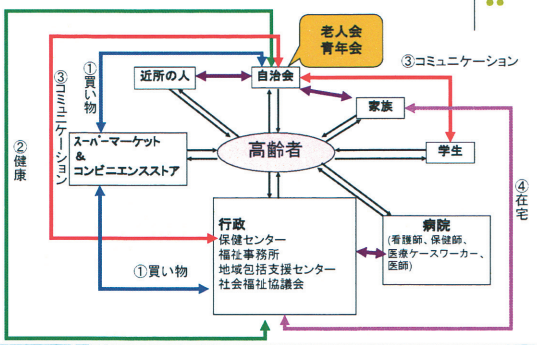
⇒ 学生によるイベントの企画
町内の青年部と老人クラブとの交流
情報相談窓口の設置

## 提案④在宅

・病気や障害があっても、できれば家で過ごしたい

⇒ 病気や障害、社会資源の利用についての知識の提供
例）地域イベントと合わせて講習会を行う。

## 支えあいネットワーク




## 5. 協働していく上で学生が感じたこと

## 訪問してみて・・・

| | 看護の学生 | 福祉の学生 |
|---|---|---|
| 最初に見たのは・・・ | 危険物はないか、その人の歩き方や姿勢はどうか | 「どんな暮らしをしているか」と家全体を見た |
| 「近所の運動場がなくなった」と聞いて最初に考えたのは・・・ | 運動する機会がなくなって、健康が損なわれるのではないか | 代わりの場所はあるのか、本人にとって楽しみの確保はできるのか |

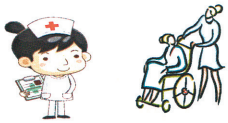
そんなところみるんだ～

そんなことまで考えてなかった

## 看護の特徴

《対象》
あらゆる年代の個人、家族、地域

《看護の目的》
疾病予防
健康の保持増進
健康の回復
苦痛の緩和



## 福祉の特徴

《対象》
高齢者・障害者・子ども・家族・地域等

《福祉の目的》
一人ひとりが住みなれた地域の中でその人らしくいつまでも安心して暮らせるように、フォーマルサービス、インフォーマルサービスを総合的に提供し援助・支援する。

## 気づいたこと・・・1

《看護》
リスクを探しがち
・健康な高齢者を訪問しても、疾患や危険を先に見てしまった
・イエスかノーかで答えられる質問が多く感じた
・健康な高齢者が多かったので何をしたらよいか分からなかった

《福祉》
・まず高齢者のありのままを捉えようとした
・高齢者が社会資源の情報をどれだけ知っているかを知ろうとした
・高齢者とその家族をひとつとして考えていた
・その人が持っている力やプラス面を考える

## 気づいたこと・・・2
《共通していえること》

**関わる姿勢**
・・・相手の話を聞いて共感し、受け止め、尊重する。
人との関わりやコミュニケーションを重視している。

**高齢者を理解する心(その人の気持ちになって考える)**
・・・高齢者を第一に考える。
全体像を把握する。(生活史、生活背景、性格、考え方、キーパーソンの把握など)

**先を予測した上で、今をどうすべきか考える。**

その人らしく、安心して暮らせるように支援する。

## 6. 連携の必要性について

## グループワークで感じたこと

**良かった・楽しかったこと**

・異なる視点をもっているので、高齢者や環境からより多くの情報を得られた
・連携をすることで得た知識を別の場面でも生かせた
・他職種と協力して高齢者がより生活しやすく喜んでもらえると、達成感が得られると感じた
・少人数だと思いつかない意見や知識が出てくるので、不足している部分を補える

**困ったこと・大変だったこと**

・他職種について理解を深めるのに時間がかかってしまった
・スケジュールを合わせるのが大変
・それぞれの主張を尊重して話をまとめていくことが難しかった
・他職種同士で目標を統一することが難しかった




## 連携しなかった場合・・・

**高齢者が困ること**

・生活すべてのニーズを満たせない可能性がある
・たくさんの職種にそれぞれ同じ話をしなければいけない
・それぞれの職種から伝えられる話が食い違っていると混乱してしまう

**高齢者が困る原因**

・一つの職種の視点だけで支援をしてしまう
・高齢者が一番必要とするときにニーズに合ったサービスを提供できない
・高齢者が私たち看護職・福祉職をどれだけ信頼しているかによって得られる情報量は異なる

これではお互いに困ってしまいます・・・

## 連携することの利点

**看護職・福祉職にとっての利点**

・高齢者が求めるさまざまなニーズを発見できる
・他職種の役割を知ることで、高齢者により合ったサービスを紹介できる
・効率よく最短のルートで高齢者のニーズを満たすことができる
・それぞれの専門性を高められる

## 高齢者にとっての利点

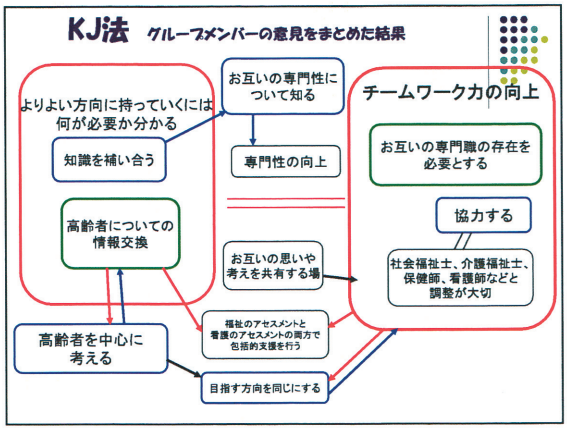
・どのサービスを受けているか明確になったことで、過不足なくニーズに沿ったサービスが受けられる

・生活すべてのニーズを満たせるので、心身ともに健康で住みやすい環境づくりができる

・さまざまな職種に同じ話をする時間がはぶけ、その分より多くのサービスを受けられる




## 7. 今後、他職種と協働で取り組む上で大切にしたいこと




## ★よりよい方向に持っていくには何が必要か分かる

●高齢者についての情報交換

■意見や考えを聞く、伝える

例)人が多くかかわるため、自分の意見をしっかり持ち、それを相手に伝える

■対象者について自分が見てきたこと、聞いてきたことを言い合う

例)専門用語を避け、お互いに分かりやすく情報交換を行う

●知識を補い合う

例)他職種の正しい役割を理解する

## ★チームワーク力の向上

●お互いの専門職の存在を必要とする

■2つの学部が歩み寄る

例)高齢者にとって福祉と看護、どちらが欠けても生活が成り立たなくなってしまうので、お互いを尊重していく

■対等な関係性

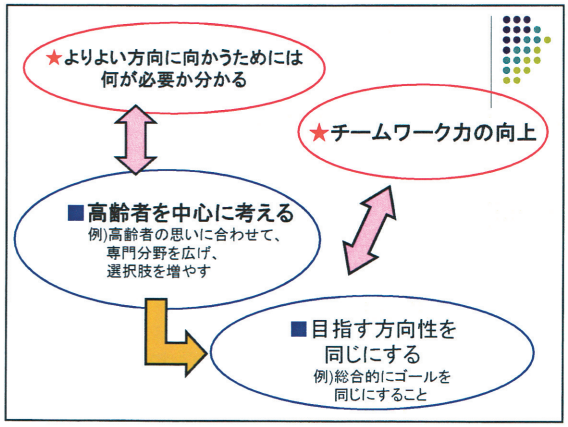
例)同じチームの一員という意識を持ち、それぞれの意見を言い合える関係を築くことを大切にする

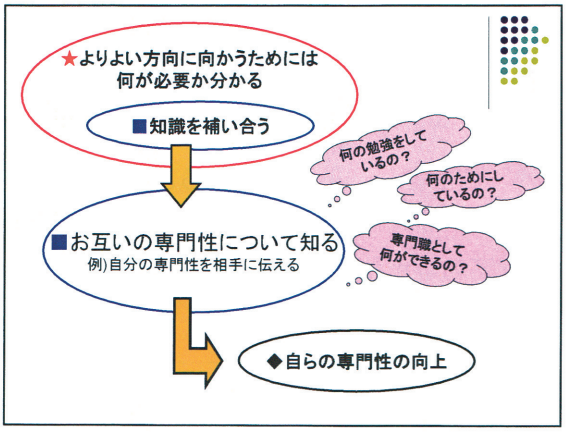
●協力する

例)一人ですべての役割を担うのではなく、協力して支援に取り組むこと

||

◆社会福祉士、介護福祉士、保健師、看護師などの調整が大切



## 今後の課題

演習後の振り返りの結果

- 自分の専門職の役割については自分の言葉で相手に伝えられる学生が多い

しかし・・・

- 相手が学んでいる専門職の役割について自信を持って自分の言葉で表現できる学生が少ない

## 今後の課題

お互いの専門性について知る

・・・何を学んでいるのか？
・・・何のために学んでいるのか？
・・・専門職として何ができるのか？
など

**自らの専門性の向上を目指していく！**

## ご静聴ありがとうございました

甲府市中央地域包括支援センター(きょうりつ)グループ

3) 甲府市西地域包括支援センター

# 高齢者を取り巻く地域の実態と連携からの学び

**西ほうかつグループ（50名）**
**看護学部31名、人間福祉学部19名**
**2010年1月5日～4月17日**

## 取り組みのプロセス

・1月5日　池田キャンパス
　・オリエンテーション
　・聞き取り調査の内容確認など

・2月6日　飯田キャンパス→各訪問地へ
　・高畑北部の高齢者への聞き取り調査
　・聞き取り内容の整理



## 合同発表会に向けての準備

4月5日、池田キャンパス

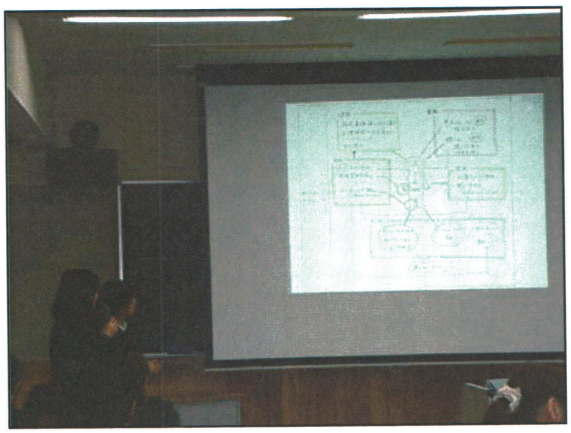
・西ほうかつエリアの聞き取り調査結果の共有
・演習の学びの振り返り
・意見交換、発表資料作り（模造紙、パワーポイント）
・グループリーダーの打ち合わせ、資料作成





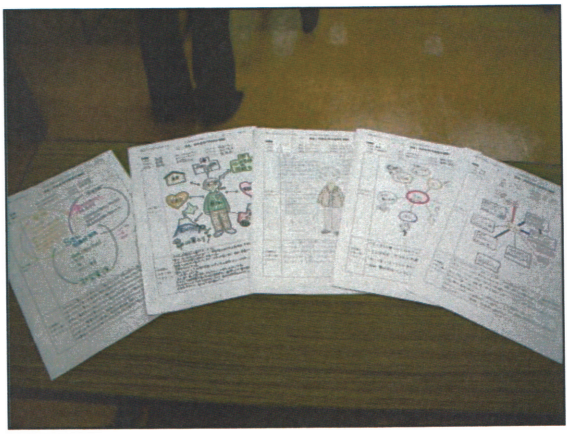












## 石田地区の特性

・人口

| | | |
|---|---|---|
| 甲府市 | 198,652人（85,187世帯） | H.22年3月現在 |
| 石田地区 | 8,461人（3,775世帯） | H.21 4月現在 |

・高齢化率

| | | | |
|---|---|---|---|
| 甲府市 | 65歳以上 | 23.2% | H.21 4月現在 |
| | 75歳以上 | 9.9% | H.21 4月現在 |
| 石田地区 | 65歳以上 | 25.7% | H.21 4月現在 |
| | 75歳以上 | 11.3% | H.21 4月現在 |

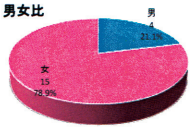


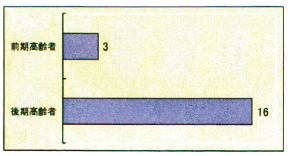


## 調査協力者の背景

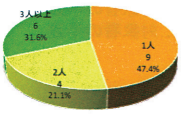
・高畑北部老人クラブ在籍者のうち本演習に協力でき同意された高齢者19名

男女比



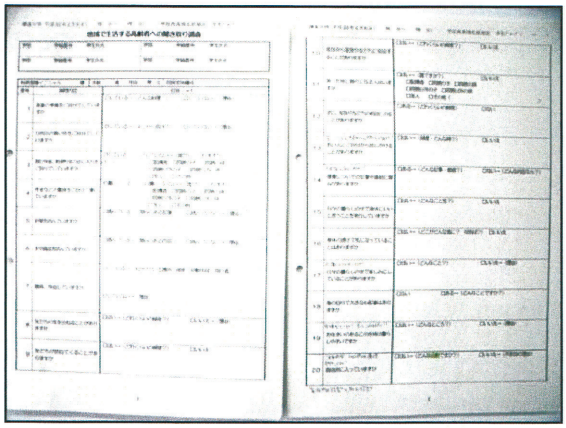




家族構成



# 調 査 項 目

・基本項目（22項目）
1.食事の準備をご自分でしていますか
2.困ったときに頼りになる人はいますか
3.地域の集まりや催しには参加していますか
etc...
・オリジナル項目（各グループ2項目）
1. 以前の職業、家族構成
2.持病の有無、病院への通院
3.趣味、生きがい、ライフヒストリー
etc...



# 調査結果の中から

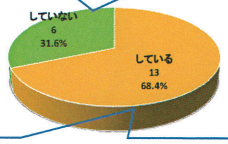
高齢者の生活・健康に焦点を当てて
考えたこと



## 日用品の買い物をご自分でしているか？

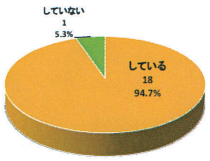
**していない**
**理由**：身体的問題（足腰が弱い）
家族・家政婦が行ってくれる
配達サービス

その他　周囲を気にして夕方に行くことが多い




**している**
**店**：オギノ・いちやま・岡島・サンドラッグ・山交・コンビニ
**手段**：徒歩・原付・自転車

## 普段、外出しているか？



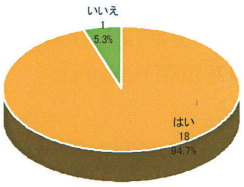

**●外出している場所**
・病院　・買い物　・散歩　・食事　・旅行
・デイサービス　・温泉　・友人宅　・犬の散歩
・習い事（大正琴、民謡など）　・お茶をしに行く
等

**●頻度**
・月1回（食事、自治会）　・年2回（旅行）
・毎日（散歩）
・週3回（デイサービス）　・2～3か月に1回（通院）
・週2回（習い事）　・月に3回（買い物）
・毎日10000歩、毎日1時間とか決めてる

**●移動手段**
・徒歩　・自転車　・車　・タクシー　・電車　・原付

**●同行者**
・妻　・夫　・友人　・兄弟　・自治会の人

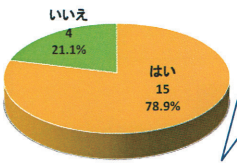
## 日々の暮らしの中で楽しみにしていることがあるか？




**●楽しみにしていること**
・晩酌　・自治会の活動　・会長としての仕事
・食事（友人・家族）　・旅行、外出　・山菜とり
・デイサービス　・話すこと　・読書　・野菜作り
・色々なことに興味を持つ　・編み物、大正琴
・老人会、地域の催し　・孫、家族が遊びに来る
・カラオケ　・孫の成長　・ボランティア　等

**●楽しみにしていることがない理由**
・動けないため

## 体の調子で気にしていることがあるか

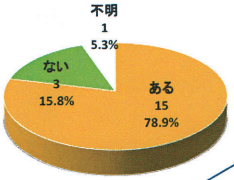



自分の体の変化について気にしている
↓
今後、対処方法についての情報交換を深める

**【内容】**
・足腰の痛み
・高血圧、高コレステロール
・物忘れ
・将来への不安

**【対処法】**
・通院、薬…対象者の半数
・回答なし…対象者の半数

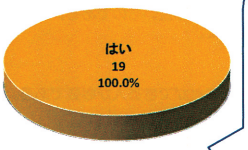
## 健康についての記事や番組への関心があるか




健康に対して関心がある
→加齢に伴い、身体面の変化や衰えを自覚している
↓
- 健康でいたいという思いが強く、自己管理しようと知識を深めている

**【内容】**
・持病に関すること
・運動・体操
・食事・栄養

## 体にいいと思うことを実行しているか

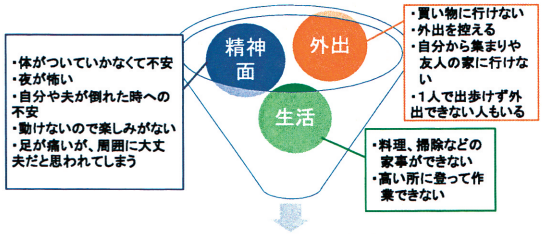



全ての人が実行している
→運動と食事管理に気を遣うと健康でいられるという考えを持っている

- 今ある機能を維持しようとしたり、衰えを予防しようとしている

【内容】
- 屋内での作業や体操、マッサージ
- 外出（散歩）
- 食事

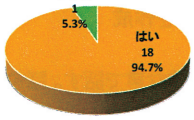
## 生活や健康に対する高齢者の思い



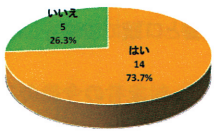

- 調査から主に精神面、外出、生活面で支障をきたしていることが分かった
- 高齢者の思いに応えるために地域で必要なことは何か

## 地域の取り組み

自治会への参加率




地域の催しに参加していますか？

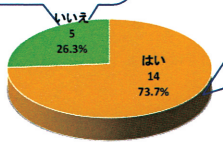



≪参加している催し≫
- 道祖神祭り、自治会活動、無尽、老人クラブ、カラオケ　etc…

≪参加しない理由≫
- 体がきつい。行くのが大変。
- 知り合いがいない。
- 参加したい気持ちはあるけれど・・・。

## 地域の暮らしやすさ

≪暮らしにくい理由≫
- 店が遠い。少ない。
- 歩行者にとって危険な道が多い。
- 高齢者の一人暮らしが多い。
- 若い世帯が多くなって、近所交流が希薄になった。




お住まいの地域は暮らしやすいですか？

≪暮らしやすい理由≫
- 住宅が多い。
- 町の中心だから。
- 近所同士が助け合っていて、つながりがある。
- 地域活動が活発。

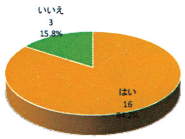
## 地域特性から見えたこと

- 移動手段の限られている高齢者にとって、店が遠いことや道が狭いことが暮らしにくさにつながっていることがわかった。

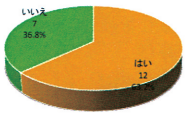
- 自治会や地域活動への参加率が高く、活動に満足している人が多い。一方で地域の活動に参加していない人がいるのも事実である。そのような人には、自治会以外に頼れる人がいることが大切なのではないか。

## 友人とのつながり

友人の訪問がある



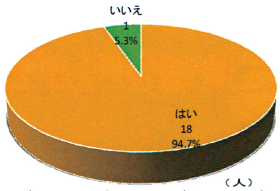

友人宅を訪問する

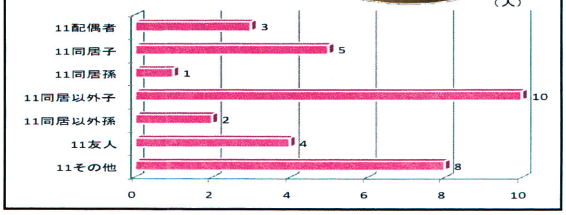



- ひとりで気軽に行ける範囲で、近所の友人同士で家を行き来している
- ひとりで動ける人のほうが友人宅を訪ねている
- 老人クラブを通した交流が盛ん
- 健康状態（足腰）が悪いと、友人宅などへ出かける機会が減る

## 頼れる人がいる

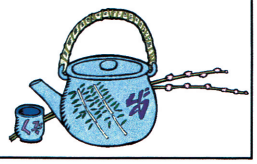
- ほぼ全員に頼れる人がいる
- 自分の子どもを頼っている人が最も多い
- 同居以外の家族や友人を頼りにしている人も多い

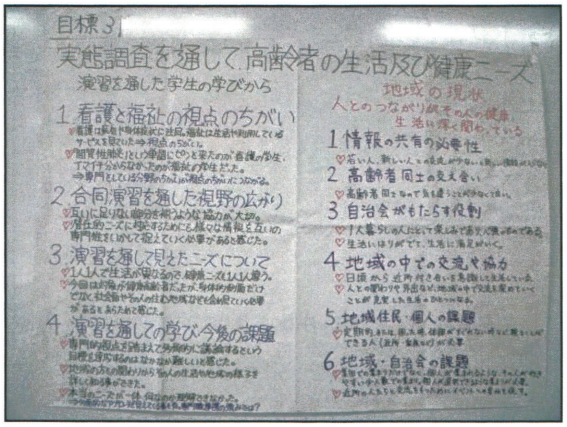



## 人とのつながりから見えたこと

- 地域の人や近所の人を頼っている人が多かったことや、近所の友人宅を訪問している人が多かったことから、家族だけでなく、近所の人とのつながりが密であると分かった。



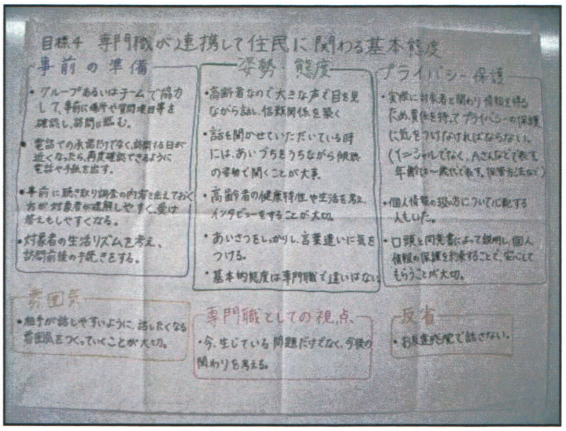



## 地域住民の生活および健康ニーズ

★自治会がもたらす役割
- 一人暮らしの人にとって楽しみであり、心強いものである。
- 生活に張りが出て、生活に満足がいく。

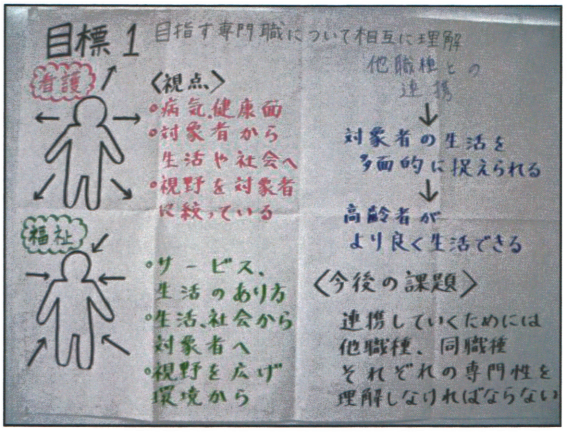
★地域住民・個人の課題
- 困ったとき、体調が悪いときに頼ることができる人が必要である。

★地域・自治会の課題
- 集団での集まりだけでなく、個人が集まれるような、その人が参加しやすい少人数での集まりが必要である。個人が選択できるような集まる機会があれば良い。
- 近所の人たちと交流を持つためのイベントへの参加を促す。




## 専門職としての住民との関わり

★聞き取り調査の事前準備
・対象者のことを配慮しながら質問を作成
★姿勢態度
・高齢者ということを考えながら大きな声で話す。話す速さを考えながら関わる
★プライバシー保護
・聞き取り調査をする際には同意書と口頭で依頼をした
★今後の課題
・専門職としての視点を持つために、対象者の今後のことも考えていく必要がある。




## 専門職の相互理解

★看護と福祉の視点の違い
・看護は病気や身体症状に注目。福祉は生活や利用しているサービスに注目
★合同演習を通した視野の広がり
・潜在的ニーズに対応するためにも、様々な情報を互いの専門性を生かして捉えていく必要がある
★演習を通して見えたニーズ
・身体的側面だけでなく、社会面や地域も含めて考えていく必要がある。
★今後の課題
・専門的視点を持って多角的に議論することは難しいと感じた。よって、今後専門性を意識して取り組んでいく。

## 私たち福祉と看護の学生が連携して行えそうなこと

★高齢者と話をするボランティアに看護の学生も参加し、一緒に活動していく

★学園祭などで地域の高齢者を歓迎し交流できるようにする



## (3) リフレクション　　（編集：山本　奈央）

### 1) 学生の評価

#### ① 評価項目別評価結果 2009 年度教育ＧＰ「学際統合型専門職連携演習」合同発表会後自己評価

| | 自己評価項目 | 全体 (%) | | | | n=156 | おおくに (%) | | | n=55 | きょうりつ (%) | | | n=51 | 甲府西 (%) | | | n=50 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | A | B | C | D | | A | B | C | D | A | B | C | D | A | B | C | D |
| 1 | **看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互に理解することができる** | 69.2 | 30.8 | 0.0 | 0.0 | | 80.0 | 20.0 | 0.0 | 0.0 | 60.8 | 39.2 | 0.0 | 0.0 | 66.0 | 34.0 | 0.0 | 0.0 |
| 1) | 自分が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について説明することができる | 70.5 | 28.2 | 0.6 | 0.0 | | 81.8 | 18.2 | 0.0 | 0.0 | 58.8 | 37.3 | 2.0 | 0.0 | 70.0 | 30.0 | 0.0 | 0.0 |
| 2) | 相手が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について自分の言葉で表現できる | 31.4 | 63.5 | 5.1 | 0.0 | | 32.7 | 63.6 | 3.6 | 0.0 | 21.6 | 70.6 | 7.8 | 0.0 | 40.0 | 56.0 | 4.0 | 0.0 |
| 3) | 互いの専門性について尊重することができる | 94.2 | 5.8 | 0.0 | 0.0 | | 98.2 | 1.8 | 0.0 | 0.0 | 92.2 | 7.8 | 0.0 | 0.0 | 92.0 | 8.0 | 0.0 | 0.0 |
| 4) | 互いの専門性を踏まえた連携の必要性について多面的に考えることができる | 82.1 | 17.9 | 0.0 | 0.0 | | 89.1 | 10.9 | 0.0 | 0.0 | 80.4 | 19.6 | 0.0 | 0.0 | 76.0 | 24.0 | 0.0 | 0.0 |
| 2 | **実態調査で関わった高齢者の暮らしと、それを支える社会資源について検討できる** | 59.0 | 41.0 | 0.0 | 0.0 | | 56.4 | 43.6 | 0.0 | 0.0 | 58.8 | 41.2 | 0.0 | 0.0 | 62.0 | 38.0 | 0.0 | 0.0 |
| 1) | 関わった高齢者個々の暮らしについて考えることができる | 87.8 | 11.5 | 0.6 | 0.0 | | 85.5 | 12.7 | 1.8 | 0.0 | 88.2 | 11.8 | 0.0 | 0.0 | 90.0 | 10.0 | 0.0 | 0.0 |
| 2) | 関わった高齢者個々の暮らしを支える社会資源について説明することができる | 26.3 | 68.6 | 5.1 | 0.0 | | 23.6 | 69.1 | 7.3 | 0.0 | 31.4 | 66.7 | 2.0 | 0.0 | 24.0 | 70.0 | 6.0 | 0.0 |
| 3) | 関わった高齢者が暮らす地域について考えることができる | 80.1 | 18.6 | 1.3 | 0.0 | | 80.0 | 16.4 | 3.6 | 0.0 | 80.4 | 19.6 | 0.0 | 0.0 | 80.0 | 20.0 | 0.0 | 0.0 |
| 4) | 関わった地域で調査した高齢者全体の生活及び健康ニーズを考えることができる | 68.6 | 31.4 | 0.0 | 0.0 | | 76.4 | 23.6 | 0.0 | 0.0 | 68.6 | 31.4 | 0.0 | 0.0 | 60.0 | 40.0 | 0.0 | 0.0 |
| 3 | **実態調査をとおして、高齢者の生活及び健康ニーズについて検討し、地域にフィードバックできる** | 51.3 | 46.8 | 1.9 | 0.0 | | 49.1 | 49.1 | 1.8 | 0.0 | 56.9 | 39.2 | 3.9 | 0.0 | 48.0 | 52.0 | 0.0 | 0.0 |
| 1) | 互いの専門的な視点を踏まえ、得られた情報を共有するとともに、多角的に議論することができる | 73.7 | 26.3 | 0.0 | 0.0 | | 78.2 | 21.8 | 0.0 | 0.0 | 78.4 | 21.6 | 0.0 | 0.0 | 64.0 | 36.0 | 0.0 | 0.0 |
| 2) | 議論の結果をもとに、客観的に分析し、課題を明らかにできる | 57.7 | 41.0 | 1.3 | 0.0 | | 61.8 | 34.5 | 3.6 | 0.0 | 51.0 | 49.0 | 0.0 | 0.0 | 60.0 | 40.0 | 0.0 | 0.0 |
| 3) | 課題に対する解決方策を専門的な視点から考えることができる | 52.6 | 44.9 | 2.6 | 0.0 | | 58.2 | 40.0 | 1.8 | 0.0 | 51.0 | 45.1 | 3.9 | 0.0 | 48.0 | 50.0 | 2.0 | 0.0 |
| 4) | 得られた結果をまとめて、関係者にわかりやすく報告することができる | 44.2 | 53.2 | 2.6 | 0.0 | | 40.0 | 58.2 | 1.8 | 0.0 | 43.1 | 52.9 | 3.9 | 0.0 | 50.0 | 48.0 | 2.0 | 0.0 |
| 4 | **専門職が連携して地域住民に関わるための基本的態度を学ぶことができる** | 87.8 | 11.5 | 0.6 | 0.0 | | 90.9 | 9.1 | 0.0 | 0.0 | 82.4 | 15.7 | 2.0 | 0.0 | 90.0 | 10.0 | 0.0 | 0.0 |
| 1) | 訪問前後の手続き（電話・礼状など）が的確に実施できる | 84.0 | 14.7 | 0.6 | 0.6 | | 80.0 | 18.2 | 1.8 | 0.0 | 80.4 | 17.6 | 0.0 | 2.0 | 92.0 | 8.0 | 0.0 | 0.0 |
| 2) | 身だしなみや言葉遣いが適切であり、相手に不快を与えないよう接することができるとともに、相手の反応を的確に捉えることができる | 87.8 | 11.5 | 0.6 | 0.0 | | 87.3 | 12.7 | 0.0 | 0.0 | 84.3 | 13.7 | 2.0 | 0.0 | 92.0 | 8.0 | 0.0 | 0.0 |
| 3) | 地域住民・専門機関従事者に感謝の意を伝えることができる | 92.9 | 7.1 | 0.0 | 0.0 | | 96.4 | 3.6 | 0.0 | 0.0 | 88.2 | 11.8 | 0.0 | 0.0 | 94.0 | 6.0 | 0.0 | 0.0 |
| 4) | 個人情報を的確に扱い、確実に保護することができる | 96.2 | 3.2 | 0.6 | 0.0 | | 98.2 | 1.8 | 0.0 | 0.0 | 94.1 | 5.9 | 0.0 | 0.0 | 96.0 | 2.0 | 2.0 | 0.0 |
| 5 | **1～4をとおして、他職種と連携する意義を考えることができる** | 79.5 | 20.5 | 0.0 | 0.0 | | 85.5 | 14.5 | 0.0 | 0.0 | 74.5 | 25.5 | 0.0 | 0.0 | 78.0 | 22.0 | 0.0 | 0.0 |
| 1) | グループワークに積極的に参加し、チームの一員としての役割を担うことができる | 70.5 | 29.5 | 0.0 | 0.0 | | 74.5 | 25.5 | 0.0 | 0.0 | 66.7 | 33.3 | 0.0 | 0.0 | 70.0 | 30.0 | 0.0 | 0.0 |
| 2) | グループメンバーの意見を傾聴し、受け止めたうえで自分の意見を述べることができる | 77.6 | 21.2 | 1.3 | 0.0 | | 80.0 | 18.2 | 1.8 | 0.0 | 72.5 | 25.5 | 2.0 | 0.0 | 80.0 | 20.0 | 0.0 | 0.0 |
| 3) | 協働する体験から得られた学びをグループ活動を通してまとめ、分かり易く発表することができる | 55.8 | 41.0 | 3.2 | 0.0 | | 54.5 | 43.6 | 1.8 | 0.0 | 56.9 | 37.3 | 5.9 | 0.0 | 56.0 | 42.0 | 2.0 | 0.0 |
| 4) | 連携して関わった一連のプロセスを振り返り評価し、今後の自己の課題を明確にできる | 71.2 | 28.8 | 0.0 | 0.0 | | 78.2 | 21.8 | 0.0 | 0.0 | 66.7 | 33.3 | 0.0 | 0.0 | 68.0 | 32.0 | 0.0 | 0.0 |

## ② 包括別評価結果

### ア） 甲府市南西地域包括支援センター

| 自己評価項目 | | おおくに（%） | | | | n=55 | 看　護（%） | | | | n=34 | 福　祉（%） | | | | n=21 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | A | B | C | D | | A | B | C | D | | A | B | C | D | |
| 1 | **看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互に理解することができる** | 80.0 | 20.0 | 0.0 | 0.0 | | 85.3 | 14.7 | 0.0 | 0.0 | | 71.4 | 28.6 | 0.0 | 0.0 | |
| 1) | 自分が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について説明することができる | 81.8 | 18.2 | 0.0 | 0.0 | | 88.2 | 11.8 | 0.0 | 0.0 | | 71.4 | 28.6 | 0.0 | 0.0 | |
| 2) | 相手が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について自分の言葉で表現できる | 32.7 | 63.6 | 3.6 | 0.0 | | 32.4 | 64.7 | 2.9 | 0.0 | | 33.3 | 61.9 | 4.8 | 0.0 | |
| 3) | 互いの専門性について尊重することができる | 98.2 | 1.8 | 0.0 | 0.0 | | 97.1 | 2.9 | 0.0 | 0.0 | | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | |
| 4) | 互いの専門性を踏まえた連携の必要性について多面的に考えることができる | 89.1 | 10.9 | 0.0 | 0.0 | | 88.2 | 11.8 | 0.0 | 0.0 | | 90.5 | 9.5 | 0.0 | 0.0 | |
| 2 | **実態調査で関わった高齢者の暮らしと、それを支える社会資源について検討できる** | 56.4 | 43.6 | 0.0 | 0.0 | | 47.1 | 52.9 | 0.0 | 0.0 | | 71.4 | 28.6 | 0.0 | 0.0 | |
| 1) | 関わった高齢者個々の暮らしについて考えることができる | 85.5 | 12.7 | 1.8 | 0.0 | | 88.2 | 8.8 | 2.9 | 0.0 | | 81.0 | 19.0 | 0.0 | 0.0 | |
| 2) | 関わった高齢者個々の暮らしを支える社会資源について説明することができる | 23.6 | 69.1 | 7.3 | 0.0 | | 11.8 | 76.5 | 11.8 | 0.0 | | 42.9 | 57.1 | 0.0 | 0.0 | |
| 3) | 関わった高齢者が暮らす地域について考えることができる | 80.0 | 16.4 | 3.6 | 0.0 | | 79.4 | 17.6 | 2.9 | 0.0 | | 81.0 | 14.3 | 4.8 | 0.0 | |
| 4) | 関わった地域で調査した高齢者全体の生活及び健康ニーズを考えることができる | 76.4 | 23.6 | 0.0 | 0.0 | | 76.5 | 23.5 | 0.0 | 0.0 | | 76.2 | 23.8 | 0.0 | 0.0 | |
| 3 | **実態調査をとおして、高齢者の生活及び健康ニーズについて検討し、地域にフィードバックできる** | 49.1 | 49.1 | 1.8 | 0.0 | | 50.0 | 50.0 | 0.0 | 0.0 | | 47.6 | 47.6 | 4.8 | 0.0 | |
| 1) | 互いの専門的な視点を踏まえ、得られた情報を共有するとともに、多角的に議論することができる | 78.2 | 21.8 | 0.0 | 0.0 | | 76.5 | 23.5 | 0.0 | 0.0 | | 81.0 | 19.0 | 0.0 | 0.0 | |
| 2) | 議論の結果をもとに、客観的に分析し、課題を明らかにできる | 61.8 | 34.5 | 3.6 | 0.0 | | 67.6 | 32.4 | 0.0 | 0.0 | | 52.4 | 38.1 | 9.5 | 0.0 | |
| 3) | 課題に対する解決方策を専門的な視点から考えることができる | 58.2 | 40.0 | 1.8 | 0.0 | | 58.8 | 41.2 | 0.0 | 0.0 | | 57.1 | 38.1 | 4.8 | 0.0 | |
| 4) | 得られた結果をまとめて、関係者にわかりやすく報告することができる | 40.0 | 58.2 | 1.8 | 0.0 | | 47.1 | 52.9 | 0.0 | 0.0 | | 28.6 | 66.7 | 4.8 | 0.0 | |
| 4 | **専門職が連携して地域住民に関わるための基本的態度を学ぶことができる** | 90.9 | 9.1 | 0.0 | 0.0 | | 94.1 | 5.9 | 0.0 | 0.0 | | 85.7 | 14.3 | 0.0 | 0.0 | |
| 1) | 訪問前後の手続き（電話・礼状など）が的確に実施できる | 80.0 | 18.2 | 1.8 | 0.0 | | 79.4 | 20.6 | 0.0 | 0.0 | | 81.0 | 14.3 | 4.8 | 0.0 | |
| 2) | 身だしなみや言葉遣いが適切であり、相手に不快を与えないよう接することができるとともに、相手の反応を的確に捉えることができる | 87.3 | 12.7 | 0.0 | 0.0 | | 94.1 | 5.9 | 0.0 | 0.0 | | 76.2 | 23.8 | 0.0 | 0.0 | |
| 3) | 地域住民・専門機関従事者に感謝の意を伝えることができる | 96.4 | 3.6 | 0.0 | 0.0 | | 94.1 | 5.9 | 0.0 | 0.0 | | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | |
| 4) | 個人情報を的確に扱い、確実に保護することができる | 98.2 | 1.8 | 0.0 | 0.0 | | 97.1 | 2.9 | 0.0 | 0.0 | | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | |
| 5 | **1～4をとおして、他職種と連携する意義を考えることができる** | 85.5 | 14.5 | 0.0 | 0.0 | | 88.2 | 11.8 | 0.0 | 0.0 | | 81.0 | 19.0 | 0.0 | 0.0 | |
| 1) | グループワークに積極的に参加し、チームの一員としての役割を担うことができる | 74.5 | 25.5 | 0.0 | 0.0 | | 85.3 | 14.7 | 0.0 | 0.0 | | 57.1 | 42.9 | 0.0 | 0.0 | |
| 2) | グループメンバーの意見を傾聴し、受け止めたうえで自分の意見を述べることができる | 80.0 | 18.2 | 1.8 | 0.0 | | 85.3 | 14.7 | 0.0 | 0.0 | | 71.4 | 23.8 | 4.8 | 0.0 | |
| 3) | 協働する体験から得られた学びをグループ活動を通してまとめ、分かり易く発表することができる | 54.5 | 43.6 | 1.8 | 0.0 | | 58.8 | 38.2 | 2.9 | 0.0 | | 47.6 | 52.4 | 0.0 | 0.0 | |
| 4) | 連携して関わった一連のプロセスを振り返り評価し、今後の自己の課題を明確にできる | 78.2 | 21.8 | 0.0 | 0.0 | | 73.5 | 26.5 | 0.0 | 0.0 | | 85.7 | 14.3 | 0.0 | 0.0 | |

## イ）甲府市中央地域包括支援センター

| | 自己評価項目 | きょうりつ (%) n=51 | | | | 看　護(%) n=34 | | | | 福　祉(%) n=21 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | A | B | C | D | A | B | C | D | A | B | C | D |
| 1 | **看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互に理解することができる** | 60.8 | 39.2 | 0.0 | 0.0 | 64.7 | 35.3 | 0.0 | 0.0 | 71.4 | 28.6 | 0.0 | 0.0 |
| 1) | 自分が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について説明することができる | 58.8 | 37.3 | 2.0 | 0.0 | 67.6 | 29.4 | 0.0 | 0.0 | 71.4 | 28.6 | 0.0 | 0.0 |
| 2) | 相手が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について自分の言葉で表現できる | 21.6 | 70.6 | 7.8 | 0.0 | 20.6 | 76.5 | 2.9 | 0.0 | 33.3 | 61.9 | 4.8 | 0.0 |
| 3) | 互いの専門性について尊重することができる | 92.2 | 7.8 | 0.0 | 0.0 | 88.2 | 11.8 | 0.0 | 0.0 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 4) | 互いの専門性を踏まえた連携の必要性について多面的に考えることができる | 80.4 | 19.6 | 0.0 | 0.0 | 76.5 | 23.5 | 0.0 | 0.0 | 90.5 | 9.5 | 0.0 | 0.0 |
| 2 | **実態調査で関わった高齢者の暮らしと、それを支える社会資源について検討できる** | 58.8 | 41.2 | 0.0 | 0.0 | 58.8 | 41.2 | 0.0 | 0.0 | 71.4 | 28.6 | 0.0 | 0.0 |
| 1) | 関わった高齢者個々の暮らしについて考えることができる | 88.2 | 11.8 | 0.0 | 0.0 | 88.2 | 11.8 | 0.0 | 0.0 | 81.0 | 19.0 | 0.0 | 0.0 |
| 2) | 関わった高齢者個々の暮らしを支える社会資源について説明することができる | 31.4 | 66.7 | 2.0 | 0.0 | 23.5 | 73.5 | 2.9 | 0.0 | 42.9 | 57.1 | 0.0 | 0.0 |
| 3) | 関わった高齢者が暮らす地域について考えることができる | 80.4 | 19.6 | 0.0 | 0.0 | 82.4 | 17.6 | 0.0 | 0.0 | 81.0 | 14.3 | 4.8 | 0.0 |
| 4) | 関わった地域で調査した高齢者全体の生活及び健康ニーズを考えることができる | 68.6 | 31.4 | 0.0 | 0.0 | 73.5 | 26.5 | 0.0 | 0.0 | 76.2 | 23.8 | 0.0 | 0.0 |
| 3 | **実態調査をとおして、高齢者の生活及び健康ニーズについて検討し、地域にフィードバックできる** | 56.9 | 39.2 | 3.9 | 0.0 | 58.8 | 38.2 | 2.9 | 0.0 | 47.6 | 47.6 | 4.8 | 0.0 |
| 1) | 互いの専門的な視点を踏まえ、得られた情報を共有するとともに、多角的に議論することができる | 78.4 | 21.6 | 0.0 | 0.0 | 82.4 | 17.6 | 0.0 | 0.0 | 81.0 | 19.0 | 0.0 | 0.0 |
| 2) | 議論の結果をもとに、客観的に分析し、課題を明らかにできる | 51.0 | 49.0 | 0.0 | 0.0 | 50.0 | 50.0 | 0.0 | 0.0 | 52.4 | 38.1 | 9.5 | 0.0 |
| 3) | 課題に対する解決方策を専門的な視点から考えることができる | 51.0 | 45.1 | 3.9 | 0.0 | 55.9 | 38.2 | 5.9 | 0.0 | 57.1 | 38.1 | 4.8 | 0.0 |
| 4) | 得られた結果をまとめて、関係者にわかりやすく報告することができる | 43.1 | 52.9 | 3.9 | 0.0 | 41.2 | 58.8 | 0.0 | 0.0 | 28.6 | 66.7 | 4.8 | 0.0 |
| 4 | **専門職が連携して地域住民に関わるための基本的態度を学ぶことができる** | 82.4 | 15.7 | 2.0 | 0.0 | 82.4 | 14.7 | 2.9 | 0.0 | 85.7 | 14.3 | 0.0 | 0.0 |
| 1) | 訪問前後の手続き（電話・礼状など）が的確に実施できる | 80.4 | 17.6 | 0.0 | 2.0 | 73.5 | 23.5 | 0.0 | 2.9 | 81.0 | 14.3 | 4.8 | 0.0 |
| 2) | 身だしなみや言葉遣いが適切であり、相手に不快を与えないよう接することができるとともに、相手の反応を的確に捉えることができる | 84.3 | 13.7 | 2.0 | 0.0 | 85.3 | 11.8 | 2.9 | 0.0 | 76.2 | 23.8 | 0.0 | 0.0 |
| 3) | 地域住民・専門機関従事者に感謝の意を伝えることができる | 88.2 | 11.8 | 0.0 | 0.0 | 85.3 | 14.7 | 0.0 | 0.0 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 4) | 個人情報を的確に扱い、確実に保護することができる | 94.1 | 5.9 | 0.0 | 0.0 | 91.2 | 8.8 | 0.0 | 0.0 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 5 | **1～4をとおして、他職種と連携する意義を考えることができる** | 74.5 | 25.5 | 0.0 | 0.0 | 67.6 | 32.4 | 0.0 | 0.0 | 81.0 | 19.0 | 0.0 | 0.0 |
| 1) | グループワークに積極的に参加し、チームの一員としての役割を担うことができる | 66.7 | 33.3 | 0.0 | 0.0 | 70.6 | 29.4 | 0.0 | 0.0 | 57.1 | 42.9 | 0.0 | 0.0 |
| 2) | グループメンバーの意見を傾聴し、受け止めたうえで自分の意見を述べることができる | 72.5 | 25.5 | 2.0 | 0.0 | 73.5 | 23.5 | 2.9 | 0.0 | 71.4 | 23.8 | 4.8 | 0.0 |
| 3) | 協働する体験から得られた学びをグループ活動を通してまとめ、分かり易く発表することができる | 56.9 | 37.3 | 5.9 | 0.0 | 52.9 | 38.2 | 8.8 | 0.0 | 47.6 | 52.4 | 0.0 | 0.0 |
| 4) | 連携して関わった一連のプロセスを振り返り評価し、今後の自己の課題を明確にできる | 66.7 | 33.3 | 0.0 | 0.0 | 64.7 | 35.3 | 0.0 | 0.0 | 85.7 | 14.3 | 0.0 | 0.0 |

## ウ）甲府市西地域包括支援センター

| | 自己評価項目 | 甲府西(%) n=50 | | | | 看　護(%) n=31 | | | | 福　祉(%) n=19 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | A | B | C | D | A | B | C | D | A | B | C | D |
| **1** | **看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互に理解することができる** | 66.0 | 34.0 | 0.0 | 0.0 | 71.0 | 29.0 | 0.0 | 0.0 | 57.9 | 42.1 | 0.0 | 0.0 |
| 1) | 自分が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について説明することができる | 70.0 | 30.0 | 0.0 | 0.0 | 83.9 | 16.1 | 0.0 | 0.0 | 47.4 | 52.6 | 0.0 | 0.0 |
| 2) | 相手が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について自分の言葉で表現できる | 40.0 | 56.0 | 4.0 | 0.0 | 41.9 | 54.8 | 3.2 | 0.0 | 36.8 | 57.9 | 5.3 | 0.0 |
| 3) | 互いの専門性について尊重することができる | 92.0 | 8.0 | 0.0 | 0.0 | 87.1 | 12.9 | 0.0 | 0.0 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
| 4) | 互いの専門性を踏まえた連携の必要性について多面的に考えることができる | 76.0 | 24.0 | 0.0 | 0.0 | 80.6 | 19.4 | 0.0 | 0.0 | 68.4 | 31.6 | 0.0 | 0.0 |
| **2** | **実態調査で関わった高齢者の暮らしと、それを支える社会資源について検討できる** | 62.0 | 38.0 | 0.0 | 0.0 | 67.7 | 32.3 | 0.0 | 0.0 | 52.6 | 47.4 | 0.0 | 0.0 |
| 1) | 関わった高齢者個々の暮らしについて考えることができる | 90.0 | 10.0 | 0.0 | 0.0 | 96.8 | 3.2 | 0.0 | 0.0 | 78.9 | 21.1 | 0.0 | 0.0 |
| 2) | 関わった高齢者個々の暮らしを支える社会資源について説明することができる | 24.0 | 70.0 | 6.0 | 0.0 | 16.1 | 77.4 | 6.5 | 0.0 | 36.8 | 57.9 | 5.3 | 0.0 |
| 3) | 関わった高齢者が暮らす地域について考えることができる | 80.0 | 20.0 | 0.0 | 0.0 | 83.9 | 16.1 | 0.0 | 0.0 | 73.7 | 26.3 | 0.0 | 0.0 |
| 4) | 関わった地域で調査した高齢者全体の生活及び健康ニーズを考えることができる | 60.0 | 40.0 | 0.0 | 0.0 | 71.0 | 29.0 | 0.0 | 0.0 | 42.1 | 57.9 | 0.0 | 0.0 |
| **3** | **実態調査をとおして、高齢者の生活及び健康ニーズについて検討し、地域にフィードバックできる** | 48.0 | 52.0 | 0.0 | 0.0 | 54.8 | 45.2 | 0.0 | 0.0 | 36.8 | 63.2 | 0.0 | 0.0 |
| 1) | 互いの専門的な視点を踏まえ、得られた情報を共有するとともに、多角的に議論することができる | 64.0 | 36.0 | 0.0 | 0.0 | 71.0 | 29.0 | 0.0 | 0.0 | 52.6 | 47.4 | 0.0 | 0.0 |
| 2) | 議論の結果をもとに、客観的に分析し、課題を明らかにできる | 60.0 | 40.0 | 0.0 | 0.0 | 64.5 | 35.5 | 0.0 | 0.0 | 52.6 | 47.4 | 0.0 | 0.0 |
| 3) | 課題に対する解決方策を専門的な視点から考えることができる | 48.0 | 50.0 | 2.0 | 0.0 | 54.8 | 45.2 | 0.0 | 0.0 | 36.8 | 57.9 | 5.3 | 0.0 |
| 4) | 得られた結果をまとめて、関係者にわかりやすく報告することができる | 50.0 | 48.0 | 2.0 | 0.0 | 61.3 | 38.7 | 0.0 | 0.0 | 31.6 | 63.2 | 5.3 | 0.0 |
| **4** | **専門職が連携して地域住民に関わるための基本的態度を学ぶことができる** | 90.0 | 10.0 | 0.0 | 0.0 | 93.5 | 6.5 | 0.0 | 0.0 | 84.2 | 15.8 | 0.0 | 0.0 |
| 1) | 訪問前後の手続き（電話・礼状など）が的確に実施できる | 92.0 | 8.0 | 0.0 | 0.0 | 96.8 | 3.2 | 0.0 | 0.0 | 84.2 | 15.8 | 0.0 | 0.0 |
| 2) | 身だしなみや言葉遣いが適切であり、相手に不快を与えないよう接することができるとともに、相手の反応を的確に捉えることができる | 92.0 | 8.0 | 0.0 | 0.0 | 96.8 | 3.2 | 0.0 | 0.0 | 84.2 | 15.8 | 0.0 | 0.0 |
| 3) | 地域住民・専門機関従事者に感謝の意を伝えることができる | 94.0 | 6.0 | 0.0 | 0.0 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 84.2 | 15.8 | 0.0 | 0.0 |
| 4) | 個人情報を的確に扱い、確実に保護することができる | 96.0 | 2.0 | 2.0 | 0.0 | 100.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 89.5 | 5.3 | 5.3 | 0.0 |
| **5** | **1～4をとおして、他職種と連携する意義を考えることができる** | 78.0 | 22.0 | 0.0 | 0.0 | 83.9 | 16.1 | 0.0 | 0.0 | 68.4 | 31.6 | 0.0 | 0.0 |
| 1) | グループワークに積極的に参加し、チームの一員としての役割を担うことができる | 70.0 | 30.0 | 0.0 | 0.0 | 90.3 | 9.7 | 0.0 | 0.0 | 36.8 | 63.2 | 0.0 | 0.0 |
| 2) | グループメンバーの意見を傾聴し、受け止めたうえで自分の意見を述べることができる | 80.0 | 20.0 | 0.0 | 0.0 | 83.9 | 16.1 | 0.0 | 0.0 | 73.7 | 26.3 | 0.0 | 0.0 |
| 3) | 協働する体験から得られた学びをグループ活動を通してまとめ、分かり易く発表することができる | 56.0 | 42.0 | 2.0 | 0.0 | 51.6 | 45.2 | 3.2 | 0.0 | 63.2 | 36.8 | 0.0 | 0.0 |
| 4) | 連携して関わった一連のプロセスを振り返り評価し、今後の自己の課題を明確にできる | 68.0 | 32.0 | 0.0 | 0.0 | 71.0 | 29.0 | 0.0 | 0.0 | 63.2 | 36.8 | 0.0 | 0.0 |

### ③ 学生が演習の中で感じたこと、考えたこと、学んだこと（抜粋）

#### ｱ）甲府市南西地域包括支援センター

[ｱ-1]今まではグループごとに分かれて作業を続けていたので、今日は他のグループの発表を聞くことができ、とてもいい機会になった。これまで私達はグループの中だけで看護学部と福祉学部の共通点や視点の違い、専門性などを考えてきたが、今回他のグループの発表を聞いたことで、グループごとの視点の違いに気付いた。これは当然のことかもしれないが、同じ看護学部と福祉学部の連携であっても、関わる一人ひとりによっても様々な視点があることを実感することができた。だから私は今後よりよい他職種との連携が行えるようになるために、まずは自分の持つ専門性を高め視野を広げていきたいと思った。教育ＧＰを行っていくうえでグループをまとめてくれたリーダーさん方や先生方、協力していただいた地域の方々に感謝したいと思う。

[ｱ-2]他の地域の発表を聞くことによって、改めて高齢化率、特性の違いがあるため、必要な援助が違うということを実感した。実際の高齢者の話にあったように、高齢者の方は若い人たちと話す機会がないと感じているため、今回のような体験の中での話はとても貴重な情報であると感じるため、情報を大切にして生かしていくことが必要だと感じた。また、疾病の予防、生活環境の改善など、お互いの専門分野を生かして協働し、高齢者を中心に「より良い生活を送る」ことを目標にしてさまざまな方向からアプローチできると再確認した。自分自身の専門性を磨くことによって、他職種と連携した時により専門性を発揮できると感じたので、これからもっと自分自身の専門性を磨いていけるように努力したいと思う。

[ｱ-3]高齢者の家に訪問して以来、個別グループで訪問内容の結果をまとめてきて、自分たちの調査結果がどうなっているのか全体的にはどうなっているのか分からなかった。しかし、今日のリハーサルや発表会を通して、はじめは看護学部、福祉学部でそれほどお互いを理解しあって協働するというのは見られなかったが、最終的には、みんなが協力して考えたりまとめたりした結果が分かりやすくまとめることができ、地域に住む高齢者にとってよりよい生活のために何が必要なのか考えられていたのでよかった。また、この演習を通して、専門職連携における課題や必要性を十分理解できた。他の地域の発表を聞いて、地域それぞれに特色があり、その地域の特色にあった専門職の関わり方や、連携の必要があるのだと思った。

[ｱ-4]今回演習をやってみて、自分たちで結果を考察し、その中で昨年度の先輩たちの結果と比較した部分もあった。他学部との連携について学習するのはもちろん、せっかくこのような機会を学生として与えてもらっているので学生なりに協力してもらった地域の人たちへ返していくことが大切だと思った。先輩たちの結果も用いながら、継続的に分析していくのが必要であるし、違いがみられた場合にはおもしろいなと感じた。訪問した地域の人は私たちの訪問をとても楽しみにしてくれていたし、若い人と交流できてうれしいといってくれた。学生として、高齢者の自宅を訪問し話をきかせてもらうことで、お互いによい経験ができているのだと感じた。今回の連携で福祉の学生はどのような視点で捉えているのかなど自分とは違う面、共通点も明らかにすることができ、連携の大切さを学ぶことができた。短期間で大変であったがとても深い学びができて良かった。

[ｱ-5]今まで長い間福祉学部の人と一緒に連携について学んできて、今回の授業で福祉学部のことについて新たな発見が多かったし、自分たちの看護の専門性についても考えさせられることが多かった。今回学んで終わりではなく、今回の反省を今後も解決できるようにしていきたいし、今回の学びを今後にも生かしていきたいと思った。今回の連携で地域の人も、思った以上に喜んでくれたことは演習を行って良かったと感じた。

[ア-6]今回の発表は、今までやってきた演習の成果を発揮するものであったと思う。時間をかけて、分析・まとめを行ったものを２０分に集約してしまうとあっという間であったけれど、みんなが力を合わせて協働できた証であると感じた。また、他の包括センターのグループの発表を聞いてみてそれぞれの地域の特徴を踏まえた考察となっていて、地域を理解しよう、できることは何かという思いが強いと感じて、人々のことを真剣に考えられていた。このことから、この演習では「私たちは専門職になる」という意識の向上にもつながっているのではないかと思った。他のグループの発表もとても興味深くて、よいまとめの発表だった。

[ア-7]インタビューした内容や学生全員の意見をまとめ、他者に発表し伝えることがとても難しく、大変なことだと知った。短時間で伝えたいことを発表することは、今後就職してからも“健康教育”などの機会でも必要となると思うので、とても勉強になった。発表内容では、どの地区でも看護と福祉の視点の違いの検討が同じような結果となっていたので、専門性というものが実際に明らかとなっていることを実感できた。おおくにでは男性へのインタビューが多かったが、女性へのインタビューが多かった地区もあったので、男性と女性の比較もしてみたいと思った。おそらく違いが見られると思うので、介入の方法も異なってくるのではないかと思うので、地区ごとの結果の比較も面白そうだと感じた。

[ア-8]午前中には最終のGWを行ったが、改めてGWの必要性と困難さを感じた。ＧＰが始まって今回まで、専門職を目指す学生として他学部との「連携」を図ってきたが、私たち学生が、現在の知識ではあるものの専門職に通じた視点で、それぞれが協調性を持ちながら多くの学生と話を持つこと、また一つの目標へ向かって何かに取り組むということは、互いを理解して共に協働していかなければ不可能なものなのだと身を持って感じられたように思う。また、専門職の「卵」である私たちですら、専門職間の「連携」の在り方に困難性を感じたため、今後専門職として自らの分野を極めていく中での専門職同士の関わりや連携では、自らの視点に偏ったものの見方をしないように互いに尊重し合う姿勢を心がける必要性を感じた。各地域のグループ発表では、発表の仕方やまとめかた、分析方法など多種多様で、ひとつのことに取り組むのにも、様々なものの見方があるのだと実感し、常に対象者に明確にかつ端的に伝えられる方法を考えながら取り組むべきであるとも感じた。当たり前であるように思うけれど、今回地域に分かれた発表で他のグループのまとめ方を見て、改めて感じたことなので、心に留めながら今後専門職として誠実にありたいと思った。

[ア-9]去年に４年生の発表を聞いてから、本日の発表日までの教育ＧＰの活動がまとめられて達成感を得られました。人間福祉学部の学生と協働し、１ つの目標に向かって行動できたと思います。また、他職種の専門性と自分が学んでいる専門性を理解することができました。さらに、他のグループの発表を聞いて、地域によってニーズが異なるし、解決策も様々考えられると学びました。この演習を通して、専門職が連携していくことの大変さと大切さを学んだので、実際に現場に出てからも、この経験を活かしていきたいです。

[ア-10]今回、合同発表会の資料やパワーポイントを作成して、本当に大変でした。しかし、福祉の学生と看護の学生が協力して意見を出し合えば、とてもいいものが作れるということがわかった。実際に準備をしているときは、大変で投げ出したくなったけど、今、発表が終わってとても達成感があり、連携してひとつのものに仕上げられたことがとてもうれしいです。また、自分たちが地域で調査してきたことが地域のみなさんや地域包括センターのみなさんにわかってもらえるように発表できたので本当に教育ＧＰの活動に参加することができてよかったと考えました。来年以降もこのプロジェクトが行われると思うので、とても活動内容や結果に興味がわくものだなと思った。

[ア-11]今まで０地域の老人クラブの方の健康ニーズという面を捉えてきていたが、合同発表会を

通じて、他の地域の実態や課題を知ったことで住んでいる人などの地域特性よって健康ニーズや老人クラブの活動が少し異なっているということが分かった。地域住民の生活や健康ニーズを知るためにはまず、その地域の実態をよく調べることが重要であるということが学べた。また、連携においては看護・福祉の専門性を効果的に活かせるようにお互いの意見に耳を傾かることが必要であると感じた。演習の中で福祉の人から対象者を看るときの新しい視点に気づかされた。現場に出たとき他職種間で連携を取るのは難しいことではあると思うが、教育ＧＰを通して“連携”することにより私たち及び対象者にもプラスな効果が期待できると知ったのでこのことを忘れないようにしたいと思う。

[ｱ-12]今回、チームリーダー、また発表者として演習を行ってきたが、みんなに自分の言いたいことを的確に伝えること、相手に自分の思いが伝わることというのは、難しいことなんだなと感じた。その中で、地域に訪問して高齢者と関わって、感じたこと学んだことを、看護学部・人間福祉学部で話し合い、また経験を積んでいる先生方と話し合うことによって、自分だけでは気付くことが出来なかったことや、いろんな新しい見方で地域と向き合うことが出来た演習だったと思う。また、地域での発表でも高齢者の方から温かい言葉をかけていただき、改めて地域のために、高齢者のためにこれから専門職として何かしていきたい、何が出来るか考えていかなければいけないんだと、気付くことが出来た。学びの多い演習だったと思う。

[ｱ-13]今日は、他の地域の発表を聞くことができた。自分の地域との発表とは違い、連携することの意義や、地域への支援の具体的な案を聞いて、自分達と他の考えについて考えることが出来た。今日の発表を聞いていて、一人では気づかなかったことが多くの人の考えが集まれば、いろいろな視点でみることできることを改めて感じた。演習を通して、他の職種の考えや連携することの大切さを学ぶことが出来た。また自分の考えを相手に伝えようとすること、理解しあうことが大切であると学んだ。今回学んだことを臨床に出てからも生かしていきたいと思った。

[ｱ-14]教育ＧＰが始まったばかりのころは、短期間で学べることがあるか不安もありましたが、終わってみると他学部の学生と何かを成し遂げる、作り上げるということ自体も良い経験になりました。地域に出て、そこで暮らす方々からも、支援の必要性やそのための他職種間の連携の必要性を感じました。また、それ以上に対象者と接するときや他職種との連携の際には、人と人との関わりであるということを常に考えていなければならないと感じました。相手を大切にして、理解しようとする気持ちから、その人のニーズや考え、思いに気付くことができるのだと思います。また、私自身他職種間の連携の一員となれるよう、これからもコミュニケーション能力の向上に努めていきたいです。

[ｱ-15]今回発表の準備を進めたりする上で、福祉の人たちと時間を調整して資料を作るなど、知識などでの連携だけでなく自分たちの都合だけではなく、時間を合わせ場所を設定するなどあらゆる面で連携に必要なことがあるのだとわかった。また、他のグループの発表を聞き同じ高齢者でも住んでいる環境や年代などに差があり、地域の特性や個々の特性をしっかりとアセスメントしていく必要があると思った。そして、看護だけでの視点だけでなく福祉の視点を知ることができ、それにより良いケアにつながるのだと思った。視点に偏りがあるのは悪いというのではなく、自分たちに専門性が身についてきたというのにも気づけてよかった。

[ｱ-16]今回のＧＰで私は、他職種連携の大切はもちろんですが、それ以前に、人と人とのかかわりを大切にしたいと思いました。それは、専門職それぞれの間、対象者と専門職の間など様々だと思いますが、そういった関係を大切にし、尊重しあうことでいいケアが提供できるのだと思いました。だから、専門性を意識して関わるのはもちろんですが、専門性だからといって役割化するのではなく、他職種の視点を自分のものにしていけば、よりいいと思いました。ほか

の地域の発表を聞いていると、看護師は病的なこと、福祉は生活の事を主にみていると言っていましたが、私は今までの実習で生活と切り離して対象者のことを考えたことはありませんでした。看護職は、関わるうえで、退院に向けてあっても、在宅看護であっても、その人の病気だけを見て接しているわけではないと思います。看護は福祉の人の視点も、含んでもっていると思いました。もし、持っていないのならば、つけていかなければならないと思いました。

**ｲ）甲府市中央地域包括支援センター**

[ｲ-1]教育ＧＰの最初の頃は、あまり前向きに取り組めなかったけど福祉の学生と一緒に活動して色々考えたり話し合ったりして学ぶことも多かったのでやってきて良かったなと思った。地域の方々や、地域包括センターの方々などのおかげで良い勉強ができたことに感謝して教育ＧＰの活動が終わっても、今回学んだことを活かして今までよりも広く視野を持って患者さんと関わったり、自分の専門性の向上のために学びを深めていこうと思う。

[ｲ-2]教育ＧＰの演習を通して、専門職同士の連携の大切さを学びました。今まで、連携は大切だということはわかっていたけれど、教育ＧＰの演習を通して連携がどうして必要なのかを自分たちなりに考えられました。どうしたらお互いが理解し合えるのか、相手の専門性を尊重するとはどういうことなのか、他職種との連携でさまざまな視点から対象者への支援を考えられることなど、多くのことを学べました。

[ｲ-3]看護と社会福祉のお互いの違いがわかっただけではなく、協働していく上で食い違う点などを意見しあえたことでこれから実際に社会人としてかかわっていくうえでとても勉強になった。

[ｲ-4]私たちが学んだことを、相手にわかりやすくまとめて発表することがとても難しかった。日本語とか文章の構成とか相手がわかりやすく理解できるための表現の仕方について、グループでの話し合いが多かったり、先生たちに指摘されたりとグループ内でたくさん悩んだ。でも、きょうりつグループでの発表の場が多かったのでたくさんの助言をもらえてよかった。そのおかげで、本日の発表がよりよくできたのがとてもうれしかった。

[ｲ-5]初めて他学部とのグループワークを行ったことで、これまでは気付いていなかった看護学部としての思考の傾向を知ることが出来た。また、福祉学部の学生の視点は私にはなかったものばかりだったので、多くのことを学べた。

[ｲ-6]他の地区の発表を聞いていても、福祉学部と看護学部の学生が協同して演習に臨んだことでその地区や住民を多面的に捉えられていたように思う。就職した後も、今回学んだ他職種との連携をする意味と利点を忘れずにいたいと思った。

[ｲ-7]演習をし、自分たちが訪問した地域について様々な考察をし、グループメンバーと議論し合う中で、新たな発見をすることができたり、今までになかった視点で考えられるようになったりと得るものはたくさんありました。福祉の学生と協働して何かに取り組むということは今までなかったので、連絡の調整や話し合いの機会の確保に戸惑うことも何度かありましたが、とても楽しく活動することができました。今回は発表者としての役割も果たしましたが、どうしたら発表を聞いてくれている人に私たちの言いたいことが伝わるのかなど、様々なことをグループメンバーと共に考え協力して一つの目標を達成できたことで、とても充実した活動ができたと思っています。

[ｲ-8]今回の演習により、看護だけではなく様々な職種との連携が重要であるが、とても難しいと感じた。自分の専門職については伝えられても、相手の専門職を自分の言葉で説明できるほどに理解するには、もっと時間をかけてお互いの仕事を知り、コミュニケーションを図る必要があると感じた。専門職として自信をもって取り組むため、互いに腑に落ちない点もあり、話し合いでもまとまらないなどあった。しかし、今後実際に社会に出て、連携を図らなければならない場面で今回の学びを生かしていけるのだと思った。

[ｲ-9]実態調査では、高齢者の方にきちんと連絡が取れなかったため、アポイントメントの必要性を強く感じた。しかし、グループの中で出た情報を、専門職の視点としてアセスメントし、地域に暮らす高齢者の方にそった検討が行えた。成果報告に向けても、お互いの意見を出し合い行えた。今回は、他学部とのグループワークで、スケジュールを合わせたりなど大変なことが多かったが、互いによい学びができたと思う。

[ｲ-10]自分のグループは看護と福祉の共通点についてまとめたのですが、発表当日にリハーサルをやってみて自分のグループではできたと思っていたのですが、色々教えてもらう部分があり同じ共立グループ内でも新たに発見があり、学ぶことができました。本番では成果がどのグループも出ていたと思いましたので、専門職の一員になれた気分になりました。これから看護と福祉は連携していろいろな場で活躍できればと思いました。また、ただこうなればいいという理想だけに終わらせずにこれからも継続していけ、実際に町が変化していければいいと思いました。

**ｳ) 甲府市西地域包括支援センター**

[ｳ-1]発表内容をみて、改めて自分たちの調査に行った地域についての特性などを理解することができた。また、他の地域の発表をみて、同じ目的をもって関わりをもっていても、地域や関わる人などが異なると、視点や着目点なども異なってきていて、とてもおもしろいと感じた。それぞれのグループの中でででてきた、自分たちにできることというのをもう一度考えて、自分のできることを行い、地域に貢献できるようになれたらいいと考えた。福祉の学生さんとの関わりを持てたことで、今までは知らなかった福祉の学習内容、福祉の視点から見た地域や高齢者などの捉え方を感じることができた。そこで、今まで看護学部の同じ学年とばかり授業を受け、専門知識を主に学んできた中での自分の価値観の偏りを実感した。このことを忘れずに他職種や他の人の考えを尊重できる専門職になりたいと考えた。

[ｳ-2]今回で教育ＧＰが最後となったが、長いようであっという間だった。最初は何をしたらよいのか分からず、戸惑ったが、回数を重ねていくにつれて、地域の特性や健康ニーズ、専門職が連携する意味などが見えたり分かったりして、最後には、もっと議論して深めていきたいと思うようになった。短い期間だったが、とても貴重な演習ができた。今回の演習を忘れずに就職してからも活かしていきたい。

[ｳ-3]発表会で他の演習グループの発表を聴き、自分たちのグループでの演習では明らかにならなかったことや共通点があり、学びが深まった。看護は対象を見る視点が狭く、福祉は全体を見ることができているという発表があった。だが、自分は対象者の全体像を捉えようと関わっているつもりだったので、自分にそういう傾向があることを初めて考えさせられた。

[ｳ-4]3 グループの発表を聞いてみて、地域によって生活の特徴というものがそれぞれにあり、それは実際に自分で足を運んでみて見たり聞いたりしないとわからないものだと感じた。どのグループも同じ内容で質問しているのに見る視点も発表の仕方も違っていて聞いていて興味がもてた。他の専門職との連携は学生のうちはなかなかできないものであるから、専門性の理解、連携の重要性・難しさなどを感じる良い機会であった。

[ｳ-5]今日は今までの総まとめとなる専門職連携演習合同発表会を行い、Ｎ以外の地区）を調べていた学生の発表を聞くことができ、各グループ様々な視点で調査の考察を行っていてとても興味深かった。私たちとはまた違う調査方法や、考察、まとめ方がされており、パワーポイントもわかりやすいようにそれぞれ工夫がされていて素晴らしかった。今日は他グループの発表を聞くことを通して今までのまとめを行うことができ、あらためて「看護」と「福祉」の２つの専門職の特徴を考えることができた。また、対象を全人的にとらえるためにも専門性を活かした連携は大切であると実感することもできた。この教育ＧＰでは他学部の学生同士が協力し合

いながら演習を行ってきたが、看護学部の学生も人間福祉学部の学生もそれぞれ3年間自分たちの専門的な学習をしてきたからこそ互いに気付けるものが多くあり、勉強になったのだと感じる。看護と福祉が協力しながら“地域の高齢者の方々にできることは何か”をすごく考えさせられた演習であったし、専門職としてこれから働くためにも必要な“他職種の理解を深める”ということもできた演習であった。充実した楽しい演習であるとともに学ぶことも多かった演習だったと思う。

[ｳ-6]今日は今までの演習のまとめを行ったけれど、それぞれの演習場所によって発表の内容が異なっていて、同じ演習をしたのにかかわらずさらに色々なことを学べたと思いました。私たちの演習場所も看護と福祉の視点の違いについて述べていたけれど、きょうりつはより詳しく丁寧にまとめあげていてすごいと思いました。私たちは自分たちの演習でのまとめを発表する一方で、3 年生に対してより分かりやすく教育ＧＰの紹介ができたのじゃないかと思いました。去年、私たちが4年生の発表を聞いたときにいまひとつＧＰの活動内容をイメージすることができなかったので、その点をうまく改善できたのではないかと思いました。今回教育ＧＰという場を通して、福祉学部と共同に学習して他職種の理解と連携の大切さを学ぶことができました。ただ、合同演習ということで人数が多くなり、結局一人一人に作業が分担されるというよりはリーダーに負担が集中しすぎてしまったように感じます。せっかくの共同作業なのでもっとみんなに連絡がいき時間を可能な限り合わせていっしょに作業ができるような工夫を来年からはする必要があると思います。

[ｳ-7]今回、長い時間をかけて他職種の学部とかかわる機会が多く、他職種について学ぶことも多く、普段では知ることのできないことをたくさん学ぶことができたと思う。他のグループの発表を聞くことで、各地域のことも知れたし、また違った視点で地域や高齢者のことをとらえることもできたと思う。今回ＧＰを通して、今後就職をしていく上で役に立つことを学べたと思う。

[ｳ-8]今回、3か所の地域の発表を聞き、それぞれ地域の特徴を捉え限られた時間の中でうまくまとめられていたと思った。また、同じ山梨県であってもその地域の特性や、そこで暮らす年齢層の違いなどから、大きく生活感が変わってくるのが分かった。私は発表の準備も当日の発表も担当していなかったが、福祉の学生といい関係を作りながら演習ができた。そして、福祉の学生と看護の学生の視点の違いも知ることができ、一人の対象者を多面的に捉える必要性と大切さを学んだ。この演習を通して、これから看護職として臨床や地域に出るためのステップを踏めたと思う。短い時間だったがとてもいい勉強になった。

[ｳ-9]N以外の地域の発表を聞いて、Nとは違う視点で地域や福祉との連携の必要性を発表していて勉強になった。高齢者と実際に関わったのは1回だけだが、そこからわかる地域の特性や健康ニーズは多いと感じた。他のグループの発表で、地域の特性から、対処方法として様々な提案をしていて、よく地域を調べてその地域にあった対処方法を考えていると感じ、参考になった。看護と福祉の連携についてはどのグループも協働することが大切だと言っており、お互いの不足している知識や技術の共有をし合うことが大切だと感じた。お互いの意見が合わなくて対立する場面もあるかもしれないが、地域の人々を中心として、何が一番地域に暮らす人々にとって必要なのかを話し合うことが重要だと思った。ＧＰを通して、初めて他職種と関わってみて、専門性や連携の必要性について深く考えることが出来た。今回学んだことを今後活かしていきたい。

[ｳ-10]今日の発表では、他の地区の報告を聞くことができ、自分が気づいていなかった部分や考察が不足していた部分にも気づくことができた。しかしながら、教育ＧＰの取り組みは他職種の連携について考えることはもちろん大切であるが、それはあくまで自分たちの課題であり、

考える主体となるべきは地域に住む高齢者であることは忘れてはいけない視点であると感じた。他職種と連携することは、互いの専門性を理解しなくてはならないが、自分たちの専門性でさえも4年間という時間をかけて身につけるものなのに本当に大変なことだと思った。しかし、連携は不可欠なものであるため、努力していかなければいけない自分の課題であると考える。

2）**地域参加者と本学教員コメント**　（編集：柳田　正明）

以下、逐語記録をもとに編集者が要点を落とすことのないよう配慮しつつ書き下ろした。

**① 地域包括支援センターA氏**

地区の高齢者学級に大学教員と学生とで同様の発表をした際、参加者は非常に興味を持って聞いていた。また、若い人たちが自分たち年配の、高齢者のサポートをしてくれるのは非常に心強いのだというような意見も聞かれた。

包括支援センターは今年で５年目になり、地域でも地区の把握ということが、課題となっている。地域の力を知ったり、地域の実情を知ったりということが、まず包括支援センターの業務の基盤となっているが、そこがうまくいっていない一面もあり、課題として考えていた。

また、地域の中で力を持っている人たちが大勢いらっしゃると思うが、そういう方たちの力をさらに向上していただくような支援も包括支援センターとしては必要ではないかと考えてみましたところ、それをいざ、どのようにやっていったらよいのかというのも課題ではあった。

そのような状況下、平成21年度のＧＰの対象地域として選ばれ、老人クラブの実情を知るというような目的で質問項目を考える際に、老人クラブの活動の場所、メンバーの方が老人クラブに対してどのような要望をもっているかというようなことを聞いてほしいとの要望を取り入れて頂いて質問項目が作成された。今回まとめた内容を聞きして、感じたこととしては２０年度の要支援の方の調査と２１年度の老人クラブに参加している方との調査とで、老研式の項目でも差があるということである。介護予防の視点としても老人クラブを地域で活発にされていることは、非常に有効であると考えられた。その根拠として非常に重要なデータが得られたと思っている。そしてそれを今後包括としてもどのように生かすかということについては、また持ち帰って課題として考えたいと思う。

地区は２０か所自治会があり、１０個の老人クラブがある。その中でも活発に月に１回程度集まっている老人クラブもある。本当に年２回、３回ぐらい、集まる老人クラブもあるので、差が出てしまうことに疑問をもっていたが、発表の中にもあったように他の老人クラブがどんな取組をしているかということを知ったことで、それを参考にしていただくということが有効だと思った。その面では、包括でも取組んでいけたらなと思う。例えば、老人クラブの取材をして、ある老人クラブではこんな取組をしているというようなものをつくって、他の老人クラブの方にも見て頂くとか、地域の方にも見て頂くとか、そのようなことができれば、よいのではないかなというように考えた。また、包括としても持ち帰って課題として取組みたいと思うが、甲府市であったり、大学の力も借りて、そんなような取組が出来ればよいと思った。

**② 地域包括支援センターB氏**

プレゼンテーション能力も含めて、すばらしい報告だったと評価する。協働という文字を協力の協に働くという文字をきちんと選んだというところに、まずそこから感動した。

地区をこのようにも分析したことに感謝したい。今後の地区の街づくりに地域と一緒に、その報告書もいただきながら街づくりの課題を進めていきたい。一方、その街づくりの提案されたその中身が本当にそれぞれの職種の専門性がしっかり活かされていたまとめであったか否か。そこに気づいるかどうかは分からない。やはり地域をしっかり組織化していくための何か。巡回や買物の際立ち寄れる広場をつくりそこに一番ニーズのある健康や介護のこと、そこに看護系の視点

を入れて、相談活動を行って、コミュニティを広げていく、街を活性化していく。これって福祉と保健の総合的な視点がなければ提案できないネットワークの提案だと思う。恐らくそこまで考えていく中でそれぞれの特徴、意見を言い合いながらつくり上げたのだろうとの苦労が、過程で見ることができた。すばらしいと評価する。

それぞれの専門性のことを、それぞれに悩みながら出し会って、まとめていったのだと思う。そもそも一人の人間なのだから、それをそれぞれの専門で分け、考察するということは難しいかと思う。だが、学問、専門、例えば八百屋、魚屋、全然違うのだが、我々は魚と野菜を自分で選んで商品は買っているが、病気や障がいを持ってしまったり、健康に生きていくための支援という場面では様々な職種が関わっているわけである。セラピストも含めて、リハビリの人も、医者も薬剤師も含めて、それぞれの専門性をすごく深めて、高めて、一緒に重なり合いながら、その人一人を支援していくとういことが、求められているということを仕事をしながら感じている。私はソーシャルワーカーだが、新人のソーシャルワーカーの時代に重責の喘息の発作、死も直面してしまうような発作を繰り返しくる高齢者の入院の場面に立ち会った。どうしてこのように頻繁にひどい発作を起こすのだろう、薬も出してるし、医者もどんどん重い薬に変えていくわけである。それで看護婦と訪問をした。そうしたら、蒲団屋を営み、もう７０歳過ぎているので、蒲団工場の片隅のお部屋に間借りをしていた。もう、高齢になって働けなくなったが、会社の社長さんが追い出すわけにもいかず、そこで寝泊りをしていた。でも、ドア一枚で上に１ｍ以上の隙間があいている。そこから綿ぼこりがすごく入ってくる。ドアを開けると、綿ぼこりを踏みながらしか、部屋に入れない。結局、その環境が病気を引き起こしていたのだ。さらに経済的にも破綻していたので、そのアセスメントというのは、私のソーシャルワークの視点と看護師さんの視点がなければ、私はその時はまだ新人だったので、喘息の発作をひどく起こすことがその生活環境によるものだということが、すぐには結びつかなかった。一緒に考える事で、生活をアパートに移し、生活保護を申請し、環境を整えてたら医者の出す薬も本当に軽くなって、以後入退院を繰り返さなくなった。という事例があった。これがやはり協働であろうと思う。今日も訪問してきたところが、少し知的な障がいがあって仕事になかなかつけなくて、兄の家に間借りをせざるを得なくなった方のところに相談に行ってきた。実はその兄もその方も地域から孤立していて老人クラブには入れない、入れるような状況でもないし、自治会とのつながりもない方である。やはり自治会活動に参加するとか、老人クラブに入るっていうのは、一定の経済力がなければできない。それ以外のところで本当に孤立して、貧困の中で社会とも隔絶して暮らしておられる方々が地域の中には沢山いるのである。そういう方々に身近な地域の中で、そういう人たちを発見して下さって相談に乗って、専門機関に繋げるのが、すなわち皆さんが地域が元気になって気軽に相談できる街づくりができれば、そういう困難層の方も早期の関わりで、良い暮らしを送れるようにやっていけるのではないかというふうに思う。

**③地域包括支援センターC 氏**

期間でまとめて、分析していくところが、非常にすばらしいと思い感心させられた。地域包括支援センターには３職種がる。社会福祉士、保健師、それから主任ケアマネである。今日の発表の中で連携とか協働とか、非常に何回も何回も、出てきた。文章の中だとか、今回の実践の中で少し肌で感じてきたのではという思いであるが、それが今度実践力というところになると、なかなか難しくなってくるかもしれない。今日、我々もスーパービジョンの研修会があり、同様な言葉をやはりその中でも出てくる。それを現場で活かしていくというのは、体感していくというところが非常に難しいところであると思った。しかるに、その前にこのようにまとめとておく、恐らく将来的にも、実践してみるというところは非常に貴重なものとなる。このようにまとめたものを復習し、「あっ、こういうことがあったな」ということが大きくなるでしょう。我々自身も

今実践で出来ていないと思わされて、勉強になった。ケア会議とかサービス担当者会議を実践で行っているが、皆さんのいうコミュニケージョンとか、根拠のある、具体的にとか、分析にとか、非常にやれてはいなかったなど、我々がまだまだ学ばなければいけないと感じた。ここでこのようにまとめていたことが、非常に良い学びであった。

**④地域代表Ｄ氏**

包括センター管轄の○○北部を中心とした報告を聴いたが、自身は民事協の会長と同時に、この自治会出身であり、妻は老人会の班長を兼ねている。大学から家庭訪問と、こういう依頼があった時に、まず対象となる家庭の中にはほとんど来客が無い家庭もあった。よって、「きていただくと家は汚くて困るね」というようなことも多く、しかし、「そうは言っても学生さんの勉強になる」と、こういうことで家庭訪問と、もしくは自治会に来ていただいて、そこで面接するということ受け入れた。端的にいって、この家庭訪問を受けた高齢者のまず第一の感想は、「非常に楽しく愉快に家庭訪問を受けました」と、いうことである。私たちの世代は、子供たちの巣立った後である。娘についても、息子についても、若い世代とじっくり話したことが無い。自身含めて、そこに若々しいフレッシュな皆さんが来て、家庭訪問していただいて、熱心に聴いていただいたと、このことが非常に良くて先ほどの発表を見ながら、聞きながら、「ああ、だいぶ○○北部自治会が風通しを良くしていただいたし、良かったな」という思いが第一である。我々民生委員はひときり前は点の勝負であった。「あの家、この家、私たち」、約100世帯から300世帯に一人の民生委員の割り当てである。そのような中での活動というのは、点の活動であったのだけれども、今は面である。そういう意味では、地域包括支援センターの職員が非常に活躍をして、民生委員が困った時には、まず地域包括支援センターの職員に連絡をして困った問題を一緒に考えたり、行政につないだり、こういうことで大変ありがたく思っている。教育ＧＰという、初めて聞くような依頼だったが、ぜひ補助金がなくても、ぜひこの活動は地域に出て、本当に地域の実情を踏まえた教育、演習をしてくれればよいと思い受諾した。このような教育展開がされることに敬意と感謝を申し上げる。

**⑤行政職員Ｅ氏**

大学のでオリエンテーションは正月が終わったばっかりで、大丈夫か不安と心配があったが、このように短時間の間で非常に一生懸命取組んだと思っている。昨年と比べると、昨年は要支援の方への関わりが多かったので、どちらかというと足りないサービスとか、こんな制度があったら良いなというような点が多く出ていたかと思うが、今年は健康な高齢者というところで老人クラブの方との関わりが大変深かったと思っている。甲府市全体としては一般の元気な高齢者にどうあったらいいかということの視点を私も一緒に学ばせて頂いた。その中で甲府市の老人クラブは今、２８連合体があって、２５５の会に分かれているが、7000人～8000人位の高齢者が所属はしているものの、やはり高齢化とともに役職になる人がいないので、活動が大変しづらいということを聞いている。私も保健課の包括を一緒に担当しているものとして、老人クラブ全体への働きかけをしているのだが、やはり役員のなり手が無いので、徐々に老人クラブ休会しようとか、やめようとかという動きがあるということがどこにもあるということをうかがっている。そのような中で、やはり情報が得られる、そして人とつながれるということが最大の利点だなというふうに思う。そのことも考えながら、やはり情報を大事にする。そしてそれをみなさんに発信していく。そういう仕組みづくりをしていくということが重要になっていくかなと思っている。

今まさに包括支援センターを中心にしながら地域が大きく変わっていく変化にある時期かなと思っている。昨夜も今年度初めての包括支援センター全員の職員の方に集まっていただいて、今年はどんな活動をしていこうかということをみんなで話し会いをした。その中で、それぞれ１０か所がどんな活動をしてきたかという話をした。何回もその中で大学で実習をして地域にでる

ことが重要だねということをやったので、大変皆さん自信をもって地域に出ているということで、まさに包括支援センターが発信して、地域を変えてきているなと私は大変うれしく思ったわけであるが、その中でも今年、国の方は、地域包括ケア体制をだんだん創っていこうということを打ち出してきた。甲府は少し大学の協力も得ながら、少し先進的に進められているかなと思っている。でもなによりも一番遅れているのは行政だなと大変思っているが、本当に連携ということは、それぞれの人が思いを強くしながら、結ばれていくというところで、あきらめないで、またやっていこうというふうに今日思ったところである。学生さんのフレッシュな考え方、そして素直な考え方にふれて、また一所懸命やろうという気になったことは大変感謝したい。

3) **本学教員による評価コメント**

**① 人間福祉学部長（藤谷）**

この取り組みは一つの地域での保健と福祉との抱えている課題に触れるということと、それからその課題を解決していくにあたって、いろんな職種の専門性を持った人の連携がどういう意義があるのかということを経験的に学ぶという取組だと思うが、そこを学生はしっかり受け止めて頂いき、非常にうまくまとめて頂いたと思うところである。特に私が良かったかなと思うのは、３つ程あって、ひとつは具体的な提案まで考えたところがあったということと、それから学生自身がこれからも地域活動の中に入っていって、ボランティア、そういうところまで考えていてくれたと、学生自身が地域社会の一員として、関わっていくということが提案されていたことはすごく心強いと思う。それとあと３つ目はこれはどこのグループであったか、模造紙とか、実際に自分たちが使った生の、あれを提示してくれたのがとても良かった。やはりどうしてもパワーポイントだと、きれいにまとめ過ぎてしまい生身の活動みたいなものが見えてこないところがある、あのようなものを少し入れてくれたことが、「みんなどういうふうに活動してきたのかな」ということが分かって良かった。全体的には、これまでコメントをいただいてきたように、大変評価されるのであるが、あんまりほめすぎると、天狗になるといけないので、少しだけ欲をいえば、苦言をいうと、全体的に話がややうまく出来過ぎている。非常に限られた期間での取組なので、「本当にそこまで言えるのかよ」というところがいくつか気になるところはあった。これはやはり長い実践、経験をとおして、初めて意味を持って分かってくるということがあるのだけれども、言葉で求めることは結構簡単には出来るとは思う、むしろ私がもうちょっと聞きたかったのは、実践をとおして疑問に思ったこととか、失敗したこととかそういう具体的な話を出して、そこから何を学んだのかということがもう少し出ていると良かったのではと思う。今回の取組は、これで終わりにしないで、ぜひこれからの皆さんのそれぞれの専門や学びの中に、そこで感じたこと、課題に思ったことは活かしてほしいと思う。ひとつの例だが、昨年この取組に参加した学生の一人が包括支援センターの方の協力を得て、自分の卒業研究のテーマに絡めてもう一回センターに行って協力していただいて、もう一回お宅を訪問して、もう一回聞取りをやったという学生もいた。これは、非常に直接的にその後を活かした例であるけれども、そういった形だけではなくて今後の皆さんの勉強にぜひ、今回の取組を活かしていってほしいというように思う。

**② 国際政策学部教員** F

非常に良い発表だったと思う。具体的に申し上げると、一番目の 00 地区の発表の中でメッセージを掲げているが、本当に必要なサービスを受けられる世の中にしてほしいというようなメッセージがどなたかご老人のかたからあったと思うが、これが非常に印象に残っている言葉である。それから、二番目の 00 地区の中で、やはり専門職のチームワーク力の向上というのを最後に掲げられていたが、これも非常に重要な言葉、キーワードではないかと思った。そして 00 地区の発表の中にも、「頼れる人がいますか」という質問をしていたが、頼れる人、これは子どもさんとかご家族、友人という、実はこの頼れる人というのが、今世の中では本当にいるのかどうかと

いうことが非常に問題になっており、実は、私の研究している民法の分野では、民法の中に身上監護義務という言葉がある。これは高齢者に限らず、お子さんとか病気を持っていらっしゃる方とか、そういう方々に対して保護をするような事、法律上もうそういった義務を課しているわけである。こういったように実は法律の分野からも今日の発表の内容は、非常に重要なテーマであり、この高齢社会の中で抱えている、今日はたまたま甲府地区の問題であったが、これは日本中どこでも同じような問題抱えている。一方では、隣の韓国とか、中国でも、世界的にみたら、超高齢社会を迎えるのは、日本は高齢社会の先進国ではあるけれども、同じような問題、これから世界中が抱えるわけである。そういう意味では、今日の発表の知見というか、問題点の視点とかは世界中の研究者や行政とかこれからこういった問題を考えていく上で重要な意見を今日の学生さんの発表の中から、私は出たような気がするところである。私の所属する国際政策学部は、なかなか表には出てこなくて、本日は看護学部と人間福祉学部の学生を中心とした発表ではあったが、実はこの大学はもう一つ学部があり、国際政策学部でも、こういった研究テーマについて、私は個人的にはこういった内容の研究をしていきたいと思っていたので、ぜひ皆さん方のこういった個々の研究、それから地域の皆様方のご協力を仰いで、これからも大学の中から地域に向けて、場合によっては、日本、それから世界に向けて問題解決の発信ができるような大学を創っていきたいと思っている。ちなみに私この4月から高齢者の財産管理についての地域連携という研究で国から助成金を受けたこともあり、ぜひ皆さん方と合わせて一緒にやっていきたいと思うので、よろしくお願いしたい。

4）**本学学長による総括**

昨年と比べて、長足の進歩をしたと思う。非常に前年と比べた時に、前年も良かったのだが、非常に中身が豊富になった。それからもうひとつやはり私も、藤谷学部長と同じように感じたのは自分たちがもう一回地域に入りたいという提案があったことである。これはぜひ実現しょうではないか。大学としても、そういう活動についてはしっかりと支援をしたいと思っている。一昨日甲府市長と私の間で、市と大学との包括支援の契約も結んだ。そこで具体的に我々が地域とどう関われるか、また、地域が我々に対してどういう問題を要請してくるか。その関係はしっかり作りたいと思っている。今日の発表の中に出てきた、関わる、具体的関わり方を考えるべきだという提案は、各グループからでていたけれども、大変私も印象に残った。ぜひ、この話だけでは終わらないでいだたきたい。実現の方向に向けていきたいと思う。それから、石田の石原さんから提案があった、私も今年で予算が終わるので、終わりますというのではなく冒頭に申し上げた通り、この活動は本学の言わば個性として継続していきたいと思っている。ぜひ包括支援センターの皆さんこれからもよろしくお願いしたいと思うところである。大変今日は学生にとっても私どもにとってもいい機会であった。最後までご清聴頂きまして感謝申し上げる。

5）**本演習プロジェクト責任者による総括**

今日は甲府市、それから地域包括支援センターの皆さん、そして本当にご参加いただいて、率直にうれしく思う方である石原会長、佐藤副会長には深く感謝申し上げる。4 年生、本当によく頑張ったと思います。また、沢山の深い学びにつながるコメントいただいた。我々が提言したことが少しでも現実的になるように、また地域の中に一緒に入っていきたい。それから3年生へ、これから来年の1月からいよいよフィールドに出る演習が始まる。また、このブルゾンを着て、うちの大学の看板を背負いながら、みんなで活動していきたいと思いるので、どうぞ一緒にやっていきたく、楽しみにしている。

## 6. 演習評価

### (1) 学生評価表　　（編集 ：中橋　淳子）

#### 1) 平成 21 年度 学生自己評価の変化

##### ① 回収率

| | | 1/5 オリエンテーション | | | | | 2/6 演　習 | | | | | 4/27 合同発表会 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 学生数（人） | 欠席者（人） | 提出数 | 回収率（%） | 有効回答数 | 有効回答率(%) | 欠席者（人） | 提出数 | 回収率（%） | 有効回答数 | 有効回答率(%) | 欠席者（人） | 提出数 | 回収率（%） | 有効回答数 | 有効回答率(%) |
| 全体 | 166 | 5 | 158 | 95.2 | 158 | 95.2 | 0 | 158 | 95.2 | 154 | 92.8 | 4 | 157 | 94.6 | 156 | 94 |
| 看護 | 103 | 3 | 99 | 96.1 | 99 | 96.1 | 0 | 98 | 95.1 | 94 | 91.3 | 3 | 99 | 96.1 | 99 | 96.1 |
| 福祉 | 63 | 2 | 59 | 93.7 | 59 | 93.7 | 0 | 60 | 95.2 | 60 | 95.2 | 1 | 58 | 92.1 | 57 | 90.5 |

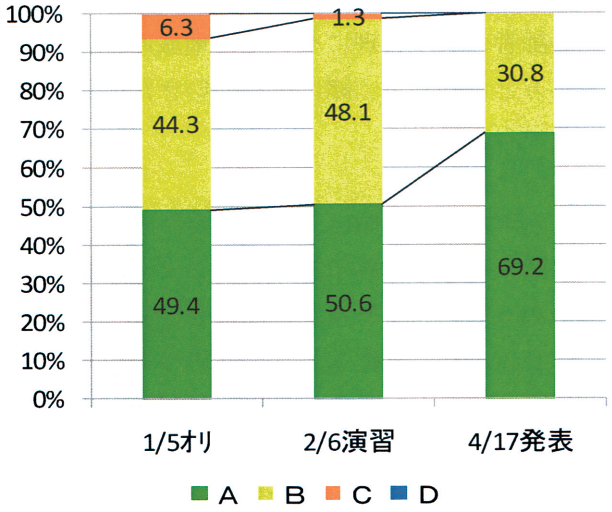
※ 欠席者は出席停止含む

##### ② 結　　果

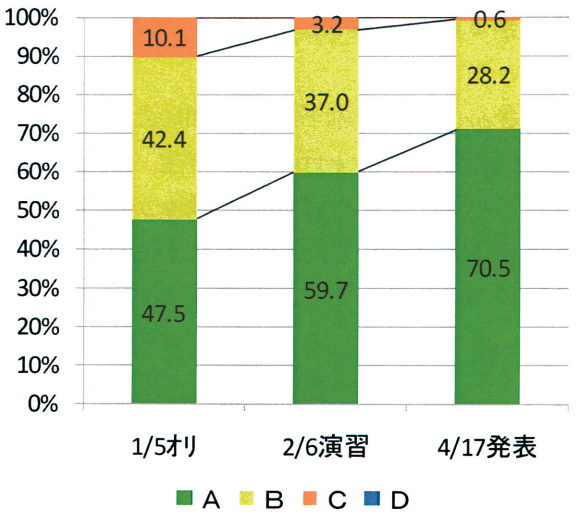
A：目標を達成できた　　B：目標をある程度達成できた

C：目標を達成するにはやや努力を要する　　D：目標をほとんど達成できなかった

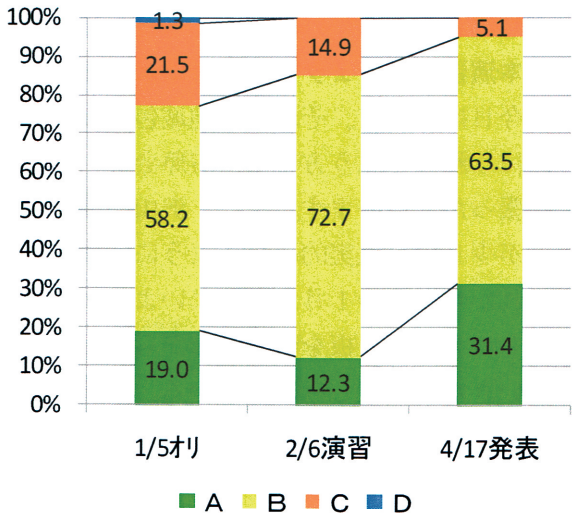
大項目 1：看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互に理解することができる



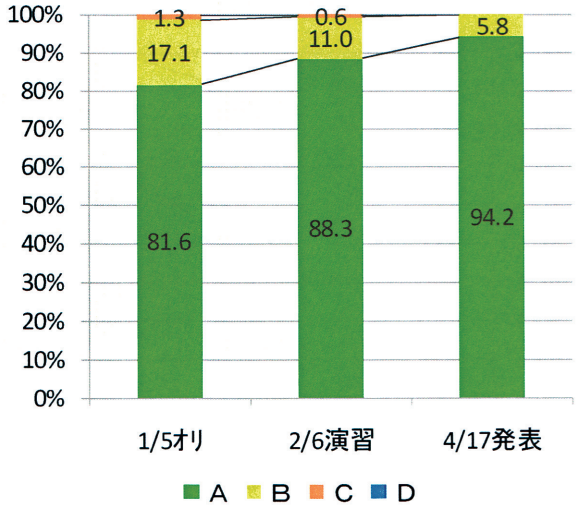

小項目 1-①：自分が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について説明することができる



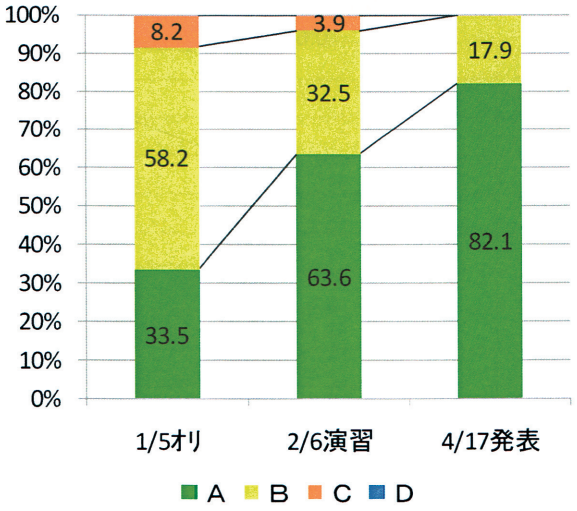

小項目 1-②：相手が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について自分の言葉で表現できる



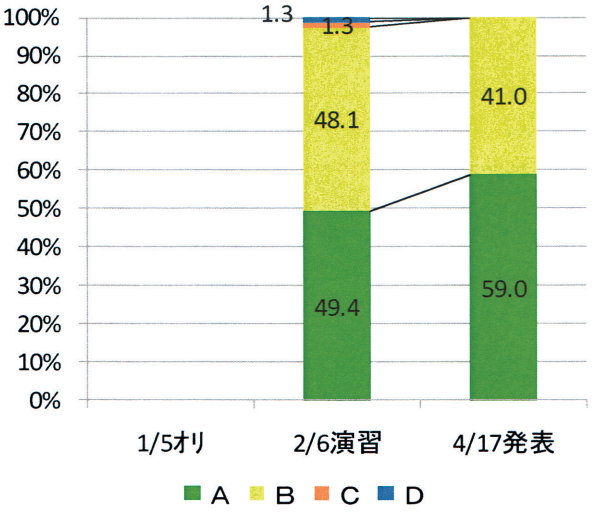
小項目 1-③：互いの専門性について尊重することができる



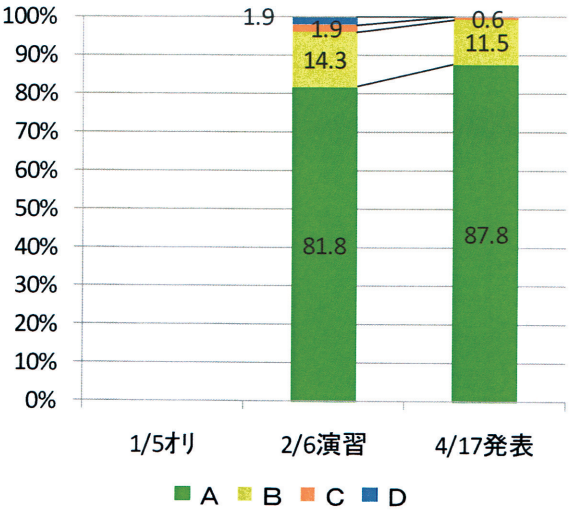

小項目 1-④：互いの専門性を踏まえた連携の必要性について多面的に考えることができる



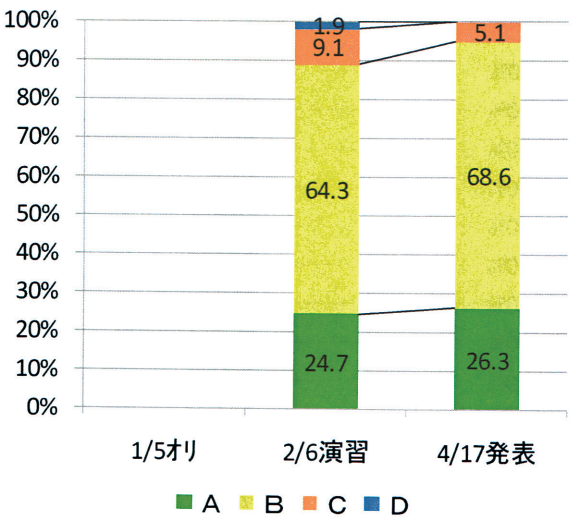

大項目 2：実態調査で関わった高齢者の暮らしと、それを支える社会資源について検討できる



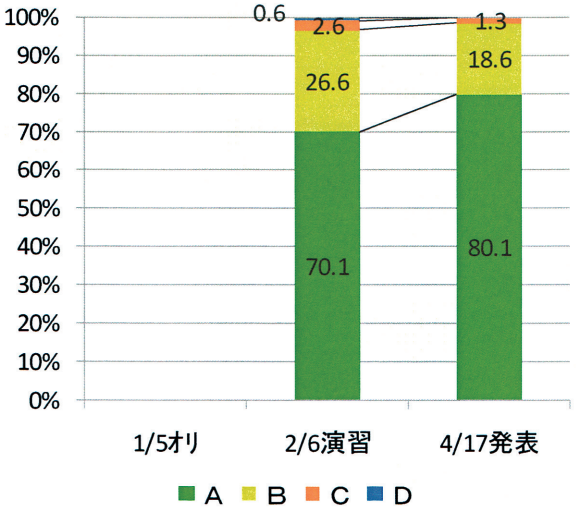

小項目 2-①：関わった高齢者個々の暮らしについて考えることができる



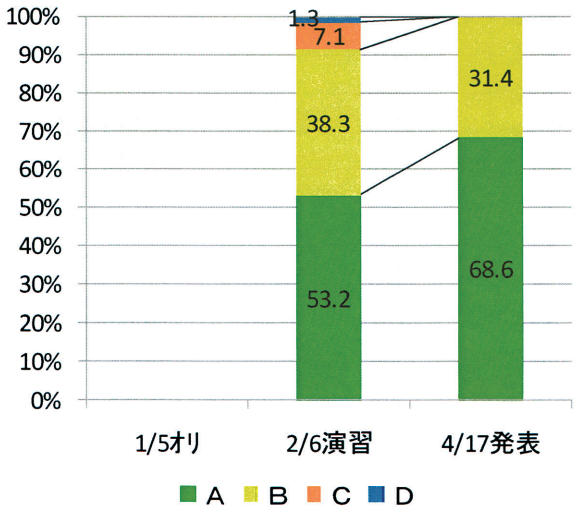

小項目 2-②：関わった高齢者個々の暮らしを支える社会資源について説明することができる



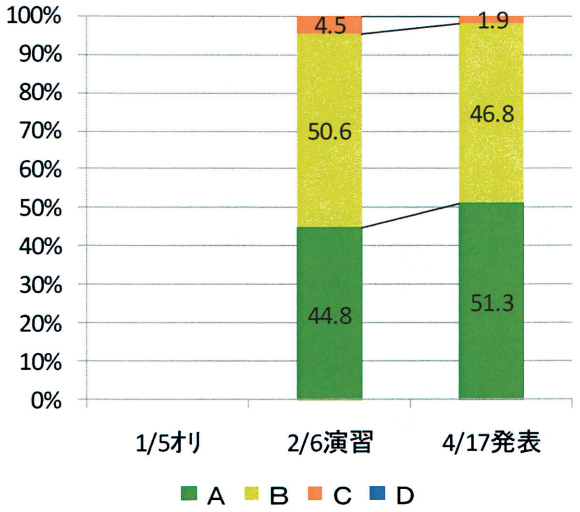
小項目 2-③：関わった高齢者が暮らす地域について考えることができる



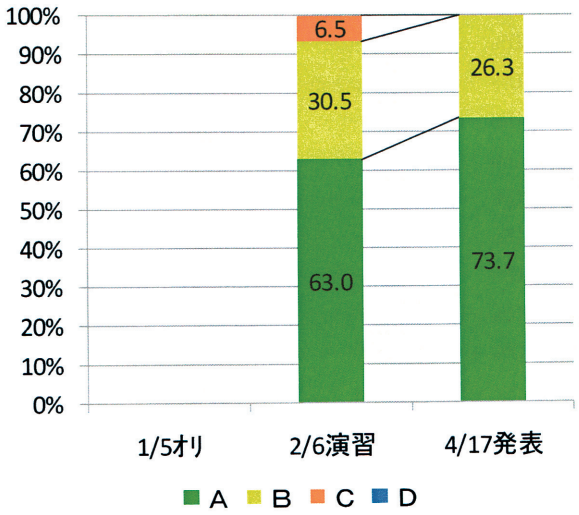

小項目 2-④：関わった地域で調査した高齢者全体の生活及び健康ニーズを考えることができる



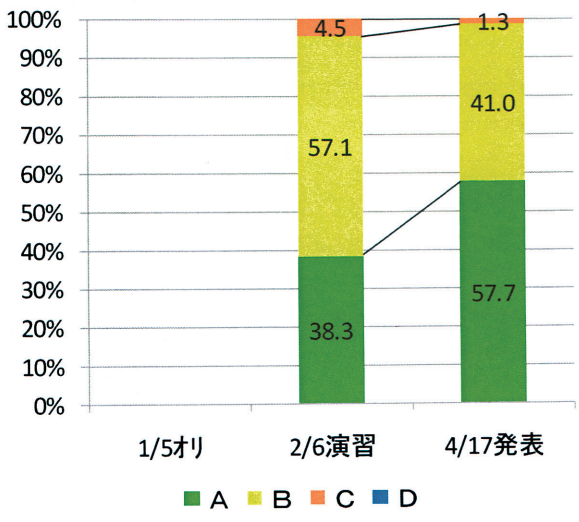

大項目 3：実態調査をとおして、高齢者の健康ニーズについて検討し、地域にフィードバックできる



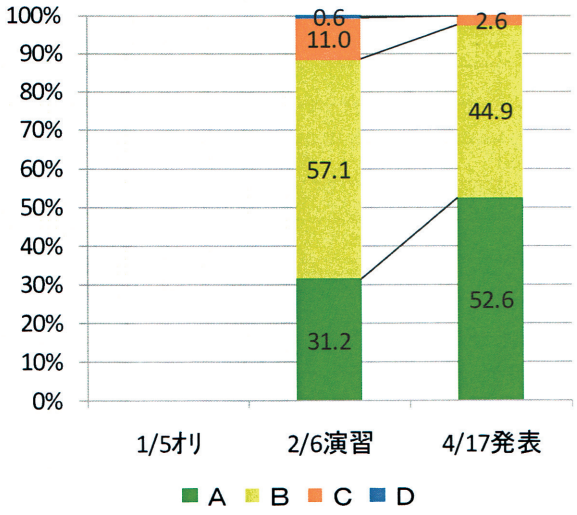

小項目 3-①：互いの専門的な視点を踏まえ、得られた情報を共有するとともに、多角的に議論することができる



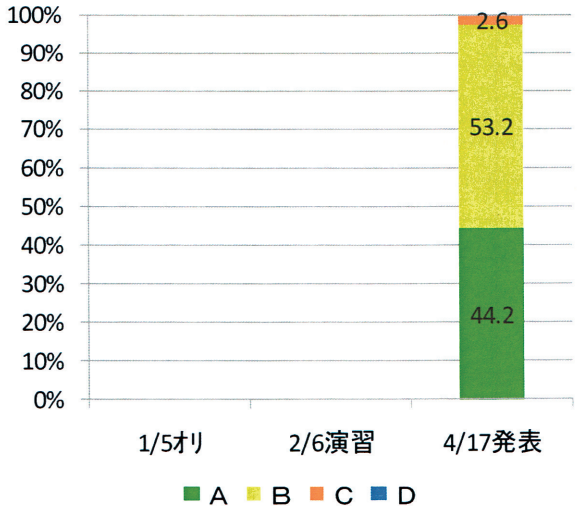

小項目 3-②議論の結果をもとに、客観的に分析し、課題を明らかにできる



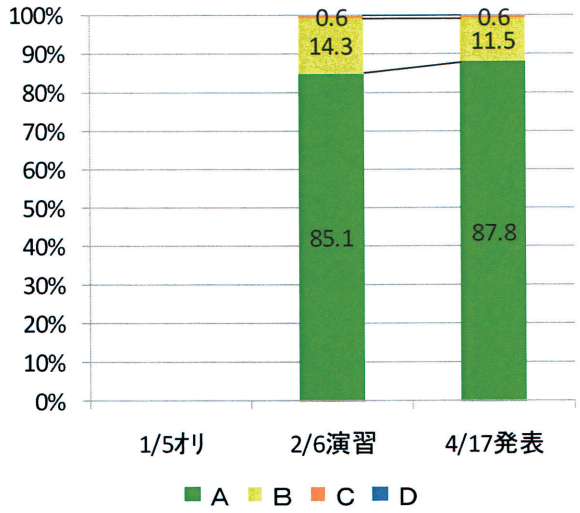
小項目 3-③：課題に対する解決方策を専門的な視点から考えることができる



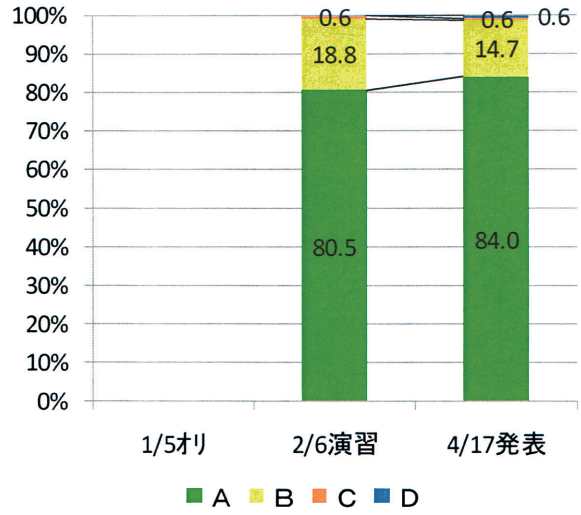

小項目 3-④：得られた結果をまとめ、関係者にわかりやすく報告することができる



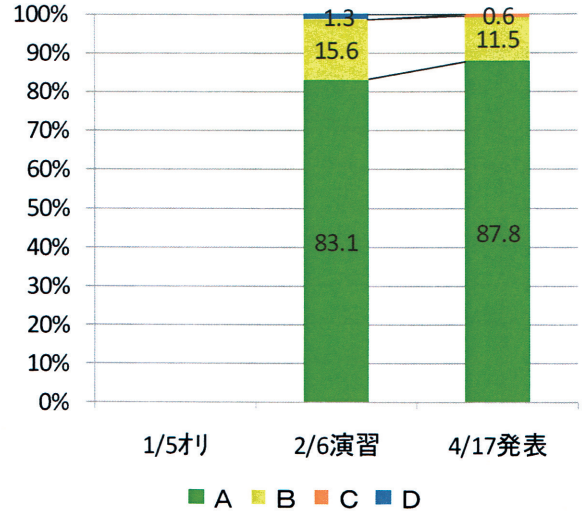

大項目 4：専門職が連携して地域住民に関わるための基本的態度を学ぶことができる



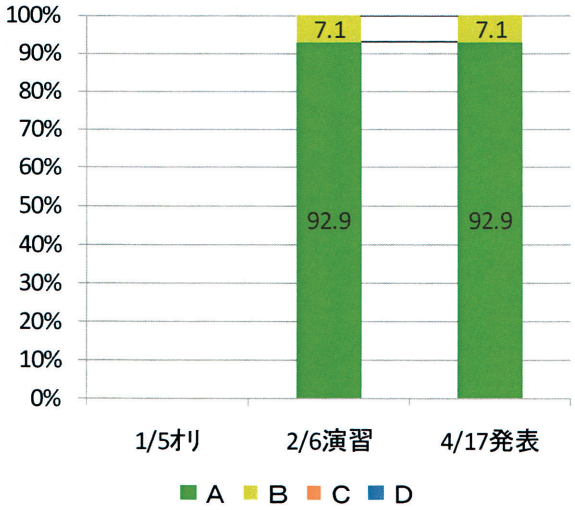

小項目 4-①：訪問前後の手続き（電話・礼状など）が的確に実施できる



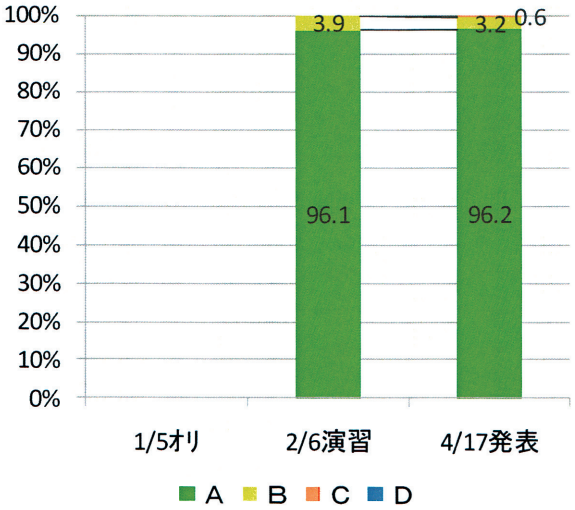

小項目 4-②：身だしなみや言葉遣いが適切であり、相手に不快を与えないよう接することができるとともに、相手の反応を的確に捉えることができる



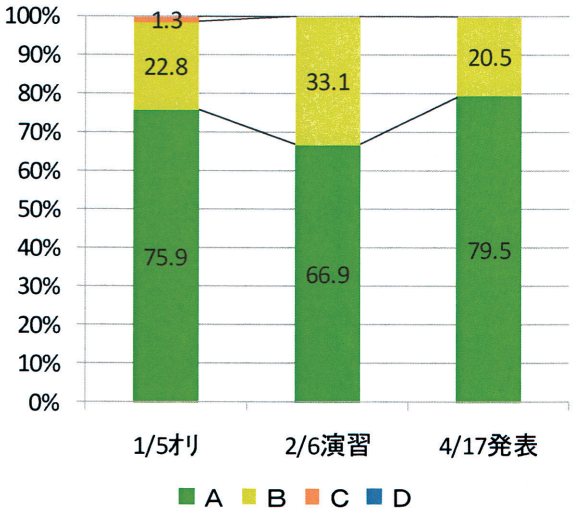
小項目 4-③：地域住民・専門機関従事者に感謝の意を伝えることができる



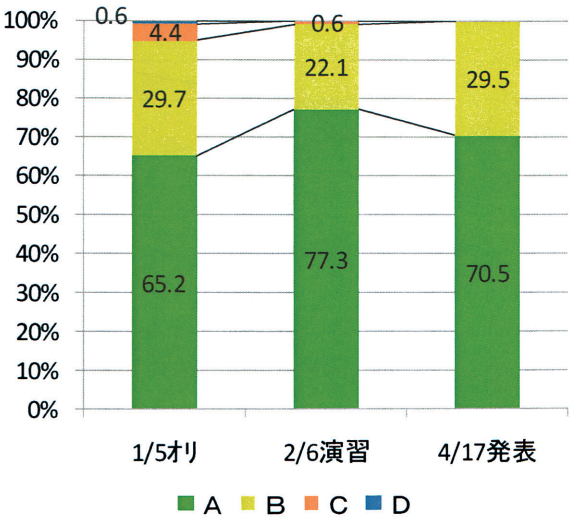

小項目 4-④：個人情報を的確に扱い、確実に保護することができる



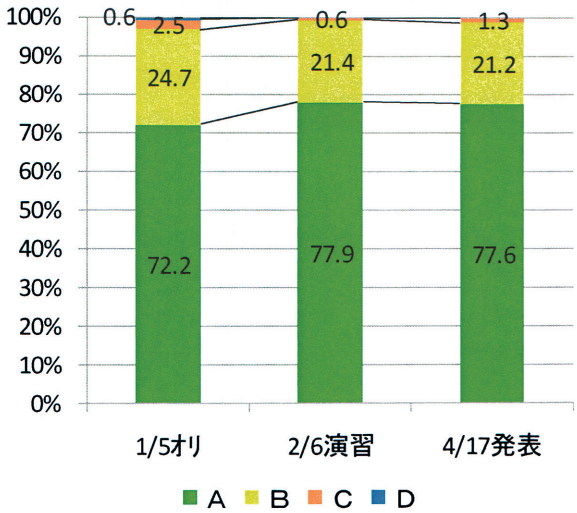

大項目 5：1～4 をとおして、他職種と連携する意義を考えることができる



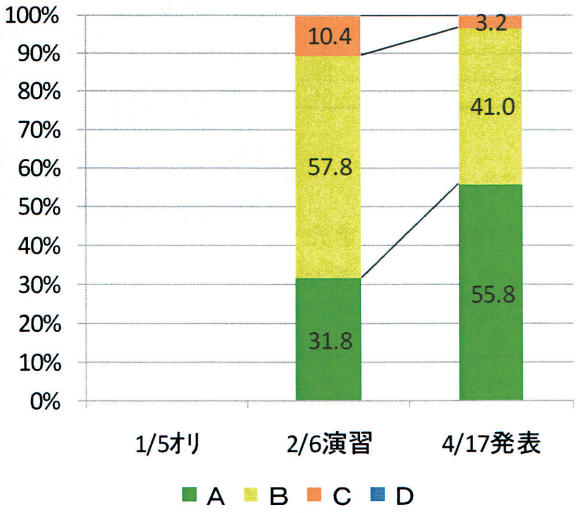

小項目 5-①：グループワークに積極的に参加し、チームの一員としての役割を担うことができる



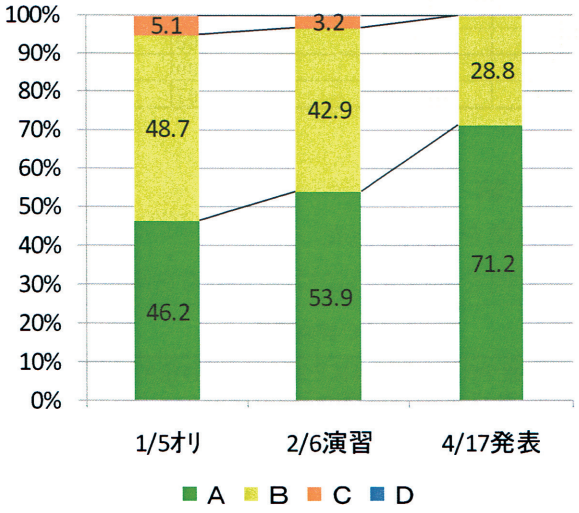

小項目 5-②：グループワークメンバーの意見を傾聴し、受け止めたうえで自分の意見を述べることができる



小項目 5-③：協働する体験から得られた学びをグループ活動を通してまとめ、分かり易く発表することができる




小項目 5-④：連携して関わった一連のプロセスを振り返り評価し、今後の自己の課題を明確にできる



2) 平成 22 年度 学生自己評価の変化

① 回収率

| | | 1/11 オリエンテーション | | | | | 2/5 演　習 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 学生数（人） | 欠席者（人） | 提出数 | 回収率（%） | 有効回答数 | 有効回答率(%) | 欠席者（人） | 提出数 | 回収率（%） | 有効回答数 | 有効回答率(%) |
| 全体 | 171 | 4 | 166 | 97.1 | 162 | 94.7 | 5 | 164 | 95.9 | 162 | 94.7 |
| 看護 | 102 | 3 | 99 | 97.1 | 95 | 93.1 | 3 | 98 | 96.1 | 97 | 95.1 |
| 福祉 | 69 | 1 | 67 | 97.1 | 67 | 97.1 | 2 | 66 | 95.7 | 65 | 94.2 |

※ 欠席者は休学含む

② 結　果

A：目標を達成できた　　B：目標をある程度達成できた

C：目標を達成するにはやや努力を要する　　D：目標をほとんど達成できなかった

| 自己評価項目 | | 1/11 オリエンテーション(%) n=162 | | | | 2/5 演習(%) n=162 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | A | B | C | D | A | B | C | D |
| 1 | 看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互に理解することができる | 22.8 | 58.6 | 17.3 | 1.2 | 54.3 | 43.2 | 2.5 | 0.0 |
| 1) | 自分が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について説明することができる | 32.1 | 51.9 | 15.4 | 0.6 | 58.0 | 37.7 | 4.3 | 0.0 |
| 2) | 相手が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について自分の言葉で表現できる | 9.9 | 54.9 | 33.3 | 1.9 | 27.2 | 63.6 | 9.3 | 0.0 |
| 3) | 互いの専門性について尊重することができる | 63.6 | 34.0 | 2.5 | 0.0 | 85.2 | 13.0 | 1.9 | 0.0 |
| 4) | 互いの専門性を踏まえた連携の必要性について多面的に考えることができる | 30.9 | 53.1 | 14.2 | 1.9 | 67.3 | 28.4 | 4.3 | 0.0 |
| 2 | 実態調査で関わった高齢者の暮らしと、それを支える社会資源について検討できる | | | | | 50.6 | 45.7 | 3.7 | 0.0 |
| 1) | 関わった高齢者個々の暮らしについて考えることができる | | | | | 79.0 | 19.8 | 1.2 | 0.0 |
| 2) | 関わった高齢者個々の暮らしを支える社会資源について説明することができる | | | | | 35.8 | 51.9 | 12.3 | 0.0 |
| 3) | 関わった高齢者が暮らす地域について考えることができる | | | | | 59.3 | 37.0 | 3.7 | 0.0 |
| 4) | 関わった地域で調査した高齢者全体の生活及び健康ニーズを考えることができる | | | | | 53.1 | 38.3 | 8.6 | 0.0 |
| 3 | 実態調査をとおして、高齢者の生活及び健康ニーズについて検討し、地域にフィードバックできる | | | | | 38.3 | 54.9 | 6.8 | 0.0 |
| 1) | 互いの専門的な視点を踏まえ、得られた情報を共有するとともに、多角的に議論することができる | | | | | 53.7 | 41.4 | 4.9 | 0.0 |
| 2) | 議論の結果をもとに、客観的に分析し、課題を明らかにできる | | | | | 32.7 | 61.1 | 5.6 | 0.6 |
| 3) | 課題に対する解決方策を専門的な視点から考えることができる | | | | | 30.9 | 61.1 | 8.0 | 0.0 |
| 4) | 得られた結果をまとめて、関係者にわかりやすく報告することができる | | | | | | | | |
| 4 | 専門職が連携して地域住民に関わるための基本的態度を学ぶことができる | | | | | 84.6 | 13.6 | 1.9 | 0.0 |
| 1) | 訪問前後の手続き（電話・礼状など）が的確に実施できる | | | | | 83.3 | 13.6 | 2.5 | 0.6 |
| 2) | 身だしなみや言葉遣いが適切であり、相手に不快を与えないよう接することができるとともに、相手の反応を的確に捉えることができる | | | | | 83.3 | 13.6 | 3.1 | 0.0 |
| 3) | 地域住民・専門機関従事者に感謝の意を伝えることができる | | | | | 88.9 | 9.9 | 1.2 | 0.0 |
| 4) | 個人情報を的確に扱い、確実に保護することができる | | | | | 92.6 | 7.4 | 0.0 | 0.0 |
| 5 | 1～4をとおして、他職種と連携する意義を考えることができる | 56.2 | 40.1 | 3.7 | 0.0 | 62.3 | 35.2 | 2.5 | 0.0 |
| 1) | グループワークに積極的に参加し、チームの一員としての役割を担うことができる | 59.3 | 34.6 | 6.2 | 0.0 | 70.4 | 25.3 | 4.3 | 0.0 |
| 2) | グループメンバーの意見を傾聴し、受け止めたうえで自分の意見を述べることができる | 57.4 | 33.3 | 8.0 | 1.2 | 71.0 | 25.9 | 3.1 | 0.0 |
| 3) | 協働する体験から得られた学びをグループ活動を通してまとめ、分かり易く発表することができる | | | | | 37.7 | 50.6 | 10.5 | 1.2 |
| 4) | 連携して関わった一連のプロセスを振り返り評価し、今後の自己の課題を明確にできる | 36.4 | 56.2 | 7.4 | 0.0 | 52.5 | 43.2 | 4.3 | 0.0 |
| | 休学 | 2 | | | | 2 | | | |
| | 欠席 | 2 | | | | 3 | | | |
| | 未提出 | 3 | 未入力 | | 4 | 5 | 未入力 | | 2 |

## (2) プロジェクト実施の成果と課題

### 1) 甲府市南西地域包括支援センター　　（文責：田中　彰子）

教育GP「学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト」が目指したものは、①看護学部と人間福祉学部の学生が、協働して「地域包括支援センター」を核としたフィールドに入り、住民の生活を体感する中で、生活及び健康ニーズを考えることができる。②看護・福祉の学生が協働で取り組むことによって、互いの専門性を知り、他職種と協働することの利点を明確にできる。の2点であった。学生の成果については、リフレクションペーパーからの考察で述べたので、ここでは南西ほうかつグループが3年間実施してみて、教員側から見た成果と今後の課題について述べる。

#### ① プロジェクトの成果

看護学部と人間福祉学部の教員が、GP 執行部、専門職ワーキングチーム、そして、南西ほうかつチームという組織的な流れのなかで相互に連携をとり、また、地域包括支援センター職員と連携し合っている姿が、学生にとっての生きた教材でありモデルであった。学生が書いたリフレクションを紹介する。両学部の学生は、初日のオリエンテーションに、緊張感を持って集まったが、看護、福祉と対立的に向き合うのではなく、協働する視点でこれからの演習に臨むことを動機付けられた。特にグループワークは、互いに知り合う機会となり、この場が大変有効であった。学生達は、グループワークで他者の専門性を理解するだけでなく、自分の専門性を意識し他人に伝えると言う体験学習をすることができ、またそのことが次の段階での協働作業に繋がった。さらに対象を見る視点、互いの強み・弱みを意識することができ、だからこそ連携をしてゆくことの重要性を学んだものと考える。

> 教育ＧＰのオリエンテーションでは、学生以外にも多くの先生方が集まっていて、実際に看護と福祉の学生間だけでなく、学生と教員、地域包括支援センターの職員など、これから私たちが連携を学んでいくうえでの連携もあるということがわかった。そのつながりに感謝して他職種の連携を学んでいきたいと感じた。福祉学部の学生と初めて顔を合わせ、短い時間の中であまり多くを話すことはできなかったけれど、これからの演習で看護と福祉、それぞれの得た情報を共有しながら、視点の違いや良さなどを分かち合って連携していきたいと思った。
>
> （2010.1.28　オリエンテーション後のリフレクションペーパーより）

#### ② 今後の課題

今回、科目の位置づけがなかったことで、学生に対してあまり強要できないという意識があった。科目の位置づけのない中での展開だったため、演習までは問題なかったが、その後のまとめ作業や発表準備において、タイムスケジュールを組むのが困難でオーバーワークとなった。企画については、3年間ほぼ同じパターンを繰り返してきた。プロセスの一つひとつは必要で意味があるが、組み立ててゆく時間も十分ではなく、枠組みがない中で展開しなければならなかった。演習の到達度としては高かったと思うが、時間管理に課題を残した。

また、オリエンテーションから演習の実施とデータ分析・グループ発表のプロセスまでは、学生全員が同じ行動で成果も同様の期待ができるが、その後のまとめと合同発表会、対象者へのフィードバックのプロセスは、学生同士で選んだ特定の学生だけの成果となる。このやり方では、学生の到達レベルが異なるため、全員の到達レベルを同一にする必要がある。本来授業時間（1単位30時間）の中でやるべきものであるが、リーダーになった学生にはオーバーワークであり、ここに参加しなかった多くの学生には、ローワークとなり、1単位としてのばらつきが生じている。今後この点について、統一性をもたせられるよう改善が必要と思われる。解決策として、①教材の開発　②ゼミ形式での実施　③グループでの到達水準の均質化　を図ることが重要である。

さらに、3年間積み上げたデータは貴重であり、これから収集されるデータも含めて、どのようにして、包括支援センターを中心とした地域に還元できるのか、その仕組みをつくるのかが大きな課題である。

2) **甲府市中央地域包括支援センター**（文責：伊藤　健次、望月　宗一郎）

平成21年度の演習全般について、その目的・目標と学生の達成度・満足度を照らし合わせてみると、本演習によって両学部の学生が相互の専門性を意識しながら様々な視点から情報及び意見交換をする中で、他職種と協働することの意義について学びを深めることができた。また、グループワークを繰り返すたびに学生一人一人の視点が広がり、得られた情報や調査結果を多角的に分析することの重要性に気づくことができた。学生たちは高齢者が「住み慣れた環境で自分らしく暮らしたい」という思いを持っていることに気づけていた。また、独居高齢者や二人暮らし高齢者がその地域で生活を続けるためには、生活面及び健康面において周りの支援を受けながらも自立していることが大切だということを、インタビューを通じしっかり学びとることができていた。21年度からは20年度の反省を生かし、演習前のオリエンテーションの段階で、学生に評価表を提示した。このことによって演習の目的がより明確になり、学生自身の達成すべきタスクゴールがどこにあるのかが理解しやすくなったと考えられる。

合同発表会終了後に、学生から「発表に向けてみんなで話し合ったことで、達成感がとても大きかったし、この演習の意味を考えることができた。」という積極的な言葉が聞かれたが、合同発表会の欠席者については、20年度と同様達成感・満足度は低かった。発表会後の講評の中で、中央ほうかつグループの学生が考えたアイデアを是非実践に移していただきたいという、大変前向きなコメントをいただき、学生たちの意欲や達成感を引き出すことに繋がった。

平成21年度の演習を組み立てる際に教育効果を一層上げるために工夫したこととして、教員間（看護学部・人間福祉学部）の連携を密に図り、意見交換を積極的に行ったことがあげられる。演習後に反省点を教員間で共有して、課題に対する改善策を検討するという体制を作ることが20年度以上にできたと思われ、学生のリフレクションペーパー記載内容からも効果が高かったことが読み取れる。しかし、学生自身による各学部の履修科目や演習・実習内容についてのプレゼンテーションに時間がかけられず、このことは20年度と比べあまり改善することはできなかった。

平成22年度の演習全般についていえば、これまでの各年度と同様、両学部の学生が協働して演習を行うことによって、職種間連携や協働に関する意義について理解し、単一の学部での学びでは得られない様々な刺激と気づきを得ており、一定の成果を上げることが出来たといえる。しかし、21年度・22年度の実践を通じ、本演習の持つ課題も明らかになってきた。それは「せっかくの看護学部との演習はもっと充実した時間が欲しかったと感じた」「時間､時間と追い立てられて、深めることも深めずに終わった部分もあるのではないかと考える」というリフレクションの記述に現れているように、フィールド演習によって得られた様々な気づきを活用し、お互いの専門性についての討議を行い、具体的な連携の形を模索していくこころみへとつなげていくことが不十分だった点である。リフレクションの記述は裏を返せば、もっと学びたいという学生の願いにも感じられる。しかし、演習によって連携の重要さを理解する入り口には立てたものの、お互いの専門性の共通点と相違点をうっすらと理解はしたものの、深めていくことが出来なかった学生たちの不全感の象徴とも考えられる。これらはこれまでの各年度においても繰り返し提示されてきた学生の声であり、連携演習をより効果的に実施するためには十分検討すべき点であるが、教育カリキュラムが大きく異なり、キャンパスも別、という現在の両学部の教育環境からすると演習内容の修正で対応するには限界があるとも考えられる。これらの難しい条件下においては限られた時間と資源をどのように配分し、よりよい教育につなげていくかを精査し、合同での演習の前

段階での下準備と、演習後の意図的な教育介入、フィールド演習以外の手法の検討などもあわせて整備していくことで更なる成果を引き出すことが出来ると考えられる。

### 3) 甲府市西地域包括支援センター　（文責：清水　惠子）

「専門職連携演習」指導に3年間継続して関わってきた立場で、本演習のフィールドとの調整や計画、準備・実施・まとめ、評価、さらに地域報告会など、フィールドへのフィードバックの一連の過程を振り返り、各年度の特徴や奮闘の様子を述べ、成果と課題を検討した。

平成20年度は、演習目的にある「『地域包括支援センター』を核としたフィールドに入り、…」の核となる「甲府西包括支援センター」（以下、「西ほうかつ」）について、どのようなスタッフがいるのか、どのような役割があるのかを知ることから始まった。そういう点では、「西ほうかつ」と信頼関係のある「介護予防ケアプラン」に登録者の皆様のご協力をいただき訪問調査を実施するなど、「西ほうかつ」に多大なご支援をいただくこととなった。事前の打ち合わせを緊密にするとともに1月上旬のオリエンテーション、2月上旬の訪問調査、4月の合同発表会はイメージがつかめない中であったが、学生の力を信じて共に推進していった。成果は中間報告書で報告した通りで試行錯誤のものであった。

平成21年度は、甲府市が「住み慣れた地域で心豊かに暮らすことを地域の方々とともに支援する環境をつくっていく」という高齢者支援計画を、石田地区をモデル地区として検討していたことから、「西ほうかつ」を通じて、石田地区の地域リーダー石原氏のいる「甲府市高畑北部自治会」をご紹介いただき、同自治会老人クラブ会長様に依頼して、訪問対象者をご推薦いただいた。前年度同様に、オリエンテーション、訪問調査、大学での合同発表会と進めていった。また、合同発表会後であったが同年度は、合同発表の内容を再構築し、同自治会会館において地域報告会を開催することができた。学生には報告だけでなく参加してくださった地域住民の方々と交流する機会となった。これらの機会を通して担当教員は、あらためて自治会の組織や活動について熟知していないことを知り、教育に理解と協力をお願いするには、地域住民との日頃からの関わりを持つ必要性を痛感した。

平成22年度は、前年度の反省を受け、フィールドへの参入を早期にと意識しながらも、「西ほうかつ」への相談は11月と例年のペースとなった。本演習も3年目ということで、フィールド選定は、大学側が石田地区の地域リーダーにご相談しながら、「甲府市高畑南西自治会」に決定した。今年度は、同自治会の副会長で、自治会の民生委員を務める佐藤千恵子氏にオリエンテーションにお招きし、同自治会がどのような福祉の町づくりを目指して取り組んでいるかについてご説明いただいた。同氏の民生委員としての取り組みや成果には目を見張るものがあり、そのにこやかで知性的でかつ実行力のあるお人柄に、すっかり魅了されてしまった。今年度は学生も教員も地域のリーダーのオリエンテーションを受け、イメージをもってフィールド演習に取り組むことができたのではないだろうか。

今年度合同発表会は開催されなかったが、オリエンテーションやフィールド演習のリフレクションからは、あらためて学生の学びの大きさに驚かされた。さらに、前述の「リフレクションと評価」の項では紹介しなかったが、学生は「教育ＧＰがこんなに楽しいとは思わなかった。お宅訪問する機会があれば是非もう一度したいと思った。」、「今回は、地域をフィールドにおいて一回の演習であったが、可能であれば病院や介護施設などといった様々な施設で福祉の学生と実習を行って、より連携の大切さ、必要性が学べる機会があったらよいと考えた。」、また「今回のような連携する機会がもっと低学年のうちからあれば、看護もよりよいものになっていくのではないかと思うし、後輩たちにもこのような機会を経験してほしいなと感じた。」というように、1月のオリエンテーション・準備から2月の訪問調査・まとめまでの1カ月足らずの経験から、連携・

協働の喜びや価値を見出し、専門職連携についての学部における効果的な教育のあり方までを展望する力があることに感心した。

まさに、専門職連携演習の今後の課題は、専門職連携の教育のあり方についてどのような可能性があるかを検討することであり、例えば通常の講義や臨地実習において連携・協働するなど、本学の教員が学部を超えて議論し教育内容やその教授方法を創造することが問われているのではないだろうか。

### 4) 演習全体の成果と課題　（文責：神山　裕美）

#### ① PDCA サイクルによる学生の段階的理解と教育方法の改善

この専門職連携演習は、1月のオリエンテーション、2月の演習、4月の発表の3段階で進めているが、徐々に学生の目標達成できた割合が高まってきている。H22（2010）年度は3月に開催された地域発表会後のリフレクションまで本報告書には掲載できないが、H21(2009)年度と同じような結果が予測できる。また、H21年度とH22年度のオリエンテーション時と演習時の数値を比較すると、H22年度のほうが目標を達成できた割合が高くなっている。これは、学生が先年度の学生発表等から学んだ部分と、教員が学生のリフレクション等より教育方法等を改善しながらより効果的な指導に努めてきた結果ではないかと考える。PDCA サイクルにより学生が自らの学びを次の学年に伝えていく循環と、教員がデーターに基づいた教育方法の見直しをする循環の、両方がうまく働いており演習の効果も高まったのではないかと考える。

#### ② 演習で学んだ点と不足する点

平成21年度、22年度とも、学生の目標達成割合の高い項目と低い項目は、同じ傾向がある。「互いの専門性への尊重」、「高齢者の個々の暮らしと地域を考えること」や「住民のかかわる基本的な態度・マナー・手続き」等は目標達成割合が高い。反面、「相手の専門性の自分の言葉での表現」、「社会資源の理解」、「課題への分析や対応方法の検討」「地域へのフィードバックとわかりやすい発表」は、目標達成割合の比較的低い項目である。これは、合同演習や地域調査等により直接的に見える・体験できる部分は学生にとってわかりやすいが、その後の考察や発表の場や時間が不足しており、目標達成割合が低かったのではないかと考える。先の3か所の包括支援センター毎の成果と課題でも述べられているが、実際に地域に入り直接住民から話を聞き、それを学部の異なる学生の協働作業で行ったことは学生にとって多くの学びがあった。しかし、科目の位置づけがない中での検討時間の不足や、発表会や準備の課目時間外での設定により、全ての学生が発表までのプロセスにかかわることができなかった。その解決が、新カリキュラムの中での改善点のひとつではないかと考える。

#### ③ 演習による学習効果の高い項目

平成21年度、22年度とも、「相手の専門性を自分の言葉で表現できる」項目が最も目標達成度が低かった。そのほか、「社会資源の理解」「課題の分析と解決策の検討」「グループによる学びのまとめと発表」も低い項目である。しかしH21年度では、発表会後にこれらの項目の目標達成が1.5〜2倍に高まっており、学習効果の高かった項目でもある。本演習の授業時間内では高齢者の訪問調査が中心で、発表に向けて議論を深め発表資料を作る正規時間内での余裕がなかった。その限られた時間でも学内発表会をすることで学生たちは多くの学びを得ることができたので、さらにその場を広げ保障することで学生の学びの成果がより高まるのではないかと考える。

#### ④ 地域と向き合い地域から学ぶ意義

この演習は学部を超えた学生に、地域ニーズへ直に触れさせることによる教育効果や、その中での専門性の活用や深まりを意図したものである。この約2年間の演習を通してそれらが十分効果的に作用したことが、学生のリフレクションからもうかがえる。それを今後も続けていくため

には、継続的に地域との協力関係を作り、学生が地域に役立ち、地域が学生を育てる循環を作ることもまた必要だろう。専門職連携を学ぶ意義は、利用者や地域社会のために、どれだけ専門職としての知恵や技術を活用する事が出来るか、そして利用者の望む健康な生活や幸せな生活を実現することができるかに尽きる。その過程で、自らの学びを見直し向上していく学生像を描きつつ、教育プログラムや指導方法を改善し地域社会との調整を行っていくことが、今後も求められるだろう。

## Ⅳ　専門職連携演習教材開発　　（文責 ： 吉澤 千登勢）

### 1. 教材開発プロジェクトの位置づけ

教材開発プロジェクトの目的は、これまで積み重ねてきた「専門職連携演習」の成果及び課題を検証し、平成 23 年度からの必修化に向けて、同科目(1 単位 30 時間)の授業案と使用教材を検討することにある。同プロジェクトでは、「学生の自己評価表」の結果や教員のマンパワー、フィールド演習の場の特性などを基礎資料に、学生自らが、まずは自己が目指す専門職の専門性を問い、その上で連携する他職種の専門性を理解しながら、連携の意義や必要性を学習できるような授業案作りや教材開発を進めてきた。本報では、第 1～4 回目での授業案と使用する教材について報告する。

### 2. メンバー表・会議開催状況

**[メンバー表]**

| 学　部 | 看護学部 | 人間福祉学部 | ＧＰ事務室 |
|---|---|---|---|
| 氏　名 | 吉澤 千登勢(リーダー)<br>井出 成美・須田 由紀<br>中橋 淳子・森田 祐代 | 神山 裕美・下村 幸仁<br>柳田 正明・伊藤 健次 | 三井 知波留<br>松橋 昌代<br>平形 満美子 |

**[会議開催状況]**

| 日　時 | 内　容 | 出席者(人) |
|---|---|---|
| 2010 年 6 月 28 日<br>18:30～20:00 | 平成 23 年度「専門職連携演習」シラバス(案)を作成するために必要な事項(授業目標、教育方法、評価方法、必携図書など)について | 10 |
| 7 月 12 日 18:35～19:50 | シラバス(案)の検討 | 10 |
| 9 月 1 日 14:00～15:40 | 第 1～4 回目の講義の授業案を検討するために必要な事項(各回の授業目標及びねらい、授業内容、学生の到達度など)について | 11 |
| 10 月 18 日 18:30～20:10 | 第 1～4 回目の講義の授業案に関する検討 | 10 |
| 12 月 13 日 18:20～19:30 | 第 1～4 回目の講義で使用する教材について(グループワーク用教材、ペーパー事例、コミュニケーションスキルに関する資料) | 11 |

### 3. 平成 23 年度「専門職連携演習」の第 1～4 回の授業案及び使用する教材

表 1.2参照（p118～119）

**[授業目標及びねらい]**

| 回　数 | 授業目標 | 授業のねらい〈教員の目標〉 |
|---|---|---|
| 1・2 回 | 1. 演習目的及び目標、演習の到達度を理解することができる。<br>2. 両学部の学生が相互の学習及び実習内容などを知り、コミュニケーションを図ることができる。 | 1) 本演習の概要及び演習目的・目標、到達度を理解させる。<br>2) 演習の進め方を理解させる。<br>3) 両学部の学生に、チームづくりに向けての動機づけを行う。<br>4) 互いの専門性を理解させる。<br>5) 演習フィールドの概況を理解させる。<br>6) 提示してペーパー事例の概要を理解させる。 |

| 回　数 | 授業目標 | 授業のねらい〈教員の目標〉 |
|---|---|---|
| 3.4回 | 1. ペーパー事例を通して、高齢者個人及び地域課題について知ることができる。<br>2. 両学部の学生が相互の専門性を知り、チームアプローチについて考えることができる。 | 1) 連携に必要なグランドルール(コミュニケーションスキル、チームアプローチ)について理解させる。<br>2) 高齢者個人のニーズや個人を取り巻く地域課題について理解させる。<br>3) 保健・医療・福祉制度が実践の場でどのように利用されているか理解させる。<br>4) 検討した事例を通して、相互の専門性、役割を理解し、多職種が連携することの意義や、連携に必要な具体的なチームアプローチの方法について考えることができる。<br>5) 事例検討会を通して、互いの専門性や連携することの意義について、前回の講義よりも具体的に理解させる。 |

※ 第5回目の授業は、1回から4回目までの授業の理解度を確認するための講義を予定している。

**[使用教材]**

| 教　材 | 内　容 |
|---|---|
| グループワーク用教材 | ・話し合いの材料として「学生評価表」の評価項目に関して考えることができるようなワークシート(ツール)を作成する。<br>・ワークシートは個人用(一人ひとりがしっかりと考える事ができるように、また話し会いの参加が積極的になるように)とグループ用(考えを共有するため)の2パターンを作成する。<br>・ワークシートはグループワーク後に必ず提出させ、回を重ねる毎に個人の学習効果が見えるようなものとする(ポートフォーリオ形式)。 |
| ペーパー事例 | ・事例は、幅広い角度から意見が出ることを重視して作成し、両学部の教員間で事前に事例検討を行う。<br>・事例には着目させたい点のみを示すような仕掛けをし、事例検討を行うためのワークシートを作成する→次年度、事例選定後に、授業案に示した「ねらい(専門性の説明、相手の専門性の理解、チームの一員としての役割など)」に基づいてワークシートを作成する。 |
| コミュニケーションスキルに関する資料 | ・コミュニケーションスキルについては、両学部の他の科目にて学習が進んでいるので、本科目では、人間福祉学部で活用している「SOLER」の手法などを参考に資料を作成し、ミニレクチャーを行うにとどめる。<br>・チームアプローチについては、事例検討の中でも着眼させ、“チームアプローチに必要なこと”、“してはならないこと”などを書き出させるようにしていく。 |

**表1 平成23年度「専門職連携演習」（第1回、2回授業案）**

| 授業目標 | 1. 演習目的及び目標、演習の到達度を理解することができる<br>2. 両学部の学生が相互の学習及び実習内容などを知り、コミュニケーションを図ることができる |
|---|---|

| ねらい(意図):教員の目標 | 授　業　内　容 | 時間 | 使用教材 | 評価の視点（学生の到達度） |
|---|---|---|---|---|
| 1.本演習の概要及び演習目的・目標、到達度を理解させる<br>2. 演習の進め方を理解させる<br>3. 両学部の学生に、チームづくりに向けての動機付けを行う | **1.オリエンテーション**<br>①今までの専門職連携演習の概要と取り組みの経過について<br>②IPEとは--専門職連携・協働の必要性と意義--<br>③演習目的、目標、方法、評価方法について（リフレクションペーパーの説明も含む）<br>④今後の演習のタイムスケジュールについて<br>⑤担当教員の紹介<br>⑥グループメンバーの発表 | 30分 | ・シラバス<br>・オリエンテーション資料<br>・評価表<br>・グループメンバー表 | **※リフレクションペーパー（学生の自己評価表）の項目に沿って評価していくが、不足する部分は新たに追加する。**<br>・なぜ、IPE及びIPWが必要なのか理解することができる<br>・演習目的、目標、方法、評価表に示された到達度を理解することができる<br>・演習のスケジュールをイメージすることができる |
| | ⑦アイスブレイキング | 30分 | ※要検討 | ・互いに話しやすい雰囲気を形成することができる |
| 4. 互いの専門性を理解させる | **2.グループワーク**<br>①グループ毎に自己紹介(例えば、氏名、もし3億円の宝くじが当たったら? IPEに期待すること)<br>②両学部のカリキュラム(教育体系)及び実習内容の紹介<br>③自己の専門性に関する説明(役割、働く場など)<br>④相手の職種のイメージは?<br>⑤専門職連携に必要なコミニュケーションスキルとは<br>⑥グループリーダーを決定する | 75分 | ・評価視点に立ったワークシートを作成する(ポートフォリオ様式) | 1. 看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互に理解することができる<br>2. 自分が学んでいる専門職の専門性(知識・技術など)について説明することができる<br>3. 相手が学んでいる専門職の専門性(知識・技術など)について理解したことを自分の言葉で表現できる<br>4. 互いの専門性を知り、連携の必要性について考えることができる<br>5. グループワークに積極的に参加し、チームの一員としての役割を担うことができる<br>6 .グループメンバーの意見を傾聴し、受け止めた上で自分の意見を述べることができる |
| 5. 演習フィールドの概況を理解させる | **3.演習フィールドの地区概況に関する説明** | 45分 | 地区概況資料(地図等) | ・フィールドの特徴を理解することができる |
| 6. 提示したペーパー事例の概要を理解させる | **4.第3・4回講義で使用するペーパー事例の配布と説明** | | ペーパー事例(1事例) | ・事例の内容をイメージすることができる |
| | **5.次回の講義に関する連絡事項** | | | ・本日の一連のプロセスを振り返り、評価し、今後の課題を明確にできる |

**表2 平成23年度「専門職連携演習」（第3回、4回授業案）**

| 授業目標 | 1. ペーパー事例を通して、高齢者個人及び地域課題について知ることができる<br>2. 両学部の学生が相互の専門性を知り、チームアプローチについて考えることができる |
|---|---|

| ねらい(意図):教員の目標 | 授　業　内　容 | 時間 | 使用教材 | 評価の視点（学生の到達度） |
|---|---|---|---|---|
| 1.連携に必要なグランドルール(コミュニケーションスキル、チームアプローチ)について理解させる | **1.オリエンテーション**<br>①専門職連携に必要なコミュニケーションスキル(チームアプローチ)について<br>②グループワークの目的、目標、進め方 | 20分 | ・「SOLER」を基にしたコミュニケーションに関する資料 | ・連携するために必要な基本的なコミュニケーションスキル(チームアプローチ)について考えることができる |
| 2.高齢者個人のニーズや個人を取り巻く地域課題について理解させる<br>3.保健・医療・福祉制度が実践の場でどのように利用されているか理解させる<br>4.検討した事例を通して、相互の専門性、役割を理解し、多職種が連携することの意義や、連携に必要な具体的なチームアプローチの方法について考えることができる。 | **2.グループワーク**<br>①事例検討<br>②発表用資料の作成<br>【事例の選定について】<br>フィールド演習担当施設から「オーソドックスな事例(連携を要する事例)」を原案として提示してもらい、これを基礎資料に教員が教材として加工する。<br>※提示する事例は、ウォーミングアップ的なものを用意し、困難事例は避ける。 | 90分 | ・事例検討用ワークシートについては、来年度、具体的事例決定後、事例に沿ったワークシートを作成する | 1. 事例検討を通して、高齢者の健康や生活のニーズをアセスメントし、課題を明確にすることができる<br>2.事例検討を通して、高齢者が暮らす地域の課題を明確にすることができる<br>3. 個人及び 地域の課題に対する解決策について検討することができる<br>4. 事例検討をとおして、多職種と連携する意義を考えることができる<br>5. 事例検討をとおして、看護学部及び人間福祉学部の互いの専門性やアプローチについて考えることができる<br>6. グループワークに積極的に参加し、チームの一員としての役割を担うことができる<br>7. グループメンバーの意見を傾聴し、受け止めた上で自分の意見を述べることができる |
| 5. 事例検討会を通して、互いの専門性や連携することの意義について、前回の講義よりも具体的に理解させる | **3.発表** | 50分 | | ・各グループの発表を聴き、互いの学習内容を共有することができる |
| | **4.まとめ** | 15分 | | ・事例検討を通して得られた学びを、次回からのフィールド演習に繋げようと考えることができる |
| | **5.次回の講義に関する連絡事項** | 5分 | | ・本日の一連のプロセスを振り返り、評価し、今後の課題を明確にできる |

## Ⅴ　甲府市地域包括支援センター職員等研修会　　（文責：井出　成美）

本研修会に先駆けて、本プロジェクトの演習フィールドである甲府市と協議を持つ中で、地域包括支援センター（以下、包括と略す）職員が地域のニーズの把握や地域包括ケア体制の整備について課題を持っていることが明らかになった。そこで大学と甲府市両者で協働し、包括職員のスキルアップのための研修会を持つことになった。本研修会は、大学が包括職員に対し一方的に研修を施すというものではなく、包括職員、甲府市介護保険担当職員、大学教員各々が、同等の立場でそれぞれの業務上の課題を明確にして解決のための方向性を見出す過程を共に踏むことを重要視した。そのため、包括職員だけでなく、市職員や大学教員も、同じ研修に臨み、それぞれの所属での課題と解決策の明確化に取り組むことにした。

### 1. 実施要項

#### (1) 研修目的

地域包括支援センター職員が、地域の課題をより具体的に明らかにすることによって、地域包括ケア体制の方向性や対策を検討し、今後、高齢者がいきいきと暮らせる地域づくりの実践につなげることが出来る

#### (2) 目　　標

1) 地域の課題を分析し明らかにする
2) 課題解決に向けての項法制が明確になる
3) 具体的な方策を検討し業務につなげることができる
4) 共同作業を進めるプロセスにより参加者の共通理解を深めることができる

#### (3) 研修方法及び講師

1) 研修方法

KJ 法を用いてのグループワーク演習を基本とする。

2) 講　　師

情報工房代表　山浦晴男先生　シンボリックアナリスト（質的情報の体系化・指導）
ファシリテーター（ワークショップの運営・指導）



地域生存支援有限責任事業組合（LLP）組合員
千葉大学大学院　非常勤講師
東京農工大学大学院　非常勤講師
創造学園大学　客員准教授
日本質的心理学会　会員
日本地域学会　会員
廃棄物学会　　会員

① プロフィール

1948 年：長野県生まれ　中央大学卒

1971 年株式会社川喜田研究所入社、KJ 法の研究・普及に従事。同主任研究員を経て、1991 年情報工房設立。その後、株式会社認知科学研究所取締役、株式会社アヴァンインターナショナル取締役副社長、財団法人科学技術広報財団宇宙プロジェクト室客員研究員、宇宙開発事業団客員開発部長、国土交通省アイランドテラピー推進構想調査アドバイザー、財団法人山梨総合研究所特別研究員、国土交通省離島地域国際交流推進調査アドバイザー、国土交通省近畿地方整備局「コミュニケーション研修」講師、市町村アカデミー講師、山梨県戦略的産業ビジョンオブザーバー会議メンバー、国土交通省「しまづくりサポーター育成支援に関する調査」ワーキングアドバイザー、NPO やまなし県民政策ネットワーク「持

続可能な社会を導く県民主体の政策形成プロセス」委員会副委員長、文部科学省隣地実習責任者研修講師、文部科学省看護学教育指導者研修講師、文部科学省国公私立大学病院管理者講習会講師、和歌山県「参詣道と水土里のむら機能再生支援事業」アドバイザー、山梨県新任所属長・知事との対話研修ファシリテーター、国際協力事業団東欧圏研修講師、国際協力事業団集合研修講師、中国・北京大学看護学院質的研究法研修講師（千葉大学・北京大学共同研究／文部科学省21世紀COEプログラム）など歴任。

② 著　　書

「ビジネスマンのための自分の考えを深める技術」　1998年、PHP研究所
「一念を貫く～経済の時代から新人間主義の時代へ」（共著）　1998年、ビジネス社
「本当に役立つ！エクセルでできる文書データ活用術」　2001年、日本経済新聞社
「住民・行政・NPO協働で進める最新地域再生マニュアル」　2010年、朝日新聞出版

③ 論　　文

「科学的な質的研究のための質的統合法（KJ法）と考察法の理論と技術」2008年、看護研究１、医学書院
「北京大学看護学院教員・院生の研修体験感動から浮かび上がる質的統合法（KJ法）の姿」2008年、看護研究１、医学書院

**(4) 対象者**

甲府市地域包括支援センター職員
甲府市役所職員
山梨県立大学教育ＧＰ担当教員

## 2. 実施状況

### (1) KJ法による地域課題の把握と対策

#### 1) 研修時期・研修内容

研修時期は、平成21年2月～平成23年3月までの期間で合計11回の研修会を実施した。研修は、【課題明確化】【課題解決に向けた解決策の検討】【解決策実践の検証と戦略の明確化】の段階を追って実施した。詳細は、次表に示した。

研修内容

| | | |
|---|---|---|
| 研修段階1 第1～3回 | 研修時期 | 平成21年2月～5月 |
| | 研修テーマ | 【課題明確化】<br>各所属の業務上の課題を職員間で協働して明らかにする |
| | グループワーク | 所属ごとにグループをつくり、下記の問いに対する個々の考えを付箋に記入し、KJ法を用いてカード化、分類、統合、構造化の作業を行う<br>● 包括職員：包括の日常活動での地域へのかかわりについて抱えている悩み、問題は何か。<br>● A 市介護保険担当課職員：市介護支援情報センターの抱えている悩み、問題は何か。<br>● 大学教員：専門職連携演習を終えて抱えている悩み、問題は何か。 |
| | 評価のためのアンケート | 第2回と第3回の研修後に、研修への意見や感想について自由記述で回答を求めるアンケートを実施した。 |

| | | |
|---|---|---|
| 研修段階2 第4~6回 | 研修時期 | 平成 21 年 5 月～7 月 |
| | 研修テーマ | 【課題解決に向けた解決策の検討】<br>明らかになった課題の解決に向けた方策を検討する |
| | グループワーク | 所属ごとにグループをつくり、下記の問いに対する個々の考えを付箋に記入し、KJ 法を用いてカード化、分類、統合、構造化の作業を行う<br>●包括職員：包括の日常活動での地域へのかかわりについて抱えている悩み、問題点の解決策は何か。<br>●A 市介護保険担当課職員：市介護支援情報センターの抱えている悩み、問題の解決策は何か。<br>●大学教員：専門職連携演習を終えて抱えている悩み、問題の解決策は何か。 |
| | 評価のためのアンケート | 第 5 回の研修後に、研修への意見や感想について自由記述で回答を求めるアンケートを実施した。<br>第 6 回の研修後に、第 1 回～6 回までを通じての目標達成を評価するための 5 段階選択肢質問と自由記述によるアンケートを実施した。 |
| 研修段階3 第7~11回 | 研修時期 | 平成 22 年 2 月～平成 23 年 3 月 |
| | 研修テーマ | 【解決策実践の検証と戦略の明確化】<br>明らかになった解決策の実践プロセスを検証し、さらなる戦略（課題・具体策・成果目標）を明確にする |
| | グループワーク | 7,8 回：所属ごとにグループをつくり、実践プロセスを撮影した写真を材料に KJ 法によってカード化、分類、統合、構造化の作業を行う<br>●包括職員：包括の日常活動での地域へのかかわりについて解決策実施の過程と結果の検証<br>●A 市介護支援情報センター職員：市介護支援情報センターの抱えている悩み、問題の解決策実施の過程の検証<br>●大学教員：専門職連携演習を終えて抱えている悩み、問題の解決策実施の過程の検証<br>9～11 回：各所属ごとにグループをつくり、重点課題、成果目標、具体策を話し合い戦略フォームを作成する。作成した戦略フォームに沿って実践し、その実践プロセスを撮影した写真を材料に、 KJ 法によってカード化、分類、統合、構造化の作業を行う |
| | 評価のためのアンケート | 第 7～11 回の研修後に、目標達成を評価するための 5 段階選択肢質問と自由記述によるアンケートを実施した。 |

研修段階 2 までが終了したところで 4 つの目標を目指したプログラムが一段落するため、この時点で目標達成のためのアンケートを実施し評価した（詳細は別項に述べる）。その結果、包括職員間の業務に関する認識の共通理解が進んだことが成果として挙げられる一方、業務の具体的な方策の検討への達成感が十分でないことが課題として挙げられた。つまり目標 3 の達成状況が不十分であることが示唆されたので、さらに研修会を継続させ、具体的な解決策の実践プロセスを検証し実践の成果を確認すると共に、更なる課題に対する戦略が立てられるような研修会を企画して実施したのが、第 7～11 回の研修会である。

2) 参加者数

| 研修会 | 包括支援センター | 甲府市 | 大学教員 | 合計 | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 参加数 | 参加数 | 参加数 | 参加数 | 参加率 |
| 1回 H21.2.27 | 30人 | 4人 | 10人 | 44人 | 67.7% |
| 2回 H21.3.13 | 28人 | 4人 | 7人 | 39人 | 60.0% |
| 3回 H21.5.1 | 29人 | 4人 | 12人 | 45人 | 63.9% |
| 4回 H21.5.22 | 30人 | 4人 | 9人 | 43人 | 59.7% |
| 5回 H21.6.22 | 29人 | 3人 | 9人 | 41人 | 56.9% |
| 6回 H21.7.18 | 31人 | 4人 | 13人 | 48人 | 66.7% |
| 7回 H22.2.18 | 31人 | 4人 | 14人 | 49人 | 69.0% |
| 8回 H22.3.4 | 34人 | 5人 | 12人 | 51人 | 68.9% |
| 9回 H22.7.1 | 35人 | 4人 | 10人 | 49人 | 64.5% |
| 10回 H22.12.8 | 33人 | 4人 | 10人 | 47人 | 61.8% |
| 11回 H23.3.4 | 35人 | 4人 | 10人 | 49人 | 64.5% |

3) グループワークによって明らかになった地域課題と対策

①【課題明確化】の段階で明らかになった課題

第1～3回【課題明確化】の研修におけるKJ法によるグループワークで、合計46の課題に関する表題が挙がった。これらの表題を意味の類似性によって分類したところ、次表に示す11項目に分類できた。

所属は甲府市の10箇所の地域包括支援センターをA～J包括と表記して示した。

グループワークによって明らかになった課題

| 共通内容 | グループワークによって明らかにされた課題 | 所属 |
|---|---|---|
| 1.地域包括センターの認知度・理解度が低い | 地域包括センターの認知度は低く、正しい理解がされていない | A包括 |
| | 予算の問題もあり周知が徹底していない | B・C包括 |
| | 包括の役割が理解されていない | D包括 |
| | 公共機関である包括支援センターの機能が理解されていない | G・H包括 |
| 2.地域の実態把握不足と関わり方の未整備 | 地区組織とのかかわりがうすく、入り方に課題がある | B・C包括 |
| | 個々のニーズは見えても、地域全体のニーズは捉えにくい | D包括 |
| | 高齢者が集まる場所や集まりが把握できていない | |
| | 地域になかなか出られず、十分把握できていない | E・F包括 |
| | プライバシー保護のためスムーズに情報収集できない | G・H包括 |
| | 生活機能評価の情報がデータ化されていない | 市 |
| | 総合相談の環境が整わない | |
| | 包括への支援が不十分 | |
| | 市民の実態がつかみにくい | |
| 3.関係者・関係組織間での方針の共有や意思の確認が不十分 | 保険者との委託業務の中での研修・個人情報ケースの優先順位に問題 | B・C包括 |
| | 役所内は縦割りなので、連携が取りづらい | 市 |

| | | |
|---|---|---|
| | 教員がお互いの専門性を言語化していない | 大学 |
| | 最終的な教育プログラムの到達点を共有できていない | |
| 4.対象者の高齢化と地域での孤立化 | 独居の高齢者の世帯が多い | A 包括 |
| | 隣近所との関わりが薄く、支援・助けが少ない | |
| | 地区の中で集まれる場所が不足している（引っ越してきたばかりの人は昔からの老人クラブに入りづらい） | D 包括 |
| | 高齢者の集まる場所がない社会から孤立した老人が多いので生きがい役割が見つけにくい | I・J 包括 |
| | 孤立した独居高齢者が多い。特に団地に密集している | |
| 5.支援の目から漏れてしまう人たちの存在 | 地域活動・情報収集にもれてしまう人に支援の手が届いていない | B・C 包括 |
| | 虐待の疑いがあるケースが眠っている可能性がある | D 包括 |
| | 埋もれているケースが発見できない | G 包括<br>H 包括 |
| | 事務業務に追われてしまい埋もれているケースのフォローが出来ない | |
| | 引きこもりの人が多いのではないか？（団地・アパート etc） | I・J 包括 |
| 6.多問題の事例への対応に苦慮している | 問題のある家庭ほど、支援に手間がかかる | A 包括 |
| | 認知症が重症となり、かかわりが困難 | B・C 包括 |
| | 多問題ケースで別のことができない | E・F 包括 |
| 7.活動の評価が不十分で達成感がない | 達成感を味わうことがなく、不全感が残る毎日 | E・F 包括 |
| | 個別ケース対応は評価されにくい | 市 |
| | 演習の評価指標が明確ではない | 大学 |
| 8.生活基盤の不便さが問題を増幅 | バスに乗ることが大変である | A 包括 |
| | 外出手段がなく閉じこもりがちの方もいる | D 包括 |
| | 市内は駐車場がない家が多く困る | E・F 包括 |
| | 山村地域の為困りごとを解決するすべがない | I 包括<br>J 包括 |
| | 銀行・ATM、店や大型スーパーが少ないため、買い物など不便である | |
| 9.介護予防への関心や参加が少ない | 介護予防事業への参加・継続が難しい | B・C 包括 |
| | 介護保険・介護予防に興味がなく現役で頑張っている | G・H 包括 |
| | 予防事業は分かりにくいので、理解されにくい | 市 |
| 10.マンパワー不足による負担が大きい | 人の配置が同年代に固まったため、夜間動ける人に負担がかかる | E・F 包括 |
| | 業務量が多いが職員が少なく負担が大きい | 市 |
| | 実施上の教員のパワー（数・時間）が足りなかった | 大学 |
| 11.地域の組織力や人力を生かした活動ができていない | 元気な高齢者の力をうまく生かされていない | A 包括 |
| | 地域によって組織力や貧富の差があり、地域への働きかけが難しい | G・H 包括 |

② 【課題解決に向けた解決策の検討】の段階で明らかになった解決策

第 4～6 回【課題解決に向けた解決策の検討】の研修における KJ 法によるグループワークで、合計 45 の解決策が挙がった。これらの解決策を意味の類似性によって分類したところ、次表に示す 6 項目に分類できた。

グループワークによって明らかになった解決策

| 共通内容 | グループワークによって明らかにされた解決策 | 所属 |
|---|---|---|
| 1.地域に出て、当事者、関係者や関係団体をよく知り、つながりをつくる | 地域において協力できる人たちの組織化を行う | A 包括 |
| | 定期的にセンター主催の講座を開催し、参加者の把握を行う。その方たちを組織化して、必要な時に依頼を受けてもらえるような関係づくりを行う | |
| | 地区組織との顔の見える関係づくりをする | B 包括<br>C 包括 |
| | 地域へのつながりをつくる | |

| | | |
|---|---|---|
| | 地域のデータや利便性等、必要な情報を個々のケースや地区組織より収集し、地域の課題を明確にする | D 包括 |
| | 地域に出ていき、各団体に働きかける | E・F 包括 |
| | 地域に出向く | G 包括<br>H 包括 |
| | ケースの発掘の機会をつくる | |
| | 地域組織との関係づくり | |
| | 個別の関係づくり | |
| | 今あるクラブを詳しく知り、仲間づくりのヒントを得る | I・J 包括 |
| | 教員が協働で地域に出る | 大学 |
| 2.包括支援センターの名称、業務内容、啓蒙情報の周知を図る | 地域包括支援センターの名称を多くの人に知ってもらう | A 包括 |
| | 地域包括支援センターの業務内容を多くの人に知ってもらう | |
| | 包括支援センターを知ってもらう手立て | B 包括<br>C 包括 |
| | 認知症啓発をする | |
| | 住民や医療機関に包括の周知を図る | D 包括 |
| | 私たちは情報を知りたいと思っているということを発信する(通信で伝える、個人に伝える) | |
| | 包括を PR し、正しく理解してもらう | G 包括<br>H 包括 |
| | 介護予防の必要性を正しく理解してもらう | |
| | 予防事業には周知が大切 | 市 |
| 3.組織内と各支援組織との横の連携を図る | 健診などを通じて職員が健康管理し、総合相談など個々のケースから事例など通じ、信頼関係をつくり、協働でチームで関わっていく | B 包括<br>C 包括 |
| | 市役所の障がい・衛生・生保など関係機関、部署と連携をとることで、多問題ケースの虐待を発見する | D 包括 |
| | 関係機関と情報の共有をしていく | |
| | 開業医との関係をつくる | E 包括<br>F 包括 |
| | ネットワークの整理をする | |
| | 市役所内で連携をする | 市 |
| | 関係機関との情報共有する | |
| | 既存の実習も活用し、連携する | 大学 |
| | 両学部の教員が互いの授業に参加する | |
| | 学生と教員が協働する場をもつ | |
| 4.地域住民や高齢者自らが取り組む活動の場づくりと支援を行う | 地域包括支援センターが主催の地域組織を立ち上げ、活動の周知や見守り等の役割をもたせて、地域住民で活発なまちづくりを行う | A 包括 |
| | 集まれる場所の把握と整理をする | D 包括 |
| | 高齢者の活躍できる場をつくったり、つなげたりする | I 包括<br>J 包括 |
| | 高齢者が外出や買い物が楽しくできるように働きかける | |
| 5.組織内及び関係者の能力アップを図る | ニーズ把握、データ分析の手法を私たち自身が学んで実践する | D 包括 |
| | 人材育成とその支援を行う | |
| | 毎日業務に追われ何となく終わってしまうのではなく、自分自身の月間目標(ちょっと頑張れば叶うもの)を立てて、仕事を行う | E 包括<br>F 包括 |
| | 認知症、精神科疾患　キャラバンメイトでサポーター養成をする | I・J 包括 |
| | スキルアップが大切 | 市 |
| | 事例検討など互いに専門性を出し合う場を設ける | 大学 |
| 6.その他 | 予防給付を制限し、時間をとる | E・F 包括 |
| | 密着・個別相談で解決策をさぐる | I・J 包括 |
| | 包括の求めていることを知る | 市 |
| | 演習のビジョンとゴールを可視化する | 大学 |

③【解決策実践の検証と戦略の明確化】の段階における検討した成果目標

第7～11回は【解決策実践の検証と戦略の明確化】の研修を行った。

第7・8回の研修では、第6回までに明らかにした解決策に沿った実践の過程を写真に撮ってきてもらい、写真分析法による実践の検証を行った。

第9回～11回の研修では、戦略フォームに沿って、「重要課題」「具体的施策」「成果目標」を明らかにし、それに沿った実践をやはり写真に撮ってきてもらい、再び写真分析法にてその実践課程を検証した。

第9回研修時のグループワークで作成した戦略フォームのうち、「成果目標」は合計80の項目が挙がった。これらの成果目標を意味の類似性によって分類したところ、次表に示すように、8項目に分類できた。

これらの記述には、「○%増える」「○回実施する」など具体的な数値目標が表記されていたり、活動のターゲットも具体的に名前が挙がっていたりするものが多く、実践すべきことが明確になっていることが伺われた。

グループワークによって明らかになった成果目標

| 共通内容 | グループワークによって明らかにされた成果目標 | 所属 |
|---|---|---|
| 1.住民、関係機関からの相談や連絡が増える | 住民側からの相談件数が、月毎に徐々に増える | A包括 |
| | 地区組織からの相談件数が増える | B包括 |
| | 開業医からの特定高齢者候補者、介護認定必要者の情報が得られる | |
| | 虐待相談等、事業所からの相談があがる | C包括 |
| | 早い段階での虐待相談件数が増える | D包括 |
| | 本人、家族からの相談件数が増える | |
| | 医療機関からの特定、介護保険必要者の連絡が増える | |
| | 民生委員から特定、介護保険必要者の連絡が増える | |
| | 各機関からの連絡件数が昨年比120%アップ | |
| | 地域からの総合相談が前年に比べ増える | F包括 |
| | 相談件数が昨年度より5%以上増える | G包括 |
| | 民生委員等の会議でパワーポイントを使い、予防事業を理解してもらい、予防事業への参加が望ましい高齢者の情報が寄せられる | H包括 |
| | 本人からの総合相談が200件になる | I包括 |
| 2.住民に身近な場での相談会や教室の開催機会が増える | 福祉センターでの介護相談を1回行う | G包括 |
| | ミニ介護相談会がA地区・B地区にて、各1自治会ずつモデル的に開催する(計2回) | |
| | 地区の文化・健康まつりや高齢者慰安会等に 相談コーナーの設置を行う | H包括 |
| | スーパーマーケットで認知症サポーター養成講座を開催する | I包括 |
| | 出張相談ブースがつくれる | |
| | 家族介護教室を年間3回開催する | |
| | 講義の依頼件数や研修の参加人数が、昨年度より2割増える | A包括 |
| | 老人クラブの講師の依頼が増える | B包括 |
| | 教室の依頼、認知症サポーターの依頼が増える | C包括 |
| | 地域からの講師依頼が増える | F包括 |

| | | |
|---|---|---|
| | 各組織との顔の見える連携を行うことで、総合相談件数の増加・認知症サポーター養成講座・介護予防教室の講師依頼の件数が増加する | D 包括 |
| | 高齢者の集いに参加して介護予防講座等を行なう回数が増える | |
| 3.地区組織や事業所間の交流やネットワークが広がる | 地区の組織間での情報交換会が開催できる | A 包括 |
| | 担当地区内にある介護サービス事業所同士での交流会が開催できる | |
| | ケアマネ交流会を2回開催 | C 包括 |
| | 事業所研修会を1回開催する | |
| | 各組織に出向き、ケースを通じてネットワーク化についての話が1回はできる | E 包括 |
| | 民生委員を対象にネットワークの必要性を理解してもらうための研修会を1回行う | G 包括 |
| | 介護予防事業利用者の声を機関誌に掲載したり、福祉センター等で行っている予防教室やお達者くらぶの紹介を行う | H 包括 |
| | 地域ケア会議の開催が年間 50 ケース（5年間で250ケース）となる | I 包括 |
| 4.機関紙を置く場所を開拓し、若年から高齢まで幅広い年齢層に包括の PR を行う | 民間企業への機関紙の配布先が増える | A 包括 |
| | 各機関の担当者が把握できる | D 包括 |
| | 新たな働きかけを行う組織へコンタクトを取る事ができる | E 包括 |
| | 機関誌は、生活に役立つ情報や地域の元気高齢者を紹介して興味を持ってもらえる内容で毎月発行する | H 包括 |
| | 機関誌は毎月残数をカウントし、配布率50%を超える | |
| | 年間200件に個別訪問し、PR活動を行う | |
| | 出来る限り、各関係機関の会議に出席する | |
| | 機関誌配布が 1500 部となる | I 包括 |
| | 機関誌の記事の協力者年間 100 人になる | |
| | 地域の高校の校内に機関紙を掲示してもらうことができる | J 包括 |
| | 地域の銭湯や病院に機関紙を置くことが出来る | |
| | 地域の行事や高齢者の集まる場所に出向く | |
| | C 団地に機関紙を掲示することが出来る | |
| 5.地域から得られた情報を効果的に整理・分析する | 独り暮らし高齢者の情報共有・実態把握ができる | B 包括 |
| | 年度末に総合相談の分析ができる | C 包括 |
| | 整理されたファイルが用意できる | D 包括 |
| | 地図を作成する | |
| | 予防事業の説明を行いながら、参加者に基本チェックリストを記入してもらい、予防事業への参加が望ましい高齢者を発見出来る | H 包括 |
| | 民生委員、婦人部、利用者さん等から情報収集をしマップ作りにとりかかる | J 包括 |
| 6.支援を必要とする人々をサポートする住民ボランティアが増え、その活動が活発になる | 認知症サポーター数が増える | B 包括 |
| | 認知症になっても地域で暮らせると思う人が増える | |
| | 身近な所に住民の集まる場所ができる | |
| | 地域活動に参加する人が増える | |
| | ボランティアや住民が主体となった活動ができるようになる | |
| | 60 歳以下のサポーターを50名以上育成する。 | C 包括 |

| | | |
|---|---|---|
| | フォローアップ講座を年度内に1回開催する | |
| | サポーターが 50 人増える | F 包括 |
| | サポーターから、具体的な個別相談が増える | |
| | サポーターから、「地域のために何か活動したい」という声があがり、意識を高めることが出来る | |
| | 65歳以下の住民を対象にした認知症サポーター養成講座を1回行う | G 包括 |
| | フォローアップ講座を1回行う | |
| | 一般住民向けの認知症サポーター養成を開催する | H 包括 |
| | 現在活動しているボランティアグループの活動がより活発になり、見守り活動を行う | |
| | 他の地域で行っている活動を紹介したことによりボランティアや住民が自主的な活動を行うようになる | |
| | 65 才未満のサポーターが 65 才以上のサポーターを上回る | I 包括 |
| | 自治会で高齢者が一人一役の役割を持って参加する | |
| | 地域ケア会議へ地域住民・ボランティアが参加する | |
| | 地域の学校に今後の学校行事の中にサポーター養成講座の開催を組み込んでもらうことが出来る | J 包括 |
| 7.包括職員の健康が保て満足感や達成感が得られる | 各職員ごとに決めた業務終了時間に帰る。 | C 包括 |
| | 包括職員が健診で要検査にならない。 | |
| | スタッフの満足度 120%アップ | D 包括 |
| | 残業が減り、定時で帰宅できる | G 包括 |
| | 介護予防支援再委託件数が10件増える | |
| 8.担当者間で情報や方針の共有が出来る | 担当者不在でも、個々のケースに対応できる | F 包括 |
| | 年間スケジュールに沿った業務を行う | G 包括 |
| | 資料を誰が見てもわかるように整理されている | F 包括 |
| | 研修内容を全員が共有できる | |

〈研修の様子〉 H22.7.1　第9回研修会　　戦略フォーム作成の様子



戦略フォームに付箋をはっていきます



山浦先生の心強いアドバイス



みんなで意見を出し合って



どんな成果目標をたてようか・・・



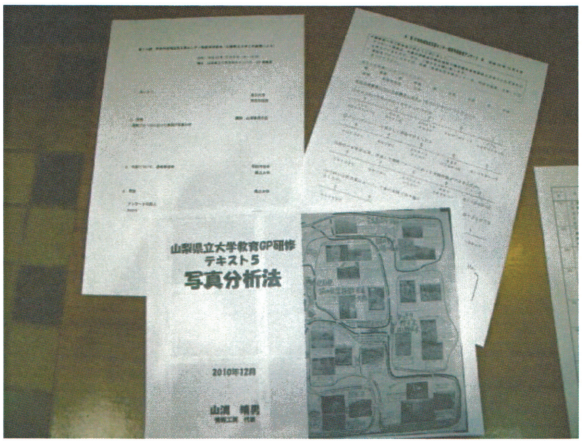
メンバーの息も合っています





教員も甲府市職員も一緒に
自分たちの課題を検討します

〈研修の様子〉 H22.12.9　第 10 回研修会　　写真分析の様子




写真分析のテキスト



分析に使用する写真を選びます



写真を模造紙上に分類します



写真の「島」の意味を付箋に書いて・・・



だんだんと構造が明らかになってきました



KJ 法の作業も慣れてきましたね

### (2) その他の研修

#### 1) 成年後見法施行10周年記念講演会

山梨県立大学教育ＧＰ・地域研究交流センターの共催講座として実施した。

① テーマ　「あなたの財産を誰に託しますか？」―超高齢化社会における地域連携と法―
② 日時　　平成22年7月23日（金）　午後6時～7時30分
③ 場所　　山梨県立大学　飯田キャンパス講堂
④ 講師　　新井　誠　筑波大学法科大学院教授
　　日本成年後見法学会理事長　日本信託法学会常務理事
⑤ 参加者数　84名
⑥ 参加者種別　甲府市地域包括支援センター職員、県下他市町村地域包括支援センター職員
　　山梨県保健福祉事務所職員、県下市町村職員、訪問看護ステーション
　　証券会社社員、障がい者支援センター職員、病院職員、司法書士、民生委員、
　　一般市民、県立大学大学院生・学部学生、県立大学教員　他

#### 2) 地域支援ネットワークづくりの事例から学ぶ

認知症の見守りネットワークづくりの先駆的な活動に取り組む富士宮市の地域包括支援センターの事例から、地域支援体制づくりのヒントを得る目的で実施した。

① テーマ　認知症になっても、住み慣れた地域で自分らしく笑顔でくらすために
② 日時　　平成23年3月4日（金）午後1時30分～3時
③ 場所　　山梨県立大学　池田キャンパス　２０１講義室
④ 講師　　藤田　博美　　富士宮市　福祉総合相談課　地域包括支援センター
⑤ 参加者数　69名

## 3. アンケート結果

### (1) アンケート内容

本研修会では、研修の目標達成の評価を行うことと、研修内容や研修方法への意見を聞き研修にフィードバックさせることを目的にアンケートを実施した。実施したアンケート内容は、次表のとおりである。研修の成果を評価するアンケートとは別に、研修方法や内容の改善への意見を問うための自由記述式アンケートを適宜行った。

アンケート内容

| アンケート目的 | 実施回 | アンケート内容 | 回答方法 |
|---|---|---|---|
| 研修会の目標達成評価 | 第6回 | 目標1について<br>・地域の課題を分析し明らかにすることが出来たか<br>目標2について<br>・課題解決にむけての方向性が明らかになったか<br>目標3について<br>・具体的な方策は業務につなげることが出来そうか<br>目標4に関して<br>・共同作業を進めるプロセスにより参加者の共通理解を深められたか | とてもよくできた・ややできた・どちらともいえない・あまりできなかった・まったくできなかった（問いによる表現の違いあり）の5段階選択肢による回答 |
| | 第7回 | 目標3に関して | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | ・前回研修会で検討した方策を実践出来たか | |
| | 第8回 | 目標3に関して<br>・研修会での成果を今後の業務につなげられそうか | |
| | 第9回 | 目標3に関して<br>・活動の重点課題と目標設定・具体的戦略整理についての達成感はどうか<br>目標4に関して<br>・これまでの研修会によって専門職間の理解や協働がすすんだか | |
| | 第10回 | 目標3に関して<br>・前回の研修会以降、作成した戦略フォームに沿った実践活動ができたか<br>・今回の分析作業によって、今後の実践で取り組むべきことや方向性を見出すことができたか<br>目標4に関して<br>・グループメンバーで協力して実施できたか | |
| | 第11回 | 目標1について<br>・地域の課題を分析し明らかにすることが出来たか<br>目標2について<br>・課題解決にむけての方向性が明らかになったか<br>目標3について<br>・具体的な方策は業務につなげることが出来そうか<br>目標4に関して<br>・共同作業を進めるプロセスにより参加者の共通理解を深められたか | |
| 研修会の内容,方法への意見をきく | 第1回、第4回を除く全回 | この研修会への要望・意見・感想など | 自由記述で回答を求めた |

**(2) アンケート結果**

**1) 研修目標に沿って作成した5段階選択肢質問への回答結果**

研修会の目標達成の評価を目的に行った問いへの回答の結果を以下に示した。

**① 目標1「地域の課題を分析し明らかにする」、目標2「課題解決に向けての方向性が明確になる」を評価する問いへの回答結果**

目標1、目標2については、研修段階2が終了した第6回の研修終了後に評価のためのアンケートを実施した。

その結果、目標1に関しては、次図に示すように「地域の課題を明らかにすることができたか」という問いに対し、84.6%の者が「とてもよくできた」あるいは「ややできた」と回答していた。

目標2に関しては、次図に示すように、「課題の解決に向けての方向性が明らかになったか」という問いに対し、88.5%の者が「非常に明らかになった」「やや明らかになった」と回答していた。

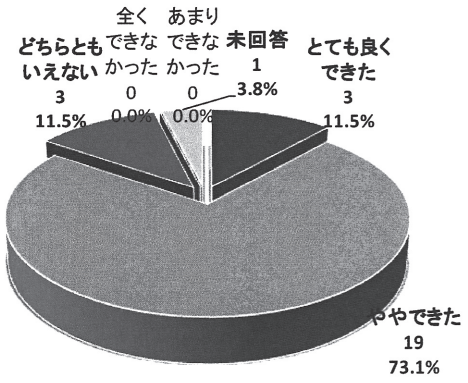



**図　地域の課題を分析し明らかにすることができたか（第6回研修後実施）** 回答数 26 名

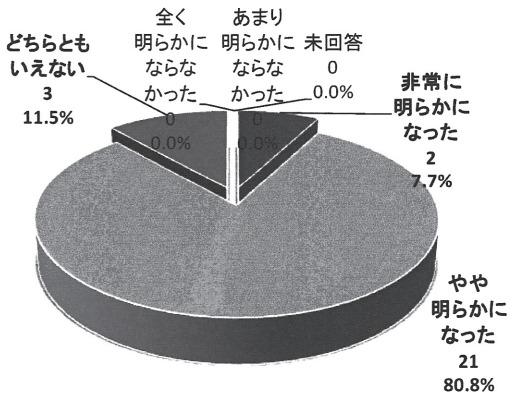



**図　課題の解決に向けての方向性が明らかになったか（第6回研修後実施）** 回答数 26 名

② 目標 3「**具体的な解決策を検討し、業務につなげることができる**」を評価する問いへの回答結果

次の図に示したように「具体的な解決策は業務につなげることができそうか」という問いに対し、第 6 回研修後の回答では、「とてもできそう」「ややできそう」と回答した者は、合わせて 46.2%にとどまっているが、第 7 回研修後の、「方策を実践する活動が出来たか」という問いに対し、「かなりできた」「ややできた」と回答した者は合わせて 75.9%、第 8 回研修後では、「研修会での成果を今後の業務につながること出来そうか」という問いに、「できそう」「ややできそう」と回答した者は合わせて 97.1%にのぼっている。また、第 9 回研修実施後の、「活動の重点課題と目標設定・具体的戦略整理についての達成感」について、「達成感がある」「やや達成感がある」と回答した者は合計 78.1%であった。さらに、第 10 回研修会実施後の「前回の研修会以降、作成した戦略フォームに沿った実践活動ができたか」という問いに、「できた」「ややできた」と回答した者は合計 87.8%、「今回の分析作業によって、今後の実践で取り組むべきことや方向性を見出すことができたか」という問いに、「できた」「ややできた」と回答した者は合計 87.8%であった。

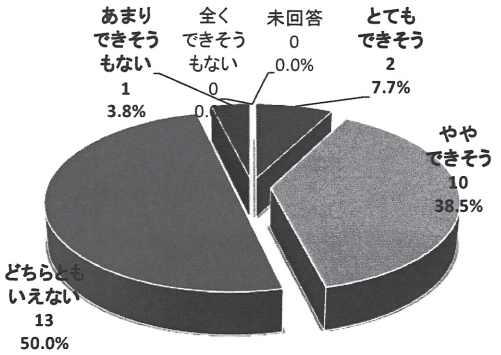



**図　具体的な方策は業務につなげることができそうか**（第6回研修後実施）回答数 26 名

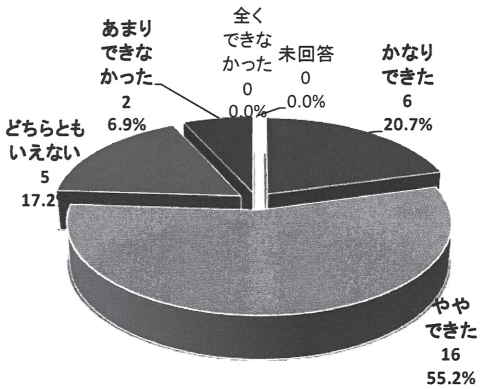



**図　方策を実践する活動ができましたか（第7回研修後実施）　回答者数 29 名**

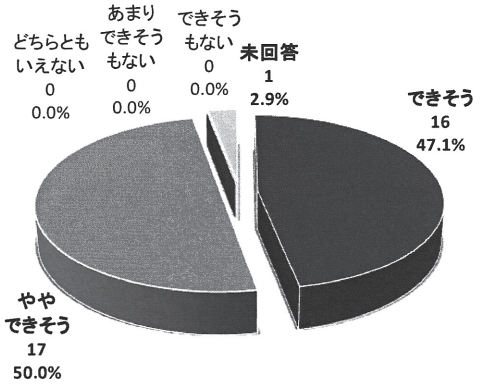



**図** 研修会での成果を今後の業務につなげることができそうですか（第8回研修後実施）回答者数 34 名

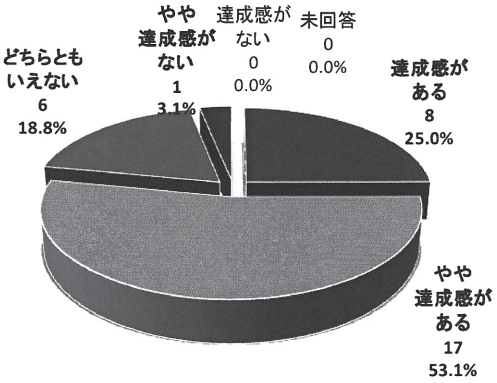



**図** 活動の重点課題と目標設定・具体的戦略整理についての達成感（第9回研修後実施）回答者数 32 名

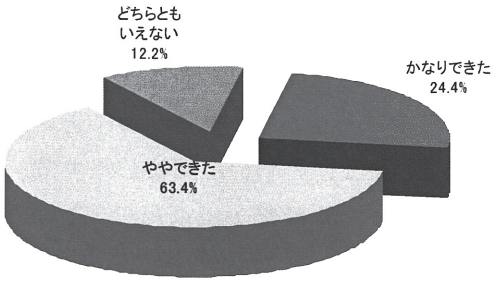



**図** 前回の研修会以降、作製した戦略フォームに沿った実践活動ができたか（第 10 回研修後実施）回答者数 41 名

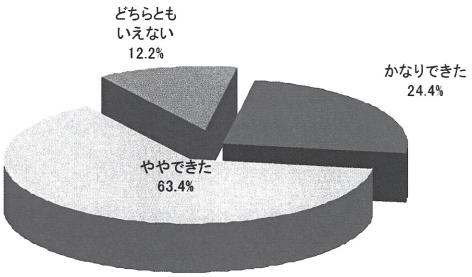



**図** 今回の分析作業で、今後の実践で取り組むべきことや方向性を見出せたか（第 10 回研修後実施）回答者数 41 名

### ③ 目標 4「共同作業を進めるプロセスにより参加者の共通理解を深めることができる」を評価する問いへの回答結果

次図に示すように、第 6 回研修会終了時、「共同作業を進めるプロセスにより参加者の共通理解を深めることができたか」という問いに対し、100%の者が、「とてもよくできた」「よくできた」と回答した。また、第 9 回研修会終了時、「専門職間での理解や協働がすすんだか」という問いに対し、「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した者は合わせて 75%であった。第 10 回研修会終了時、「グループメンバーで協力してできたか」という問いに対し、100%の者が、「かなりできた」「ややできた」と回答した。

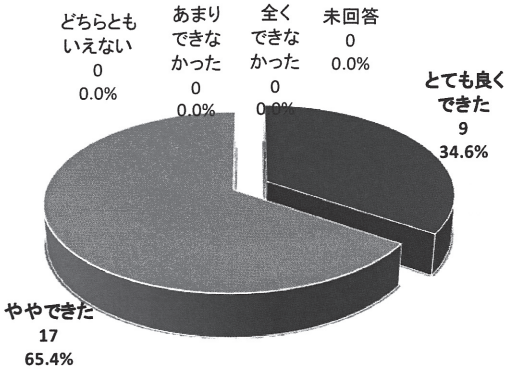



**図** 共同作業を進めるプロセスにより参加者の共通理解を深めることができたか（第6回研修後実施） 回答数 26 名

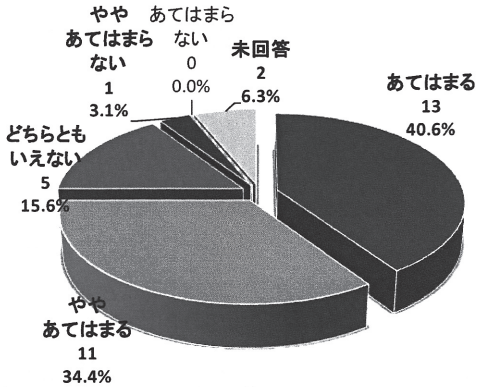



**図** 専門職間の理解や協働がすすんだか（第9回研修後実施） 回答者数 32 名

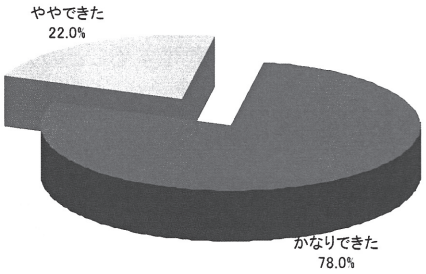



**図 グループメンバーで協力してできたか（第 10 回研修後実施）回答者数 41 名**

2) **自由記述内容の研修目標ごとの分類結果**

① **目標 1「地域の課題を分析し明らかにする」に関する記述**

アンケートの自由記述から、目標 1 に関した記述内容を抽出し、研修の段階ごとに、意味内容の類似性によって分類した結果を次表に示した。

研修段階 1 の目標 1 に関する記述は、「KJ 法により課題が次第に明らかになり、楽しく取り組める」「担当地域の特性が見えてきて気づきや学びが多く仕事に活かせそう」「普段できない業務の振り返りが出来、新しい発見があり、有意義である」の 3 項目に分類できた。

研修段階 2 の目標 1 に関する記述は、「問題や課題が図式化され目に見える形となり解決策に結びつけることが出来た」の 1 項目に集約できた。

研修段階 3 の目標 1 に関する記述は、「他の包括の発表を聞きつつ所属包括の課題が明らかになった」「課題がはっきりし今後の活動に活かすことが出来る」「包括職員間で課題の再認識と共有が出来た」の 3 項目に分類できた。

**表 目標1「地域の課題を分析し明らかにする」に関する記述**

| 研修段階 | 分類項目 | コード |
|---|---|---|
| 研修段階1<br>第 1～3 回<br><br>研修テーマ<br>【課題明確化】 | KJ 法により課題が次第に明らかになり、楽しく取り組める | 課題が明らかになり今後が楽しみ |
| | | 細かい作業だが問題がはっきりしつつある |
| | | グループワークにより課題が整理された |
| | | KJ 法によって包括の持つ課題が浮かび上がった |
| | | 課題も明確になり KJ 法の楽しさも分かった |
| | 担当地域の特性が見えてきて気づきや学びが多く仕事に活かせそう | 地域のことが少しづつ見えてきた |
| | | 地域の特性がわかって楽しい |
| | | 地域の特性が見えてきて仕事に活かせる |
| | | 高齢者に住みやすい穏やかな地域づくりが必要であることが見えてきた |
| | | 地域が見えてきた |
| | | 表面化していなかった地域の特性や問題点が見えて学びが大きかった |
| | | 改めて地域を知ることができ仕事に活かしていける |
| | 普段できない業務の振り返りが出来、新しい発見があり、有意義である | 日頃できない業務の振り返りができてよかった |
| | | 意識して考えることができなかったことが見えて刺激となった |
| | | 業務を振り返り自分自身の問題が分かった |
| | | 適度に緊張しながら参加し業務を見直すきっかけとなっている |
| | | 業務につながる研修で充実している |
| | | 新しい発見があり楽しい研修 |
| | | 予想以上に楽しくさまざまな発見があった |

| | | |
|---|---|---|
| 研修段階2<br>第 4～6 回<br><br>研修テーマ<br>【課題解決に向けた解決策の検討】 | 問題や課題が図式化され目に見える形となり解決策に結びつけることが出来た | 普段感じていた問題が整理され課題としてはっきりとした |
| | | 問題点が見えてきた |
| | | 課題が目に見える形ととなった。思考を視覚化することの大切さを再認識した |
| | | 地域がより明確に見え課題がはっきりした |
| | | 課題が見えてきた |
| | | 自分たちの課題が明らかになった |
| | | 自分たちの課題が図式化された |
| | | 問題点の再確認ができた |
| | | 作業の中で問題や解決策が明確になった。 |
| | | 課題が明確になった |
| | | KJ法によって問題点がみえて良かった |
| | | 課題について検討できた |
| 研修段階3<br>第 7～11 回<br><br>研修テーマ<br>【解決策実践の検証と戦略の明確化】 | 他の包括の発表を聞きつつ所属包括の課題が明らかになった | 各包括の課題が明確になり目標が定まりやすくなった |
| | | 他の包括の発表を聞き課題がよりはっきりとした |
| | 課題がはっきりし今後の活動に活かすことが出来る | 日々の業務で気付けない課題に気付く機会だった |
| | | 課題が分かり今後の仕事に活かせそう |
| | | 課題を見出す一方法として意義があった |
| | | 課題が見えたので来年度の活動に活かせる |
| | | 課題が見え今後に期待できる |
| | | 実践の確認ができ課題を整理できた |
| | | 不足している活動を客観的に分析できた |
| | | 課題解決に向け考えることができた |
| | 包括職員間で課題の再認識と共有が出来た | 課題を包括内の職員間で再認識できた |
| | | 職員間で共通認識を深め業務に取り組みたい |

② 目標 2「課題解決に向けての方向性が明確になる」に関する記述

アンケートの自由記述から、目標２に関した記載内容を抽出し、研修の段階ごとに意味内容の類似性によって分類した結果を次表に示した。研修段階１では、目標2に関する記述はなかった。研修段階２では、「するべきこと、解決策が明確になった」「参加者が少なく内容が深まらなかった」の２項目に分類できた。研修段階３では、「日々の業務の整理が出来た」「今後の業務ですべきことが分かった」「地域の課題を意識しながら業務に取り組む姿勢が持てた」「他包括の活動を聞き、視野を広げることが出来た」「目標を持って活動するという意識の重要性に気付けた」の５項目に分類できた。

表　目標2「課題解決に向けての方向性が明確になる」に関する記述

| 研修段階 | カテゴリー | コード |
|---|---|---|
| 研修段階 1<br>第 1～3 回<br>研修テーマ<br>【課題明確化】 | | |
| 研修段階 2<br>第 4～6 回<br><br>研修テーマ<br>【課題解決に向 | するべきこと、解決策が明確になった | 行動すべき課題が見えた気になった |
| | | 包括職員で導いた地域の課題から解決策がみえてきてすっきりした |
| | | 地道に地域住民に働きかけることが大切と実感した |
| | | 出来ることを検討する機会が持てた |
| | | 職員同士で解決策を具体化できた |

| | | |
|---|---|---|
| けた解決策の検討】 | | 今後の業務や方向性が見えて楽になった |
| | | KJ 法によって解決策が見えてよかった |
| | 参加者が少なく内容が深まらなかった | 所属包括からの参加人数が少なく深まらなかった |
| 研修段階 3 第 7～11 回 研修テーマ【解決策実践の検証と戦略の明確化】 | 日々の業務の整理が出来た | 業務内容の整理ができ達成感があった |
| | | 包括職員間で日々の業務の整理が共に出来た |
| | 今後の業務ですべきことが分かった | 今後すべき仕事が明確になった |
| | | 地域組織を活かしてネットワークを構築するという業務の振り返りが出来た |
| | | 今後の活動について新しい発見があった |
| | | 何をすべきか分かってよかった |
| | 地域の課題を意識しながら業務に取り組む姿勢が持てた | 課題を認識して業務に取り組む機会となった |
| | | 課題を持って業務に取り組む姿勢が足りないことがわかった |
| | | 地域の課題と包括の役割について改めて考える機会となった |
| | 他包括の活動を聞き、視野を広げることが出来た | 自分の地域を広い視野で見れ改めて社会資源に気付けた |
| | | 他包括の活動を参考に今後に活かしたい |
| | | 他の包括の活動を聞け業務の振り返りができた |
| | 目標を持って活動するという意識の重要性に気付けた | 目標を持つという意識が欠けていたと気付けた |
| | | まだ理解が不十分だが目的が見えた |
| | | 満足のいく目標設定が出来なかった |
| | | 現実可能な目標ラインになった |

③ 目標 3「具体的な解決策を検討し、業務につなげることができる」に関する記述

アンケートの自由記述から、目標 3 に関した記述内容を抽出し、研修の段階別に意味内容の類似性によって分類した結果を次表に示した。研修段階 1 では目標 3 に関する記述はなかった。研修段階 2 では、「方策を具体化して実践していきたい」の 1 項目に集約できた。研修段階 3 では、「地域に出向くことが楽しくなり効果が見えてきた」「反省点を活かし来年度に向けてがんばりたい」「活動が可視化でき達成感がある」「他包括の活動を自分の包括にも活かしたい」「具体的な方策を挙げることが重要である」の 5 項目に分類できた。

表　目標3「具体的な方策を検討し業務に繋げることができる」に関する記述

| 研修段階 | 分類項目 | コード |
|---|---|---|
| 研修段階 1 第 1～3 回 研修テーマ【課題明確化】 | | |
| 研修段階 2 第 4～6 回 研修テーマ【課題解決に向けた解決策の検討】 | 方策を具体化して実践していきたい | 具体的なことのほうが実践につながる |
| | | 実践できればと思う |
| | | 今後の実態把握や活動に活かしたい |
| | | 実行してみて結果が楽しみ |
| 研修段階 3 第 7～11 回 研修テーマ【解決策実践の検証と戦略の明確化】 | 地域に出向くことが楽しくなり効果が見えてきた | 地域に出向くきっかけになった |
| | | 地域に出向くのが楽しくなった |
| | | 地域に出向く効果が見えてきた |
| | 反省点を活かし来年度に向けてがんばりたい | 思い通りの活動ができなかったという反省を来年度の活動に活かしたい |
| | | 業務を振り返れたので来年の活動計画に活かしたい |
| | | できることをひとつずつ皆で検討して実践していきたい |

| | | |
|---|---|---|
| | | 問題点が把握できたので来年度の活動に活かしたい |
| | | 世代間交流をし高齢者の生活を支えるネットワークづくりをしたい |
| | | 実践に結び付けられるよう詰めていきたい |
| | 活動が可視化でき達成感がある | 活動の様子がよくわかった |
| | | 今までの活動が可視化でき達成感があった |
| | | 実践を反映した結果になったか疑問だが楽しくできた |
| | | 包括の活動の様子がよくわかった |
| | 他包括の活動を自分の包括にも活かしたい | 他の包括のよい活動を自分の包括でも取り入れ体制整備をしたい |
| | 具体的な方策を挙げることが重要である | 具体的な戦略を考えるにあたり新しい発想の具体策を挙げることに苦労した |
| | | 具体的な行動が取れやすくなった |

### ④ 目標4「共同作業を進めるプロセスにより参加者の共通理解を深めることができる」に関する記述

自由記述から、目標4に関した記述内容を抽出し、研修の段階別に意味内容の類似性によって分類した結果を次表に示した。研修段階1では、「他包括の現状や課題が知れてよかった」「他包括との共通の課題やそれぞれの特徴が分かりよかった」「他包括職員との意見交換がよかった」「グループワークは楽しい」「職員同士気持ちを分かち合い一体感が生まれた」「意見交換で新たな発見が出来た」「回によってメンバー構成が変わり深められなかった」の7項目に分類できた。研修段階2では、「職員の考えや意見を知ることが出来、気付きがあった」「参加者との交流が図れて関係が密になった」「職員同士共に考え話し合えた」「職員同士の考えを共有できた」「参加人数が少ないと達成感が薄い」の5項目に分類できた。研修段階3では、「他の包括の活動の様子を確認できてよかった」「職員同士協働して活動する機会となった」「各専門職からの意見や発想が乏しかった」の3項目に分類できた。

表　目標4「共同作業を進めるプロセスにより参加者の共通理解を深めることができる」に関する記述

| 研修段階 | 分類項目 | コード |
|---|---|---|
| 研修段階3<br>第1～3回<br><br>研修テーマ<br>【課題明確化】 | 他包括の現状や課題が知れてよかった | 他の包括の現状が理解でき今後が楽しみ |
| | | 他の包括の抱える問題を聞く機会が持て勉強になった |
| | | 各包括の問題が聞けてよかった |
| | | 日常業務の中で感じることを共有化でき、他の包括の課題の共有もできた |
| | | 他の包括の状況が参考になった |
| | 他包括との共通の課題やそれぞれの特徴が分かりよかった | 他の包括と共通した課題については解決策を共に考える機会があるとよい |
| | | 他の包括と共通の悩みが明らかになり面白かった |
| | | 他包括の発表を聞き共通部分や違う部分があり興味深かった |
| | 他包括職員との意見交換がよかった | 他の包括の職員との意見交換は参考になる |
| | | 他の包括と意見交換ができよかった |
| | グループワークは楽しい | 同じ職場のものと作業でき楽しかった |
| | | 他のスタッフの考えが見えてきてグループワークは楽しい |
| | 職員同士気持ちを分かち合い一体感が生まれた | グループワークにより職員間の一体感が生まれた |
| | | 話し合いの中で悩みやストレスの解消もできた |
| | | 地域を知ることに関してスタッフの前向きな気持ちが見えてよかった |
| | | 職員間の問題の共有や共通理解が図れた |
| | 意見交換で新たな発見が出来た | 日ごろの業務の中では分からないことも意見交換で発見できてよかった |
| | | 意見が多く出て新しい発見があった |

| | | |
|---|---|---|
| | | 業務に追われ意識してこなかったことが見えてきた |
| | 回によってメンバー構成が変わり深められなかった | 研修の初回と2回目でメンバー構成に違いがあり意見の方向性がみえなくなった |
| 研修段階 2<br>第 4～6 回<br><br>研修テーマ<br>【課題解決に向けた解決策の検討】 | 職員の考えや意見を知ることが出来、気付きがあった | 他のスタッフが抱えている課題も分かり方策検討の中で勉強になった |
| | | 自分では思いつかない発想もあり有意義であったが知識不足も感じた |
| | | お互いの考えを比較分析できたのもよかった |
| | | 意見を出し合うことで気付くことが多かった |
| | | メンバーの考えを知ることができてよかった |
| | | 意見交換、交流ができたので良かった |
| | | たくさんの意見が聞けてよかった |
| | | メンバーの思い、スタンスなど知る機会となった |
| | 参加者との交流が図れ関係が密になった | 日常業務が整理でき他の包括とも交流が図れた |
| | | 皆の思いがわかりより深く理解しあえた |
| | | 他の包括職員とコミュニケーションが図れた |
| | | 他の包括の地域のことを知ることができた |
| | | グループでの関係も密となり楽しくできた |
| | | 普段できない話もでき充実していた |
| | 職員同士共に考え話し合えた | 職員間で課題を考えそれに対する解決策も具体化できてよかった |
| | | 職員同士で同じ課題をもち、解決に向けて話し合いができた |
| | | 他のメンバーと意見交換できたことがとてもよかった |
| | 職員同士の考えを共有できた | メンバーの考えを共有でき整理できてよかった |
| | | 改めて地域のことを話し合うことができて共有できた |
| | | 情報、状況の共有ができた |
| | | 似た問題を感じていたり、それに対する共通理解ができた点が良かった |
| | 参加人数が少ないと達成感が薄い | もっと参加人数が多かったら検討が深められた |
| | | メンバーが少ないとグループワークがつらい |
| 研修段階 3<br>第 7～11 回<br><br>研修テーマ<br>【解決策実践の検証と戦略の明確化】 | 他の包括の活動の様子を確認できてよかった | 包括同士の活動内容を、改めて知ることができるのが楽しみ |
| | | 他包括の課題知ることが出来、自身の包括にも役立つアイディアを獲得出来た |
| | | 他の包括の活動の様子を知ることができ良かった |
| | | 他包括の取り組みが共有でき住みやすい町づくりに発展させられると思った |
| | | 1年間の皆の努力が見えた |
| | | 他包括の地域への取り組みを知ることが出来て良かった |
| | | 他の地域の様子を知る機会になった |
| | | 各包括が同じ悩みを持ちながらもがんばっている様子がわかった |
| | | 他包括の活動状況を知ることが出来非常に良かった |
| | 職員同士協働して活動する機会となった | 職種をこえて何かをすることの必要性を感じている |
| | | 職員同士、有効な話し合いができた |
| | | 時間をとって皆で話をする機会が今後の私たちの活動につながった |
| | | 日頃の業務の中で話しあう機会が少ないため良い機会となった |
| | | 今後の戦略についてみんなで話ができ良かった |
| | | 協働できチームとして取り組めた |
| | | 3 人そろってひとつのことを考える機会を得られて良かった |
| | | 各々の考えが伝わってよかった |
| | | 普段から話しあいが持てているがより理解が深まった |
| | 各専門職からの意見や発想が乏しかった | 各々の専門職の立場からの意見や発想は出なかったように感じた |

## 4. 成果と課題

### (1) 目標達成状況

#### 1) 目標 1「地域の課題を分析し明らかにする」

アンケート結果から、地域の課題を分析し明らかにできたことへの達成感は高く、どの研修段階でも課題の明確化についての自由記述があり、地域特性が明確になってきたことや、所属包括職員間で明らかになった課題を共有できたことへの意義を感じていることが伺われる。普段の業務の中ではなかなか職員間で話し合う機会が持てないという記述もあり、職員間で課題が共有できたことが、解決策や活動の成果目標をより具体的に検討することにつながっている。

明らかになった課題の内容を見ると、『対象者の高齢化と地域での孤立化』などの支援対象者側の問題や地域特性が明確になってきたと共に、『地域の組織力や人力を活かした活動が出来ていない』などの包括職員としての活動上の課題も明確になっている。

#### 2) 目標 2「課題解決に向けての方向性が明確になる」

アンケート結果から、研修参加者の 88.5%の者が課題解決への方向性の明確化への達成感は高いと考える。自由記述にも、するべきこと、出来ることが具体的に見えてきたという記述や、他の包括の活動を知る事によって新しい発見があり、今後の業務に活かせそうであるという記述がみられることから、解決の方向性をある程度明確に出来たと考えられる。一方で、参加人数が少なく深まらなかったという記述や目標設定について現実的に達成可能な低いラインに設定してしまうなどの記述もあり、グループ構成やグループワーク支援に関して、検討が必要であることが示唆された。

明らかになった解決策の内容を見ると、とにかく地域に出て対象者や関係者の状況を把握することや、様々な人や組織をつなげていくこと、住民や自らを含め各関係者の能力の向上に務めることなど、課題が明らかになったことに呼応して具体的でかつ直接的な解決策を見出すことができていると考える。

#### 3) 目標 3「具体的な方策を検討し業務につなげることが出来る」

アンケート結果から、方策を業務につなげることについて、第 6 回研修終了時、第 7 回終了時、第 8 回研修時と達成感は上昇している。第 7,8 回に実践のプロセスを確認する内容を入れたことが、効果的だったと考える。第 9 回で重点課題・目標設定・具体的戦略の整理の達成感は、第 8 回終了時の結果に比べて低くなっているが、第 10 回では、戦略フォームに沿った実践の達成感や、今後の方向性が見出せたかについて達成できたとする解答が 87.8%となっており、この目標についてもおおむね達成できたと考える。自由記述には、実際に地域に出向く活動が多くなっていることを実感している記述、実践が進んでいることを可視化できたという記述があり、実践の過程を皆で検証しあい他の包括と共有する場を研修会で持てたことによる職員の自信や実践への意欲の向上が伺われる。

研修で導き出された成果目標の内容をみると、地域との密着した活動を具体的に行動に移せるような成果目標が掲げられ、数値目標も設定でき、今後の活動への実行可能な目標となっている。

#### 4) 目標 4「共同作業を進めるプロセスにより参加者の共通理解を深めることが出来る」

アンケート結果から、共同作業を行った包括職員間の共通理解への達成感は高いが、専門職間の理解や協働への達成感は十分とは言えない。したがって今後さらに、研修会だけでなく専門職連携教育の演習を通じて、具体的に専門職間の共通理解を促進させるような工夫が必要であると考える。自由記述では、職員間の一体感や、悩みや気持ちの共有が出来たとの記述があった。他の職員の抱える課題を共有し整理できたこと、他の職員との考え方の違いを理解できた上で解決策に向けて話し合えたことに意義を感じるという記述がみられた。他の包括の活動の様子を知ることが出来、自分の所属包括に役立てたいとする記述もあり、研修の過程で、所属内だけでなく、

他包括の課題や市全体の課題の共通理解も進んだことが伺われる。

**(2) 今後の課題**

本研修は、本学と甲府市との協議により、計画的段階的に進めてきた。これまで全11回の研修の中で、4つの研修目標についてその達成状況を検討したが、アンケート結果や、各段階で導き出された課題、解決策、成果目標の内容から、概ねその目標を達成できたと考える。しかし、専門職間の共通理解など、達成感の不十分な点も示唆された。今後も大学と地域との協働による研修の継続を望む声もあり、包括職員が、自信を持って実践を行っていけるような、継続的な支援となりうる内容や、専門職間の連携や共通理解が進むような工夫を検討していく必要がある。

**(3) 大学の地域貢献における本研修会の意義**

地域貢献は大学に求められる役割のひとつである。特に看護や福祉という専門職を養成する分野においては、質の高い人材を地域に送り出すという役割に加え、地域で働く専門職の資質向上に寄与することも重要な使命である。このような意味からも、本研修会において、地域包括支援センターの業務改善や職員の資質向上に向けて、大学側の一方的な研修ではなく、業務改善の過程と成果を可視化する方法を取り入れて地域側と共に取り組んだことは、大学の地域貢献として意義があったと考える。

地域と協働した専門職連携教育のあり方として、大学には、総合的な視点と態度を併せ持った保健福祉従事者を養成することに加え、現任者への教育・研究事業にも貢献することが求められている。専門職連携教育と現場の専門職連携は車の両輪であり、双方の推進が双方にとって効果を上げる。本学の専門職連携教育演習は、教育ＧＰの期間終了後も、本学教育プログラムの中に定着させていく予定であり、この教育プログラムを成功させていくためにも、包括職員研修のなんらかの継続は必要であろう。

## Ⅵ　合同フォーラム・講座・成果報告会・シンポジウム　（編集：神山　裕美）

本プロジェクト主催の講演等の事業として、平成２１年度６月から２２年度３月までに以下のとおり実施した。

### 1. 合同フォーラム

**(1) 概　　要**

1) **日　　時**：

平成 21 年 6 月 20 日（土）13 時～14 時 30 分

2) **テーマ**：

「地域での多職種連携を進めるために～日米の取り組みからチームアプローチを考える～」

3) **目　　的**：

① 多職種連携の推進に向けた現状と課題を提示し、その対応に向けた具体的な取り組みや意義を日米の実務者から学ぶ。

② 地域での多職種連携推進上での課題や疑問について、講演者と参加者が共に考え、議論を深め、今後の多職種連携の理解と推進に役立てる

4) **場　　所**：

山梨県立大学飯田キャンパス講堂

5) **プログラム**

13:00～　学長挨拶　　山梨県立大学「学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト」
推進事業代表　学長　伊藤　洋

13:10～　講　演

話題提供：「他職種・住民との連携協働の現状と課題」
山梨市地域包括支援センター　保健師　鈴木　操

講　演１：「在宅医療とチームアプローチ～多職種協働の意義～」
ﾗｲﾌｹｱｼｽﾃﾑ代表理事　互酬会水道橋東口ｸﾘﾆｯｸ理事長　医師　辻　彼南雄

14:40～　講　演２：「ﾐｼｶﾞﾝ大学ﾀｰﾅｰｸﾘﾆｯｸの学際的多職種連携教育ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑと
多職種協働の実際～ﾁｰﾑｱﾌﾟﾛｰﾁの展開～」
ﾐｼｶﾞﾝ大学ﾍﾙｽ・ｼｽﾃﾑ　ｸﾘﾆｶﾙ・ｿｰｼｬﾙﾜｰｶｰ　フォーク阿部まり子

15:45～　公開討論会

16:25～　おわりのあいさつ　　推進事業担当代表　佐藤悦子

16:30　　終　了

**(2) 結　　果**

本学学生、教職員はもとより地域包括支援センター職員、訪問看護ステーション職員、民生委員などの実務者、及び甲府市など行政の立場からの出席もあり、総勢１９２名の参加があった。

### 2. 話し相手ボランティア養成講座

日　時：第 1 回　平成 21 年 8 月 26 日（水）・28 日（金）　午前 10 時～午後 4 時
第 2 回　平成 22 年 8 月 23 日（月）・24 日（火）・25 日（水）　午前 10 時～午後 4 時

目　的：学生が住民と接するための「傾聴」のスキルを学び、学生の自主活動への支援をする

場　所：山梨県立大学　池田キャンパス　101 講義室

参加者数：第 1 回　15 名　　第 2 回　10 名

### 3. 認知症に関するミニ講演会

日　時：平成 21 年 10 月 6 日（火）　午後 6 時 30 分～午後 8 時 15 分

場　所：山梨県立大学飯田キャンパスサテライト教室

テーマ：アルツハイマー病のための「最高の友人」とは何か

～ベストフレンドアプローチの概要とミシガン大学認知症デイサービスの実践～

講　師：ミシガン大学老年医学センターシルバークラブ

メモリーロスプログラム　ディレクター　ベス・スペンサー氏

東京大学総括プロジェクト機構ジェロントロジー寄付研究部門客員研究員

ルース・キャンベル氏

参加者数：医療福祉従事者：21 名　甲府市福祉部：3 名　学内教職員：15 名　大学院生：2 名

計 41 名

### 4. 成果報告会・シンポジウム

平成 20 年 10 月に採択された本プロジェクトは、3 年目を迎えた平成 22 年 10 月に 2 年間の成果をふまえ、成果報告会とシンポジウムを開催した。

#### (1) 成果報告会

1) **テーマ**：

「看護と福祉の専門職連携演習に参加して」

2) **目　的**：

学生や住民、関係機関が、このプロジェクトに参加したことでどんな意義があったのか。

各立場からの意見を明らかにしてその成果を共有し、今後の地域づくりや教育プログラム改善に生かすことを目的とする。

3) **日　時**：

平成 22 年 10 月 2 日（土）10：00～12:00

4) **場　所**：

山梨県立大学池田キャンパス講堂

5) **プログラム**

総合司会：(柳田正明)

10：00　あいさつ（推進事業代表 学長　伊藤洋氏）（甲府市長　宮島雅展氏）

成果報告会座長：(吉澤千登勢・伊藤健次)

10：10　プログラム概要の説明（佐藤悦子）

10：20　山梨県立大学学生による発表

（看護学部　　内村愛・小澤マリ子・小松歩美・高畑舞・村松藍・山下藍）

（人間福祉学部　　角谷舞・北澤桂・篠原沙也佳・嶌崎美紗・小池涼子・横内佐知）

10：40　　演習にご協力いただいた地域住民の方による発表（石原公三氏）

10：50　　演習フィールドからの発表

甲府市役所・青柳京子氏：甲府市包括の位置づけ・役割、行政の役割、包括職員等研修会の成果

南西ほうかつ・渡辺幸氏：老人クラブの有効性（学生の調査から明らかになった点）、今後の課題

中央ほうかつ・清水季世子氏：演習によって地域が活気づいたこと、現場における多職種・地域連携

西ほうかつ・滝花昌子氏：取り組みから発展した地域の実態把握・地域との関係づくり

11：30　　質疑応答
11：40　　総括（神山裕美）
12：00　　おわりのあいさつ（人間福祉学部長　藤谷秀）

6）**参加者数**

学生 189 名、一般（自治会、包括支援センター、訪問看護ステーション、県関係、市関係他）
49 名、学内教職員 41 名　計 282 名

### (2) シンポジウム

1）**テーマ**：

「地域との協働による多職種連携教育プログラムの成果と課題」

2）**目　的**：

平成 17 年度の教育ＧＰに採択された埼玉県立大学、平成 19 年度に同じく採択された千葉大学は、いずれも IPE（専門職連携教育）をテーマとしており、本学のプロジェクトも両校から学ぶことが多い。両校、及び本校の IPE の成果や課題の比較検討により、地域と協力した教育プログラムシステムを明らかにして、今後の IPE の取り組みに生かすことを目的とする。

3）**日　時**：

平成 22 年 10 月 2 日（土）13：00～16:00

4）**場　所**：

山梨県立大学池田キャンパス講堂

5）**プログラム**

総合司会：清水惠子
13：00　　あいさつ（推進事業代表 学長　伊藤洋氏）
シンポジウム座長（神山裕美・井出成美）
13：10　　千葉大学　（千葉大学大学院看護学研究科　宮﨑美砂子氏）
13：35　　埼玉県立大学（埼玉県立大学保健医療福祉学部健康開発学科　國澤尚子氏）
14：00　　山梨県立大学（山梨県立大学看護学部看護学科　佐藤悦子氏）
14：25　　休憩
14：35　　ディスカッション
15：50　　まとめ（神山裕美）
16：00　　おわりの挨拶（清水惠子）

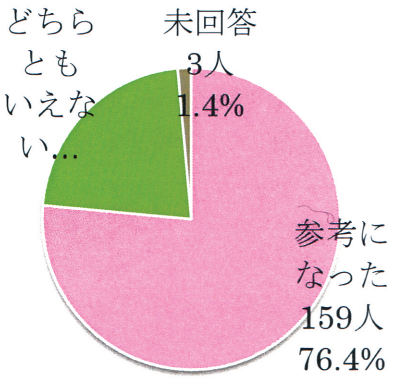
6）**参加者数**

学生 23 名、一般（訪問看護ステーション、包括支援センター、県内専門学校、県外大学他）
38 名、学内教職員 42 名　計 103 名

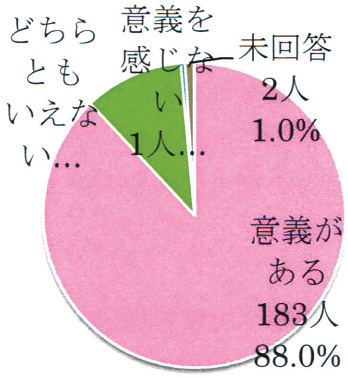
### (3) アンケート結果(抜粋)

#### 1) 成果報告会

(活動成果の発表について)

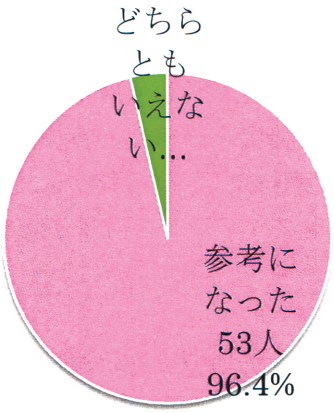



(本学の取り組んだ演習は意義があると思うか)

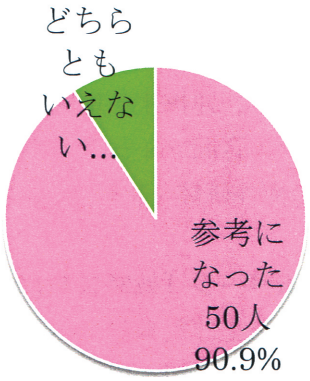



#### 2) シンポジウム

(発表3校の IPE の取り組みは参考になったか)




(地域と協力したプログラムは参考になったか)




成果報告会・シンポジウムのアンケート結果より、いずれも「参考になった」という意見が多数をしめていることがわかる。

なお、成果報告会・シンポジウムの内容は、本報告書別冊としてまとめたので、あわせてご参照いただきたい。

## 5. 講演会

テーマ:「認知症になっても住み慣れた地域で自分らしく笑顔でくらすために」

日　時:平成 23 年 3 月 4 日 (金) 13:30～15:00

場　所:山梨県立大学 池田キャンパス 201 講義室

講　師:富士宮市 福祉総合相談課

地域包括支援センター 主任保健師 藤 田 博 美

## Ⅶ　情報発信及び他大学との交流　（資料編参照）　（文責：小野　興子）

平成 20 年度に採択され、本学のプロジェクト活動２年目となる平成 21 年度は、初年度（20 年年度）学生が行った専門職連携演習の結果を広く県内外及び海外にも伝え、専門職連携のための参考に供するための広報活動を行った。さらに３年目となった平成 22 年度は積み重ねてきた学生の演習の成果、及び本プロジェクトによって企画した専門職連携のための研修会・講演会等の開催を伝え、参加者を募り保健医療福祉分野における多職種連携の必要性とその効果等を広く地域に普及・活用されるための広報活動を継続した。また、本プロジェクトの教育活動にも参考とするために、国内外の他大学関係者との交流活動も継続した。

### 1. 平成 21 年度

#### (1)　「教育ＧＰ」としての情報発信・周知

**1) パンフレット Vol. ２の作成**（H. 21. 12. 5 発行）

Vol. １に引き続き、大学の教育理念と本プロジェクトの概要を掲載し、さらに①平成 20 年度の学生のフィールド演習の状況とその反応（感想）・成果を伝えるための「合同発表会」の状況、②連携している甲府市および甲府市地域包括支援センター職員と大学教員とが協働で行った研修会の状況、③山梨県全域に呼び掛けて行った合同フォーラム「多職種・住民との連携協働の現状と課題」の開催状況、④学生が地域とつながり地域ボランティアとなるための研修講座「話し相手ボランティア養成講座」の開催状況等を掲載し、前年度から平成 21 年度前半の活動状況を伝える内容とした。（発行部数：1,000 部、次年度演習に参加する学生・全教員、甲府市・甲府市地域包括支援センター、連携する地域住民、本プロジェクト主催の研修会・講演会の参加者、大学教育改革プログラム合同フォーラム参加者等に配布）また、前年度作成した英語版パンフレットを平成 21 年度の海外研修（米国、ミシガン大学等）にも持参し、本プログラムを紹介した。（７か所、30 部配布）

**2) 本学ホームページ「教育ＧＰ」欄の継続と掲載内容の更新**

採択時に立ち上げた本学ホームページの「教育ＧＰ」欄に学生の演習実施状況を伝える内容、及び本プロジェクトが主催するフォーラム、講演会、研修会等の開催について掲載し、広く一般に「教育ＧＰ」としての活動を周知するために活用した。また、本学学生の演習、研修会等への参加呼びかけなど学内にむけても発信し、周知徹底を図った。

**3) 「大学教育改革プログラム合同フオーラム」ポスターセッションへの参加と意見交換**（H. 22. 1. 8）

本学教育ＧＰを紹介するポスターを持参し掲載、全国から参集した大学関係者に本学「教育ＧＰ」の概要を説明し、意見交換等を行った。パンフレット Vol２及び大学名とＧＰ名を入れたクリアーファイル、布製書類バックも参加者に配布した。（200 部持参・配布）

**4) 学会における発表**

第２回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会（H. 21. 10. 11. 千葉大学）において以下の２題を発表（一般口演）し、参加者との意見交換を行った。

・「地域包括支援センターを核とした教育プログラムの現状と課題」と題して、本プログラムの概要・実施体制と教育の現状等について発表した。

・「地域包括支援センタートと大学との連携による地域づくりに向けた取り組み」と題して、学生の演習フィールドとなる地域包括支援センターの職員の質の向上を目的に行った職員研修会の実施状況について発表した。

**5) 学生・教員のブルゾン着用（訪問調査時）と調査対象者への協力依頼文の配布**

初年度に作成した大学名入りブルゾンは、平成 21 年度学生も引き継ぎ、調査実施時に着用した。また、調査対象者には、「教育ＧＰ」として実施する旨の協力依頼書を作成し学生個々が持参し、

地域住民の同意を得て実施した。

**6) その他**

本プログラムを紹介し、関係者に理解・協力を求めるために、パンフレットVol.２とともに大学名及び本学プロジェクト名を入れたクリアーファイルと布製書類バックを作成した。(ｸﾘｱｰﾌｧｲﾙ2,000枚、布製書類バック350枚作成、配布先：演習参加学生・教員、学生の訪問調査に協力いただいた地域住民、ＧＰに関わる公的機関、報告会・講演会・研修会への参加者、大学教育改革プログラム合同フォーラム参加者等)

**(2) 教育活動の状況及びその成果に関する情報発信**

**1) 「学生による合同発表会」(H.22.4.17実施)の開催通知及びホスターの作成と配布・学内掲示**

学生は「専門職連携演習」を甲府市の包括支援センター３か所に別れて実施したため、それぞれの演習成果を発表し合い、関係者に報告するとともに、次年度演習に入る学生への導入ともするために合同の発表会を開催した。その参加を呼び掛けるための開催通知及びポスターを作成し、配布した。参加者は385名であった。(配布先：県内医療・福祉専門職の所属する市町村・団体、実習を受け入れ協力いただいた地域住民、県内教育機関、新聞等報道関係者、また学内掲示により本学学生へ・教職員等へは教授会を通じて周知を図った)

**2)「地域報告会」開催通知及びチラシの作成と配布**

学生の訪問調査の結果については、学内における合同発表会だけでなく、調査に協力していただいた地域へ直接学生が出向いて、住民にその結果を報告した。地域ごとに、そのためのチラシを作成し、各地域関係者や住民に参加を呼び掛けた。

**3) 学生の演習状況に関する新聞等の報道**

**① 訪問調査に関する報道**

平成21年度学生の演習の実施にあたり、報道関係機関へも周知した。その結果学生と共に報道記者も調査時に同行し、その様子が新聞報道された。(朝日新聞山梨版、H.22.2.23掲載)

**②「学生による合同発表会」の実施状況に関する報道**

上記 1)の合同発表会の様子が取材され、次日に県内に向け報道された。(山梨日日新聞、H.22.4.1掲載)

**③ 学生の訪問調査に関する記事の掲載**(本学地域研究交流センター広報誌「tobira」H.22.9.発行)

学生の訪問調査に同行した担当教員が、「地域とつながる」と題して演習の状況を掲載した。地域研究交流センター広報誌「tobira」は県内大学、市町村等の公的機関、保健・医療・福祉関係施設等、本学と関係する機関に広く配布されている。

**4) 研修会・講演会等の実施に関する学内・外への周知**

**①「話し相手ボランティア養成講座」開催ポスターの掲示**(H.21.8.26・28実施)

学生・教員の自由参加を呼び掛けるポスターを作成し、両学部の数か所に掲示し参加を募り、15名の学生・教員が参加した。

**② 意見交換会「マリコ・アベ・フォーク氏と語り合いませんか」開催ポスター・チラシの配布**(H.21.6.17実施)

下記合同フォーラムのために米国から招聘したソーシャルワーカーと教員の意見交換会を行うためのポスター・チラシを作成し、教員に参加を呼び掛けた。１０数名の教員が参加した。

**③ 合同フォーラム「地域での多職種連携を進めるために－日米の取り組みんからチームアプローチを考える－」の開催ポスターの配布と学内掲示**(H.21.6.20 開催)

米国からの招聘講師(ｿｰｼｬﾙﾜｰｶｰ)と日本において多職種でケアシステムを構築して地域に関わ

っている医師を招いての講演並びに県内の保健師による実践報告と意見交換を行った。そのために県内の保健医療福祉関係者及び民生委員等地域の実務者、学生・教職員に参加を呼び掛けるためにポスター・チラシを配布した。参加者は約200名であつた。

**④ ミニ研修会「アルツハイマー病のための『最高の友人』とは」チラシの配布**(21.10.6開催)

県内認知症ケアに関わる福祉施設等関係者及び学内関係者、学生等に配布、参加を促した。学内外から41名が参加した。

## 2. 平成22年度

### (1) 「教育ＧＰ」としての情報発信・周知

**1) パンフレットVol.３の作成**(H.22.8.31発行)

「専門職連携演習」の授業は、年度末である１月から３月にかけてのカリキュラムとなるため、前年度の実施状況をふまえ、平成22年１月から８月までの本プロジェクトの実践状況を報告する内容とした。掲載内容は本プロジェクトの概要に加え、①学生の演習の実践状況とその成果報告会の内容、及び地区報告会の状況、また、実践から得られたプログラム開発に向けての課題、②包括支援センターの職員・甲府市の職員・大学教員が連携して継続実施している職員研修会の進捗状況、③学生ボランティア養成講座の実践状況、さらに④本プログラムの中間時点に行った「健康長寿プロジェクト実行委員会」の開催状況等である。(発行部数：500部、配布先はVol.２と同様)

**2) 本学ホームページ「教育ＧＰ」欄の継続と掲載内容の更新**

平成21年度に引き続き、プログラムの実践状況について逐次更新した。

**3) 平成22年度「大学教育改革プログラム合同フオーラム」分科会での発表と意見交換**(H.23.1.25)

本プロジェクトの目的・体制・方法・内容、及びこれまでの２年半に渡る取り組み経過等について発表した。特に本プロジェクトの特色である人間福祉学部と看護学部の学生が協働で取り組んだ「専門職連携演習」における学生の自己評価からみた成果及び２年余り継続してきた甲府市地域包括支援センター・甲府市福祉部・本学教員の「職員研修会」の成果と課題についてまとめ、報告した。

**4) 「大学・自治体・民間連携による地域づくり支援」の実践例として職員研修を紹介**

職員研修会の講師である山浦晴男先生の著書**「地域再生マニュアル」**(H.22.6.30 発行、朝日新聞出版)に、本プロジェクトが前年度より行ってきたＫＪ法による研修会の経過と成果が「大学・自治体・民間連携による地域づくり支援」の実践例として紹介された。

**5) 本プロジェクトの「成果報告会」(H.22.10.2実施)の開催通知とポスター・プログラムなどの作成**

本プロジェクトの２年半の実践・進捗状況とその成果について県内外の関係機関に働きかけて成果報告会を実施した。参加は演習を実施した学生と訪問調査を受け入れた地域住民の代表、連携した甲府市の代表者と各包括支援センターの代表者、専門職連携に関する教育を本学に先駆けて行っている他大学の代表者等である。参加を呼び掛けるための文書とポスター、チラシを作成した。(発送数：約1,000通、県内外の大学、県内医療・福祉関係施設、市町村の包括支援センター等に発信)参加者282名であった。

**6) 訪問調査時の学生・教員のブルゾン着用と調査対象者への協力依頼文書の配布**

大学名入りブルゾンについては、初年度より引き続き、平成22年度も学生の訪問調査時に着用した。調査対象者へ「教育ＧＰ」として実施する旨の協力依頼書も前年と同様に作成し同意を得て実施した。

**7) その他**

平成21年度に作成した大学名及び教育ＧＰ名入りクリアーファイル・布製書類袋は平成22年度も引き続き使用し、ＧＰ演習に取り組む学生と学生の訪問調査対象者、フォーラム参加者、合同発表会参加者等に配布した。

**(2) 教育活動の状況及びその成果に関する情報発信**

**1)学会における発表**

第３回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会（H.22.8.11. 札幌）において「地域包括支援センターをフィールドとした看護学部・人間福祉学部の学生による専門職連携演習の成果と課題」と題して21年度の学生の行った演習結果について学生の自己評価の観点から分析し報告した。

**2)学生の演習状況に関する情報発信**

**①「成果報告会」に関する新聞報道**（山梨日日新聞、H.22.10.3掲載）

成果報告会における学生の発表内容等、２学部学生の連携に関する成果について当日取材あり報道された。

**②演習の成果にふれたインタビュー記事の掲載**（朝日新聞山梨版、H.22.10.26掲載）

成果報告会での学生の演習成果をふまえて、聞き取り調査を実施した学生の声、話し相手ボランティアを行った学生の声とそれを受けた地域の高齢者の声等を新聞記者が追跡取材し、学生の活動実績が具体的に報道された。

**3)研修会・講演会等の学内・外への周知**

**① 第２回「話し相手ボランティア養成講座」開催ポスターの学内掲示**（H.22.8.23～25開催）

前年度に引き続き、学生・教員の自由参加を呼び掛けるポスターを作成し、両学部の数か所に掲示し参加を募った。学生・教員10名が参加した。

**②「認知症サポーター研修講座」開催ポスターの学内掲示**（H.22.8.6、9の２回開催）

学生のボランティア活動等に役立てるために学内数か所に掲示し、自主的参加を促し、それぞれ12～13名の学生が参加した。

**③ 講演会「あなたの財産を誰に託しますかー超高齢化社会における地域連携と法ー」開催ポスター・チラシの配布**(H.22.7.23実施，本学地域研究交流センターとの共催)

学外講師を招聘し、県内の医療・福祉関係者・地域包括支援センター、報道関係、一般住民にも呼び掛けて実施（ポスター・チラシ・イベント情報等)、学内・外から84名が参加者した。同日その様子が県内ＴＶニュースとしても取り上げられ、放映された。

**④ 講演会「認知症になっても、住み慣れた地域で自分暮らしく笑顔でくらすために」開催チラシの配布**(H.23.3.4実施)

甲府市及び地域包括支援センター職員と大学教員と協働で継続的に行ってきた職員研修会の締め括りとなる講演会は、研修に参加した者以外の地域の関係者に呼びかけ、公開で実施した。そのために地域によびかけるチラシを作成し、山梨県・甲府市・包括支援センターに関わる担当者に配布し、参加を呼び掛けた。

## Ⅷ　米国調査・研修(2010 年 3 月 18 日～22 日)　（編集 ： 吉澤 千登勢）

### 1. 調査・研修の概要及びスケジュール　（文責 ： 神山 裕美）

教育ＧＰの専門職連携演習の調査・研修の一環として、アメリカのミシガン大学老年病センターとその周辺の関係機関の調査・研修を行った。ミシガン大学老年学センターでは、学生の多職種連携教育プログラム（IPE）を試行的に実施すると共に、関係機関や施設での多種種連携（IPW）も実践的に行われている。その実際を、関係者からのインタビューや施設見学、及び体験型研修から明らかにすると共に、今後の本学専門職連携教育プログラムの開発と改善の参考にすることを目的とするため実施した。参加者は、看護学部：田中彰子、吉澤千登勢、山本奈央、人間福祉学部：鳥居美佳子、神山裕美、教育ＧＰ事務局：松橋昌代の６名であり、調査・研修先別に分担して報告書を執筆した。

今回のミシガン大学ヘルスシステムターナクリニックのフォーク・阿部・マリコ氏が調整したスケジュールは、以下のとおりである。スケジュール調整から滞在中の相談まで細かく配慮してくださったマリコ・フォーク氏と、通訳の方々に心から感謝いたします。

**Wednesday, March 17**

**5:00**　Meet Mariko at the lobby of Campus Inn（ホテルのロビー集合）オリエンテーション

**Thursday, March 18**

**10:30**　Leave the hotel, to Challenge Program Site（1120 Dixboro Rd.）
タクシー２台でチャレンジプログラム場所に向かう。

**11:00– 4:00　Challenge Program**　（facilitators: John Swerdlow, Elizabeth Zollweg, ）

**12:30– 1:00**　lunch

**Friday, March 19**

**9:30　“Services for Students with Disabilities”**
（ミシガン大学、障がいのある学生のためのサービス） by Sam Goodin, Dan Measel (Vision 視覚障がい)& Virginia (Learning Disability 学習障がい）, Jill Rice (Hearing 聴覚障がい )(763-3000, sgoodin@umich.edu djhansen@umich.edu) 2105 B in the Michigan Union (2nd floor)

**11:00**　ターナークリニックに向けて出発

**11:30　Turner Geriatric Clinic, East Ann Arbor Health and Geriatric Center**
4260 Plymouth Road, AA (Turner SW-Mariko: 764-2556/ 763-4965)

**11:30**　lunch

**1:00　Introduction to Turner Clinic and programs for the elderly in the U.S.A.**
（ターナークリニックの説明、質疑応答、クリニックの見学)
Little Conference Room, Geriatric Social Work , B-1

**2:30- 4 30　Interdisciplinary Team Education Panel**
（学際的チームの実際とその教育：パネル・ディスカッション) Brent Williams, MD (physician 医師), Jenny Merritt-Hacket MS (nurse practitioner 専門ナース), Tami Remington, Pharm D. (pharmacist 薬剤師), Mariko Foulk , LMSW (social worker ソーシャルワーカー)

**Saturday, March 20**

**Silver Club**

認知症専門デイセンター(ターナーシニアリソースセンターの一部を2グループに分かれ見学)

- 午前のグループ（３人）は９：４０分にキャンパスインのロビー集合

（通訳の瀬川めぐみさんの車でシルバークラブに行く。帰りはタクシーにて帰る。）

AM group：10:00-10:30：Orientation with Beth / 10:30-12:30：In Silver Club

- 午後のグループ（３人）は昼食を済ませた後、タクシーにて、１時までにシルバークラブに行く。帰りは瀬川めぐみさんにホテルまで送ってもらう。

PM group :1:00- 1:30：Orientation with Beth / 1:30- 3:00：In Silver Club

昼食 自由

**Sunday, March 21　休　　日**

**Monday, March 22**

**9:00　Leave the hotel**

タクシー２台でアーバーホスピスに向かう

**9:30–11:30　Arbor Hospice Residence**

アーバーホスピスの見学とそこで、学際的チーム（ソーシャルワーカー、ナース、牧師）から話を聞く。　Ask for Pat Baur

9:30-10:20　Greeting and Tour of the Residence. 施設見学

10:30-11:30　A discussion / Q & A with Pat Baur（SW ソーシャルワーカー), Teri Turner（RN 看護師）and Rev. Diane Smith（spiritual care 牧師）多職種連携に関する話し合い

**11:40　Brecon Village Memory Support Center,**

（Brecon Village Retirement Community, 200 Brecon Drive, Saline）

**12 noon　Ask for Marti Coplai at the reception desk of the Memory Support Center**

Lunch with Marti.

**1:00– 4:00　Brecon　Village Memory Support Center**　見学とスタッフとの話し合い

Evangelical Home of Michigan は長年ナーシングホームを運営してきたキリスト教組織ですが、数年前から高齢者の自立、ケアつきのホームを立ち上げました。その一番新しいのが、このメモリーケアの施設です。認知症の方のみではなく、夫婦片方のみが認知症でも一緒に住めるユニットもあります。

**Tuesday, March 23– Depart**

## 2. ミシガン大学研修報告～チャレンジプログラムについて～　（文責 ： 田中 彰子）

本研修の目的は、専門職連携の独自の開発プログラムをもち、先進的な取り組みを行っているミシガン大学を訪問し、山梨県立大学ＧＰ専門職連携の今後の活動の示唆を得ることにある。私たちは、アクティビティに参加する体制を整え「チャレンジプログラム」の体験学習に臨んだ。チャレンジプログラムサイトは、ホテルからタクシーで約 20 分離れた郊外にあった。土地は、1950 年頃に Mr.Matthaei より寄贈されたものであり、広大な森の中にあった。

### (1) チャレンジプログラムの受講目的

チャレンジプログラムのアクティビティとディブリーフィング（GW）に参加することを通して、プログラムの内容、方法、ファシリテートの仕方を学ぶ。

### (2) ファシリテーター

John Swerdlow　Elizabeth zollweg　通訳：瀬川めぐみ

### (3) チャレンジプログラムの特徴

チャレンジプログラムの特徴は、①皆が協力するものであること　②自らの挑戦であること　③活動自体が楽しいものであること　④選択による挑戦であること（倫理的側面）にある。従って受講者は、これができるかどうかを考えて自らで選択することが重要である。

### (4) 参加した「チャレンジプログラム」(主な Active Practice)

1) Active Practice No1 (おもちゃのパス)

| 方　　法 | 結　果 | ディブリーフィング |
|---|---|---|
| 6 名の参加者が長方形に置かれたロープの外側に立つ。フラフープが対角に 2 つあり、1 つのフラフープの中にはおもちゃが入っている。それに最も近い人からスタートし、もう一つのフラフープに最も近い人が最後にその中に移す。すべてのおもちゃを移す所要時間を測定する。〈ルール〉①おもちゃを投げて全員がパスをする②左右となりの人にはパスしてはならない③ロープ外に落ちたものは最初のフラフープ内に戻してもう一度やり直す④ロープ内に落ちたものはそのまま | 1 回目:5 分(4 つ落下)→5 分のディスカッション・練習<br>2 回目:1 分 47 秒(4 つ落下)→5 分のディスカッション・練習<br>3 回目:1 分 46 秒(3 つ落下)＊3 回目の目標設定:1 分 30 秒(落下は 3 つまで) | タイムが改善したのは、何がよかったからか。<br>・投げる相手の名前を呼んだ・パス中のおもちゃが空中で衝突しないように周囲を見るようにした・能力や状態によってポジションを調整した・投げるものの特徴に応じて受け取りやすい投げ方を検討し練習した・パスが極端に難しいものは落下してよいものとした |

2) Active Practice No2 (シーソーの上でバランスをとり一曲歌う)

| 方　法・ルール | 結　果 | ディブリーフィング |
|---|---|---|
| シーソーが傾かないようにバランスをとりながら全員がシーソーの上に乗る。全員が乗ったら真ん中 6 枚(×と書かれている板)に乗らないように外側に移動し、バランスをとったところで歌を一曲歌う。〈ルール〉乗るときは真ん中から乗る。但し、バランスを失ったら(シーソーの四角下ボールの音が鳴ったら)やり直し。線を越えたら話し合いをしない。 | 体格を考慮して立ち位置や乗る順番を相談して決めた。歌は「♪もしもし亀よ亀さんよ～♪」 | 気づいたこと、仕事との共通点<br>・わかりやすいジェスチャーを心がけた<br>・周りの様子を見ながら動くこと・お互いの特性や能力を把握することの重要性、共通点など |

3) Active Practice No3 (個性の異なる学生を全員で卒業させるには？)

| 方　法・ルール | 結　果 | ディブリーフィング |
|---|---|---|
| スタートラインからゴール(バケツ)まで全員の持っているパイプをつないで転がす。より多くの学生を卒業させるように！ 7 分の練習・話し合いの後、本番へ。〈ルール〉ボールが止まったり手に触ったり、落ちたりしたらやり直し。 | 8 個のボールをバケツに入れることに成功 | 振り返りのポイント<br>・初めは上手くできなかったが、だんだん上手くいくようになったのは、どんなところがよかったからか・ルール違反があってもやめなかったのはなぜか・なぜ、ゴルフボールだけを選んだか、など |

4) Active Practice No4 (橋をかけて全員渡る)

| 方　法・ルール | 結　果 | ディブリーフィング |
|---|---|---|
| 5 つの丸太に 3 本の長い板を渡して、その上を全員が手をつないで歩く。どうしたら最後まで渡ることができるか。話し合いの後にチャレンジ。〈ルール〉話し合いのときは、スタートラインから先に入ってはならな | 板の長さが予測できず、丸太に届かないことがあった。全員落下せず、無事に渡ることができた。 | 2 つのグループに分かれて、チーの強みを話し合う。2名でペアを組み次のチャレンジの場所に移動するまで歩きながらどんな意見が出たかを共有する |

| | | |
|---|---|---|
| い。板を渡す人以外は、つないだ手を離してはいけない | | ・役割分担ができていたのでよかった<br>・役割分担は個々の特性を踏まえていた・よく分からないけど「まずやってみて考えよう！」と意志統一ができた |

### (5) まとめ

#### 1) Challenge Program の効果

このチャレンジプログラムのグループの中で見えてきた課題は、職場でも起こっているようなことである。職場との違いは、アクティビティを通して知ることにあり、個人レベル、グループレベルの課題を比喩的に捉えることができる。それによって職場の課題も見えてくる。又、話し合いがしやすいことが上げられる。上司と部下などの上下関係に拘らないで行うことができる。

#### 2) Debriefing（査問・振り返り）について

振り返りのポイント（質問の仕方）は、①What? 何が起こりましたか ②So What? それが起こったことからグループについて、どのようなことがわかりますか ③Now What? それがわかってどうしますかという単純な質問である。振り返りの方法は、丸くなって全員で、グループを２つに分ける、２人一組で、など様々な形がある。表わし方は、握りこぶしを使い（Fifty Five）、自分の経験がどうだったかを“1～5”の５段階評価で表わすなどの方法がある。

#### 3) ファシリテーターの役割について

ディブリーフィングにおけるファシリテーターの説明は最小限であり、チャレンジグループのメンバーが自発的に気づくことが重要である。気づくことができない場合、気づきを促すコメントを行う。あくまでも黒幕的な存在である。効果的なプログラムを創案し、実際に何回も試して、用具の開発、順序性、所要時間などを念入りに準備し、環境を整えることが大切である。

### (6) 今後に向けて

今回、チャレンジプログラムの体験から多くのことを学んだ。アクティビティは、フィールド環境が必要であるが、なくてもできる方法もあり、初めてメンバーが知り合う時、グループの結束力を高めたい時、グループや個人の課題を明確にしたい時などに利用できる。その考え方や方法は、ＧＰ専門職連携プロジェクトにも活用することができると考える。

















## 3. Services for Students with Disabilities

### ～ミシガン大学、障がいのある学生のためのサービス～　（文責 ： 鳥居 美佳子）

### (1) はじめに

ミシガン大学では、様々な障がいに対応したサービスが提供され、現在、約 1300 名の学生がそのサービスに登録している。その実際を説明していただいた。“Services for Students with Disabilities”を担当する部署は学生部に属し、専門職 5 名、事務職 3 名、学生アルバイト・学生ボランティアの登録者約 40 人により構成されている。

本研修は、ミシガン大学のセミナールームで行われ、3 名の専門職員からサービス提供の背景、現状、課題などを伺うことができた。



講師：シーグル（主任、臨床心理学博士）、
バージニア（学習障がい担当、アカデミック・コーチ）、
ジル（聴覚障がい担当）

### (2) 障がいのある大学生の背景と現状

#### 1) 障がい者を取り巻く社会的背景

アメリカでは最近、政治的変化（オバマ大統領の就任、視覚障がいのあるニューヨーク州知事）があり、障がい者が過ごしやすくなってきた。障がい者の社会進出を考える指標の一つとして「就業率」がある。これまでの報告では、障がい者の就業率は健常者の就業率に比較して低いと言われてきたが、最近では、高等教育を受けた障がい者の社会進出が目覚しいという報告がされている。

**① 医療的側面**

エイズなどの慢性疾患がある学生がいる。また、“目に見えない病気”つまり、精神的疾患（ADHD、アスペルガー症候群、自閉症、うつ）による学習障がいのある学生が増えている。

**② 法的側面**

アメリカでは、「リハビリテーション法（1973 年）」「Americans with Disabilities Act; ADA（障がいのあるアメリカ人法, 1990 年）」のため、多くの障がい者が裁判で権利を失ってきた。なぜなら、これらの法律の下、裁判では精神疾患者は薬で症状が治まっている場合は、障がいなしとみなされていたためである。2005 年の改正「障がいのあるアメリカ人法」によ

って、障がい者の権利が拡大された。

### (3) テクノロジーの進歩について

#### 1) 聴くことをサポートする(対象 : 聴覚障がい)

“Alphasmart”…言葉を入力して会話をするため携帯できるキーボード。大学生活だけでなく家族の中でも孤立しがちな聴覚障がいのある学生が、会話をサポートされることで孤立するのを改善することに役立つ。

#### 2) 読むことをサポートする(対象 : 視覚障がい)

“Kindle”…Amazon.com が販売する電子ブックリーダデバイス・ソフトウェアおよびサービスであり、わずか 1.2 ポンドで様々な情報（書籍、新聞など）をインターネットを用いてダウンロードし、音声出力することができる。

#### 3) 聴講・ノートをとることをサポートする（対象：学習障がい）

“Smartpen”…講義中、集中力が途切れて抜けた部分をテープ起こしして、講義をペーパーに出力してくれる。

#### 4) 考えをまとめ文章化をサポートする（対象：学習障がい）

“Inspiration”…羅列したキーワードを自動的に線でつなげてアウトラインを作成しアイディアを整理することを助ける。

“Mac-Speech”, “Dragon Dictate”…話すと素晴らしいことを言えるのに、文章にしようとすると混乱してしまい、言いたいことを書けなくなってしまう人のために、マイクで音声入力した言葉を文章化するプログラムである。他多数（資料により紹介)。

#### 5) ミシガン大学における学内設備など

学内のいたるところにあるコンピュータラボに上記ソフトウエアが設置されている。テーブルの高さが車椅子利用者や身体的特徴に応じて調節することが可能である。一時的に骨折してキャンパス内の移動が困難な学生をバスやバンで移動する支援も行っている。

### (4) 専門職による業務・役割

#### 1) スクリーニングのための面接からサービス登録へ

学生と面接をし、何が問題なのか現状を把握し、解決のためにどこに送ればよいか判断する（病院など適切なところへの紹介)。また、サービスに登録することになったら、登録ために必要な書類が揃っているかチェックする。

#### 2) アカデミック・コーチング

アカデミック・コーチは、前述したテクノロジーを補助的に利用して、学習障がいを持つ学生がレポートやエッセイを書くことをサポートしている。博士課程の学生が研究論文を書くときに、アイディアと文献を話し、何をどのように書けばよいか考えをまとめる手助けをすることもある。あくまでコーチは質問を投げかけて、学生自身が答えを見つける手助けをする。また、学生のスケジュール管理のサポートを行う。例えば、授業の課題が複数重なってしまったときカレンダーに記入させ、どれも完璧にやるべきというプレッシャーに負けないよう、何を優先すべきか判断し、バランスをとるよう支援する。さらに、授業と授業以外の学習時間 40 時間程度、就寝・起床時刻を含めて生活パターンをつくっていくようにスケジュールを組み、週毎にモニタリングする。学生の自己申告による評価と成績を合わせて学生と話し合い、総合評価を行っている。障がいがあることを隠す学生もいる。障がいが先生や友人に知られると嫌なレッテルを貼られ評価される上で不利になるのではないかと心配したり、安全対策として職員に生活面を把握されることを恐れたりすることが理由である。そういう学生に対しては、障がいを隠すのではなく本当に助けてもらうべきことは何か考え、先生や友人と上手にコミュニケーションをとれるよう支援する。

3）**教員へのアプローチ**

教員向けハンドブックが大学 Web サイトに掲載されている。また、スタッフミーティングに出向いたり、新任教員の研修で講習会を行ったりして理解を求めている。また、サポートの必要な学生の履修する授業が決まったら、その授業を担当する教員に手紙を書き、教材に字幕をつけるなど、必要なことを依頼することもしている。

4）**学生アルバイトの調整**

ノートをとるサポートの必要な学生は 40 名いる。その学生とアルバイトする学生は、お互い授業があるため、時間割を見てスケジュールを調整し、手配する。

5）**人権侵害への対応**

部署内で対応し解決しなければ、教員に働きかける。この場合、彼らは両者を理解するようにしてそれぞれの話を聴き、お互いが理解できるように働きかけている。それでも解決しない場合は、学部長に働きかける。それでも解決しない場合は、ADA コーディネーターの調査が入る。それで解決しない場合は、ジェネラルカウンセラー（弁護士を含む）が調査する。それでも解決しない場合は、市民権を担当する政府組織（日本の文部科学省のようなところ）が大学を対象とした調査を実施する。このようなケースは、年間 2、3 件発生する。

6）**広報活動**

このサービスの存在を広く周知するため、学内のいたるところにパンフレットを配置している。学園祭でもクラブのブースの一角にブースを出してパンフレットを配布している。また、高校のカウンセラーがミシガン大学に行けば、このようなサービスが受けられると説明してくれて入学する学生もいる。

入学後何年もたって、もっと早くこのサービスの存在を知りたかった！という学生もいる。登録していない学生への対応は、今後の課題であると言えよう。

**(5) まとめ**

このサービスに登録している障がいのある学生と健常学生の卒業率の差は把握していないが、成績は平均で「B」であり、健常学生と変わらないか、少しよいくらいである。本サービスは、障がいのある学生の社会進出、社会生活の充実感・満足感の向上に貢献していると考えられる。

本学では、障がいのある学生に対して個別対応をしているかもしれないが、システム化されていないのが現状である。ミシガン大学で提供されているようなサービスの整備・提供は、障がい者の大学生活の充実、社会進出の大きな助けになるだけでなく、地域や高校への広報活動により、あらたな連携に発展する可能性が感じられた。

## 4. Turner Geriatric Clinic, East Ann Arbor Heath and Geriatric Center
## ～ミシガン大学老年医療センター附属ターナークリニックの視察及び学際型チームとのディスカッション～

（文責 ： 吉澤 千登勢）

**(1) ターナークリニックの概要**



1978 年に、ミシガン大学のイースト・メディカル・キャンパス（米国ミシガン州アナーバー市）に老年医療センター附属ターナークリニックを開設した。同クリニックは、高齢者専門の外来クリニックで、医師、看護師、薬剤師、ソーシャルワーカー、高齢者ボランティアなどの連携のもと、チームアプローチによって在宅療養をサポートし、老年医学において高い臨床評価を得ている機関である。

本調査・研修は、専門職連携において先駆的な取り組みをしている同クリニックのスタッフとのディスカッションを通して、その現状を知るとともに知見を深め、山梨県立大学の専門職連携教育プログラムに活用できることを目的とした。

**(2) ターナークリニックの施設見学**　(説明者: Maliko Foulks, LMSW / social worker)

精神科エリアを除き、診察室、デスカッションルーム、電子カルテなどを見学させて頂いた。

床は全てフラットで、待合室もゆったりとしたスペースが確保され、壁にある絵画や通路などに置かれている調度品も癒しの空間を演出するよう設定されていた。

見学終了後に、説明者の同クリニックのソーシャルワーカー:フォーク・阿 部・まり子氏から、高齢者医療のスペシャリスト（physicians、nurse practitioners、social workers、nurses、medical assistants、pharmacists)による「質の高いチーム医療」――医師をチームリーダーとした多職種連携による包括的な医療サービス――の実際(PQE プログラム)について説明がなされた。同レクチャーは、昨年度、山梨県立大学で開催した教育ＧＰ合同フォーラム『地域での多職種連携を進めるために～日米の取り組みからチームアプローチを考える～』のパネルディスカッションで、まり子氏が登壇した「ミシガン大学ターナークリニックの学際的多職種連携教育プログラムと多職種協働の実際～チームアプローチの展開」を、より具体的に実践例を交えながらお話頂いたものであった。特に、同クリニックでは、「Primary Care & Assessment」に重点をおき、それぞれの専門職が患者や家族の情報を共有し、問題リストを提示して、ケアプランを作成し、患者及び家族の意思を確認しながら、最終プランの決定をしているということであった。

※PQE プログラム(Partner-ships for Quality Education)： 学生時代に、患者中心の医療を実践するために必要なチームアプローチの知識や技術を学ぶプログラムである。

**【所見】**同クリニックでは、高齢者とその家族の生き方や価値観を大事にしながら医療サービスを提供するという方針が、スタッフ全員に徹底されていると感じた。そして、その哲学のもとに、治療という側面からだけではなく、精神的援助や生活環境の整備、経済問題など総合的なマネージメントが実践されていた。また、連携という観点からみると、それぞれの専門職がチームの一員であるという高い意識を持ち、他職種の専門性を尊重しながらプランを作成しているので、各専門職間の壁も低く、チーム医療が効率よく機能していることがわかった。

**(3) ターナークリニックの職員と多職種連携の実際及び連携教育に関するディスカッション**

- Brent Williams, MD（Physician ）
- Jenny Merritt-Hacket MS（Nurse Practitioner）
- Tami Pemington, Pharm D.(Pharmacist)
- Maliko Abe Foulk, LMSW（Social Worker ）
- 通訳 ： 瀬川 めぐみ（Japanese Interpreter ）



自己紹介のあと、山梨県立大学の教育ＧＰ(学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト)に関する概要を説明し、IPEの教育内容及び教育方法についてフリーデスカッションを行った。以下に、話し合った内容の概略を示す。

1) **専門職連携教育の演習目標及び方法について**

演習の構成は、チームアプローチの観点から、組み立てることが大切である。

| 項　目 | 内　容 | IPE |
|---|---|---|
| **問題提起**<br>(導入教育) | 例えば、問題提起として、「現在のヘルスシステムは壊れている。それは、医療ケアを提供するシステム(チーム医療のあり方など)が機能していないからである。その原因は何か?」と学生に問いかけることから演習を開始する（例えば、その原因は、看護師が医師に意見を言えない状況にあるのか?? あるいは、医療スタッフが多職種間の連携の必要性を感じていないのか??)<br>⇒ **学生を、"IPE について、考えなければならない状況"に導く。** | **なぜ、「多職種連携が必要か!!」という動機付けが大事である。** |
| **演習目的** | 演習目的を明確に列挙する | |
| **演習目標** | 演習で到達すべき共通目標を明示する | ・**「他職種に対する認識や態度の変化」や「コミュニケーションスキルの向上」**に関する目標設定が望ましい。 |
| **事例検討**<br>(ペーパーペーシェント) | グループ毎にケアプランを作成→発表→全体討論(批判せずに、良かった点をフィードバックする。また、悪かった点については、自己課題として述べる) | ・**チームコミュニケーションのあり方**について考える。<br>・**ファシリテーターの経験**(輪番制にし、全員が経験する)<br>・**ロールプレイ:客観的理論付け**<br>(コーチング) |
| **事例検討**<br>(フィルード演習) | グループ毎にケアプランを作成<br>(ニーズに対する介入プラン) | ・**チームコミュニケーションについての振り返り**(ディブリーフィング)：**枠付け、アドボカシー、尋ねる** |
| **評　価** | 評価表の作成 | ・**他職種に対する認識や考え方、行動の変化**<br>・**チームコミュニケーションに関する知識と技術の獲得** |
| **ゴール** | | **◎それぞれの役割をしっかりと認識させる** |

2) **専門職連携教育の現状について**

現在、米国の医学部では、IPE 教育が数多く実施されているわけではない。しかし、患者中心の医療を実現するためには、チーム医療が効率よく機能しなければならない。昨今の学生は「パフォーマンス志向」なので、教育の段階で、IPE の意義と必要性を学ぶ効果は非常に大きいと考える。教育の段階で成果が上がれば、ヘルスシステム(チーム医療)のあり方も変わっていく。オ

バマ大統領の誕生に長い年月を要したように、チェンジには時間がかかるが、教育を通してヘルスシステムを変えていくことこそ、IPE の効果といえるのではないか。

**【所見】**ディスカッションにおいて、「学生のパフォーマンス志向」という発言があったが、専門職連携教育を通して、学生がチーム医療の必要性や重要性を理解し、医療スタッフの一員として効果的なチーム・パフォーマンスを行うための知識や技術、態度を修得することができれば、それが実践力となって、現場に活かされていくと思った。ゆえに、専門職になるための育成段階において、専門職連携の必要性をいかに動機付けるか(教育プログラムのあり方)が大きな影響因子になることがわかった。

## 5. シルバークラブとメモリーサポートセンター （文責 ： 神山 裕美）

### (1) シルバークラブ　案内者：ベス・スペンサー氏（シルバークラブ・ディレクター）

**1）組　織**

ミシガン大学ヘルスシステム・ジェリアトリックセンターの一部としてシルバークラブ・メモリーロスプログラムが位置づけられている。

**2) シルバークラブの背景にある思想**

プログラムは生きがいをもたらし、コミュニティに属す感覚を味わい、メンバーの成功体験が感じられるような支援を行い、面白く喜ばしい瞬間がもたらされるようにする。

**3）プログラム種類**

早期・移行・中期の 3 種プログラムがあり、内容は社会性を重視した以下のようなプログラムである。

**① 早期プログラム**

最近認知症の診断を受けた本人や家族のための教育とサポートで、週 2 回、各 3-4 時間「コーヒーハウス」という名で開催。現在参加者は 10-12 名程度。

**② 移行プログラム**

動く「コーヒーハウス」としての遠足や「メモリーキーパー」としての回想法を行い、シルバークラブにつなげる。

**③ 中期プログラム**

認知症デイサービスのようなシルバークラブを週 6 日、アナーバー市内 2 箇所で開催。参加者は 12-18 名程度で待機者が 5-10 名。

**4）シルバークラブ内容**

1 日 5 時間のプログラムで、午前 10 時頃に家族送迎によりクラブに到着し、フィットネス・音楽・工芸・絵画・ゲーム・ビンゴ・カード・季節のパーティ等を行い、高齢者の栄養に配慮したケータリングによる昼食をとり午後 3 時ごろ帰宅する。月間予定表は、アクティビティプログラムと昼食メニューがある。

**5）参加者数** ： 1 週間で延べ 60 名。週 2 回利用者が多い。

**6）家族支援**

年 1 回介護家族との定期面接と緊急時面接を実施。

**7）支援内容**

初期プログラムでの本人・家族アセスメント、本人の試行参加からの観察。サービス利用後は、スタッフとボランティアによる毎日の振りかえり、定期的ケアプラン作成、ストレングスと問題とニーズの評価と、支援方法の検討を継続し、家族満足度を定期的に調査し評価とする。

8）**スタッフ構成**

ソーシャルワーカー（修士・学士）、認定ナースアシスタント、ボランティアナース、レクレーションセラピスト・音楽療法士・芸術家等、利用者4人に1人のスタッフを配置。

9）**利用料**

1時間17.5ドル～4ドルまで所得ごとに異なる。服役兵は助成金あり、メディケイド利用者もいる。

10）**所　見**

昨年山梨にもお越しいただいたベス・スペンサーさんの案内で話を伺った。ミシガン大学ヘルスシステムの付属施設につき、元大学関係者等知的レベルの高い利用者も少なくない。「その人」からはじまる認知症ケアのため、これまでの生活歴や嗜好やストレングスや好きなこと、興味があることをよく理解して、「その人」が快適で安心して楽しめる場を提供している。今回、半日づつ利用者と共にプログラム体験をさせていただいたが、アメリカの文化や生活に根ざしたプログラムは大人が楽しめる内容であり興味深かった。利用者はとても落ち着いてプログラムに参加しており、快適な居心地のよい場であることがわかる。また、医療・看護・ソーシャルワークでもミシガン大学との円滑な連携がうかがえた。

**(2) メモリーサポートセンター**

**案内者：マーティ・コプレイ氏（メモリーサポート部門ディレクター）、**
**ジュリー・セージ氏（セールス部門ディレクター）**

1）**組　織**

Evangelical Home of Michigan は長年ナーシングホームを運営してきたキリスト教組織だが、そこがブレコンビレッジという高齢者住宅とケアつきホームを設立した。その一番新しい施設が、このメモリーサポートセンターである。認知症の方のみではなく、夫婦片方のみが認知症でも一緒に住めるユニットもあるがオープンして一ヶ月であり、これから入所者を迎える。

2）**立　地**

アナーバーの隣Salineという町にあり、アナーバーから車で30分程度。広い敷地に分譲コテージや有料老人ホーム、ナーシングホーム等がある。

3）**メモリーサポートセンターの設備**

メモリーサポートセンターのある建物には、家族や入居者は集えるカフェ、チャペル、ジム、スパ、共同ダイニングキッチン、集会スペース等があり、個室での入居者の異常を感知するセンサーも完備され、スタッフのポケベルに直接連絡がいくようになっている。

4）**ブレコンビレッジの社会資源**

メモリーサポートセンターは、ブレコンビレッジ敷地内にあるので以下のような施設がある。

① **アシステッドリビングレジデンス ： 軽度介護が必要なひとへの入居施設。**

② **デイプログラムやアクティビティ**

認知症利用者向けのレクレーションや社会的支援など、利用者が自信をもって尊厳ある生活を安心して出来るよう支える。

③ **在宅サービス**：ﾎｰﾑﾍﾙﾌﾟｻｰﾋﾞｽ、介護者研修、ショートステイ等の提供。

④ **図書館とリソースセンター**：認知症についての情報提供やセミナー開催などを実施。

⑤ **コテージ**：家族と共に暮らしたい認知症の方々のための分譲型一戸建て住宅。

⑥ **庭や花壇**：園芸療法、カラーセラピー、アロマセラピーにも活用できる。

5）**所見**

メモリーサポートセンターのあるキリスト教の非営利法人は、施設経営に伝統ある組織である

が、中産階級向けの有料老人ホームも経営しており、今回訪れた施設はまだ木の香も新しい新設の施設であった。マーティ氏は、別の医療機関や病院でのソーシャルワーカー経験も長く、それらを生かした新しい施設運営に意欲的であった。設備はホテルのように素晴らしく、通常稼動するときが楽しみである。





## 6. Arbor Hospice Residence

### ～アーバーホスピスの施設見学および学際的チームとのディスカッション～

（文責 ： 山本 奈央）

私達は研修日程の最終日にアーバーホスピスを訪れた。本研修では、医療・保健・福祉の専門職チームが連携して、ホスピス施設や地域・在宅での幅広い医療サービスを提供している学際的チームとの意見交換を行い、その連携の実際について理解を深めることで、山梨県立大学の学際型専門職連携教育プログラムの開発に役立てることを目的とした。

ソーシャルワーカーである Pat Baur 氏によりアーバーホスピス施設を案内していただき、その後、学際的チーム（ソーシャルワーカー、ナース、牧師）によるヘルスケアの実際についてお話を伺い、多職種連携に関する質疑応答を行った。




＜参加者＞

- Pat Baur，SW（ソーシャルワーカー）
- Teri Turner，RN（看護師）
- Rev Diane Smith，spiritual care（牧師）
- 通訳：篠原　みどり

### (1) 施設の紹介

アーバーホスピスは 2001 年に開設され、施設は全個室で 26 部屋からなる。ヘルスケアチームはミシガン州の 7 つの群を担当し、アーバーホスピス入所者および地域に住む合計 220 名を対象としている。ヘルスケアサービスはアーバーホスピスにおける医療だけでなく、在宅や地域（ナーシングホームなど）のさまざまな場所をフィールドとしてケアが提供されている包括的なヘルスケアシステムでる。スタッフは 160 名の有給スタッフとパートスタッフがおり、ケアシステムは医療関係者ではない NPO 団体が管理している。

アーバーホスピスの施設内には共同スペースとして、ダイニング、キッチン、図書コーナー、小児のレクレーションルームなどがある。ダイニングスペースにはゆったりとしたソファやドリンクコーナー、ピアノ、パソコンなどがあり、いつでも誰でも自由に利用できる環境が整えられていた。施設内の壁には、設立時にキルト会社より寄贈された大きなキルトが飾られていた。さまざまな模様の細かい刺繍がされている実に美しいキルトであった。（写真右）満床のため個室内を見学する

ことはできなかった。

### (2) ホスピスの基本理念と専門職の役割



ホスピスケアはユニークで独特なところがあり、多職種で協働するという基本的考えがある。多職種チームの主要構成メンバーは、看護師、ソーシャルワーカー、牧師であり、その他にもさまざまなメンバーがチームの一員として関わっていた。ホスピスケアにおける各専門職の主な役割を示す。

#### 1) 看護師

ケースマネージャーやチームリーダーの役割を担い、チームは看護師を中心にコミュニケーションを図り、意思決定がされる。しかし、一番大切なのは患者中心のケア（Patient Centered care）である。看護師は専門的に身体的ケアや医療的処置を行う。

痛みの緩和に関して、まずは身体的な痛みに注目する。しかし、痛みは身体的なものだけでなく心理的、社会的、霊的なものなどさまざまである。家族の重荷になりたくないという心配から生じる痛みも多い。痛みの緩和に対して最もチェレンジングな状況は、ケアを受け入れてくれない場合である。そのような場合はケアの強制はできないし、対象は痛みを持つ権利を認める必要がある。対象の状況に応じて、ソーシャルワーカーや牧師と密に連携を図ってケアを提供している。

#### 2) ソーシャルワーカー

患者と家族への感情面での関わりや、亡くなる前からグリーフ（悲嘆）に介入し、支援する。また、さまざまなサービスやサポート体制の調整を行う。アーバーホスピスでは修士レベルのソーシャルワーカー（MSW）を雇用している。学際的な考えだけでなく、ホスピスの理念に共感し、使命を持っていることが大切である。ソーシャルワーカーは、患者が死亡後最低13ヶ月間に渡って家族をサポートする“グリーフメイトカウンセラー”としての役割も担っている。

#### 3) 牧　師

４名が宗教的活動をする資格を持って活動している。宗教の種類に関わらず、その人の生きてきた意味、ここにいる意味を消化するのを支援する。対象が無宗教（無信者）であっても生きる意味を考えるお手伝いをする。ホスピスでは必ずしも資格は必要ではなく、牧師として、対象の霊的な面を把握する、信じる者をあるがままに支援する姿勢が必要であり、オープンでサポーティブに介入することが大切である。宗教の有無や種類に関係なく、相手の信じるものを学び、支援するのが牧師の役割である。関わりの中での最も多く抱える問題は、「許す」という概念や「和解」「人生の意味」を相手の納得できる言葉で説明して理解してもらうことである。相手の信じるもの、理解できる言葉、教えを理解し、牧師として何が支援できるか考えることが必要である。

#### 4) その他のチームメンバー

他にもさまざまなチームメンバーが関わる。ヘルスエイド・ナースエイドは身の回りのケア（清拭や入浴の介助、整容の手伝い、ベッドメーキング、ネイルケアなど）を行う。ボランティアなどがチームに加わる。ボランティアは、一緒にゲームをすること、ただそばにいること、本を読むこと、おつかいなどさまざまな役割を担う。平日８時～18時以外の時間帯で関わることが多いのはヘルスエイド・ナースエイドやボランティアである。メディカルディレクターである医師は、２週に１回メンバーと会って入所者の状況などについて話を聞く。その他、PT（理学療法士）、OT（作業療法士）、栄養士などのスタッフがチームでケアを提供している。

ホスピス医療の現状として、アーバーホスピスにはより医療依存度が高い方が入所しており、常に満床の状態である。30 年前の調査によると自宅に死にたいという希望が最も多かったが、現状では病院が最も多く、救急車内や集中治療室で亡くなるケースも多い。このような現状から、可能な限り自宅で亡くなってもらうのがホスピスの役割と考える。そのためには、患者や家族への教育的関わりが必要であり、看護師は家族に対する介護や医療ケアに関する教育も行っている。実際には家族が遠方に住んでいる場合もあり、全体の 1/3 はナーシングホームやアシステッドリビングに住んでいる。

**(3) 多職種連携：IDT（InterdisplinaryTeam）Meeting　多職種チーム会議**

IDT Meeting は２週に１回、10 個（チーム）のミーティングを開催する。デトロイト州と３つの組織により、メディケアの義務として 15 日に１回のミーティングを持つことが定められている。IDT Meeting は、アーバーホスピスやナーシングホームなどさまざまな場所で開催される。対象の特性を考慮し、例えば、10 代の子どもの場合はチームメンバーが専門医である小児科医のところへ出向いてミーティングを行う場合もある。その場合、看護師やソーシャルワーカーも専門のスタッフが関わる。IDT ミーティングは２週に１回であるが、実際には毎日スタッフ間で情報交換をしている。

**(4) 学際的チームとの意見交換の主な内容**

1) **対象に関する情報の共有**

各専門職が得た情報をパソコンに入力し、情報共有を図っている。患者カルテのように、パスワード管理でいつでもどこからでもアクセスして閲覧できるようになっている。リアルタイムで情報を入力することが課題である。

2) **入所までの手続き**

２名の医師による、余命６ヶ月以内であるという認定が必要である。医師の内、１名は主治医（紹介する側）でもう１名はホスピスの医師である。入所の受け入れに関しては専門のスタッフ１名が対応している。

3) **費用について**

メディケアの人の約 95%は個人の保険が適応される。メディケアより、１日あたり 150 ドルが施設に支払われる。人件費、医薬品費、医療システム（酸素吸入など）等、多額な医療費が必要となるため、現状では支出の方が多く、財源は年間１億円以上の寄付や助成金で成り立っている現状がある。

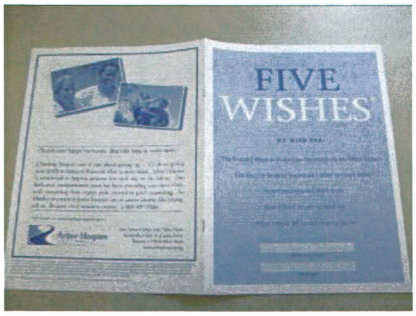
4) **リビングウィル（Living will）の手続きについて**

法律により患者の意思確認を行うことが義務づけられている。蘇生の希望がある場合は、死亡直前に医療機関に搬送することもある。意思を決めていない場合は、ソーシャルワーカーが介入して、「FIVE WISHES」を一緒に考える。「FIVE WISHES」は 50 の州でそれぞれ取り決めがあり、医療に関わる意思決定についての書類である。蘇生術や経管栄養などさまざまな内容について、対象の意思が確認できるうちに決めることができる。その際、家族の価値の対立がある場合は、ソーシャルワーカーが中心に関わる。

**FIVE WISHES（５つの願い）**

私の願いは、

1. 私が自分自身でケアに関する意思決定ができない場合に、私の代わりに決定してくれる人は誰か
2. 私が望む、あるいは望まない医学的治療の種類
3. 私がいかに安楽でいられるか
4. 私が人々にどのように治療して欲しいか
5. 私が愛する人に何を知って欲しいか




### (5) 研修での学びと今後の課題

今回の研修で、アーバーホスピスの施設見学とそこで活躍する学際的チームとのディスカッションを通して、多職種連携の重要性について多くのことを学ぶことができた。医療・保健・福祉に関わるそれぞれの専門職が対象に関する情報交換を密に行い、他の職種の専門性を尊重しながら、自分の専門性・役割を最大限に発揮し、患者や家族が望むヘルスケアサービスを提供したいという同じ目標に向かって、チームとして機能していた。その多職種チームの連携によって、対象の希望に添ったケア、患者中心のケアの提供が可能になっていることが理解できた。多職種が連携することにより、対象を多角的、総合的に捉えることが可能になり、包括的なヘルスケアが提供できることにつながる。



実際の医療現場において、この専門職チームによるケアを提供するためには、学部での看護基礎教育における専門教育が不可欠である。そのためには、医療・保健・福祉を取り巻く多様な時代背景を見据え、さまざまな健康問題を抱える患者・家族や特殊な健康・生活ニーズを持つ対象を想定した中で、チームの一員として果たすべき役割を熟考し、多職種で連携することの目的・意義、さらに実際の連携のための専門的知識・技術を習得できる教育プログラムの構築が必要であることを学んだ。

## Ⅸ 総　　括　　（文責：佐藤　悦子）

「学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト」が平成20年度文部科学省の「質の高い大学教育推進プログラム：教育 GP（Good　Practice）」の選定を受け、３年が経過した。学長を中心として組織的に推進体制を組み、取り組んできた活動の総括を以下の３つの視点から述べる。

### 1. 専門職連携教育プログラムの開発

本取り組みのねらいは専門職連携教育のプログラムを開発することにある。専門職の連携教育の方法として本学が重点を置いた点は、学生が机の上だけではなくフィールドに出て活動することを通し、理論と実際を体感しながら学ぶところにある。つまり、学生が住民の生活する環境の中で演習を展開することで、より具体的な生活・健康のニーズを体感し、そこから住民を巻き込んだ生活の質を高める活動のあり方を考える。さらにそのプロセスのなかで、連携の意義とスキルを学んでいくというものである。

フィールドワークを重視した理由は、専門職の連携は、かかわる住民のニーズを満たすためのものだからである。連携ありきではなく、住民のニーズにどう対応するか、連携はそこからずれてはならない。学生の思考も、住民のニーズを核にしたものであってほしいと考えたからである。

平成20年度の活動は、初年度ということもあり、演習のねらいは住民の生活・健康ニーズがどこにあるか、まず学生たちが体感することに焦点を当てた。学生の学びをみると、地域で生活する高齢者の状況はみんな違い、それぞれ固有のニーズがあった。しかし、その多くが「住み慣れた地域で生活し続けたい」と思い「その人なりに生活を工夫している」ことを感じ取ることができた。さらに「人との交流を持ちたい」と思ってはいるが、必ずしも交流が持てているとは言い難く、若い学生たちと交流が持てたことを本当に喜んでもらえたことが、学生たちの満足感にもつながっていた。また、高齢者の多くが「何らかの心配事や不安」を持っていることも明らかにすることができた。

平成21年度・22年度も、学生がとらえたニーズはほぼ同様であった。しかし、20年度のものを積み上げ、そのニーズに対応するために、支援者である自分たちには何ができるのか少しずつではあるが、地域のニーズとして掘り下げ、検討することができている。

この過程を通して、専門職の連携の意義を学ばせたいと考えた。看護と福祉を学ぶ学生が協働で取り組むことによって、互いの専門性を知り、他職種と協働することの利点を明確にできることが、本取り組みのねらいのひとつでもある。

両学部の学生が学部を超えて、共通の目的を持って演習に取り組んだことで、互いの共通点と相違点に気付くことができた。それを互いの専門性として捉え、多角的に人を見ることでより幅の広い見方ができることを学んでいる。それは学生たちにとって新鮮な発見であり、「他学部の学生と交流できて良かった」という言葉からも裏付けられる。

本取り組みをある程度専門教育が進んだ３年次の時期に入れたことも、効果的であったと考える。演習がスタートした頃は、他学部の学生に、自分の専門性を相手にわかる言葉で伝える場面で、多くの学生が戸惑いを感じていたようだった。改めて自分が学んでいる専門にはどんな特徴があるのか、自問自答を繰り返しながら取り組んでいる姿が印象的であった。

また、協働で行うことの困難さも一部体験し、「時間を合わせるのが大変だった」「コミュニケーションをうまく取るのが大変だった」と言った言葉も聞かれ、異なる専門職が協働することの利点と困難さを体験できたことは、大きな成果であった。

以上、３年間の試行を繰り返すことで専門職連携教育プログラムの素案を作る事が出来た。専門職連携演習の到達目標を明文化し、評価指標を作成した。これは学生が自己の達成状況をその過程の中で自己評価し、確認しつつ進めることを可能にした。回を重ねるごとにその到達度は高くなる

## 2. フィールドとなる地域包括支援センターの活性化

本プロジェクトのもう一つのねらいは、フィールドとなる地域包括支援センターの活性化にある。フィールドの質を高めることで、専門職連携教育の質を高めることができると考えたからである。

今回、大学がフィールドとして直接入らせていただいたのは3か所の包括支援センターである。20 年度は、学生が地域に入るために様々な準備をしていただいた。まだ、地域包括支援センターの存在そのものが地域に浸透していないといった課題を抱えていた。この活動を3年継続させたことで、その地域住民へのアピールができ、また学生が把握したデータの蓄積を行うことで、地域のニーズが徐々に明確になり、活動の方向性がみえてきた。

一方で、実習フィールドも含めた甲府市内 10 か所の地域包括支援センターの研修会を甲府市と共同で継続的に実施した。山浦晴男先生を講師に招き KJ 法を活用し、各包括が抱えている課題の明確化、課題に対する対応を戦略的に計画し、実践、評価まで行った。この過程を通して、課題をメンバーが共有でき、異なった専門職同士が活動目標を同じにするプロセスを共有できたことは大きな成果であった。さらに、それを実践し報告しあうことで、互いの包括の活動を見ることができ、自分たちの活動のヒントや刺激を互いに得ることができたと確信している。それは、研修会への出席状況を見ても、その意識の高さを伺うことができセンターの活動が活性化するための素地づくりがでたと評価したい。

## 3. 今後の課題

本プロジェクトは、本学の専門職連携教育を展開することで同時に地域の包括ケアが推進できることを最終的なねらいに置いている。専門職連携教育プログラムの素案はできたが、それを行うことで地域の包括ケアを推進するところまでには至っていない。なぜならば、3年間の積み上げだけでは、地域住民の生活・健康ニーズ把握できそこに対応する活動の提案が精いっぱいであり、学生の具体的な活動につなげるまでには至らず、そこに課題が残った。

その原因としてはいくつか挙げられる。まず、一番大きな原因は、カリキュラム上のことである。本取組はまだ正規の科目ではなく、いくつかの科目から時間を配分しての授業展開であり、学生の時間の確保が十分できたとは言えない中での展開であったからである。多くは土曜日を使い、学生たちのゆとりはなかった。しかし、平成 23 年度からは、「専門職連携演習」として 1 単位 30 時間の科目となる。特に看護学部は必須科目に位置付けられている。科目の位置づけが明確になることで、学生たちの動機付けはやりやすくなった。しかし、学部を超えての時間割調整は難しく、今後の課題としては大きい。

もう一つの原因として、学部を超えての授業展開は、かかわる教員間の調整が非常に重要である。本プロジェクトは、22 名のワーキングチームを作り取り組んできたが、教員にかかる負担は想像以上に大きかった。本取り組みは多くのマンパワーと時間が必要であり、専門職連携は、教員の熱意と連携スキルが必要である。学生への教育効果が取り組みへのエネルギーを充電させてくれることにはつながっていったが、今後教員のパワーと時間をどのように確保するか大きな課題である。

さらに、教員の連携教育に関する指導力の向上が必須である。イギリスやアメリカの先進地の視察を行い、教員の指導力のスキルアップの必要性を痛感した。専門職連携教育に関する学会や研修会に積極的に参加し、さらに指導力を向上させる取り組みを継続させたい。科目の展開が、地域の包括ケアとして住民を巻き込んだ形での授業展開となるように、さらに多くの検討を重ねていく必要がある。

本取り組みの3年間を振り返り、思考錯誤の展開にも関わらず、真摯に取り組んでくれた学生たちにまず御礼を述べたいと思います。そして、この取り組みは、伊藤洋学長を中心に大学全体の体

制で推進できました。伊藤学長はじめ多くの教職員の皆様に心から感謝いたします。また、常にご支援ご協力を下さいました甲府市介護保険課の青柳京子課長補佐様をはじめ職員の皆様、甲府市地域包括船センターの皆様、甲府市の地域の皆様には、言葉では尽くせない感謝の気持ちでいっぱいです。最後になりましたが、時には重圧に押しつぶされそうになりながらも、ともに悩み苦しみ楽しみながらこの取り組みを推進してきました教育GPの先生方、事務局の皆様、そして最も縁の下からこの活動を支えてくださいましたGP室三井様　平形様　松橋様　堀内様に、心から深く感謝申し上げます。

## ― 資　料　編 ―

### 1. 演習に使用した資料

#### (1) 評価表

**教育ＧＰ「学際統合型専門職連携演習プロジェクト」**
**2010 年度 専門職連携演習　評価表**

学部名：（　　）　学籍番号：（　　）　氏　名：（　　）
演習場所：甲府市地域包括支援センター（　　）

| 項　　目 | 自己評価 |
|---|---|
| **1 看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互に理解することができる** | |
| 1）自分が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について説明することができる | |
| 2）相手が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について自分の言葉で表現できる | |
| 3）互いの専門性について尊重することができる | |
| 4）互いの専門性を踏まえた連携の必要性について多面的に考えることができる | |
| **2 実態調査で関わった高齢者の暮らしと、それを支える社会資源について検討できる** | |
| 1）関わった高齢者個々の暮らしについて考えることができる | |
| 2）関わった高齢者個々の暮らしを支える社会資源について説明することができる | |
| 3）関わった高齢者が暮らす地域について考えることができる | |
| 4）関わった地域で調査した高齢者全体の生活及び健康ニーズを考えることができる | |
| **3 実態調査をとおして、高齢者の生活及び健康ニーズについて検討し、地域にフィードバックすることができる** | |
| 1）互いの専門的な視点を踏まえ、得られた情報を共有するとともに、多角的に議論することができる | |
| 2）議論の結果をもとに、客観的に分析し、課題を明らかにできる | |
| 3）課題に対する解決方策を専門的な視点から考えることができる | |
| 4）得られた結果をまとめて、関係者にわかりやすく報告することができる | |
| **4 専門職が連携して地域住民に関わるための基本的態度を学ぶことができる** | |
| 1）訪問前後の手続き（電話・礼状など）が的確に実施できる | |
| 2）身だしなみや言葉遣いが適切であり、相手に不快を与えないよう接することができるとともに、相手の反応を的確に捉えることができる | |
| 3）地域住民・専門機関従事者に感謝の意を伝えることができる | |
| 4）個人情報を的確に扱い、確実に保護することができる | |
| **5 1～4 をとおして、他職種と連携する意義を考えることができる** | |
| 1）グループワークに積極的に参加し、チームの一員としての役割を担うことができる | |
| 2）グループメンバーの意見を傾聴し、受け止めたうえで自分の意見を述べることができる | |
| 3）協働する体験から得られた学びをグループ活動を通してまとめ、分かり易く発表することができる | |
| 4）連携して関わった一連のプロセスを振り返り評価し、今後の自己の課題を明確にできる | |

**評価基準**　A：目標を達成できた　B：目標をある程度達成できた
C：目標を達成するにはやや努力を要する　D：目標をほとんど達成できなかった

＊ 本日の演習の中で感じたこと、考えたこと、学んだこと（自由記載）

＊ その他、質問事項など（自由記載）

＊ 1～5は、1)～4)の自己評価を踏まえ、入力してください。

## (2) リフレクションペーパー

### 1) 合同発表会（4年生の発表を聞いて）

＜A5版縦＞

教育ＧＰ「学際統合型専門職連携演習プロジェクト」
2010年度 専門職連携演習
学生による合同発表会リフレクションペーパー

学部名：（　　）
学籍番号：（　　）
氏　名：（　　）
演習場所：包括支援ｾﾝﾀｰ名（　　）

4年生の発表を聞いて

### 2) 演習前オリエンテーション

＜A4版縦＞

教育ＧＰ「学際統合型専門職連携演習プロジェクト」
2010年度 専門職連携演習合同オリエンテーション リフレクションペーパー

学部名：（　　）　学籍番号：（　　）　氏　名：（　　）
演習場所：甲府市（　　）地域包括支援センター

| 項　目 | 自己評価 |
|---|---|
| **1 看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互に理解することができる** | |
| 1) 自分が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について説明することができる | |
| 2) 相手が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について自分の言葉で表現できる | |
| 3) 互いの専門性について尊重することができる | |
| 4) 互いの専門性を踏まえた連携の必要性について多面的に考えることができる | |
| **2 実態調査で関わった高齢者の暮らしと、それを支える社会資源について検討できる** | |
| 1) 関わった高齢者個々の暮らしについて考えることができる | |
| 2) 関わった高齢者個々の暮らしを支える社会資源について説明することができる | |
| 3) 関わった高齢者が暮らす地域について考えることができる | |
| 4) 関わった地域で調査した高齢者全体の生活及び健康ニーズを考えることができる | |
| **3 実態調査をとおして、高齢者の生活及び健康ニーズについて検討し、地域にフィードバックすることができる** | |
| 1) 互いの専門的な視点を踏まえ、得られた情報を共有するとともに、多角的に議論することができる | |
| 2) 議論の結果をもとに、客観的に分析し、課題を明らかにできる | |
| 3) 課題に対する解決方策を専門的な視点から考えることができる | |
| 4) 得られた結果をまとめて、関係者にわかりやすく報告することができる | |
| **4 専門職が連携して地域住民に関わるための基本的態度を学ぶことができる** | |
| 1) 訪問前後の手続き（電話・礼状など）が的確に実施できる | |
| 2) 身だしなみや言葉遣いが適切であり、相手に不快を与えないよう接することができるとともに、相手の反応を的確に捉えることができる | |
| 3) 地域住民・専門機関従事者に感謝の意を伝えることができる | |
| 4) 個人情報を的確に扱い、確実に保護することができる | |
| **5 1～4をとおして、他職種と連携する意義を考えることができる** | |
| 1) グループワークに積極的に参加し、チームの一員としての役割を担うことができる | |
| 2) グループメンバーの意見を傾聴し、受け止めたうえで自分の意見を述べることができる | |
| 3) 協働する体験から得られた学びをグループ活動を通してまとめ、分かり易く発表することができる | |
| 4) 連携して関わった一連のプロセスを振り返り評価し、今後の自己の課題を明確にできる | |
| 評価基準　A：目標を達成できた　B：目標をある程度達成できた　C：目標を達成するにはやや努力を要する　D：目標をほとんど達成できなかった | |

＊ 本日のオリエンテーションの中で感じたこと、考えたこと、学んだこと（自由記載）

＊ その他、質問事項など（自由記載）

＊ 1～5は、1)～4)の自己評価を踏まえ、入力してください

### 3) 演習後＜A4判縦＞

教育ＧＰ「学際統合型専門職連携演習プロジェクト」
2010年度 専門職連携演習 リフレクションペーパー

学部名：（　　）　学籍番号：（　　）　氏　名：（　　）
演習場所：甲府市（　　）地域包括支援センター

| 項　目 | 自己評価 |
|---|---|
| **1 看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互に理解することができる** | |
| 1) 自分が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について説明することができる | |
| 2) 相手が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について自分の言葉で表現できる | |
| 3) 互いの専門性について尊重することができる | |
| 4) 互いの専門性を踏まえた連携の必要性について多面的に考えることができる | |
| **2 実態調査で関わった高齢者の暮らしと、それを支える社会資源について検討できる** | |
| 1) 関わった高齢者個々の暮らしについて考えることができる | |
| 2) 関わった高齢者個々の暮らしを支える社会資源について説明することができる | |
| 3) 関わった高齢者が暮らす地域について考えることができる | |
| 4) 関わった地域で調査した高齢者全体の生活及び健康ニーズを考えることができる | |
| **3 実態調査をとおして、高齢者の生活及び健康ニーズについて検討できる　し、地域にフィードバックすることができる** | |
| 1) 互いの専門的な視点を踏まえ、得られた情報を共有するとともに、多角的に議論することができる | |
| 2) 議論の結果をもとに、客観的に分析し、課題を明らかにできる | |
| 3) 課題に対する解決方策を専門的な視点から考えることができる | |
| 4) 得られた結果をまとめて、関係者にわかりやすく報告することができる | |
| **4 専門職が連携して地域住民に関わるための基本的態度を学ぶことができる** | |
| 1) 訪問前後の手続き（電話・礼状など）が的確に実施できる | |
| 2) 身だしなみや言葉遣いが適切であり、相手に不快を与えないよう接することができるとともに、相手の反応を的確に捉えることができる | |
| 3) 地域住民・専門機関従事者に感謝の意を伝えることができる | |
| 4) 個人情報を的確に扱い、確実に保護することができる | |
| **5 1～4をとおして、他職種と連携する意義を考えることができる** | |
| 1) グループワークに積極的に参加し、チームの一員としての役割を担うことができる | |
| 2) グループメンバーの意見を傾聴し、受け止めたうえで自分の意見を述べることができる | |
| 3) 協働する体験から得られた学びをグループ活動を通してまとめ、分かり易く発表することができる | |
| 4) 連携して関わった一連のプロセスを振り返り評価し、今後の自己の課題を明確にできる | |
| 評価基準　A：目標を達成できた　B：目標をある程度達成できた　C：目標を達成するにはやや努力を要する　D：目標をほとんど達成できなかった | |

＊ 本日の演習の中で感じたこと、考えたこと、学んだこと（自由記載）

＊ その他、質問事項など（自由記載）

＊ 1～5は、1)～4)の自己評価を踏まえ、入力してください

### 4) 合同発表会後＜A4版縦＞

教育ＧＰ「学際統合型専門職連携演習プロジェクト」
2009年度 専門職連携演習 評価表

学部名：（　　）　学籍番号：（　　）　氏　名：（　　）
演習場所：甲府市地域包括支援センター（　　）

| 項　目 | 自己評価 |
|---|---|
| **1 看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互に理解することができる** | |
| 1) 自分が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について説明することができる | |
| 2) 相手が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について自分の言葉で表現できる | |
| 3) 互いの専門性について尊重することができる | |
| 4) 互いの専門性を踏まえた連携の必要性について多面的に考えることができる | |
| **2 実態調査で関わった高齢者の暮らしと、それを支える社会資源について検討できる** | |
| 1) 関わった高齢者個々の暮らしについて考えることができる | |
| 2) 関わった高齢者個々の暮らしを支える社会資源について説明することができる | |
| 3) 関わった高齢者が暮らす地域について考えることができる | |
| 4) 関わった地域で調査した高齢者全体の生活及び健康ニーズを考えることができる | |
| **3 実態調査をとおして、高齢者の生活及び健康ニーズについて検討し、地域にフィードバックすることができる** | |
| 1) 互いの専門的な視点を踏まえ、得られた情報を共有するとともに、多角的に議論することができる | |
| 2) 議論の結果をもとに、客観的に分析し、課題を明らかにできる | |
| 3) 課題に対する解決方策を専門的な視点から考えることができる | |
| 4) 得られた結果をまとめて、関係者にわかりやすく報告することができる | |
| **4 専門職が連携して地域住民に関わるための基本的態度を学ぶことができる** | |
| 1) 訪問前後の手続き（電話・礼状など）が的確に実施できる | |
| 2) 身だしなみや言葉遣いが適切であり、相手に不快を与えないよう接することができるとともに、相手の反応を的確に捉えることができる | |
| 3) 地域住民・専門機関従事者に感謝の意を伝えることができる | |
| 4) 個人情報を的確に扱い、確実に保護することができる | |
| **5 1～4をとおして、他職種と連携する意義を考えることができる** | |
| 1) グループワークに積極的に参加し、チームの一員としての役割を担うことができる | |
| 2) グループメンバーの意見を傾聴し、受け止めたうえで自分の意見を述べることができる | |
| 3) 協働する体験から得られた学びをグループ活動を通してまとめ、分かり易く発表することができる | |
| 4) 連携して関わった一連のプロセスを振り返り評価し、今後の自己の課題を明確にできる | |
| 評価基準　A：目標を達成できた　B：目標をある程度達成できた　C：目標を達成するにはやや努力を要する　D：目標をほとんど達成できなかった | |

＊ 本日の演習の中で感じたこと、考えたこと、学んだこと（自由記載）

＊ その他、質問事項など（自由記載）

＊ 1～5は、1)～4)の自己評価を踏まえ、入力してください

**(3) 地域の皆様への協力依頼文**

＜A4 版縦＞

## 山梨県立大学「学生による訪問調査」へのご協力のお願い

日頃、本学の教育推進のためにご配慮いただき、厚く御礼申し上げます。

本学では、確かな知識技術を持ち、豊かな人間性を持った社会に貢献できる質の高い専門職業人を育成し、県民の皆様の生活に貢献できることを大学の使命としております。

平成 20 年度より、文部科学省より「質の高い大学教育推進プログラム（教育ＧＰ）」として本学の取り組みが全国の大学の中から選定を受けております。この取り組みは、平成 20 年度～22 年度の 3 カ年計画で実施し、「学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト」という名前です。

地域の皆様がより豊かな生活を送るために専門職としての活動を学ばせていただくことで、学生への教育効果をあげることを主たる目的としております。今回の「学生による訪問調査」も、この取り組みのひとつです。

この取り組みは、甲府市地域包括支援センター、並びに甲府市のご理解とご協力を頂いております。

つきましては、本学の教育の趣旨をご理解いただくとともに、学生への教育に対しまして、何卒ご協力、ご指導を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成２３年２月５日

山梨県立大学　学長　伊藤　洋

（教育ＧＰ推進本部長）

〈本調査の関係機関〉

甲府市福祉部介護保険課

甲府市地域包括支援センター

山梨県立大学看護学部・人間福祉学部

## (4) 訪問調査案内＜はがき＞

（南西ほうかつ）

**訪問調査のお願い**

まもなく立春ですね。いかがお過ごしでしょうか。今回、訪問調査の了承をいただき、ありがとうございます。私たちは、山梨県立大学3年生・4年生の

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿です。

下記の日時にお伺いしたいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

**訪問日時：平成２３年２月５日（土）**
**午前１０時～　１時間程度**



ご都合が悪くなった場合やご不明な点がありましたら、ご一報ください。

**＜ご連絡先＞**

山梨県立大学教育GP室：**055-253-9452**
甲府市南西地域包括支援センター
（南西ほうかつ）：**055-220-2315**

甲府市福祉部 介護保険課
甲府市南西地域包括支援センター(南西ほうかつ)
山梨県立大学 看護学部・人間福祉学部

（中央ほうかつ）

**学生訪問調査のお願い**

寒い日が続きますが，いかがお過ごしでしょうか。この度は，訪問調査をご了解いただきどうもありがとうございました。

次の日時に，お伺いさせていただきたいと思いますので，ご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

**訪問日：平成 23 年　2 月　5 日(土)**
**時間帯：午前 10 時から 1 時間程度**
**学生名：**

ご都合が悪い場合やご不明な点がございましたら，下記までご一報下さい。

**【連絡先】**
山梨県立大学教育 GP 室 **055-224-5392**
甲府市中央地域包括支援センター
**055-225-2345**



甲府市福祉部介護保険課
甲府市中央地域包括支援センター
山梨県立大学看護学部・人間福祉学部

（西ほうかつ）

**聞き取り調査のご案内**

まもなく立春ですね。いかがお過ごしでしょうか? 先日お電話にて、聞き取り調査のご了解をいただき、ありがとうございました。

下記により、おうかがい致しますので、どうぞよろしくお願いいたします。

**○ 訪問日時 ： 平成 23 年 2 月 5 日(土)**
**時 頃～**

**○ 場 所 ：**

**おうかがいする学生氏名**

ご都合が悪くなった場合や、ご不明な点がありましたら、下記まで、ご一報下さい。

**＜ご連絡先＞**

山梨県立大学　教育GP室　電話：**055-253-9452**
西ほうかつ　電話：**055-220-7677**



甲府市福祉部介護保険課
甲府市西地域包括支援センター（西ほうかつ）
山梨県立大学看護学部・人間福祉学部

(5) **訪問調査の同意書**

# 同　意　書

私は、山梨県立大学看護学部および人間福祉学部の学生が、私の普段の生活の様子や健康状態、地域での活動状況などについて話を聞くことに以下の内容をふまえて同意し、協力します。

1．私が話した内容について、プライバシーが十分配慮され、個人に関する情報（名前、住所、電話番号等）は公表されないこと。

2．私の話した内容を学生の今後の学習にいかすこと。

3．私が話した内容を地域包括支援センターの今後の活動にいかすこと。

平成　２３年　　月　　日

山梨県立大学　学長　伊藤　洋　殿
（教育 GP 推進本部長）

ご 署 名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

〈お問い合わせ先〉
甲府市○○地域包括支援センター　電話番号　０５５-○○○-○○○○
山梨県立大学池田キャンパス教育ＧＰ室　電話番号　０５５-２５３-９４５２

### (6) 調査用紙

1) 甲府市南西地域包括支援センター

## 地域で自主的な活動に参加されている皆様への聞き取り調査

訪問チームNo.

| | | |
|---|---|---|
| 学部 | 学籍番号 | 学生氏名 |
| 学部 | 学籍番号 | 学生氏名 |
| 学部 | 学籍番号 | 学生氏名 |
| 調査日時　　年　　月　　日（　　時　　分～　　時　　分） | | |

**【Ⅰ．あなた自身のことについて】**

1-1). 性別は　　①男　　②女

1-2). 年齢は　　＿＿＿歳

2.　同居のご家族は何人ですか　　＿＿＿人

3-1). あなたのお住まいの形態は　　①一戸建て　　②アパート　　③マンション　　④公営住宅

3-2). 何階にお住まいですか　　＿＿＿階

3-3). お住まいに、エレベーターはありますか　　①ある　　②ない

4. あなたは現在の地区に暮らして約何年になりますか。　　約＿＿＿＿年

**【Ⅱ．自主活動への参加について】**

5. 所属しているグループ名をお聞かせください。

6. その活動を始めたきっかけをお聞かせください。

7. その活動にどれくらい参加していますか。　　回／月・年

8. それは、どのような活動で、何人位参加していますか。

9. 活動はどこでしていますか。また、そこへはどのようにして行っていますか

　活動場所　：

　交通手段　：

10. その活動は、あなたにとってどのような意味をもちますか。（あてはまるもの全てを、〇で囲んでください。）

①生活に充実感がもてる　②生きがいになる　③健康や体力が保てる　④人と話す機会が増える

⑤新しい友人ができる　⑥情報交換できる　⑦地域のほかの活動にも参加するようになる

⑧地域に貢献できる　⑨話題が豊富になる　⑩社会への見方が広がる

⑪その他（　　）

11. その活動のほかに、参加している活動がありますか。それはどのような活動ですか。

**【Ⅲ. 近所の人とのお付き合いについて】**

12. 隣近所と、何軒くらいのお付き合いがありますか。

①ない　②1～2軒　③3～4軒　④5軒以上

13. あなたは近所の人と、平均して週に何日程度、あいさつをする日がありますか。（あてはまるものを〇で囲んでください）

①ほぼ毎日　②週に2～3日　③ほとんどしない

14. あなたは近所に気軽に相談できる人がいますか（家族や親族は除く）。（どちらかを〇で囲んでください）

①いる　②いない

15. あなたは近所の人から相談をされた時、相談にのることができますか。（どちらかを〇で囲んでください）

①内容によってはできる　②できない

16. 近所の人から相談を受けて困った時に、あなたは誰に相談をしていますか。（あてはまるもの全てを、〇で囲んでください）

①市役所　②地域包括支援センター　③民生委員　④同居の家族　⑤隣近所の人

⑥誰にも相談しない　⑦わからない　⑧その他（　　）

17. あなたは近所の人のことを気にかけていますか。（どちらかを〇で囲んでください）

①気にかけている　②気にかけていない

18. あなたは近所の人の安否が気にかかるとき、確認しようと思いますか。（あてはまるものを〇で囲んでください）

①思う　②思わない　③どちらともいえない

19. あなたが近所の人に対して見守り活動をする場合、どの程度のことができると思いますか。（あてはまるものを、○で囲んでください）

①定期的に訪問し、お話をする程度　　②訪問まではいかないが、外で会えば声かけができる程度

③何もできない

20. あなたは見守り訪問を希望されますか。（あてはまるものを、○で囲んでください）

①希望する　　②今は希望しないが、今後は希望するかもしれない　　③今後も希望しない

＊20で②または③と回答した方だけ、お答えください。

21. あなたが見守り訪問を希望しない理由はなんですか。（あてはまるもの全てを、○で囲んでください）

①家族と一緒に住んでいるから　②家族や親族が近所にいるから　③近所の人との交流があるから

④他人と接するのが苦手だから　⑤人に干渉されるのが嫌いだから　⑥介護サービス等を受けているから

⑦その他（　　）

**【Ⅳ．地域包括支援センターについて】**

22. あなたは「地域包括支援センター」を知っていますか。（あてはまるものを、○で囲んでください）

①名前も業務内容も知っている　②名前は知っているが業務内容は知らない　③名前も知らない

＊22で①または②と回答した方だけ、お答えください。

23. あなたが「地域包括支援センター」に期待することは何ですか。

**【Ⅴ．学生へのメッセージ】**

## 【Ⅵ. その他（オリジナル質問 等)】

## Ⅶ. 最後に、毎年おたずねしていることについて、（はい　：　いいえ）どちらかでお答えください。

| 番号 | 質問内容 | 回答（空白欄　メモ） | | |
|---|---|---|---|---|
| ① | バスや電車を使って一人で買い物ができますか | はい | いいえ | |
| ② | 日用品の買い物ができますか | はい | いいえ | |
| ③ | 自分で食事の準備ができますか | はい | いいえ | |
| ④ | 請求書の支払いができますか | はい | いいえ | |
| ⑤ | 銀行預金、郵便貯金の出し入れができますか | はい | いいえ | |
| ⑥ | 年金などの書類が書けますか | はい | いいえ | |
| ⑦ | 新聞などを読んでいますか | はい | いいえ | |
| ⑧ | 本や雑誌を読んでいますか | はい | いいえ | |
| ⑨ | 健康についての記事や番組に関心がありますか | はい | いいえ | |
| ⑩ | 友達の家を訪ねることがありますか | はい | いいえ | |
| ⑪ | 家族や友達の相談にのることがありますか | はい | いいえ | |
| ⑫ | 病人を見舞うことができますか | はい | いいえ | |
| ⑬ | 若い人に自分から話しかけることがありますか | はい | いいえ | |
| ⑭ | 身体にいいと思うことを日々実行していますか | はい | いいえ | |
| ⑮ | 身体の調子で気になっていることはありますか | はい | いいえ | |
| ⑯ | 楽しみにしていることはありますか | ある | ない | |
| ⑰ | 人との交流はしていますか | はい | いいえ | |
| ⑱ | 暮らしやすい環境ですか | はい | いいえ | |
| ⑲ | 困ったときに頼りになる人はいますか | いる | いない | |
| ⑳ | 身の回りで大きな心配事はありますか | ない | ある | |

住民への依頼文書

## 「地域住民の皆様からお話をお聞きする」ことのお願い

私たちは、現在、山梨県立大学で学んでいる学生です。将来は、看護師・保健師や社会福祉士・介護福祉士の専門職になるために勉強しています。私たちは、高齢者の方々ができる限り住み慣れた地域で元気に生き生きと生活をしてほしいと考え、そのために支援ができる専門職になりたいと思っております。

そこで、現在、地域でさまざまな活動をされている皆様から、直接お話を聞かせていただき、専門職として深く皆様を理解する機会とし、日頃、皆様がどのような活動をしながら生活をなさっているかを教えて頂きたいと思っております。

さらに、聞かせていただいたお話をもとに、地域の皆様に必要な支援について考え、「甲府市南西地域包括支援センター（南西ほうかつ）」の活動にいかしていきたいと考えております。ぜひ、この取り組みの趣旨をご理解頂き、大変貴重なお時間かとは思いますが、ご協力をいただけますようお願い申し上げます。

**【訪問日時】**　平成23年2月5日（土）　午前10時～

＊訪問時間につきましては、ご都合を伺いながら調整させていただきます。

＊訪問日が近づきましたら、改めて、お葉書やお電話で訪問日時の確認をさせていただきます。

**【訪問学生】**　看護学部３年生と人間福祉学部３・４年生・・・・計２～３名

**【聞きたいお話の内容】**

自主的なグループ等で活動していることや地域で取り組んでいること、普段の生活などについてお聞かせください。

時間は60分程度を考えております。

**何かご不明な点がありましたら、以下にご連絡ください。**

**山梨県立大学　教育GP室　０５５－２５３－９４５２**

**甲府市南西地域包括支援センター**

**（南西ほうかつ）　０５５－２２０－２３１５**

甲府市介護保険課
甲府市南西地域包括支援センター
（南西ほうかつ）
山梨県立大学看護学部・人間福祉学部

2) 甲府市中央地域包括支援センター

調査用紙 ＜A4 版縦＞

グループ　No.

## 地域で生活する方への聞き取り調査　（教育 GP 中央ほうかつ）

| 高齢者イニシャル　様 | 年齢　歳 | 性別　男・女 | 同居家族構成　1人　2人　3人　4人以上 | 調査日時　年　月　日（　時　分～　時　分） |
|---|---|---|---|---|
| 学部　学籍番号　学生氏名 | | | 学部　学籍番号　学生氏名 | |
| 学部　学籍番号　学生氏名 | | | 学部　学籍番号　学生氏名 | |

| No. | 質問内容 | 回　答（メモ） |
|---|---|---|
| 1 | 食事の準備は主にどなたがしますか<br><br>ご自身で準備される頻度はどのくらいですか | □本人　□家族　□買ってくる　□ホームヘルパーなどの介護サービス利用<br>□行政の配食サービス利用　□その他（　　）<br><br>（頻度）<br>日・週・月　に　回 |
| 2 | 日用品の買い物は主にどなたがしていますか<br><br>ご自身で買い物に行く頻度はどのくらいですか | □本人　□家族　□ホームヘルパーなどの介護サービス利用<br>□その他（　　）<br><br>（頻度）<br>日・週・月　に　回 |
| 3 | 病院や診療所など、医療機関には、どのくらいの頻度で受診していますか | （頻度）<br>週・月　に　回 |
| 4 | 病院や診療所など、医療機関にはどうやって行きますか（複数回答） | □徒歩　□自転車　□自家用車　（自分で運転・送迎）　□バス　□電車<br>□バイク　□その他（　　） |
| 5 | かかりつけ医はいらっしゃいますか | （種類）<br>□総合病院　□医院・診療所<br>□その他（　　）　□いない |
| 6 | 新聞や書籍などを読んでいますか | □よく読んでいる　□ときどき読んでいる　□あまり読んでいない |
| 7 | 普段お出かけになる頻度はどのくらいですか<br><br>どんな場所におでかけになりますか<br><br>また、出かけたいところはありますか | （頻度）　（ほとんど出かけない人はその理由）<br>週・月　に　回<br><br>□知り合い宅　□病院等　□スーパー等　□公園等<br>□その他（　　）<br><br>（出かけたい場所） |
| 8 | 知り合いの家を訪ねることがありますか | □はい→（頻度）　□いいえ→（理由）<br>週・月　に　回 |

| | | |
|---|---|---|
| 9 | 人が訪ねてきてくれることについて、どうお感じになりますか | □うれしい→（どんな人に訪ねてきてほしいですか？）<br>□親戚（子ども、孫含む）　□友人　□近所の人<br>□その他（　　）<br><br>□うれしくない→（その理由） |
| 10 | 若い人と接する機会がありますか | □はい→（頻度）　□いいえ→（接する機会はほしいですか？）<br>週・月　に　回 |
| 11 | 「健康」についての記事や番組に関心がありますか | □とてもある　□ほとんどない　□まったくない |
| 12 | 身体にいいと思うことを日々実行していますか | □している→（内容）　□していない→（理由・どんなきっかけがあれば実行できるか） |
| 13 | 楽しみにしていることはありますか | □ある→（どんなこと）　□ない→（どんなことができたら楽しいか） |
| 14 | お住まいのあるこの地域は暮らしやすいですか　またその理由を教えてください | □暮らしやすい　□どちらともいえない　□暮らしやすくない<br>（理由） |
| 15 | 家族や友達の相談にのることがありますか | □ある→（どんな事柄？）　□ない→（理由） |
| 16 | 身の回りで心配事はありますか<br>（病気、お金、孤独、健康、住まい、家族や親戚の介護、家族関係 等） | □ない<br>□ある→（どんなときに感じますか？）（それはどんなことですか？） |
| 17 | 老人会に入っていますか | □入っている→（参加の理由・期待していることなど）<br>□入っていない→（不参加の理由） |
| 18 | 地域の集まりや催しには参加していますか | □はい→（参加している催しにはどんなものがありますか？）<br>□いいえ→（不参加の理由）<br>（どんなことに参加したいと思いますか？） |
| 19 | 「地域にあったらいいなあ」と思う助け合いの仕組みやサービスがありますか | （名称や内容を具体的に） |
| 20 | （グループごとのオリジナル質問） | |

まとめ用紙＜A3 版横＞

## 演習を通じての学び（個人記録用紙）

**Ⅰ. 住民の「生活の場」から考えたこと**

1）訪問した高齢者の生活の実態について

2）高齢者の暮らしを支える社会資源について

3）高齢者が暮らす地域の特性について

4）穴切地区に暮らす高齢者全体の生活・健康ニーズについて

**Ⅱ. 他学部の学生と協働して取り組んだ中で感じた、互いの特徴（共通点・相違点）**

**Ⅲ. 今後、他職種と協働で取り組む上で大切にしたいと思うこと**

**Ⅳ. 互いの専門性を踏まえた連携の必要性について**

1）甲府市西地域包括支援センター

つながりマップ ＜A4 版縦＞

「　　さん」の人とのつながり MAP

**作成者**

（学部　　番号　　学生氏名　　）

（学部　　番号　　学生氏名　　）

（学部　　番号　　学生氏名　　）

| | |
|---|---|
| 図で描いてみましょう | |
| 全体像を文章で書いてみましょう | |
| | |

調査用紙〈A4 版縦〉

# 地域で生活する高齢者への聞き取り調査

| | |
|---|---|
| 学部　学籍番号　学生氏名 | 学部　学籍番号　学生氏名 |
| 学部　学籍番号　学生氏名 | 学部　学籍番号　学生氏名 |

| 利用者様イニシャル：　様 | 年齢：　歳　性別：　男・女 | 同居家族構成： |
|---|---|---|

| 番号 | 質問内容 | 回答（メモ） |
|---|---|---|
| 1 | 食事の準備をご自分でしていますか | □している→（どんな料理？）　□していない→（理由） |
| 2 | 日用品の買い物をご自分でしていますか | □している→（よく行く店は？）　□していない→（理由） |
| 3 | 銀行預金、郵便貯金の出し入れをご自分でしていますか | □している　□していない→（誰がしてくれますか？）<br>□配偶者　□同居の子　□同居の孫<br>□同居以外の子　□同居以外の孫<br>□友人　□その他（　） |
| 4 | 年金などの書類をご自分で書いていますか | □書いている　□書いていない→（誰がしてくれますか？）<br>□配偶者　□同居の子　□同居の孫<br>□同居以外の子　□同居以外の孫<br>□友人　□その他（　） |
| 5 | 新聞を読んでいますか | □読んでいる→（関心のある記事？）　□読んでいない→（理由） |
| 6 | 本や雑誌を読んでいますか | □読んでいる→（関心のある内容？）　□読んでいない→（理由） |
| 7 | 普段、外出していますか | □している→（出かけている場所・頻度・移動手段・同行者）<br>□していない→（理由） |
| 8 | 友だちの家を訪ねることがありますか | □はい→（どれくらいの頻度？）　□いいえ→（理由） |
| 9 | 友だちが訪ねてくることがありますか | □はい→（どれくらいの頻度？）　□いいえ |

| | | |
|---|---|---|
| 10 | 普段から家族や友だちに相談することがありますか | □はい→（どれくらいの頻度？）　□いいえ |
| 11 | 困った時に頼りになる人はいますか | □はい→（誰ですか？）　□いいえ<br>□配偶者　□同居の子　□同居の孫<br>□同居以外の子　□同居以外の孫<br>□友人　□その他（　） |
| 12 | 逆に、家族や友だちの相談にのることがありますか | □ある→（どれくらいの頻度）　□ない |
| 13 | 若い人にご自分から話しかけることがありますか | □はい→（頻度・どんな時？）　□いいえ |
| 14 | 健康についての記事や番組に関心がありますか | □ある→（どんな記事・番組？）　□ない→（どんな内容なら？） |
| 15 | 日々の暮らしの中で身体にいいと思うことを実行していますか | □はい→（どんなことを？）　□いいえ |
| 16 | 身体の調子で気になっていることはありますか | □はい→（どこがどんな風に？　対処は?）　□いいえ |
| 17 | 日々の暮らしの中で楽しみにしていることがありますか | □はい→（どんなこと？）　□いいえ→（理由） |
| 18 | 身の回りで大きな心配事はありますか | □ない　□ある→（どんなことですか？） |
| 19 | お住まいのあるこの地域は暮らしやすいですか | □はい→（どんなところ？）　□いいえ→（理由） |
| 20 | 自治会に入っていますか | □はい→（どんな役割ですか？）　□いいえ→（不参加の理由） |

| | | |
|---|---|---|
| 21 | 地域の集まりや催しには参加していますか | □はい→（参加している催しにはどんなものがありますか？）<br><br>□いいえ→（不参加の理由）<br><br>（どんな催しならば参加したいと思いますか？） |
| 22 | 「地域にあったらいいなあ」と思う助け合いの仕組みやサービスがありますか | （具体的にどんな？） |
| 23 | オリジナル　質問1 | |
| 24 | オリジナル　質問2 | |
| 25 | オリジナル　質問3 | |

訪問調査のお願い文書＜A4 版縦　裏表＞

平成 22 年 12 月 10 日

高畑南西自治会長寿の皆様へ

## 「専門職連携演習」における訪問調査のお願い

山梨県立大学「西ほうかつ」担当

当大学では、看護学部と人間福祉学部の学生が協働して、お互いの専門性を理解しながら、地域で暮らす高齢者の生活や健康についての訪問調査を実施しています。

今年度は、高畑南西自治会長寿の皆様に、次のようなご協力を賜りたくお願い申し上げます。

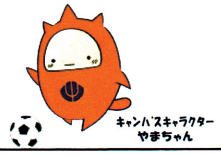
◆ 日 時 ： 平成23年2月5日(土) 午前 10 時頃から約 1 時間

◆ 場 所 ： 高畑南西自治会館あるいは協力者のご自宅

◆ 方 法 ： 学生2～3名がチームとなって、暮らし方、人とのつながり、生活上の困りごと、健康上のご心配などをお伺いする

◆ 協力者： 組の中で支援を必要とする方 23名程度

では、ご協力していただける方は、平成 22 年 12 月 22 日(水)までに、自治会副会長 佐藤千恵子様まで、「訪問調査 協力書」をご提出いただけますようお願い申しあげます。




＜お問い合わせ・ご連絡先＞
山梨県立大学看護学部
清水恵子(シミズ ケイコ)
電話　０５５－２５３－８５４９

平成 22 年 12 月　　日

高畑南西自治会副会長 宛て

## 訪問調査 協力書

私は、平成 23 年 2 月 5 日(土)に、山梨県立大学が実施する「専門職連携演習」の訪問調査の依頼に協力いたします。

| | |
|---|---|
| ご氏名 | |
| ご住所 | |
| お電話 | |

＊ご協力していただける方は、平成 22 年 12 月 22 日(水)までに、ご提出いただけますようお願い申しあげます。

自治会への依頼文書＜A4 版縦＞

平成 22 年 11 月 19 日

甲府市高畑南西自治会の皆様へ

**平成 22 年度「専門職連携演習」の高齢者訪問調査についてのお願い**

山梨県立大学教育ＧＰ
甲府市西ほうかつ担当

山梨県立大学では、平成 19 年度より地域にお住まいの高齢者の皆様のご協力の下、看護学部と人間福祉学部の学生が協働する「専門職連携演習」を実施しています。今年度は、高畑南西自治会の皆様に、下記ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

**◆専門職連携演習の目的**

1．看護学部と人間福祉学部の学生がチームで高齢者の個別訪問調査を行い、高齢者の生活を実感し、高齢者の視点から生活や健康ニーズを考えることができる。
2．両学部の学生が、演習の準備、実施、結果の分析などの合同のプロセスを通して、特に地域に暮らす高齢者の人とのつながりや周辺地域の理解を深めることができる。
3．両学部の学生が、演習の準備、実施、結果の分析などの合同のプロセスを通して、相互の理解を深め、互いの専門性や協働することの利点を明確にすることができる。

**◆演習の時期**

1）オリエンテーションと事前学習(学内)　‥　1月11日(火)
2）調査当日までの準備など(学内)　‥　1月12日(水)～2月4日(金)
3）**訪問調査の実施**とまとめ(学内)‥**2月5日(土)** 午前 10 時頃から約 1 時間の訪問
4）地域報告会　‥　3月下旬 または 4月初旬　　日程はご相談させてください

**◆参加学生数**

・看護学部の学生数３４名程度、人間福祉学部の学生数２２名程度　計５６名程度

**◆調査の方法**

両学部の学生２～３名がチームとなって、一人の高齢者のご自宅を訪問あるいは自治会館にて聞き取り調査を実施させていただく。

**◆調査の内容**

暮らし方、人とのつながり、生活上の困りごと、健康上のご心配やお悩み　など

**◆調査をお願いしたい高齢者数**

20名程度　＊当日、急な用件で中止される方のために３名多目にご依頼したい

**◆「甲府西ほうかつ」を担当する教員**

・看護学部‥清水恵子(代表)、井出成美、須田由紀、河野由乃
・人間福祉学部‥柳田正明、小野興子

＜お問い合わせ・ご連絡先＞
山梨県立大学看護学部　清水恵子(シミズ ケイコ)
電話　055－253－8549

## 2. 情報発信の関係資料

### (1) 新聞掲載

朝日新聞 平成 22 年 2 月 23 日掲載

はぐくむ

# 「看護」と「福祉」連携の意義学ぶ

## 県立大2学部、地域での演習2年目

看護と福祉、二つの学部の学生たちが一緒になって、地域の高齢者の生活実態を調べるフィールドワークに、県立大学が取り組んでいる。在宅介護の現場や医療施設などで働く際に必要となる「専門職の連携」の意義を、実地に学ぼうとの試み。演習を通して互いの持つ「視点」の違いに気付くなど、試行2年目で軌道に乗ってきたと大学側は手応えを語っている。（吉田晋）



看護と福祉の学生が一緒になって高齢者宅を訪ねるフィールドワーク＝甲府市内

### 職種間の壁取り払う交流

「食事の準備は、主にどなたがなさいますか」。数人ずつ一組になった学生たちが、高齢者の自宅を訪ね、質問を投げかける。家事、趣味、友人や家族、通院の状況……。

看護学部の約100人と、人間福祉学部の約60人が、2月上旬、数人ずつのグループに分かれて甲府市内の高齢者たちを訪問した。家庭や地域での生活の様子について聞き取る実地演習の日だ。

### 高齢者のニーズ 生の声聞き取り

地域に住む高齢者の具体的な生活・健康ニーズを体感したり、聞き取りをする際の基本的な姿勢を学んだりするのが目的。同時に、同じ大学とはいいながらキャンパスもカリキュラムも違う両学部の学生が、互いを理解するのもねらいの一つだ。

県立大は、県立看護大と県立女子短大が合併して2005年4月に開学。3学部のうち看護、人間福祉の両学部は、同じ甲府市内でも池田、飯田の両キャンパスに分かれ、相互の交流は密とは言えなかった。

「学部が違うと初めて会う顔が多いのですが、将来資格を取って働き始めれば直面する『職種間の壁』を取り払った形での教育要勢が必要だと思います」。この演習のリーダー役の佐藤悦子看護学部長は言う。

フィールドワーク真後の報告会では、さっそく「双方の視点の差」が話題になった。

「看護は『治す』、福祉は『伸ばす』といった発想の違いがあるように思った」。ある班では、体に不具合がある人の外出について、看護学生はけがのリスクに目を向け、福祉の学生はむしろ閉じこもりを心配する、といった互いの見方に気付いたと言う。

「ケアプランを作る場合には双方の視点を考慮しなければならず、難しいなと実感した」

血糖値が高い男性の話を聞いた班では、看護学生は栄養コントロールが十分かどうかに着目したのに対し、福祉の学生は炊事を担う妻の負担を気にかけていた。

他の班は、胃につなげた子ユーブで流動食をとっている人の例に注目。むせて気管に逆流することを心配する看護と、本人に楽な姿勢を重視する福祉とで見解が分かれ、「互いに譲れない点は、その根拠を理解し合うことこそが大切だと思う」と報告した。

これらを受けて、指導教員は「看護と福祉の視点は、対象者の状態に応じてウエートバランスが継続的に変わっていく」と総括。佐藤学部長も「他者とのコミュニケーションの姿勢を、これを機に学んで欲しい」とまとめた。

### 地域の課題探り 調査内容活用へ

実習は、文部科学省の「質の高い大学教育推進プログラム」に採択されたプロジェクト。3年目の来年度以降は必須科目にするという。聞き取った内容をまとめて地域の課題を探り、公民館で報告会を開いたり、高齢者ケアの総合調整を担う甲府市の「地域包括支援センター」に提供したりと、活用方法も工夫したいとしている。

山梨日日新聞 平成 22 年 4 月 18 日掲載

### 高齢者支援活動 学部超えて連携

県立大で合同発表会



山梨県立大は17日、同大池田キャンパスで「学生による専門職連携演習合同発表会」を開いた。人間福祉学部と看護学部の4年生が、甲府市内の地域包括支援センターを訪問して行った、高齢者の生活環境や健康状態などについての聞き取り調査の結果や専門職連携への課題を報告した。写真。

学部の枠を超えて取り組む連携教育開発プロジェクトの一環。同市南西地域包括支援センターを訪れた学生は、老人クラブへの参加状況や活動内容、要望などを調査。「コミュニケーションを増やすために、ほかの老人クラブと交流する機会が必要」と課題を述べた。両学部が連携して取り組んだことについては「それぞれの専門性を生かして、互いの弱点をカバーしていきたい」と発表した。

発表会には、両学部の学生や地域包括支援センターの職員ら約400人が参加した。

山梨日日新聞 平成22年10月3日掲載

## 看護・福祉の連携 2学部の学生実践

### 県立大で成果報告会

県立大（伊藤洋学長）は2日、甲府・同人池田キャンパスで、看護・福祉の両専門職の連携を目指す教育プログラムの成果報告会を開いた。

プログラムは文科省から支援を受け、2008年度から人間福祉、看護の両学部の3年生を対象に実施。学生が地域包括支援センターを拠点として、甲府市内のお年寄りの生活状況を調べ、心身の健康維持に向けた取り組みを考える演習を行った。

報告会には約300人が参加＝写真。学生は「看護と福祉の両方の視点で見ることで、不足が補え、よいケアにつながる」と発表し、地域住民は「熱心に話を聞いてもらえた」と感想。地域包括支援センター職員は「大学の教育活動が地域と行政を結びつけてくれた」と評価した。

専門職の連携を目指す教育プログラムを実施している埼玉県立大と千葉大の教授が事例を報告した後、ディスカッションをした。



朝日新聞 平成22年10月26日掲載

朝日新聞 20

## 2学部の地域交流演習・最終年度

# 専門超え理解深まる

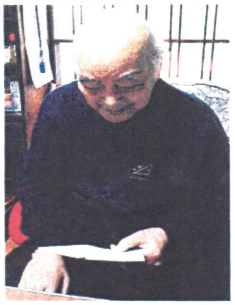
現場発！ 育・学

県立大の看護学部と人間福祉学部の学生たちが、学部の枠を超えて連携しながら地域のお年寄りと交流し、学ぶ演習が最終年度を迎えた。お互いの学部の専門的な部分を理解したり、高齢者の思いに気付いたりと、将来につながる収穫があったようだ。（柏原愛）

### 県立大看護学部・人間福祉学部

## お年寄りにも好評■成果に自信







上作成した演習資料を見ながら、お互いの体験を語る学生＝甲府市池田1丁目
左演習後、話を聞いたお年寄りの元には、学生からお礼の手紙が届いた。大切に保管している＝甲府市内
下学生がつくった折り紙。独り暮らしの高齢者の家に飾られている＝甲府市内

この取り組みは、2007年秋からスタート。08年度に文部科学省の「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」に採択され、10年度末（来年3月）までの3年間、補助金を受けながら成果を全国に発信している。

演習は、3年生の1月から始まる。両学部の学生がチームを組み、どのようなことをするかを話し合う。人間福祉学部4年の小池涼子さん(22)は、「自分の意見をどう伝えて良いのか、不安だった」。看護学部4年の小松歩美さん(22)も「専門性や意見の食い違いで、戸惑ってしまった」と話す。

その後、電話や手紙でお年寄りと連絡を取り、訪問する時間を決める。お年寄りの中には、警戒して断る人もいた。約束して当日行くと、忘れられていることもあった。「受け入れてもらうことの難しさも知った」と小松さん。

2月、両学部計160人の学生が、グループごとに甲府市内の3地域にわかれ、生活の様子を見聞きし、住みやすさなどを調べた。高畑北部福寿会では、68～90歳の約25人のお年寄りが、50人の学生と面接した。長田禮子会長(74)や会員の石原公三さん(76)が中心となり、間を取り持った。面接を受けたお年寄りからは「安心感を持って話をすることが出来、自分の話をわかってもらえた」「若い人がノートに記録しながら、真剣に話を聞いてくれることがうれしかった」と好評だ。

一方、学生は同じ話を見聞きしても、専門分野ごとに受け止め方が異なった。例えば、血圧の薬について。看護の学生は「ちゃんと飲めているか」「効果はあるか」など身体に注目。人間福祉の学生は「どうやって病院に通っているのか」「お金がどのくらいかかっているのか」など生活環境を中心に見ていた。

4年になった4月、調査結果を大学と、訪問した各地域のお年寄りの前で発表した。大学ではデータを多く盛り込み、口頭で説明。地域では文字を大きくし、スペースを空けるなど、より見やすく作り直した。発表を聞いた長田さんは「あらためて自分たちの住んでいるところについてよく分かった」。石原さんは「若い人とのかかわりは新鮮で、地域も活性化する。これからも交流したい」。

発表した小池さんは、「きれいな服を着てきたり、足の不自由な人が支えられて来たりして発表会に集まってくれた。地区の人の生活にかかわれたと感じた」と話す。訪問を通じて学生たちは、病院を退院した後のお年寄りたちの生活ぶりも知ることができた。

訪問後、学生たちはすぐにお礼の手紙を書いた。手紙を受け取った飯窪慶徳さん(90)は「若い人が熱心に話を聞いてくれて感激した」とうれしそう。

演習と同時に、独り暮らしのお年寄りの話を聞く「傾聴ボランティア」を始めた学生もいる。小池さんもその一人。「（訪ねたお年寄りから）誰とも話さない生活が3日間続いたと聞き、衝撃を受けた」という。戦争や学校の話をしたり、一緒に色紙を折ったりした。ボランティアを受けた女性(85)は「優しくて、感謝している」と笑顔。

県立大の佐藤悦子看護学部長は「看護師やソーシャルワーカーとして現場に入ると、チームを組んで仕事をすることが多い。だが、専門性が壁となって、うまく理解し合えず、連携に苦労することがある」と説明。「学生時代から地域に出て行くことが、将来社会で働く時の力になる」と取り組みの意義を語る。

教育GP終了後の11年度からは、両学部が連携するプログラムを時間割りに組み込み、演習の機能や効果を高めていくという。

## (2) パンフレット、ポスターなど

山梨県立大学 ニューズレター No. １１掲載

### → 甲府市中央地域包括支援センターと相生地区

山梨県立大学では、看護学部と人間福祉学部の３年生が互いの専門性を学び合い、学部を超えて協働する特別演習プロジェクトが実施されています。これは平成20年度に全国の大学から申請された939件のうち148件が文部科学省「質の高い大学教育推進プログラム」として採択され、その中のひとつに選ばれた教育プログラムです。

VOICE 001

このコーナーでは、山梨県立大学の地域連携による活動を紹介します。



今年２月に看護と福祉を学ぶ３年生（看護学部36名、人間福祉学部22名）が参加して行われた甲府市中央地域包括支援センター※との連携による調査では、実際に学生たちが２人１組となり、高齢者のお宅を個別訪問し、お話をうかがいました。住民の方々への聴き取りや地域調査を行い、地域実態からその課題や対応策を検討し、地区活動につなげるプロジェクトです。

地域調査訪問先は甲府市の相生地区。甲府市中央地域包括支援センターの管轄内の地域です。まずは、甲府市中央地域包括支援センターの清水季世子さんと楠史子さんのお話です。お二人とも保健福祉のプロです。そんなお二人には学生たちの取り組みはどんな風に見えたのでしょうか。

「学生たちは、オリジナル質問により、それぞれのお宅で、質問をしていました。今回調査をした相生地区は、1,591世帯、人口は3,288人。そのうちの35.1%が65歳以上の高齢者です。甲府市の平均の高齢化率24.3%と比較してみるとかなり高い数字となっています。学生たちは、ただ単に聞き取り調査をしただけではなく、相生地区の特性や生活の実態、それらから見える課題などをまとめていました。また、将来、社会福祉や看護の仕事を目指している学生たちが、一つの課題について取り組むということは現場に出た時、必ず役立つはずです。一人の人間をみていくために、対象に迫るということは現場にいる私たちにとっても大きな課題になっているのです。また、福祉、看護それぞれの立場によってみる場所が違うということも実感できるはずです。それらを摺り合わせてお互いの立場になり、理解をすることができたことは本当に素晴らしいことです。実は、学生たちの発表をうちの職員にも聴かせたいと思い、７月15日に中央包括支援センターで発表をしてもらいました。現場にいてもなかなか気付かないことや、福祉、看護の違いについて私たち自身も日々、葛藤していますので。利用者や患者さんにとっては福祉も看護も同じ専門職なので、両者が互いのよさを生かして利用者のために役立つことができればそれがベストだと思います。対象となる方と向き合うこと、これが今回、学生たちは自分たちの取り組みの中で実体験をしたのではないかと思います。学生の発表にもありましたが、介護、看護それぞれの立場が連携することが必要だということです。今回の取り組みで培った経験を今後の仕事の中でぜひ活かしてほしいですね」。



それでは、次に学生たちがおじゃました相生地区の今橋さんご夫妻のお話です。今回、お話をうかがった今橋さんのご主人の輝雄さんは85歳、奥さんの初江さんが88歳。お二人のお話によると、相生一丁目地区は、昔からの持ち家の世帯が多く、一人暮らしのお年寄りもかなり多いそうです。

「学生さんたちが話を聴きに来てくれたけど、本当に真面目な学生さんばかりで、びっくりしました。県外から来ている子が多いと聞いて、みんな頑張ってるなと感心しましたね。私たちの地域は高齢化率が高いということですが、皆さんとても元気です。住民同士のつながりも強くて、80代のぼくらがこの町を守っているという気概を持っています。彼らは看護や福祉の勉強をしていると言っていたけど、将来仕事に就いた時に、ぼくたちと話をしたことが、現場で活かされるといいなぁと思っています。看護・介護や相談援助を受ける側とする側の立場をそれぞれが考え、彼らがそれぞれの現場で活躍することを楽しみにしています」と今橋さんは元気に応えてくれました。

地元の大学に通う学生が、地域住民の中に入り、コミュニケーションを取る。その実体験を通じて、住民とともに今自分たちが学んでいる看護や福祉について考える。そんな取り組みがこれからも県立大学の教育プログラムの中で続けられていきます。

※地域包括支援センターとは、介護保険法で定められた地域住民の保健・福祉・医療の向上、虐待防止、介護予防マネージメントなどを総合的に行う機関。2005年の介護保険改正で制定され、各市町村に設置されている。

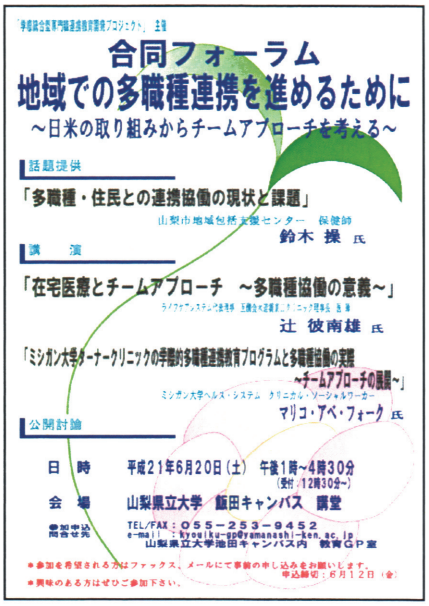
成果報告会・シンポジウム ポスター




学生による合同発表会 ポスター



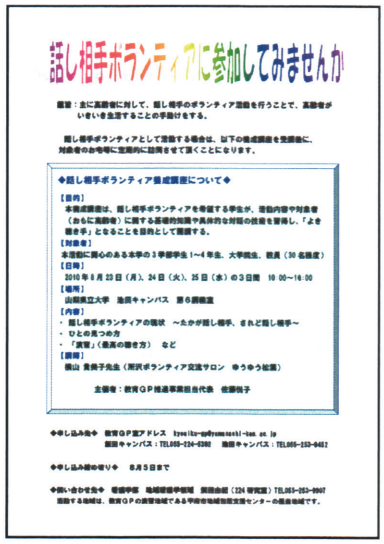

合同フォーラム ポスター



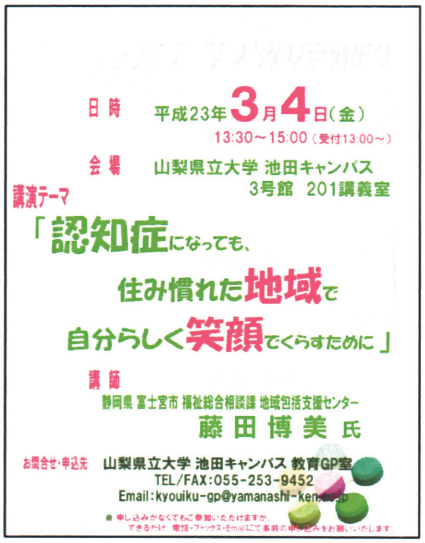

研修会 ポスター




話し相手ボランティア養成講座 チラシ



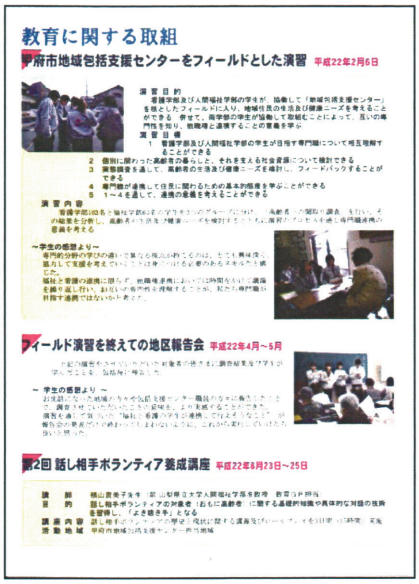

包括職員研修 チラシ



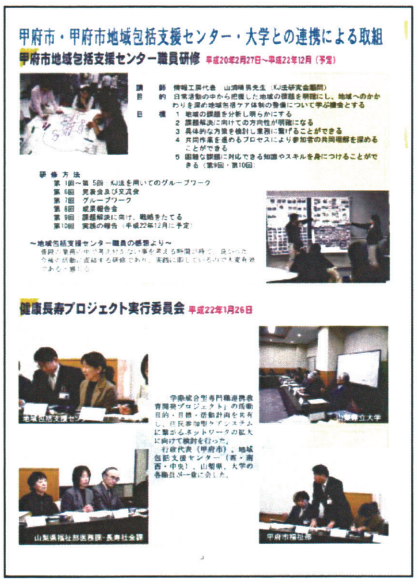


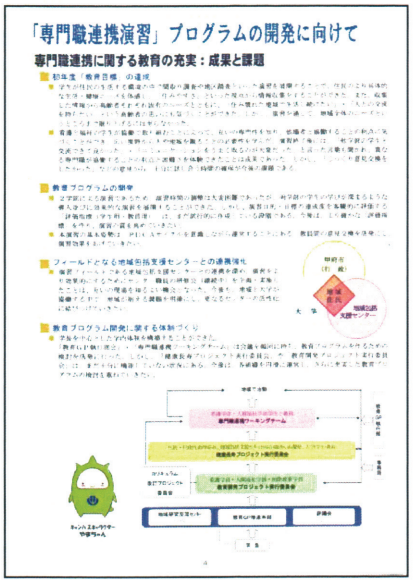
パンフレット vol.3


2008年度「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」採択
学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト
— 平成22年1月～8月の取組 —
公立大学法人 山梨県立大学


教育に関する取組
甲府市地域包括支援センターをフィールドとした演習 平成22年2月5日
フィールド演習を終えての地区報告会 平成22年4月～5月
第2回 話し相手ボランティア養成講座 平成22年8月23日～25日

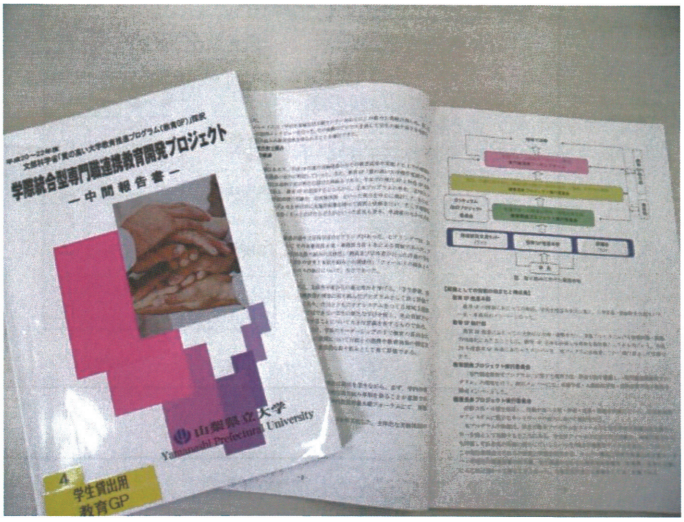

～「学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト」の概要～
学生による合同発表会 平成22年4月17日
教育GP（専門職連携演習）に参加して 学生の感想より


甲府市・甲府市地域包括支援センター・大学との連携による取組
甲府市地域包括支援センター職員研修 平成20年2月27日～平成22年12月（予定）
健康長寿プロジェクト実行委員会 平成22年1月26日


「専門職連携演習」プログラムの開発に向けて
専門職連携に関する教育の充実：成果と課題


教育理念
グローカルな知の拠点となる大学
未来の実践的担い手を育てる大学
地域に開かれ地域と向き合う大学
公立大学法人 山梨県立大学
豊かな人間性と、未来を拓く実践力を育てます!!
ACCESS

中間報告書

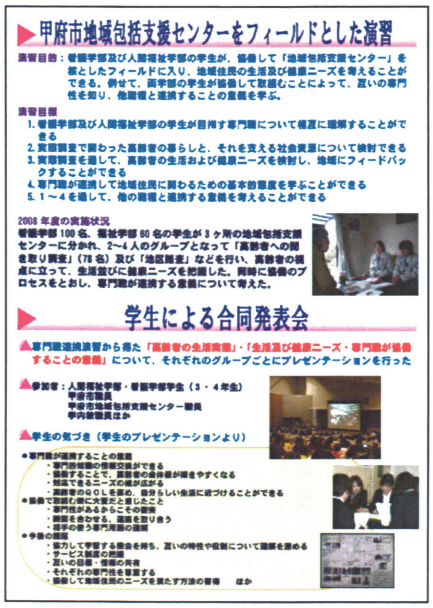



クリアファイル・手提げ袋




平成 21 年度 大学教育改革プログラム 合同フォーラム（ポスターセッション）






平成22年度大学教育改革プログラム合同フォーラム
『質の高い大学教育の展開』
質の高い大学教育推進プログラム

# 「学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト」

（平成20～22年度採択）

山梨県立大学



キャンパスキャラクター
「やまちゃん」

## 山梨県立大学の概要

山梨県立大学の理念と目的

* グローカルな知の拠点となる大学
* 未来の実践的担い手を育てる大学
* 地域に開かれ地域と向き合う大学

学生数(平成22．4．1)

| 学部 | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 国際政策学部 | 97 | 87 | 86 | 103 | 373 |
| 人間福祉学部 | 89 | 90 | 83 | 94 | 356 |
| 看護学部 | 102 | 101 | 102 | 103 | 408 |
| 合計 | 288 | 278 | 271 | 300 | 1137 |





2

## 1．プロジェクトの目的

看護と福祉を学ぶ学生が協働して「地域包括支援センター」を核としたフィールドに入り、住民の生活を体感しながら、住民とともに、住民参加型ケアシステムをつくるプロセスに関わることで、「専門性を高め、他職種との協働の在り方」を学ぶことを目的とした「専門職連携教育プログラム」を開発する

## 2．プロジェクトの内容

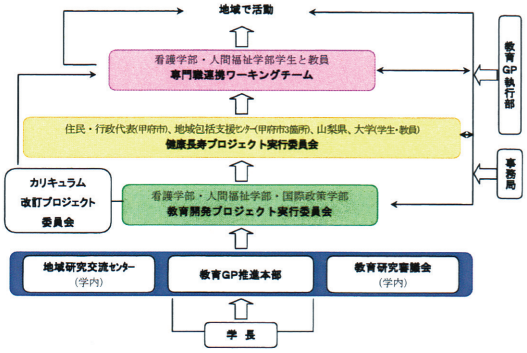
- 看護学生と福祉学生が協働して、地域包括支援センターのフィールドにはいり、地域のニーズを地区踏査・聞き取り調査、社会資源に関する調査等を行う。
- 収集した情報をもとに、高齢者の生活・健康ニーズを分析し、これらの地域ニーズから高齢者が生活するために何が必要か、専門職としてどのような機能が発揮できるかを話し合う。
- 話し合った結果をまとめ、フィールドに出て報告会を実施、意見交換を通して、自分たちの分析の評価を行う地域の関係者に発表する。
- 全体のプロセスから、学生相互に専門性を知り合い、協働で取り組む意義を考える。
- 並行して、地域包括支援センター・A市・大学と共同の研修や検討会を開催し、地域ケアシステム形成に貢献する

（平成20～22年度教育GP採択）

## 3．取り組みの経過

- 平成18年10月　検討会の発足
- 平成19年度　看護学部・人間福祉学部の3年生を対象に合同演習の企画・実施
- 平成20年度　文部科学省「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）に採択
- 平成23年度　新カリキュラム「専門職連携演習」科目　1単位30時間　開始予定

## 4　取り組みの体制








看護学部と
人間福祉学部の
教員会議

健康長寿プロジェクト実行委員会
県・市・地域包括支援センター・大学
との話し合い





## 5. 学際統合型専門職連携演習目的と目標

**＜目的＞**

①看護学部及び人間福祉学部の学生が、協働して「地域包括支援センター」を核としたフィールドに入り、地域住民の生活及び健康ニーズを考えることができる。

②両学部の学生が協働で取り組むことによって、互いの　専門性を知り、他職種と連携することの意義を学ぶ。

**＜目標＞**

(1)看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互理解することができる。

(2)個別に関わった高齢者の暮らしと、それを支える社会資源について検討できる。

(3)実態調査を通して、高齢者の生活及び健康ニーズを検討し、フィードバックすることができる。

(4)専門職が連携して地域住民に関わるための基本的態度を学ぶことができる。

(5)上記を通して、連携の意義を考えることができる

## 6. 学際統合型専門職連携教育の対象・方法

1月 合同オリエンテーション → 2月 訪問調査・地区踏査 → 3～4月 報告会（地域・学内）

学生が訪問先へ連絡 調査内容の検討

情報をもとに意見交換 報告書の作成

両学部の学生が協働で取り組む

*看護学部　3年生　約100名　　人間福祉学部　3年生　約60名*

甲府市3カ所の地域包括支援センターに分かれて実施する。
2～3名のチームを作り高齢者への訪問調査、地区踏査を行う。

**演習前・後でリフレクションペーパーで振り返り、到達目標に対する自己評価を行う**

## 7. 学生の自己評価項目

| | |
|---|---|
| **1** | **看護学部及び人間福祉学部の学生が目指す専門職について相互に理解することができる** |
| 1-1) | 自分が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について説明することができる |
| 1-2) | 相手が学んでいる専門職の専門性（知識・技術など）について自分の言葉で表現できる |
| 1-3) | 互いの専門性について尊重することができる |
| 1-4) | 互いの専門性を踏まえた連携の必要性について多面的に考えることができる |
| **2** | **実態調査で関わった高齢者の暮らしと、それを支える社会資源について検討できる** |
| 2-1) | 関わった高齢者個々の暮らしについて考えることができる |
| 2-2) | 関わった高齢者個々の暮らしを支える社会資源について説明することができる |
| 2-3) | 関わった高齢者が暮らす地域について考えることができる |
| 2-4) | 関わった地域で調査した高齢者全体の生活及び健康ニーズを考えることができる |
| **3** | **実態調査をとおして、高齢者の生活及び健康ニーズについて検討し、地域にフィードバックできる** |
| 3-1) | 互いの専門的な視点を踏まえ、得られた情報を共有するとともに、多角的に議論することができる |
| 3-2) | 議論の結果をもとに、客観的に分析し、課題を明らかにできる |
| 3-3) | 課題に対する解決方策を専門的な視点から考えることができる |
| 3-4) | 得られた結果をまとめて、関係者にわかりやすく報告することができる |
| **4** | **専門職が連携して地域住民に関わるための基本的態度を学ぶことができる** |
| 4-1) | 訪問前後の手続き（電話・礼状など）が的確に実施できる |
| 4-2) | 身だしなみや言葉遣いが適切であり、相手に不快を与えないよう接することができるとともに、相手の反応を的確に捉えることができる |
| 4-3) | 地域住民・専門機関従事者に感謝の意を伝えることができる |
| 4-4) | 個人情報を的確に扱い、確実に保護することができる |
| **5** | **1～4をとおして、他職種と連携する意義を考えることができる** |
| 5-1) | グループワークに積極的に参加し、チームの一員としての役割を担うことができる |
| 5-2) | グループメンバーの意見を傾聴し、受け止めたうえで自分の意見を述べることができる |
| 5-3) | 協働する体験から得られた学びをグループ活動を通してまとめ、分かり易く発表することができる |
| 5-4) | 連携して関わった一連のプロセスを振り返り評価し、今後の自己の課題を明確にできる |

## 3年生：両学部学生の出会いの場（４月）



## 演習 合同オリエンテーション（1月）



## 訪問や地区踏査の活動の様子





地図をみながら地区踏査



近くの公民館でインタビュー



訪問した方へのお礼のはがき



調査後の話し合い





## 地区報告会・合同報告会の準備



## 学内での合同発表会

3年生・演習を受けて下さったフィールドや地域の方が参加



## 地域での報告会



## 地域包括支援センターでの報告会

（直接住民の方や包括職員から意見を聞くことができる貴重な体験）



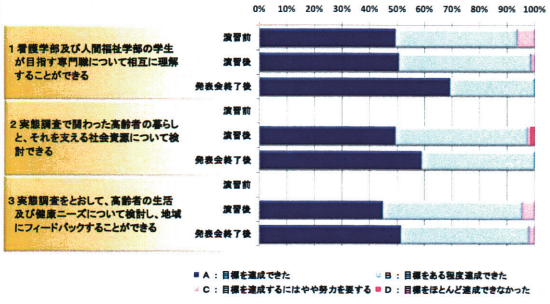
## 8. 専門職連携演習の成果（学生自己評価表から）

調査方法

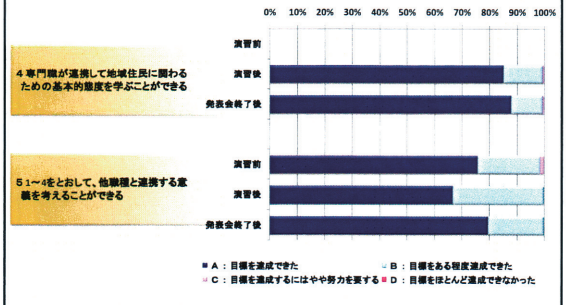
2010年1月～4月に実施した演習前・後、合同発表会終了後に実施した「学生自己評価表」を用いて、評価項目毎に統計量を算出した。また自由記述は、内容を整理し、類似性のあるものをカテゴリ化した。

＊2010年度日本保健医療福祉連携教育学会報告

## 学生自己評価：5つの大項目の推移①（演習前・演習後・発表会終了後）




## 学生自己評価：5つの大項目の推移②（演習前・演習後・発表会終了後）




## 学生自由記述カテゴリ化① N=597

| | | |
|---|---|---|
| 協働してみて | ＊各専門性からの多様な対象の捉え方ゆえ連携不可欠<br>＊他職種理解が連携の第一歩<br>＊知識共有だけでなく話し合いの場設定まで連携は必要 | 106 |
| 互いの学部の専門性について | ＊他学部との協力で自分の使命や責任を再認識<br>＊自らの専門性を伝え相手の専門性を理解する難しさ<br>＊自らのめざす専門性を改めて考える機会となる | 86 |
| 合同発表会で他のグループ発表を聞いて | ＊分析・発表・まとめ方の多様性と多様な取り組みを実感<br>＊調査結果からの学生の提案が各々異なり深い学びあり<br>＊自分のグループ以外の学びが共有できて良かった | 77 |
| 貴重な体験・自己の効力感 | ＊各々3年間専門的な学びをしたからこその気づきがあった<br>＊演習は専門職になる意識向上にもつながると思う<br>＊面識浅く考え方異なる人との作業は大変だが学びも多い | 61 |
| グループワークに関して | ＊共に考え作りあげることで連携基盤が自然に学べた<br>＊時間と手間がかるが納得するまでの話し合いで成果大<br>＊専門性の違いゆえ互いに誰に落ちずまとまらない点もあり | 55 |

## 学生自由記述カテゴリ化② N=597

| | | |
|---|---|---|
| 合同発表会に関して | ＊グループ話し合いによる成果・課題等を地域に伝える重要性<br>＊具体的成果を地域に返すことで良い地域づくりにつながる<br>＊発表準備の検討を通してわかりやすく伝える表現方法を知る | 54 |
| 調査・分析からの高齢者の健康・生活ニーズ | ＊地区毎に環境等が異なる中での支援体制や方法を導く重要性<br>＊1人1人の高齢者をみないとその地域のニーズはみえてこない<br>＊前年度比較にデータにも興味持つ | 42 |
| 今後の実践への活用 | ＊学びを生かし連携意義や自分の専門性を考え続けたい<br>＊演習より今後現場に出るステップが踏めたと思う<br>＊この学習を今後、ボランティアや仕事等にいかしていきたい | 37 |
| 自己分析・課題の発見 | ＊他職種とかかわることで、自分を客観視し見つめなおす<br>＊社会資源など幅広い選択肢を考えるにはまだ勉強不足だ<br>＊同学部・学年で学ぶゆえの視点や価値観の隔たりに気づく | 22 |
| 地域の高齢者と接して | ＊訪問し話を聴くことで高齢者も学生も良い体験ができた<br>＊若者が高齢者宅を訪問して活性化したと感想を聞き嬉しい<br>＊外出や趣味も活発で実習で出会う高齢者とは違った印象 | 6 |
| その他 | ＊他学部と協働する機会がもてて良かった<br>＊住民や包括センターのおかげで良い勉強ができた<br>＊もっと他学部の意見や考えを知りたかった | 51 |

## 9. 地域包括支援センター職員研修会による

**多職種連携と協働**

地域包括支援センターを核とした住民参加型の地域ケアシステムづくり

<目 的>

地域の問題を分析し明らかにする

課題の解決に向けての方向性が明らかになる

参加者のスキルアップ

共同作業を進めるプロセスにより参加者の共通理解を深めることができる

具体的な方策を検討し、業務に繋げることができる

## 10. 地域包括支援センター職員研修会の概要

***(1)研修の対象***
＊本プログラムの演習フィールドであるA市10カ所の地域包括支援センター職員
＊A市介護保険・介護支援部門課職員
＊本学教員

***(2)研修時期と回数***
研修時期は平成21年2月～平成22年12月　全10回の研修会を実施

***(3)研修場所***
山梨県立大学

***(4)研修方法***
KJ法の講師の指導の下、KJ法簡略型を用いてのグループワーク演習を行った。

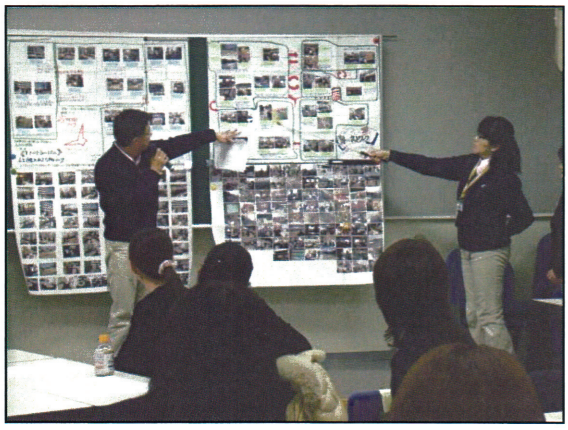
***(5)職員出席率***
出席率の平均は67.1%。 最も少ない回は60.9%、最も多い回は74.5%











## 11. 地域包括支援センター職員研修会 目的の達成について

地域の問題を分析し明らかにできた(85%)

課題の解決に向けての方向性が明らかになった(88.5%)

参加者のスキルアップ

共同作業を進めるプロセスにより参加者の共通理解を深めることができた(100%)

研修会の成果を今後の業務につなげることができそう(97.1%) 第8回研修時

具体的な方策を業務に繋げることができそう(46.2%) 第6回研修時

## 12. 最終年度　成果報告会・シンポジウム

平成22年度10月2日開催

**1. 地域への成果報告会**
**「看護と福祉の専門職連携演習に参加した意義」**

**目的：学生や住民、関係機関が、このプロジェクトに参加したことでどんな意義があったのか。各立場からの意見を明らかにしてその成果を共有し、今後の地域づくりや教育プログラム改善に生かす。**

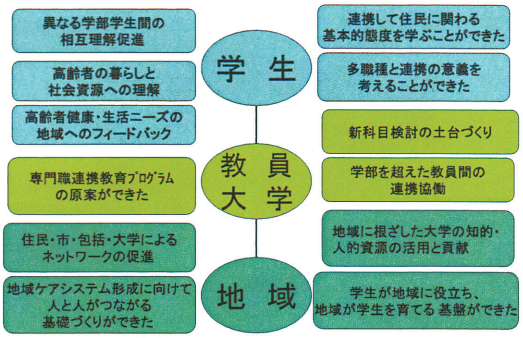
**2. シンポジウム（教員FD）**
**「地域との協働による多職連携教育プログラムの成果と課題」**

**目的：IPEを実施する他大学の成果や課題をふまえ比較検討により、地域と協力した教育プログラムシステムを明らかにして、今後の本学の取り組みに生かす。**



最終年度
成果報告会
と
シンポジウム

## 13. 取り組みの成果






朝日新聞山梨版掲載：2010年10月26日

2学部の地域交流演習 最終年度

専門超え理解深まる

お年寄りにも好評 成果に自信

現場発 育・学

aspara

## 14. 今後の課題



- 新設科目「専門職連携演習」教育プログラムの構築と検証
- 教育GP終了後の大学内の体制
- 連携教育に関わる教員の指導力の向上
- 大学と市・包括支援センターが連携を図り「住民参加型の地域ケアシステム」の構築につながる活動の具現化

## 3. メンバー表

# 平成20年度　教育GP「学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト」実施体制

### 教育GP推進本部

| | | |
|---|---|---|
| 本部長 | 鶴 見 尚 弘 | 学 長 |
| 担当主査 | 佐 藤 悦 子 | 看護学部（教授） |
| 構成員 | 阿 部 真 美 子 | 人間福祉学部長 |
| | 松 下 由 美 子 | 看護学部長 |
| | 池 田 政 子 | 地域研究交流センター長 |
| | 関 谷 秀 昭 | 主 査 |
| | 佐 原 淳 仁 | 副主査 |

### 教育GP執行部

| | | |
|---|---|---|
| 責任者 | 佐 藤 悦 子 | 看護学部 |
| サブ責任者 | 神 山 裕 美 | 人間福祉学部 |
| 構成員 | 小 野 興 子 | 人間福祉学部 |
| | 河 野 由 乃 | 看護学部 |
| | 吉 澤 千 登 勢 | 看護学部 |

### 専門職ワーキングチーム

| | | |
|---|---|---|
| リーダー | 神 山 裕 美 | 人間福祉学部 |
| サブリーダー | 吉 澤 千 登 勢 | 看護学部 |
| 構成員 | 佐 藤 悦 子 | 看護学部 |
| | 河 野 由 乃 | 看護学部 |
| | 清 水 惠 子 | 看護学部 |
| | 須 田 由 紀 | 看護学部 |
| | 望 月 宗 一 郎 | 看護学部 |
| | 小 野 興 子 | 人間福祉学部 |
| | 大 澤 準 一 | 人間福祉学部 |
| | 横 山 貴 美 子 | 人間福祉学部 |
| | 伊 藤 健 次 | 人間福祉学部 |

### 教育開発プロジェクト実行委員会

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 佐 藤 悦 子 | 看護学部 |
| 副委員長 | 神 山 裕 美 | 人間福祉学部 |
| 構成員 | 波 木 井 昇 | 国際政策学部 |
| | 熊 谷 隆 一 | 国際政策学部 |
| | 河 野 由 乃 | 看護学部 |
| | 吉 澤 千 登 勢 | 看護学部 |
| | 清 水 惠 子 | 看護学部 |
| | 須 田 由 紀 | 看護学部 |
| | 望 月 宗 一 郎 | 看護学部 |
| | 小 野 興 子 | 人間福祉学部 |
| | 大 澤 準 一 | 人間福祉学部 |
| | 横 山 貴 美 子 | 人間福祉学部 |
| | 伊 藤 健 次 | 人間福祉学部 |

### 教育GP事務

| | | |
|---|---|---|
| 事 務 | 三 井 知 波 留 | 堀 内 理 恵 |

# 平成21年度　教育GP「学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト」実施体制

## 教育GP推進本部

| | | |
|---|---|---|
| 本部長 | 伊藤　洋 | 学長 |
| 担当主査 | 佐藤悦子 | 看護学部長 |
| 構成員 | 藤谷　秀 | 人間福祉学部長 |
| | 小沢典夫 | 国際政策学部長 |
| | 波木井　昇 | 地域研究交流センター長 |
| | 関谷秀昭 | 主査 |
| | 相川喜代弘 | 副主査 |

## 教育GP執行部

| | | |
|---|---|---|
| 責任者 | 佐藤悦子 | 看護学部 |
| サブ責任者 | 神山裕美 | 人間福祉学部 |
| 構成員 | 柳田正明 | 人間福祉学部 |
| | 河野由乃 | 看護学部 |
| | 吉澤千登勢 | 看護学部 |
| | 小野興子 | 非常勤 |

## 専門職ワーキングチーム

| | | |
|---|---|---|
| リーダー | 神山裕美 | 人間福祉学部 |
| サブリーダー | 吉澤千登勢 | 看護学部 |
| 構成員 | 佐藤悦子 | 看護学部 |
| | 河野由乃 | 看護学部 |
| | 清水惠子 | 看護学部 |
| | 田中彰子 | 看護学部 |
| | 泉宗美恵 | 看護学部 |
| | 須田由紀 | 看護学部 |
| | 望月宗一郎 | 看護学部 |
| | 中橋淳子 | 看護学部 |
| | 山本奈央 | 看護学部 |
| | 山田千明 | 人間福祉学部 |
| | 横山貴美子 | 人間福祉学部 |
| | 柳田正明 | 人間福祉学部 |
| | 伊藤健次 | 人間福祉学部 |
| | 小野興子 | 非常勤 |
| | 大澤準一 | 非常勤 |

## 健康長寿プロジェクト実行委員会

| | | |
|---|---|---|
| 大学 | 委員長 | 神山裕美　人間福祉学部 |
| | 副委員長 | 河野由乃　看護学部 |
| | 構成員 | 佐藤悦子　看護学部 |
| | | 柳田正明　人間福祉学部 |
| | | 吉澤千登勢　看護学部 |
| | | 小野興子　非常勤 |
| 地域包括支援センター | | おおくに所長 |
| | | きょうりつ所長 |
| | | 甲府西所長 |
| 甲府市 | | 福祉部福祉総室長 |
| | | 福祉総室福祉計画課長 |
| | | 福祉総室健康衛生課長 |
| | | 高齢者支援室長 |
| | | 高齢者支援室介護保険課長 |
| 山梨県 | | 医務課長 |
| | | 長寿社会課長 |

## 教育開発プロジェクト実行委員会

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 佐藤悦子 | 看護学部 |
| 副委員長 | 柳田正明 | 人間福祉学部 |
| 構成員 | 神山裕美 | 人間福祉学部 |
| | 波木井昇 | 国際政策学部（センター長） |
| | 熊谷隆一 | 国際政策学部 |
| | 澁谷彰久 | 国際政策学部 |
| | 河野由乃 | 看護学部 |
| | 吉澤千登勢 | 看護学部 |

## 教育GP非常勤講師及び事務

| | | |
|---|---|---|
| 教育GP非常勤講師 | 小野興子 | 大澤準一 |
| 事務 | 三井知波留 | 堀内理恵　松橋昌代 |

# 平成22年度　教育GP「学際統合型専門職連携教育開発プロジェクト」実施体制

## 教育GP推進本部

| | | |
|---|---|---|
| 本部長 | 伊　藤　　洋 | 学　長 |
| 担当主査 | 佐　藤　悦　子 | 看護学部長 |
| 構成員 | 藤　谷　　秀 | 人間福祉学部長 |
| | 小　沢　典　夫 | 国際政策学部長 |
| | 前　澤　哲　爾 | 地域研究交流センター長 |
| | 関　谷　秀　昭 | 課長 |
| | 相　川　喜　代　弘 | 副主査 |

## 健康長寿プロジェクト実行委員

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 神　山　裕　美 | 人間福祉学部 |
| 副委員長 | 井　出　成　美 | 看護学部 |

## 教育開発プロジェクト実行委員

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 佐　藤　悦　子 | 看護学部 |
| 副委員長 | 柳　田　正　明 | 人間福祉学部 |

## 教育GP執行部

| | | |
|---|---|---|
| 責任者 | 佐　藤　悦　子 | 看護学部 |
| サブ責任者 | 神　山　裕　美 | 人間福祉学部 |
| 構成員 | 下　村　幸　仁 | 人間福祉学部 |
| | 柳　田　正　明 | 人間福祉学部 |
| | 井　出　成　美 | 看護学部 |
| | 吉　澤　千　登　勢 | 看護学部 |
| | 小　野　興　子 | 非常勤 |

## 教育GP非常勤講師及び事務

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 教育GP非常勤講師 | 小　野　興　子 | 大　澤　準　一 | 河　野　由　乃 | |
| 事　務 | 三井知波留 | 平形満美子 | 松橋昌代 | |

## 専門職ワーキングチーム

| | | |
|---|---|---|
| リーダー | 神　山　裕　美 | 人間福祉学部 |
| サブリーダー | 吉　澤　千　登　勢 | 看護学部 |
| 構成員 | 佐　藤　悦　子 | 看護学部 |
| | 井　出　成　美 | 看護学部 |
| | 清　水　惠　子 | 看護学部 |
| | 田　中　彰　子 | 看護学部 |
| | 泉　宗　美　恵 | 看護学部 |
| | 望　月　宗　一　郎 | 看護学部 |
| | 須　田　由　紀 | 看護学部 |
| | 中　橋　淳　子 | 看護学部 |
| | 山　本　奈　央 | 看護学部 |
| | 森　田　祐　代 | 看護学部 |
| | 下　村　幸　仁 | 人間福祉学部 |
| | 柳　田　正　明 | 人間福祉学部 |
| | 山　田　千　明 | 人間福祉学部 |
| | 伊　藤　健　次 | 人間福祉学部 |
| | 小　野　興　子 | 非常勤 |
| | 大　澤　準　一 | 非常勤 |
| | 河　野　由　乃 | 非常勤 |

## おわりに

2009年10月に「質の高い大学教育推進プログラム」に本学が採択されてから、あっという間に２年半が過ぎました。当時、創立から５年目を迎えた山梨県立大学で、社会に役立ち活躍できる学生をどう育てるのか、地域に大学の機能や人材がどのように貢献できるのか、そしてこのプログラムをどのように進めるのか、多くのことを模索しながらの毎日でありました。それは時には、いきすぎたこともあり、いたらなかったこともありましたが、そのような試行錯誤のなかで学生相互に、教員相互に学ぶことは多かったと思います。

専門職連携教育（IPE）に先駆的に取り組む日英米の関係者から学ぶ中でも、「連携教育の前提は、教員の相互理解とコミュニケーションとチームワーク」が重要であると聞きました。実際、日英米とも学生教育以上に教員間の連携や、学内組織化や関係者との協力体制創りが難しいようでした。しかし、その難しさを乗り越えても連携教育を行うのは、その先にある成果が学生にも教員にも、そして何よりも利用者や住民にとってのメリットが大きいからです。

英国のCAIPE開発部長のヘレナ・ロウさんが、「同質の人々が集まる仕事より、異質の人が集まってする仕事のほうが成果は大きい」という、コンタクトセオリーを紹介しながら専門職連携の意義を語っていましたが、私たちが２年半このプログラムに取り組む中でも同じように思ったことが多々ありました。異質の文化や価値観がぶつかり合うなかで、よい良い方法や対応策がみえてくること、そしてその中で両者の良い点だけでなく、改善点もまた見えてくるなど、苦労も多いけれど成果も大きく、悩ましいことも多いけれど驚くような発見もまた大きかった、というのが率直な気持ちです。

このプログラムは、地域包括支援センターをフィールドとした看護と福祉の連携教育です。しかし、異なる視点や価値観と対応方法を持つ者同志が相互理解し協力するプロセスは、教員相互に、学生相互に、地域の関係機関や住民の方々等と、さまざま人や分野に応用できる視点や考え方がいくつもありました。このような、地域社会の人と人、人と組織の関係性などに幅広く活用できる知恵が蓄積できることもまた、このプログラムの成果だと思います。

このようにチャレンジしがいのあるプログラムを大学全体で推進し、育ててくださった、伊藤学長と鶴見前学長、藤谷人間福祉学部長と阿部前人間福祉学部長、佐藤看護学部長と松下前看護学部長、前澤地域研究交流センター長と波木井前地域研究交流センター長、池田元地域研究交流センター長、そして、通常の授業・研究・学務に加え、この大きなプロジェクトを推進してくださった人間福祉学部・看護学部のワーキングチームの皆さま、教育GP事務局及び事務室の方々に心よりお礼申し上げます。

2010年度より山梨県立大学国際政策学部の実践的学習をベースにして、「課題対応型SL（ｻｰﾋﾞｽﾗｰﾆﾝｸﾞ）による公立大学新教育モデル」という新しい大学教育推進プログラムの採択を受けました。本学の理念に合わせた大学の地域貢献と学生教育の質の向上がつながるように、本プログラムの成果もまた次のプログラム推進に役立てていただければ幸いです。

平成23年3月吉日

教育ＧＰ専門職ワーキングチームリーダー

神山裕美

・・・＊・平成 22 年度　教育ＧＰ執行部・＊・・・

佐　藤　悦　子（統括責任者）
下　村　幸　仁
井　出　成　美
小　野　興　子
神　山　裕　美（統括責任者補佐）
柳　田　正　明
吉　澤　千　登　勢

・・・＊・編集担当・＊・・・

神　山　裕　美（編集責任者）
須　田　由　紀
小　野　興　子
平　形　満　美　子
吉　澤　千　登　勢（編集責任者補佐）
中　橋　淳　子
三　井　知　波　留
松　橋　昌　代



平成 20～22 年度
文部科学省「質の高い大学教育推進プログラム（教育ＧＰ）」採択

# 学際統合型専門職連携開発プロジェクト

## －最　終　報　告　書－

平成２３年３月３１日発行

発行者：山梨県立大学　教育ＧＰ執行部

池田キャンパス
〒400-0062
山梨県甲府市池田 1-6-1
TEL：055-253-7780

飯田キャンパス
〒400-0035
山梨県甲府市飯田 5-11-1
TEL：055-224-5261


※無断複写不可



公立大学法人
山梨県立大学
Yamanashi Prefectural University